長野県史跡

土口将軍塚古墳

―― 重要遺跡確認緊急調査 ――

１９８７・３

長　野　市　教　育　委　員　会
更　埴　市　教　育　委　員　会

土口将軍塚古墳　埋葬施設

朝顔形埴輪

円筒埴輪

円筒埴輪

序

長野市と更埴市は、東西に長く境を接し、風土をほぼ同じにする地域ですが、これは、行政区域を超えて、共通する人々の生活の場として拓けて来た地域でもあります。最近の考古学の研究の成果によると、遠く2000年あまり昔、この地方に稲づくりの文化が伝わり弥生人が生活するようになって以来、千曲川を挟んだ更級・埴科の地はムラが生まれ、ともに栄えて来たといわれます。それだけに、両市がこの地域の古代文化の究明を同じ立場で実施することは、大切な姿勢であると考えます。今回、ここに調査の結果を報告する“土口将軍塚古墳”の学術調査こそ、その意味で評価されるべきと考えます。

長野市にあっては、昭和41年合併により、その面積が404平方粁にも及び、そこに存在する埋蔵文化財の数は夥しく、この保護を進めることが、文化財行政の大きな課題となっております。加えて、生活圏の拡大広域化と産業活動の発展が、大型の地域開発行為という現象を招き、それにより破壊される埋蔵文化財も多くなるという結果となりました。従って、これに対応するための緊急発掘調査の件数が年々多く実施され、かろうじて記録保存の手当てをする例が増えておりました。この中にあって、両市の境界線上の古墳を共同で学術調査を実施できたことに意義深いものを感じます。そもそもの契機が子供達のいたずらという問題もありましたが、結果としてこの成果が高く評価されたことは同慶に堪えません。

長野市にあっては、古墳の学術調査は稀有のことで、特に前方後円墳の主体部を発掘調査をすることは前例のないことでした。市内には、川柳将軍塚古墳のように、舌状に張り出した尾根の先端などに占地されるものと、南向塚古墳のように平坦地に築造されるものの２様式の前方後円墳が存在しますが、それぞれの特徴は、古墳研究の重要な問題として多くの研究者の課題となっています。これに加え、最近では、東山麓に多く点在する積石塚古墳や、これ等の群集墳の性格について総合的に調査研究が進められています。これは、古代のこの地方と畿内の関係を知るだけに止まらず、日本古墳文化の趨勢を計るほどの重要な問題として真剣に取り組まれているものと理解しております。

今回の調査は、長野市・更埴市両市の関係者をもって調査会を設置し、実地の調査は団の構成員により５年の永きにわたり実施されました。特に調査団の直接の指導は、両市の文化財の保護に長年たずさわられ、古代史究明に数々の実績を示された米山一政先生が当たられました。この他、地元の関係者はもとより、中央の学会で御活躍の先生方の御参加も仰ぎ、十分な成果を上げる幾つかの要因をつくっていただきました。御協力いただいた各位にお礼申し上げるとともに、この報告書が広く斯界の研究に活用されることを希望いたします。

長野市教育委員会教育長　奥村　秀雄

序

長野盆地の最南部に位置する更埴市は、弥生時代の米づくりのムラが拓かれて以来、穏やかな風土の中で、人々の生活が営まれて来ました。最近の考古学研究の成果の一つとして、シナノの国の誕生にも、この更埴市の地を中心に進められたかの説も多くの研究者からも聞かれるようになり、ますますこの地と古代史究明の重要性を痛感するところです。

もとより、人々の生活は、その土地の風土に支配され、言いかえると、私どもの祖先のこの地での生活の発端は、自然の中でいかに生きるかの工夫の連続であったかと考えます。特に、この更埴市は、狭い山間いの地を縫うように曲がりくねって流れて来た千曲川が、ようやく平坦の広野にたどりつき、その両岸に肥沃な自然堤防をつくり出すとともに、その背後に稲作には最も適した湿地帯を発達させた土地であり、古代稲作地帯を発展させる最適地でもありました。その結果、千曲川右岸の屋代遺跡群・粟佐遺跡群、左岸に塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群・横田遺跡群と、更埴市・長野市両市にわたる大遺跡群が連なっているところであります。

更埴市にあっては、平坦地の開発行為が進み、かつての弥生時代以降近世に至るまでの住居址をはじめ、生活の舞台となった地域に当たる遺跡の調査は、年々進めて来たところですが、近年、東側山中の採石事業にかかわる遺跡保護のため、国の補助の下に森将軍塚古墳の発掘調査費及びこの復原事業を市をあげて実施しているところです。これも、遺跡を保存するとともに、古代社会を再現することにより、古代人の生活や思想を知る手がかりとなっております。ここに報告書として斯界に発表することになりました“土口将軍塚古墳”の調査につきましても、更埴市と長野市の最南部をとりまく山頂に築造された、森・川柳・越・倉科・土口の各将軍塚と呼称される古墳の性格と、平坦地に発達した遺跡群との関係を究明できる足がかりとして位置づけた訳です。

今回の調査は、たまたま占地された山頂が長野市と更埴市にまたがる古墳であったため両市が協力して調査団を結成し実施されましたが、古代にあってはもっと広い地域がこの地方のクニとして一つの社会を構成した証であり、これを確認できたことも一つの成果でもありました。

この調査に当たっては、地元の関係者の理解ある御協力を得、さらに、この調査のために結成した調査団には、筑波大学、明治大学及び東京国立博物館の先生方にも参加いただくとともに、地元の研究者の先生や県当局の御指導も仰ぐ万全の体勢下で調査が進められ、ここに、その結果がまとめられたものであります。関係された各位に感謝申し上げるとともに、古代文化究明のために長野市・更埴市が直接共同で調査を実施できた実績を大切にしていきたいと考えます。

更埴市教育委員会教育長　安藤　敏

例　言

1　本書は、重要遺跡確認緊急調査事業として実施された長野県史跡『土口将軍塚古墳』発掘調査報告書である。

2　調査は、長野市、更埴市の両教育委員会が土口将軍塚古墳調査会を設立し、調査団を編成して合同で実施したものである。

3　本書の編集は、調査団の指導を基に、調査会事務局が担当した。

4　本書作成における調査員の分担は下記のとおりである。

遺構　佐藤信之・青木和明・千野浩

遺物　矢島宏雄・佐藤信之・山根洋子・中殿章子・横山かよ子・青木和明・千野浩

写真　山口明（遺物）、佐藤信之・青木和明（遺構）

5　本書の執筆分担は下記のとおりである。

調査指導委員　大塚初重（V）

調査指導委員　岩崎卓也（IV－1）

調査指導委員　森嶋　稔（IV－2）

調査副団長　桐原　健（IV－7）

調 査 主 任　小林秀夫（II、III－2）

調　査　員　矢島宏雄（I－1・2、IV－3）

調　査　員　佐藤信之（III－1B・3A）

調　査　員　青木和明（I－3、III－1ACD・3BF、IV－5）

調　査　員　千野　浩（III－3CDE、IV－6）

調　査　員　山根洋子（IV－4）

6　調査にかかわる資料は、長野市、更埴市両教育委員会に保管されている。

目　　次

序
例　言

I　調査の概要
1　調査に至る経過……1
2　調査会・調査団の構成……2
3　調査の経過……4
II　古墳の位置と環境……7
III　調　査
1　墳丘の調査
A　後円部の調査……10
B　くびれ部の調査……16
C　前方部の調査……25
D　小　結……34
2　埋葬施設の調査……38
3　出土遺物
A　埴　輪……42
B　土師器……59
C　鉄　鏃……63
D　短　甲……67
E　玉　類……68
F　その他の遺物……70
IV　考　察
1　埋葬施設の検討……72
2　土口将軍塚古墳の設計企画……77
3　善光寺平の埴輪……81
4　叩きの埴輪……84
5　土口将軍塚古墳出土土師器の編年的位置……92
6　土口将軍塚古墳出土の鉄鏃と甲冑について……100
7　雨宮凹地から観た土口将軍塚古墳……104
V　まとめ……109

挿図目次

図１　調査区配置図……6
図２　古墳周辺の環境……8
図３　古墳の位置……9
図４　後円部西トレンチ……11
図５　後円部西トレンチ埴輪列……12
図６　後円部南トレンチ……13
図７　後円部北トレンチ……14
図８　くびれ部南側拡張調査区……17・18
図９　くびれ部埴輪列……19
図10　くびれ部南側葺石立面……20
図11　くびれ部北側拡張調査区……21・22
図12　くびれ部北側葺石立面……23
図13　前方部東トレンチ……26
図14　前方部南隅拡張調査区……27・28
図15　前方部南隅中段テラス埴輪列……29
図16　前方部南隅前面部葺石立面……30
図17　前方部北隅拡張調査区……31
図18　前方部墳頂埴輪出土状況……33
図19　墳丘復元想定図……36
図20　埋葬施設……39・40
図21　北石室遺物出土状況……41
図22　口縁端部が平坦となる埴輪……42
図23　埴輪実測図　①　……45
図24　埴輪実測図　②　……46
図25　埴輪実測図　③　……47
図26　埴輪実測図　④　……48
図27　埴輪実測図　⑤・拓影　①　……49
図28　拓影　②　……50
図29　拓影　③　……51
図30　拓影　④　……52
図31　拓影　⑤　……53
図32　拓影　⑥　……54
図33　拓影　⑦　……55
図34　土器実測図　①　……60
図35　土器実測図　②　……61

図36　鉄鏃実測図　①　……64
図37　鉄鏃実測図　②　……65
図38　短甲実測図……67
図39　玉類実測図……69
図40　その他の遺物　①　……70
図41　その他の遺物　②　……71
図42　土口将軍塚古墳の設計意図の復元……78
図43　土口将軍塚古墳の設計企画……79
図44　土口将軍塚古墳出土の高坏標準型式……92
図45　高坏比較型式と共伴資料　①　……94
図46　高坏比較型式と共伴資料　②　……96
図47　鉄鏃集成　①　……101
図48　鉄鏃集成　②　……102
図49　土口将軍塚古墳周辺の遺跡分布　……108
別添図1　土口将軍塚古墳測量図
別添図2　土口将軍塚古墳調査区全体図

表目次

表1　土口将軍塚古墳長野県史跡指定地一覧……1
表2　事業年度一覧……1
表3　墳丘計測値……36
表4　埴輪観察表（1）……56
表5　埴輪観察表（2）……57
表6　埴輪観察表（3）……58
表7　鉄鏃計測値……65
表8　玉類計測値……68
表9　長野県における5世紀代の竪穴式石室……74
表10　土口将軍塚古墳の計測と比率……80
表11　叩きの埴輪出土遺跡の概要……86・87

図版目次

巻頭図版　埋葬施設・埴輪
図版１　航空写真
図版２　全景・埋葬施設
図版３　埋葬施設
図版４　埋葬施設
図版５　石室
図版６　北石室床面
図版７　後円部西トレンチ
図版８　後円部西トレンチ・北トレンチ
図版９　後円部南トレンチ
図版10　くびれ部南側
図版11　くびれ部南側・北側
図版12　くびれ部北側
図版13　前方部南隅
図版14　前方部南隅
図版15　前方部北隅・墳頂
図版16　前方部東トレンチ
図版17　調査風景
図版18　円筒埴輪
図版19　円筒埴輪
図版20　円筒埴輪
図版21　朝顔形埴輪
図版22　形象埴輪
図版23　埴輪
図版24　埴輪
図版25　埴輪
図版26　埴輪叩き目
図版27　埴輪叩き目・刷毛目
図版28　埴輪線刻文・凸帯
図版29　土器
図版30　鉄鏃
図版31　鉄鏃・短甲・玉類

Ⅰ　調査の概要

1　調査に至る経過

土口将軍塚古墳は、長野市・更埴市の境界となる薬師山の尾根上に築かれた、県内有数の規模を誇る前方後円墳であり、端正な墳丘形態をとどめ、埴輪の遺存状況も良く、昭和48年３月12日付けで『長野県史跡』に指定されている。

昭和56年３月26日、古墳見学者によって古墳が荒らされていることが発見された。盗掘によって、古墳は北側くびれ部が大きく掘り起こされ、また前方部裾付近には30cmほどの埴輪の抜き取り痕と思われる穴が並び、さらに後円部裾付近も掘り起こされており、埴輪の小破片が散らばっていた。古墳北側の埴輪列のうち、かなりの数の埴輪が持ち去られるという被害の大きなものであった。

４月21日には、米山一政県文化財保護審議会長、県教育委員会、長野市・更埴市教育委員会による現地調査が行なわれ、盗掘部分の埋め戻しによる応急処置並びに、持ち去られた大量の埴輪の返還を願い更埴警察署へ捜査を依頼した。また４月28日には、新聞紙上でも報道されたが、今日までに盗掘品の返還はない。この盗掘事件は、遺跡の保存、史跡の管理が十分になされていないことを公にするものであった。

５月12日、県教育委員会、長野市・更埴市教育委員会による土口将軍塚古墳保存対策会議がもたれ、将来の保存方法策定のため、古墳の実態を明かにすべく確認調査が計画された。発掘調査は、昭和57年度より国・県補助事業として、総事業費8,000,000円で長野市･更埴市が費用の一部を負担し、両市教育委員会によって実施することとなった。

昭和57年、補助金の内示を受け、また土地所有者の協力を得て、７月７日長野市・更埴市合同調査のため両市教育委員会、両市文化財保護審議会、両市地元代表者からなる「土口将軍塚古墳調査会」を設立した。さらに米山一政氏を団長とする調査団を編成し、８月７日から調査を開始した。(矢島宏雄)

市	大字	字	地　番	地目	地積㎡
更埴市	土口	北山	722番１	山林	1,983
			723番１	山林	1,666
			723番２	山林	492
			724番１	山林	1,613
			724番４	畑	158
長野市（松代町）	岩野	笹崎	2,789番１	山林	8,257
			2,792番	山林	7,636
			2,793番イ	山林	3,180
			2,794番イ	山林	3,821

表１　土口将軍塚古墳長野県史跡指定地一覧

年　度	事　業　費	事　業　内　容（期　間）
昭和５７年度	２，０００千円	地形測量、第１次調査（８．７～１２）
昭和５８年度	２，０００千円	第２次調査（７．２６～８．１９）予備調査（３．２４～２７）
昭和５９年度	１，０００千円	第３次調査（７．２５～８．１８）
昭和６０年度	１，３５０千円	第４次調査（９．９～３０）
昭和６１年度	２，７００千円	補足調査（９．８～１０）整理、報告書作成

表２　事業年度一覧

2　調査会・調査団の構成

調査会		昭和57年度	昭和58年度	昭和59年度	昭和60年度	昭和61年度
会　長	長野市教育委員会教育長	中村博二	中村博二	中村博二	奥村秀雄	奥村秀雄
副会長	更埴市教育委員会教育長	和田　基	和田　基	和田　基	和田　基	和田　基
						安藤　敏
委　員	長野市文化財保護審議会長	米山一政	米山一政	米山一政	米山一政	米山一政
	更埴市文化財保護審議会長	児玉太郎	児玉太郎	児玉太郎	児玉太郎	相沢正幸
	長野市文化財保護審議会委員	桐原　健	桐原　健	桐原　健	桐原　健	桐原　健
	更埴市文化財保護審議会委員	森嶋　稔	森嶋　稔	森嶋　稔	森嶋　稔	森嶋　稔
	長野市松代町岩野区長	宮尾袈裟美	塚田　厚	塚田　厚	窪田　広	窪田　広
	更埴市土口区長	飯島靖利	酒井元勝	岡川啓雄	小出喜年	柳町和夫
監　事	長野市教育委員会庶務（総務）課長	田中穂積	関口　仁	丸山義仁	高野　覚	高野　覚
	更埴市教育委員会教育次長	小林良平	小林良平	小林良平	小林良平	宮下袈裟良
事務局長	長野市教育委員会社会教育課長	関口　仁	戸津幸雄	戸津幸雄	戸津幸雄	吉見　敏
事務局員	更埴市教育委員会社会教育課長	大田穂竝	飯島　忠	飯島　忠	飯島　忠	武井豊茂
	長野市教育委員会社会教育課長補佐	吉池弘忠	吉池弘忠	吉池弘忠	吉池弘忠	吉池弘忠
	更埴市教育委員会社会教育課係長	大井利雄	大井利雄	渡辺好和	渡辺好和	山崎文夫
	長野市教育委員会社会教育課主査	根津伸夫	早川　理	早川　理	山崎博三	山崎博三
	長野市立博物館博物館主事	青木和明	青木和明	青木和明	青木和明	青木和明
	更埴市教育委員会社会教育課主事	矢島宏雄	矢島宏雄	矢島宏雄	矢島宏雄	矢島宏雄
	更埴市教育委員会社会教育課主事			佐藤信之	佐藤信之	佐藤信之

調査団

指導委員　大塚初重（明治大学教授）
　　岩崎卓也（筑波大学教授）
　　森嶋　稔（上山田町立上山田小学校教諭）

調査団長　米山一政（長野県文化財保護審議会長）

副団長　桐原　健（長野県史刊行会専門主事・長野県立松本筑摩高校教諭）

調査主任　小林秀夫（長野市立桜ケ丘中学校教諭・長野県教育委員会指導主事）

調査員　矢口忠良・山口　明・青木和明・千野　浩（長野市立博物館）
　　矢島宏雄・佐藤信之・山根洋子（更埴市教育委員会社会教育課）
　　竹内　稔（長野市立寺尾小学校教諭・長野県埋蔵文化財センター調査研究員）
　　市村勝己（長野県埋蔵文化財センター調査研究員）
　　中殿章子・横山かよ子・田中寿賀子・山口綾子（長野市遺跡調査会）

補助員　田中正治郎・森山嘉亮・土屋浩・山崎敬二・出河裕典・古岩井久仁・高橋啓三・橘詰文彦（信州大学学生）　宮下愛彦・前島卓（立正大学学生）　前角和男（奈良大学学生）

富田与（筑波大学学生）　義家和彦（早稲田大学学生）　長谷部淳（京都大学学生）
原田和彦・松野千枝子（国学院大学学生）　鶴田典昭（明治大学学生）

作業員　青木美知子　青木森夫　青柳岩男　畔上勉　新井太郎　荒井勝彦　安藤忠重　安藤光紀
飯島毅　飯島哲也　飯島満　伊能政雄　岩佐久子　牛沢一子　臼井友一　小笠原広孝
北村裕二　北村力　北村忠文　北村和夫　北村浩治　久保操　久保啓子　窪田浩三
窪田良男　久保田博之　倉嶋千智　後藤彰一　小林昌子　小林芳白　小林俊政　駒村武彦
坂口清子　坂口城子　佐藤袈裟男　塩入博之　柴田俊　島田学　清水光　霜田正顕
住沢一也　高野貞子　田沢勝彦　田中富子　塚田薫　塚田真一　塚田厚　塚田光美
寺島康文　中村邦光　贄田明　林正一　半田可生　平尾佳代　平林昇　平林一男
真島広己　真島光夫　松本秋夫　水品紫乃　宮沢直樹　村田健一　村本光哉　山岸文久
山崎忠良　横川正人　吉村幸雄

協力者　青木平和（離山神社宮司）
安藤忠重　北村力　久保田貞雄　塚田薫　林正一　真島芳定　松崎要　吉村幸男（地権者）
松浦宥一郎　森田久男　松尾昌彦　木下亘　三木弘　増田玲子　岡林孝作　武蔵美和（調査協力者）
長野県史刊行会　森将軍塚古墳発掘調査団　明治大学大室古墳群調査団
更埴市土口区　長野市松代町岩野区

3　調査の経過

当初、２年計画を予定していた土口将軍塚古墳の調査は、昭和57年度に着手される運びとなったが、予算等諸般の事情から、昭和61年度までの５年次にわたり調査が継続されることとなった。現地における発掘等の作業日数は、延74日間に及び、調査面積は、墳丘とその周辺700㎡に達している。また、調査の開始から報告書の作成に至るまでに、度重ねて調査団会議が開催され、その都度調査の方針が検討されてきた。５年間の長期にわたった調査も、この調査団内部での確認事項をもとに実施されてきたものである。

調査の方法は、保存を前提とした調査の性格から、現状変更を最小限にとどめるという点に留意しながら、墳丘規模、構造の確認とその遺存状況の把握を目標とし、２ｍ幅の試掘坑による発掘を基本として、必要に応じて拡張調査区を設定することとした。掘削は、墳丘を構成する攪乱の認められない盛土面までとしたが、葺石や埴輪の一部が地表に露出した状態にある本古墳においては、結果的には表土層を除去する程度で掘削が完了した部分がほとんどであった。各年次における調査範囲は図に示したとおりであり、以下年次を追ってその経過を報告する。

第１次調査（昭和57年８月７日～12日）

初年度に当たる昭和57年度の事業内容は、地形測量が中心となった。土口将軍塚古墳の測量は、過去に東京教育大学により実施された経緯があるものの、事業の開始に当たり、国土座標を組み込んだ地形測量図を新規に作成することとし、墳丘を中心として長野県史跡指定地内1.1haについて、縮尺１：100、等高線0.5ｍにより実施された。また、墳丘主軸上に基準点を設置することとし、前方部墳頂と尾根上部とに２点の基準点が新設された。この２点をもとに、５ｍ方眼による任意座標を組み、それに沿って発掘調査区の設定が行なわれることとなった。

第１次調査は、次年度より本格的に実施が予定される後円部の調査に備えて、墳頂から南墳丘にかけて試掘坑（後円部南トレンチ）を設定したもので、測量現地作業の終了を待って８月７日より着手された。盗掘の痕跡が生々しく残る後円部墳頂においては墓壙の縁辺部が確認されるとともに、盗掘の際に掻き出されたと思われるガラス小玉も検出され、また、南墳丘においては、葺石の存在も明らかとなった。短期間ながら、本古墳における初めての発掘調査ということもあり、なにかと戸惑う場面もあったが、予備調査としての目標は達せられ、８月12日に埋め戻しをもって調査を終了した。

第２次調査（昭和58年７月26日～８月19日）

土口将軍塚古墳における埋葬施設の位置は、盗掘坑の存在より、後円部墳頂に予想されるものであった。しかし、大規模に及ぶ盗掘坑において、石室構築材の露出等が見られず、その構造については従来不明とされてきた。

第２次調査は、この後円部墳頂の盗掘坑周辺について発掘調査し、埋葬施設の存在を確認することを目的とし、７月26日より着手された。

調査は先ず、盗掘坑周辺の盗掘により排出されたと思われる土砂の高まりを除去し、順次盗掘坑内を掘り下げる作業へと移行するものとした。盗掘坑の周縁部においては、埴輪破片に混じって土師器

破片が集中して検出され、南側には表土直下に角礫を多量に包含した盛土層が存在することが確認された。この点から、埋葬施設はほぼ盗掘坑内に包括されていると予測されたが、盗掘による破壊は予想以上に進行しており、埋葬施設の手掛かりを得られぬまま1週間以上を経過するに至り、埋葬施設全壊という最悪の事態も想定せざるをえない状況となった。盗掘の範囲だけでも把握すべく、さらに掘削を続けたところ、ようやく8月5日に、盗掘坑の北西部において石室の壁最下段を示す石列を検出し得た。さらに7日には、既に遺存部分の外形を把握した石室(北石室)に並列して、南側にもう一つの石室(南石室)の存在を確認することができた。また石室床面から、鉄鏃等の遺物も出土し、一時は盗掘による徹底的な破壊を想定するに及んだ埋葬施設の調査も、予想外の成果を納めることとなった。

検出された石室は、実測の後土嚢を用いて保護し、盗掘坑の窪みを完全に修復させるために墳丘外からも土砂を搬入しながら埋め戻しを行ない、19日に調査を終了した。

第3次調査(昭和59年7月25日～8月18日)

前方部の調査を主体とする第3次調査に先立って、3月24日から27日にわたり、前方部の主軸上に試掘坑(前方部東トレンチ)を設定し、予備調査を実施した。前方部前面部においては良好な状態で葺石の遺存が認められるとともに、頂部においては埴輪破片の集中出土を確認し、本調査への足掛りが得られた。

第3次調査は、予備調査での所見をもとに、前方部頂部の全域と南北のコーナー部分を拡張調査区とし、さらに後円部主軸上の西側墳丘にも試掘坑(後円部西トレンチ)を設定した。

調査は7月25日の調査区設定をもって開始され、28日より前方部南隅調査区の掘削に入った。中段テラスにおいては、上部腐葉土を除去すると同時に埴輪列が検出され、葺石の遺存も良好であるなど、思いのほか作業が順調に進行し、8月2日には北隅調査区掘削へ移行し、さらに翌日には後円部西トレンチの掘削を開始した。北隅においては葺石の遺存状況が悪かったものの、トレンチ内においては埴輪列と共に良好に確認され、作業の主力は、検出された葺石と埴輪列の記録に向けられることとなった。その合間に、7日から墳頂部表土を全域にわたり除去する作業に入ったが、予備調査で確認された埴輪破片の集中出土が、埴輪列とは直接結びつかないことが判明し、期待された埋葬施設の痕跡も認められなかった。ただし、北側の墳丘肩部から、原位置を保つと考えられる円筒埴輪基部が2か所において検出され、埴輪列の一部として把握された。

予定された調査範囲での発掘と検出された遺構の記録作業は8月12日に完了し、17・18日の両日に埋め戻し作業を実施して調査は終了した。なお、埴輪列の位置を保存するために、埴輪の取り上げ後に埴輪とほぼ同大の塩ビ管を埋設し埋め戻しを行なった。

第4次調査(昭和60年9月9日～9月30日)

本年次をもって、残された予定範囲での調査を全て完了するものとし、くびれ部両側に拡張調査区を、後円部北側墳丘に試掘坑(後円部北トレンチ)を設定した。

調査は9月9日の調査区設定をもって開始され、同日よりくびれ部南側の掘削に入った。葺石の遺存状態は良好であり、13日には中段テラス埴輪列の存在も明かになった。埴輪列は基部のみを残すものであったが、周辺からの埴輪破片の出土が多く認められた。13日からはくびれ部北側の掘削へと移

行し、併せてくびれ部南側の実測を開始した。くびれ部北側の葺石も、遺存状態は良好であったものの、中段テラスは盗掘により攪乱されており、埴輪列の遺存は確認されなかった。ただし、くびれ部の墳頂肩部において、埴輪列の一部が検出され、墳頂部における同列の確実な位置が把握されることとなった。19日からは、後円部北トレンチ掘削に入ったが、墳丘と葺石の崩落が進行しており葺石の一部を検出するに留まった。検出された葺石と埴輪列の実測は26日まで続けられ、葺石の立面を写真実測するための撮影も実施された。28日には埴輪列を取り上げ、記録作業も完了するところとなり、30日の埋め戻しをもって全ての現地作業を終了した。

最終年度の61年９月８日～10日には、補足調査として、後円部墳頂の周縁の表土を除去し、埴輪列の遺存を確認する調査を実施した。前方部墳頂埴輪列が検出されているため、当然後円部墳頂にもその存在が予想されるものであったが、結果は未検出に終った。

以上をもって、土口将軍塚古墳における予定された発掘範囲での調査が完了し、目標とした情報と資料をほぼ収集するに至り、５年間にわたる調査成果を整理検討し、報告書として刊行する運びとなった。

（青木和明）

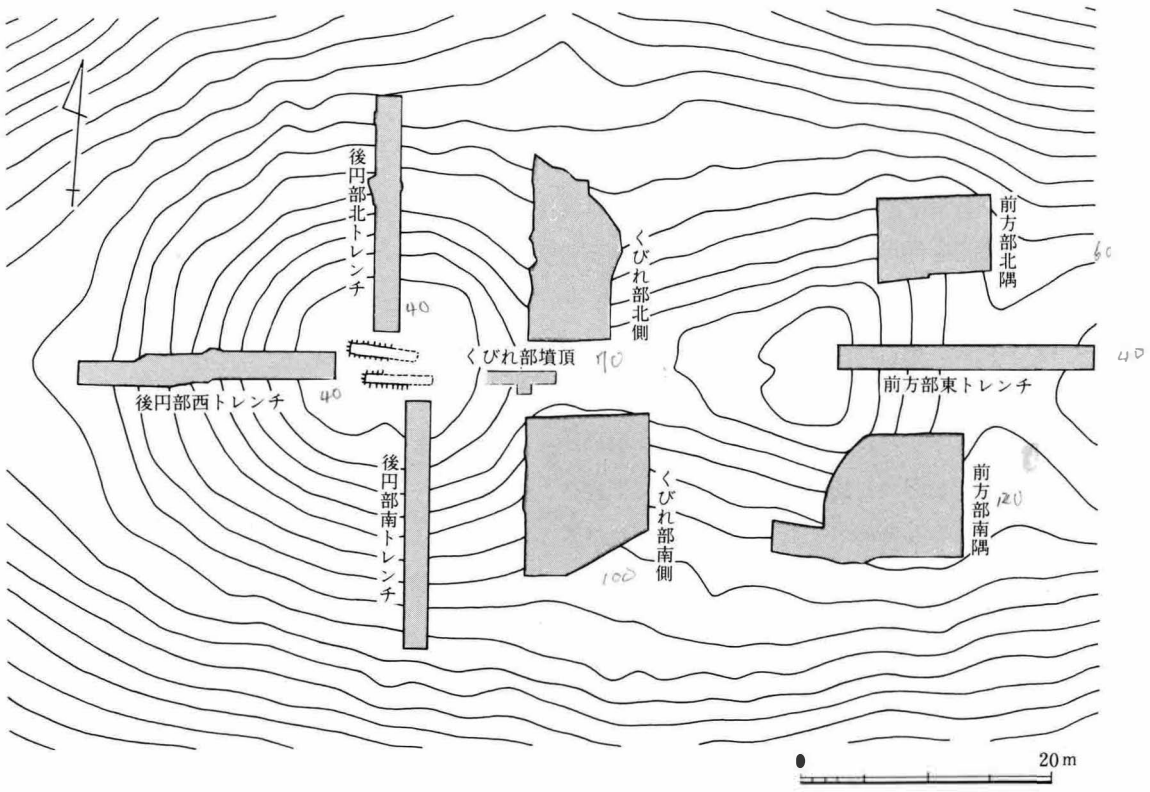


図１　調査区配置図（１：600）

II　古墳の位置と環境

長野県の北部、千曲川と犀川によって形成された盆地、善光寺平がある。この盆地に流れ込む千曲川・犀川の両河川ならびにこれに流入する小河川によって開析された小盆地が発達している。そして盆地の中央を千曲川が北流し、屈曲点には良好な自然堤防が形成され、弥生時代から平安時代にかけての大集落が発達した。

土口将軍塚古墳が立地する薬師山は、長野市松代町岩野と更埴市雨宮土口との境界線上にあり、千曲川の右岸妻女山から千曲川にそって突出する長い尾根の端部近く、標高450m地点に立地する。沖積面とは約100mの比高差があり、善光寺平を一望できる地である。

本古墳の分布する薬師山一帯は、古くから古墳の存在が知られているが、果樹園の造成等でその存在が明らかでなくなった古墳も多いようである。

土口将軍塚古墳の東500m、同尾根上の土口北山竜眼平東古墳（妻女山古墳）は、米山一政氏によると、径25.6m、高さ5mの円墳で、盗掘穴からの観察によると、竪穴式石室を内部主体とするようである。また一段下の尾根には、直径6～7m、高さ2m弱の円墳が7基、尾根の下の古大穴神社境内に円墳4基等の円墳が散在する。このように土口将軍塚古墳を中心に、20m級の円墳、小円墳群を伴う古墳群が形成されている。古墳の形成過程、歴史的意義等、今後の検討がまたれるところである。

善光寺平の古墳、特に4～5世紀代の古墳は、山頂部に立地するのが通例である。千曲川の右岸地区においては、森、倉科、有明山の各将軍塚古墳の前方後円墳、松代地区の舞鶴山2号墳、大室18号墳も同様であり、直径20m以上の円墳、例えば森2号墳、舞鶴山1号墳がある。このことは対岸の千曲川左岸地区でも同じ傾向にある。

以前から善光寺平南縁の地区では、土口将軍塚古墳の編年的位置は、森－倉科－土口－有明山の各将軍塚古墳と変遷すると考えられ、5世紀後半の時期が与えられてきた。善光寺平に限って、5世紀後半代と推定される古墳を見ると、北は中野市周辺の林畦1号墳（円墳･合掌形石室）、須坂市鎧塚2号墳（円墳・積石塚古墳）、松代地区舞鶴山2号墳（前方後円墳・竪穴式石室）、千曲川左岸の越将軍塚古墳（円墳･竪穴式石室）、長野市地附山古墳群（円墳･合掌形石室）があり、大室古墳群にも資料が増加しつつある。

このように、土口将軍塚古墳が築造されたと推定される5世紀後半は、善光寺平全域に古墳が波及する時期にあたり、かつ積石塚古墳や、合掌形石室という特異な内部主体が発生し、森将軍塚古墳を中心とする首長の系譜とは別の古墳文化の発達の時期にもあたる。土口将軍塚古墳の持つ歴史的な位置は、多くの問題をかかえているものと思われる。（小林秀夫）

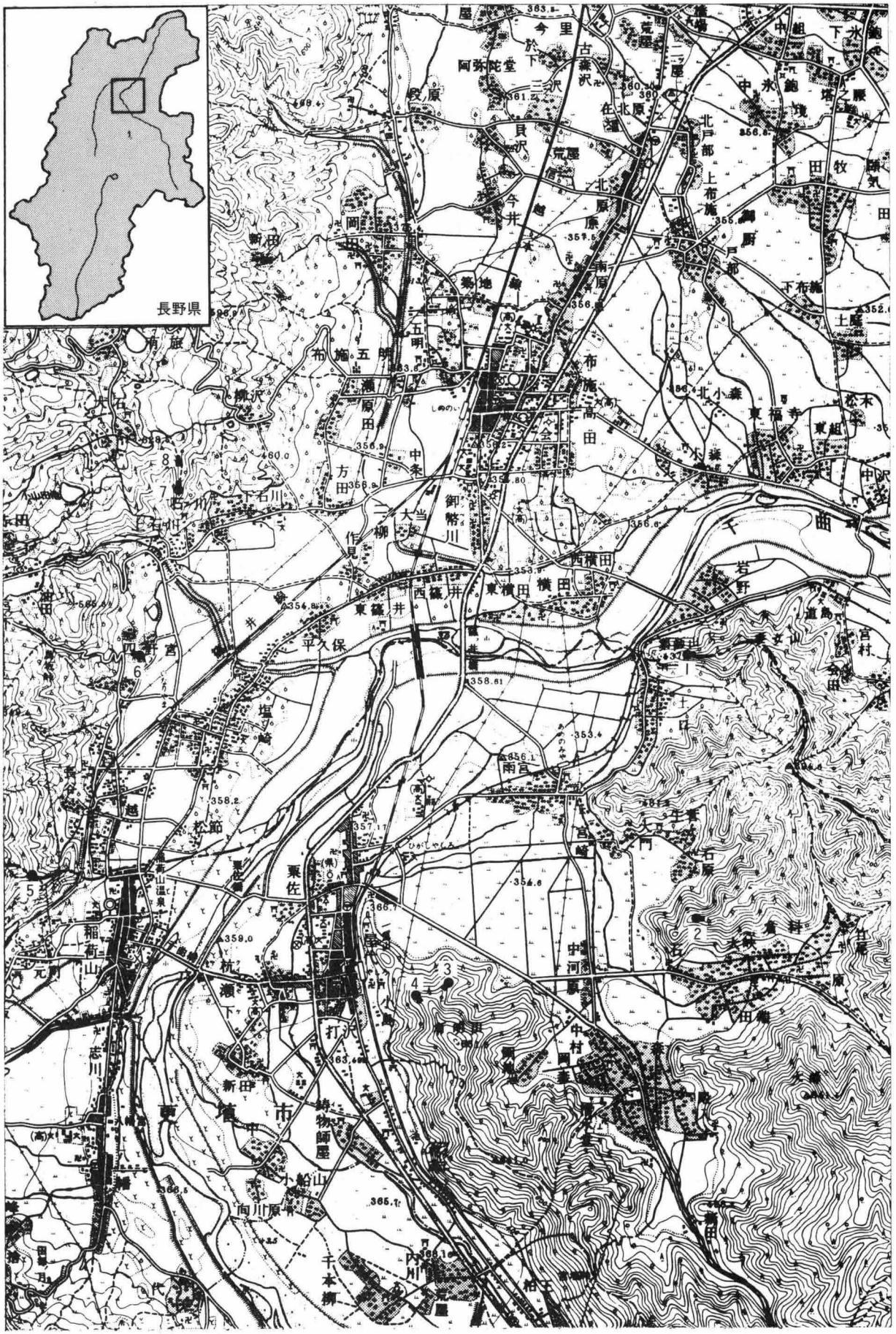


図２　古墳周辺の環境（１：50.000）

1、土口将軍塚古墳　　2、倉科将軍塚古墳　　3、森将軍塚古墳
4、有明山将軍塚古墳　　5、越将軍塚古墳　　6、中郷神社古墳
7、川柳将軍塚古墳　　8、姫塚古墳

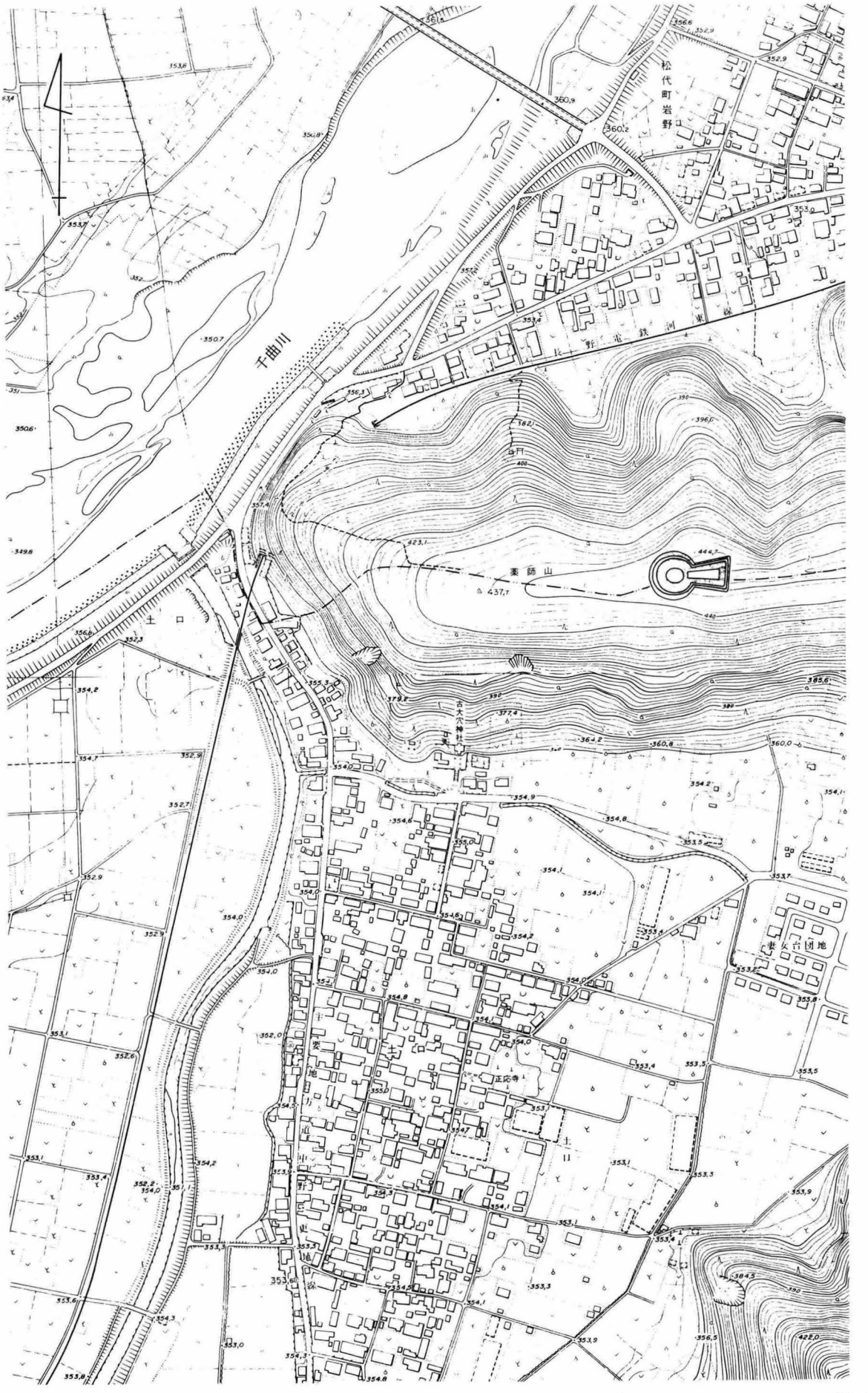


図3　古墳の位置（1：5000）

III　調　　査

1　墳丘の調査

A　後円部の調査

後円部においては、墳頂を中心として、主軸上の西側墳丘（後円部西トレンチ）と、主軸に直行する南側墳丘（後円部南トレンチ）、北側墳丘（後円部北トレンチ）に試掘坑を設定した。この他、補足的に、主体部の位置する墳頂部周縁についても、埴輪列確認のための調査を実施した。

（1）後円部西トレンチ（図4・5）

後円部西側墳丘の範囲を確定させるために設定したもので、RSN－Alineに沿って、幅1m墳頂A4杭＋50cmより、墳裾A8杭＋50cmまでの全長20mのトレンチである。

尾根先端部に向かう位置にあるため、比高差が大きく、墳頂付近の崩落が著しいが、中段テラス及び、下段丘裾部などは、比較的良好な遺存状況が認められ、発掘により上段丘、下段丘の葺石と、中段テラスの埴輪列が検出された。

上段丘葺石は、中段テラスより、幅5.3m高さ2.5mにわたり遺存しているが、その配列状況は乱れており、全てが構築時原位置を保つものであるとは考えられず、中段テラスからの転落によるものを考慮する必要がある。葺石の配列からは、上段丘裾部を把握することはできないが、A6杭を境として32°の傾斜が18°へと変換している点より、同杭付近に上段丘の裾部を設定することが可能となる。同地点より西側の葺石に関しては、中段テラスに転落したものの堆積による可能性が高いものといえよう。

下段丘は、裾部より長さ1m、高さ0.5mにわたり葺石が遺存している。葺石は、幅30cm前後の比較的大きな石材を配列して整然とした裾部が形成され、その上部に貼り石状に小振りの石材を葺上げている。墳丘裾部の位置は明瞭に判断されるところであり、A7＋3.1mの地点を裾として設定できる。上部の墳丘は、崩落が著しく、葺石の遺存は認められない。裾部葺石際には岩盤の露出が確認されるため、下段丘の形成に当っては、旧尾根を削平して基層となる岩盤面においてレベルを揃えた後、盛土を行なっている状況がうかがえる。下段丘の傾斜は33°を測り、上段丘のそれと一致した数値を示すが、A7杭付近において20°に傾斜が変換するため、同杭付近に中段テラスとの境界線が求められると考えられる。

中段テラスは、傾斜20°前後の平坦面により形成され、先述した下段丘との境界と上段丘裾部の推定から、5m弱の幅を推定することができる。他の調査地点で、テラス幅が1.5m以内であることと比較すれば、非常に大きな数値を示すといえよう。この点から、後円部西側におけるテラスは、広い幅をもって形成されていると推定され、注意を要する点である。テラス部のほぼ中央には埴輪列が確認され、3個体の円筒埴輪基部が検出されている。表土直下に埋没し、いずれも底部より10cm程度が遺存しているのみである。南側の2個体はほぼ接した形で樹立され、1.3m間隔をおいて北側にもう1個体が配置されているが、掘り方あるいは抜き取り痕跡が確認できなかったため、樹立当時の配列状況を

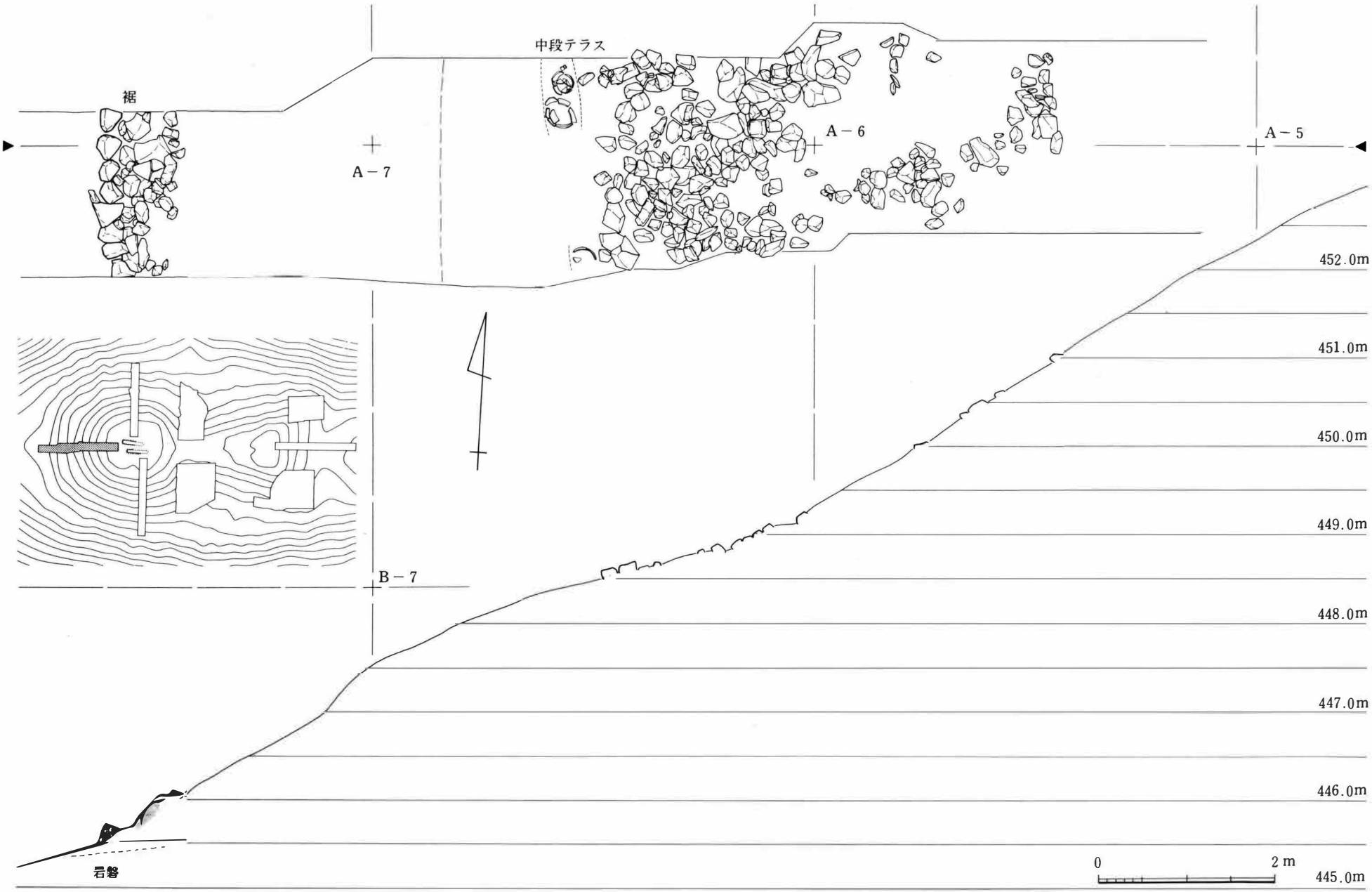


図4　後円部西トレンチ（1：60）

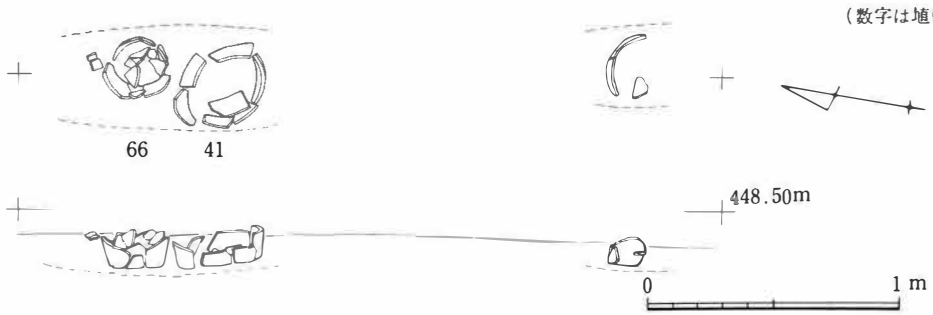


図５　後円部西トレンチ埴輪列（１：30）

把握するには至っていない。

本トレンチにおいて把握される現存の墳丘構造は、次のようにまとめられる。下段丘高さ2.2m、中段テラス幅4.5m、上段丘高さ4.6m(墳頂標高を453.6mとした場合)。山丘尾根上を若干削平して､地山の礫を混入しながら盛土して構築され、中段テラスに埴輪列を配置し、上・下段とも葺石を有する。下段丘裾部の標高は445.5m、中段テラスは448～449mを測るが、埴輪列の基底が448.3mであることから、中段テラスの標高は448.5mを基準として考えてよいだろう。中段テラスがほぼ水平に設定されていたと仮定するならば、墳丘高さの復元値は、下段丘3･0m上段丘5.1mとなる。

（２）後円部南トレンチ（図６）

後円部南側墳丘の範囲を確定させるために設定したもので、RS－３lineに沿って、１m幅で墳頂よりRS－Eline＋３mまでの全長23mのトレンチであり、墳頂部分は主体部確認トレンチを兼ねている。

現状においては、中段テラスと下段丘裾部とに、僅かな段差が認められる程度であったが、発掘により上段丘の葺石と、岩盤削り出しにより形成された下段丘裾部が検出された。

上段丘では、中段テラスより長さ３m、高さ1.7mにわたり葺石が検出されている。上部ほど崩壊が著しいが、裾部の遺存状況は比較的良好であり、上段丘裾部をRS－Cline＋4.0mの地点に設定できる。葺石上部に存在するもう一つの段差は、崩落によるものであり、直接墳丘構造にかかわるものではない。同部分を修正して傾斜を測定した場合、25°の値が求められる。

下段丘には葺石は存在せず、全て崩落しているものと判断される。ただし、構築の際に基層である岩盤を削り出しているため、裾部は明確に把握され、RS－Dline＋4.9m地点に設定することができる。岩盤を基盤として盛土が施されているが、盛土中には岩盤に由来する角礫が多量に含まれており、特に中段テラス付近ではほとんど角礫をもって盛土されているといってもよい。下段丘の傾斜は、34°を呈する。

中段テラス部は、盛土の一部である角礫層まで掘り下げたが、埴輪列を検出するには至っていない。築造時の外観を考慮すれば、角礫上部を覆う盛土を想定すべきであろう。

本トレンチにおいて把握される現存の墳丘構造は、次のようにまとめられる。下段丘高さ2.8m、中段テラス幅1.3m、上段丘高さ4.7m、下段丘裾部は岩盤削り出しにより成形し、中段テラスまで地山の角礫を主体とした盛土により構築される。葺石は上段丘のみに遺存する。標高は、下段丘裾部で445.9m、上段丘裾部で448.8mを測る。

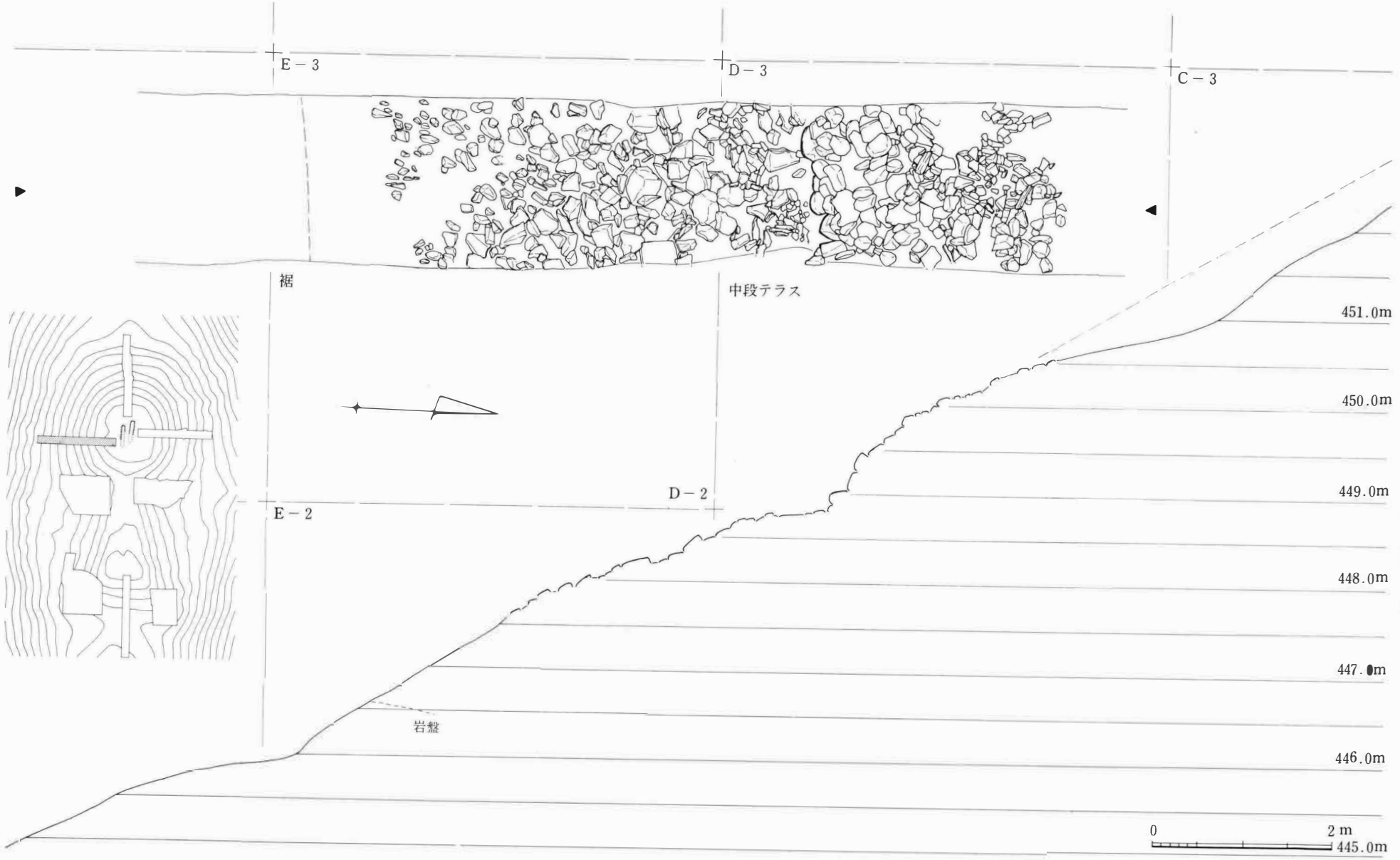


図6　後円部南トレンチ（1：60）

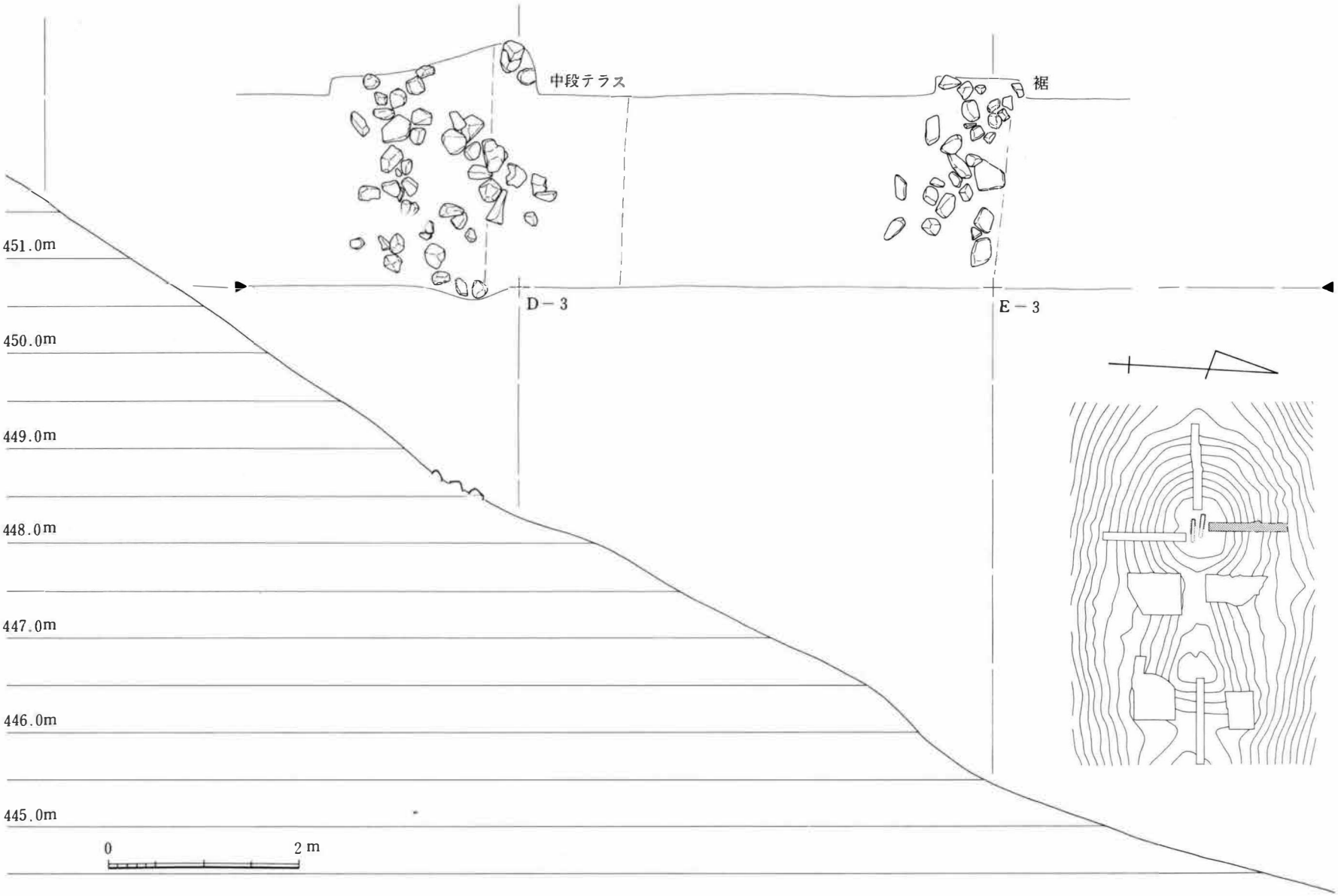


図７　後田部北トレンチ（1：60）

（3）後円部北トレンチ（図7）

後円部北側の墳丘範囲を確定させるために設定されたもので、RN－3lineに沿って、1m幅で墳頂RN－B3杭より、墳麓RN－E3＋3.6mまでの全長18.6mのトレンチである。

現状においては、中段テラスと下段丘裾部とに、僅かな段差が認められる程度であったが、発掘により上段丘及び下段丘裾部に葺石の遺存を確認した。

上段丘では、中段テラスより長さ2m、高さ1mにわたり葺石が確認されている。全般に遺存状況が悪く、裾部を画する配列も明確ではないため、崩落による堆積を考慮せざるをえない。現存する中段テラスの傾斜を22°に設定した場合、RN－C3＋4.4m地点において35°の傾斜により上段丘へと移行するため、同地点付近を裾として把握しておきたい。

下段丘は、裾部より長さ1m、高さ0.8mにわたり葺石が検出されている。やはり遺存状況が悪く、まばらな配置を示すが、裾部の配列を僅かに残すものであり、RN－E3杭付近にそれを設定できる。墳丘は上部の中段テラス際の崩落が著しいものの、30°の傾斜が測定される。

中段テラスは、肩部の崩落が著しく、埴輪列の痕跡も確認するに至っていない。

本トレンチにおいて把握される現存の墳丘構造は、次のようにまとめられよう。下段丘高さ3.0m中段テラス幅1.4m　上段丘高さ5.1m、上段丘、下段丘ともに葺石が遺存する。構築に際しての裾部削り出しは、基層となる岩盤に達しておらず、墳丘は全て盛土により構成されているものと思われる。標高は、下段丘裾部で446.0m、上段丘裾部で448.5mを測る。

（4）墳頂部

後円部墳頂の現状は、盗掘により中央部が長さ8mほど窪み、その周縁が盗掘時の排土によると思われる若干の盛り上がりを呈するものであった。

埋葬主体部の調査の際には、墓壙の周縁、特に南側と西側から多量の土師器破片が出土している。表土直下に位置し、盗掘排土による二次堆積の可能性も考えられたが、当初から墓壙の上面より周縁にかけて位置していたものと判断され、埋葬後の墳頂部での祭祀に関連する遺物として取り扱うものとする。

これに伴い埴輪破片も出土しており、墳頂部に埴輪列が存在していた可能性が考えられたため、その配列の確認のために墓壙周縁部について表土を掘り下げる確認調査を実施した。埴輪片の出土はあったものの、その配列を示す痕跡を把握するには至っていない。ただし、墳頂部における埴輪破片の出土事実を重視すれば、埴輪列存在の可能性は否定されるものではない。　（青木和明）

B　くびれ部の調査

くびれ部においては、南北くびれ部の形状、前方部墳頂から後円部前面への変化、埴輪列の確認を中心に、3箇所の調査区を設定し実施した。

（1）南側くびれ部（図8～10）

南側くびれ部を中心に、東西10m、南北15mの範囲にわたり調査を実施し、顕著な二段築成を検出した。

上段丘は、中段テラス面より前方部墳頂まで約2.7mの高さと傾斜角30°を測る。葺石の崩落は後円部側で目立つものの、調査を実施した中では、最も遺存状態が良かった部分であり、くびれ部接点では、高さ1.8mまで整った状態で確認された。それは、人頭大の石材の長辺を中段テラスラインに合わせ、前方部前面に向って約10°開くよう配列し、やや小形(30～20cm)の石材を下部の葺石に添うよう葺上げている。前方部に比べ後円部の葺石は、小形の石材を使用しており、葺石を除去して調査を行っていないため、断言はできないが、後円部に葺石を行ったあとに、前方部に葺石を施している可能性が高い。上段丘には自然山丘の岩盤の露出はなく、盛土により形成されているものと思われる。

下段丘では、墳裾より中段テラスまで約1.1～1.3mの高さと傾斜角25°を測る。葺石の崩落は進んでいたが、くびれ部接点では、一部に抜け落ちた部分はあるものの、ほぼ中段テラス面まで葺石で覆われている。前方部及び後円部は墳裾部分を除き、大方の葺石は墳麓へと崩落しているが、残存部分は、上段丘同様に人頭大の石材で裾を整えており、前方部前面に向って10°開くよう配列されている。前方部東側では、約2mにわたって自然山丘の岩盤が露出しており、下段丘の一部は岩盤を削って形成されていることが理解できる。

中段テラスは、墳裾部分から1.1mほどの高さに造られており、その幅は前方部で約1m、後円部で1.6mを測ることができる。テラス面はほぼ平坦であるが、前方部から後円部へとなだらかに傾斜して、調査区の両端では30cmほどのレベル差を測れる。テラスのほぼ中央からは、15個体の埴輪が埴輪列として確認されている。ただ、上段丘くびれ部接点と埴輪列の屈曲点とには、ややずれが見られる。埴輪列は僅かの表土を掘り下げると検出でき、前方部側で20cm、後円部側で5～10cmほどの基部が残存していた。テラス面の埴輪片及び上段丘裾となる葺石から判断すれば、残存部分が樹立当時の埋設高であったと推定される。埴輪列の構成は、前方部側に3本が接するような状態で並べられ、前方部列と後円部列の接点となる部分は、前方部側で1本の空間を開け、底径の大きな埴輪を樹立し、後円部では4本を接するように配列し、2本分の空間を開けて2本、2本分の空間を開け、さらに6本を配列している。このような配列は前方部前面においても検出されており、何らかの意図があるものと思われる。埴輪列の掘方については明確にできなかったが、樹立されていた埴輪の直下は岩盤の大ブロックとなることから、埴輪の残存高は掘方の深さをも示していると思われる。ただ、前方部側で岩盤を削り出してテラスを造り出している部分には掘方はなく、築造当時から埴輪の樹立はなかったと考えられる。後円部では盛土によって中段テラスを形成している。

墳裾・墳麓部分には、埴輪片が散在していたが、崩落した葺石、表土を除去すると自然山丘の岩盤が露出した。このことは古墳築造にあたって山丘の削平が大掛かりに行なわれていることを示してい

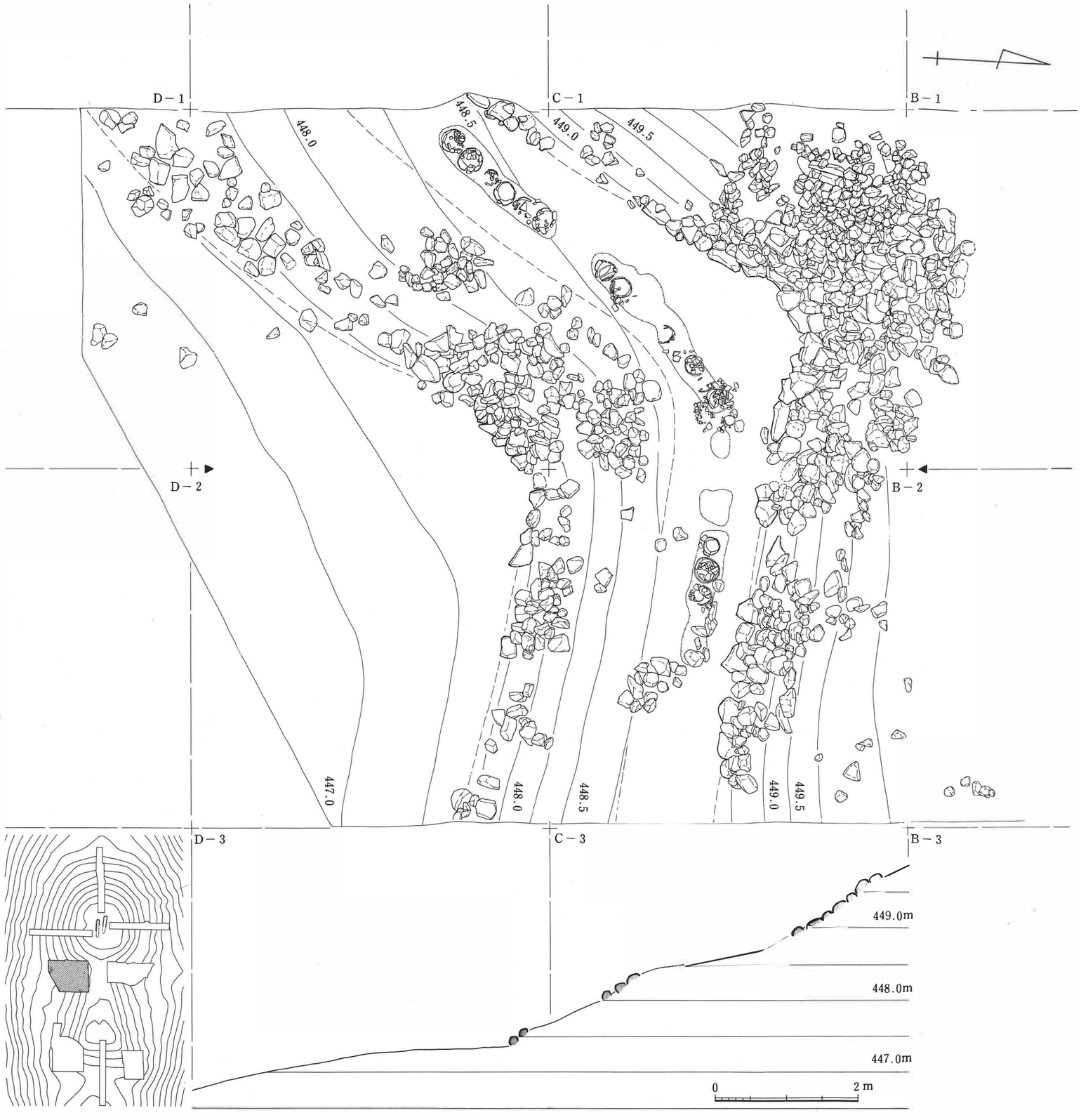


図８　くびれ部南側拡張調査区（１：60）

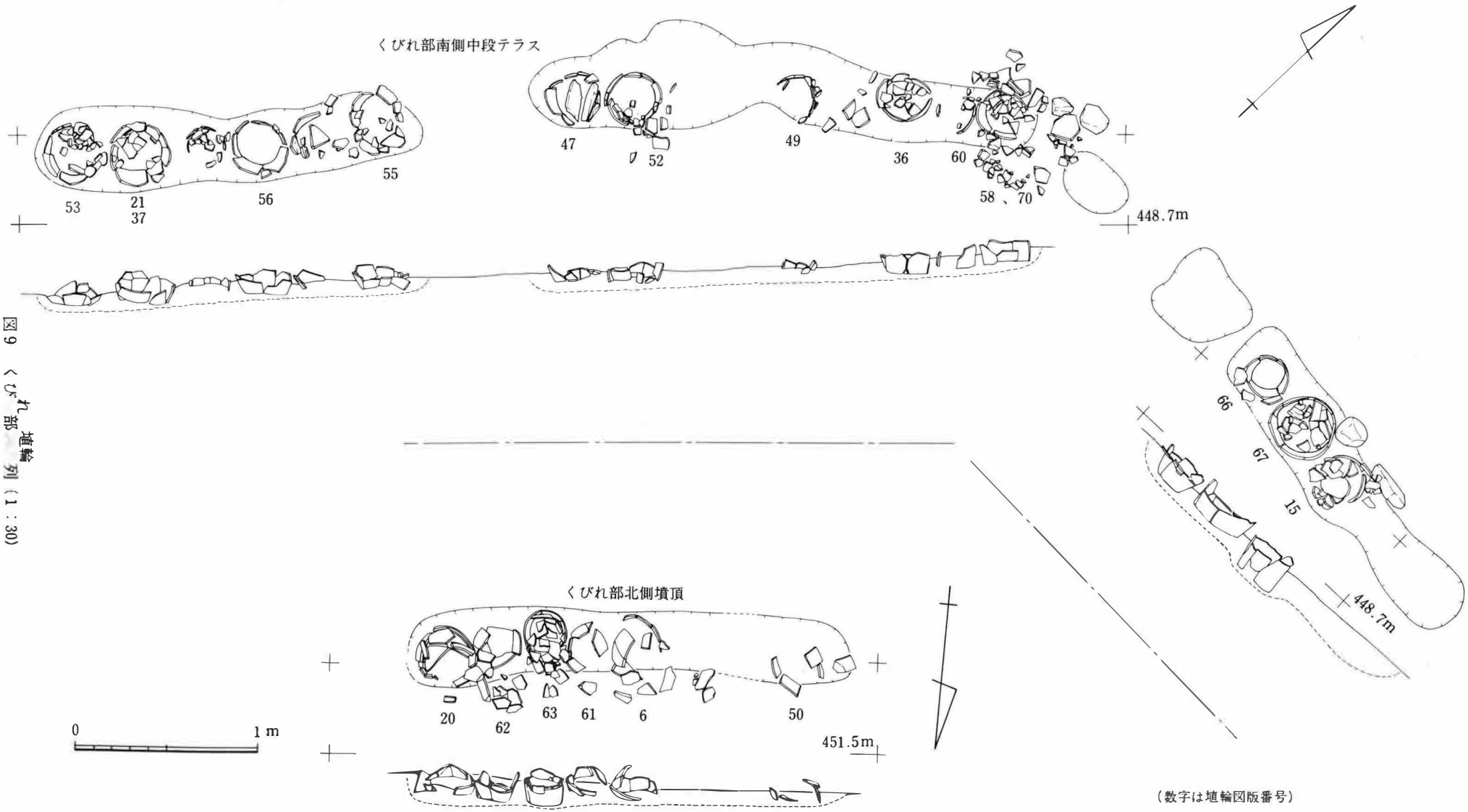


図9　くびれ部埴輪列（1：30）

（数字は埴輪図版番号）

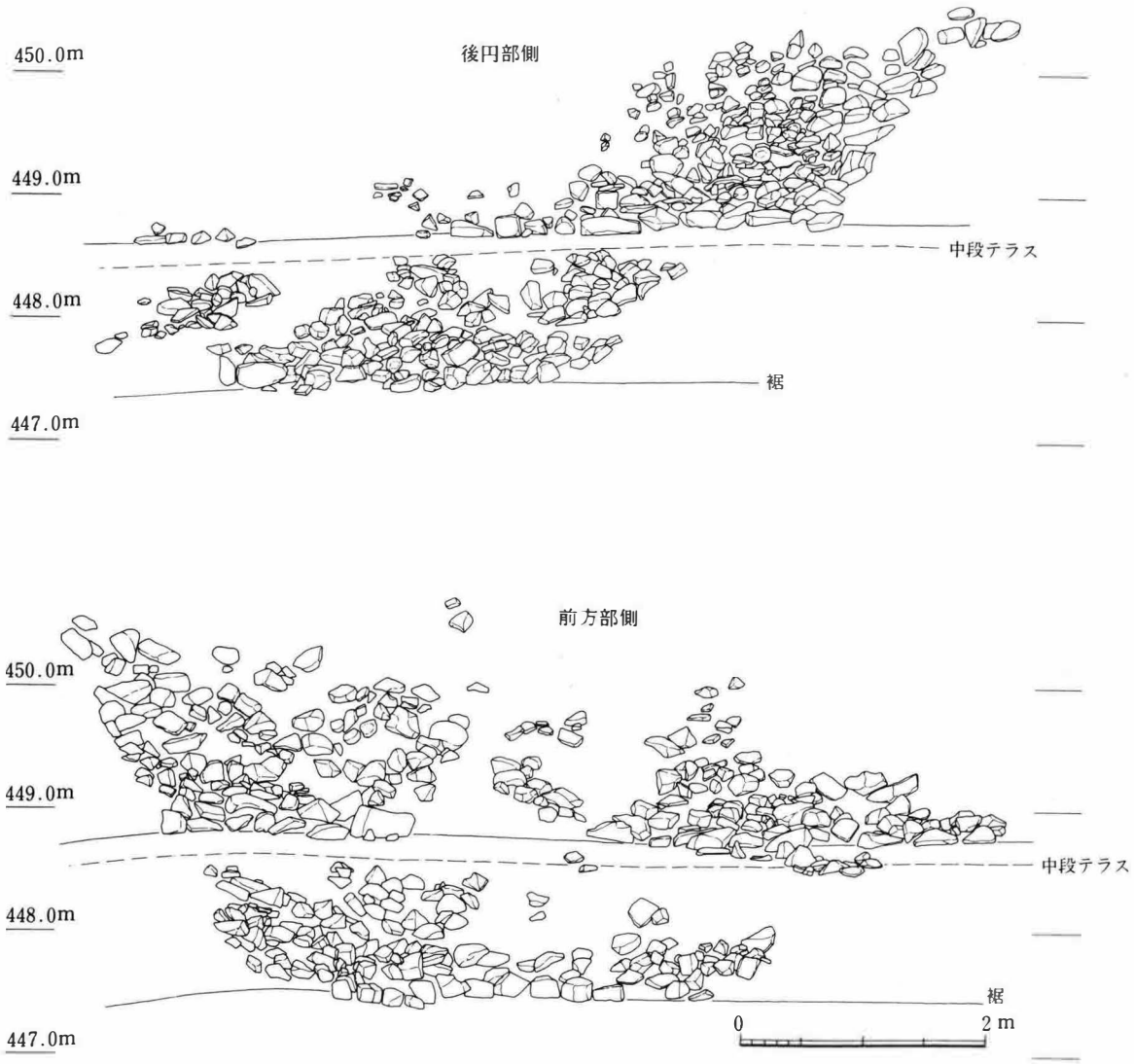


図10　くびれ部南側葺石立面（1：60）

る。墳裾には埴輪の樹立は認められない。

（2）北側くびれ部（図9・11・12）

北側くびれ部を中心に、東西10m南北13mの範囲にわたり調査を実施した。南側くびれ部に比べ、崩落は進んでいるものの、二段築成を検出した。

上段丘は、中段テラスより前方部墳頂まで2.4mの高さと、傾斜角35°を測ることができる。葺石はくびれ部接点において良好な状況にあるほかは、崩落が進んでいる。特に後円部では裾付近に僅かに残存するのみであった。くびれ部接点の葺石は、幅1.6m高さ4mにわたって遺存しており、配列は南側同様人頭大の石材により、前方部前面にむかって6°ほど開くように裾ラインを整え、やや小形(30～15㎝)の石材により上部を葺上げている。くびれ部接点より3mほど前方部によった肩の付近からは、埴輪列が検出された。5本が接するほどに樹立され、基部より最大20㎝ほどが残存していた。樹立位置が前方部肩のラインとほぼ重なっており、墳丘も崩落していることから、樹立当時の埋設高はもう少

図11　くびれ部北側拡張調査区（1：60）

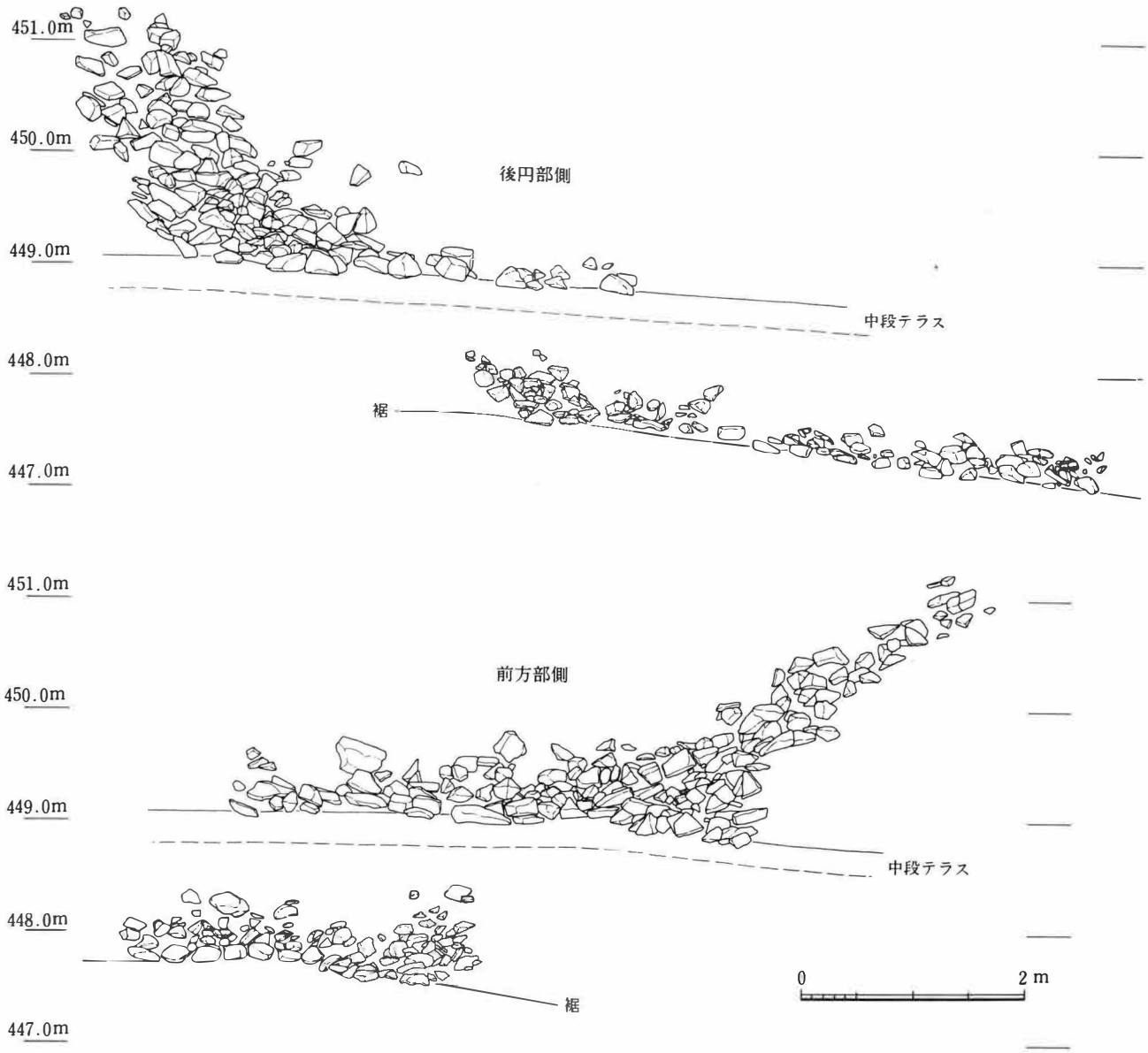


図12　くびれ部北側葺石立面（1：60）

しあったものと思われる。前方部墳頂において埴輪列が確認されたのはこの部分においてだけである。上段において、自然山丘の岩盤の露出はなく、盛土によって形成されているものと思われる。

下段丘は、崩落が激しく中段テラスとの間に明瞭な稜をなしておらず、その高さを知ることはできない。ただ、上段丘の裾部分が中段テラス面であったとすれば、1.3mを測ることができる。葺石の崩落は上段丘よりさらに進んでおり、くびれ部接点と前方部裾付近に僅かに残存するのみであった。後円部に見られる葺石は、浮いているものもかなり含まれており、原位置を留めているとは言い難い。前方部裾のラインは、前方部前面にむかってほぼ10°の角度で開いている。葺石に使用されている石材は、上段に比べ総体的に小形である。自然山丘の岩盤の露出はなく、よく締め固められた盛土によって形成されている。

中段テラス部は、殆ど原形を留めないほど崩落が激しく、強く北側へと傾斜している。したがって、テラスの幅は計測できないが、調査区の東西では約30cmのレベル差をもっており、後円部側へ傾斜している。上段丘裾から60～100cm隔てて、直径40cm前後のくぼみが３箇所確認されている。いずれも深さ５cmほどのもので、埴輪埋設跡と考えられるが、墳丘北側にはかなりの埴輪盗掘坑も見られその可能性もある。

墳裾・墳麓には、埴輪片が散在していたが、南側くびれ部に比べその量は少ない。自然山丘の岩盤の露出はなく、岩盤の風土化によって覆われていることから、墳丘の築造にあたって、自然山丘にはほとんど手を入れていないものと思われる。墳裾に埴輪列の痕跡はなかった。

（３）後円部前面

前方部墳頂から後円部前面にむかって幅１ｍで主軸に沿って設定したトレンチである。

後円部前面には、全く葺石が残存しておらず、僅かの表土を取り除くと、良く締め固められた盛土となる。しかし、前方部墳頂から後円部前面に至る変換点は、Ａ－１の杭西側１ｍに見られ、埴輪片が集中して出土した。

以上のくびれ部の調査により把握された墳丘構造は次のようにまとめられる。

下段丘の高さは、南北とも1.3m（FS－２ライン）で、中段テラスは、南側くびれ部の前方部で１m、後円部で1.6mとなる。また、上段丘の高さは南側で2.7m北側で2.4mとなる。北側と南側のくびれ部は墳裾で19.9m、上段丘裾で12.6m前方部墳頂で４ｍをそれぞれ測る。埴輪列は中段テラスと前方部肩に配列されていたが、墳裾部分にはない。標高は南側くびれ部接点で447.5m、北側で448.0mを示している。

（佐藤信之）

C　前方部の調査

前方部においては、東側の前方部前面主軸上に試掘坑（前方部東トレンチ）を、南隅と北隅に拡張調査区を設定した。また、墳頂部に関しては、埴輪列確認等を目的として、補足的な調査を実施している。

（1）前方部東トレンチ（図13）

前方部前面の形状と、構築に際しての山丘尾根切断状況を把握するために設定したもので、FSN－Alineに沿って、墳頂A 6杭より、東側尾根上A10杭まで、1m幅で全長20mのトレンチである。

墳丘の高さが低く崩落が少ないためか、保存状況は良好であり、現状においても中段テラス及び下段丘裾部が容易に観察された。発掘の結果、上段丘及び下段丘において、葺石が検出されるに至った。

上段丘では、中段テラスより長さ3.5m高さ1.7mにわたり葺石が遺存している。上部は遺存状況が良好であるものの、下位ほど崩落が著しく認められる。これは、中段テラスから高さ80cmまでが、基層となる岩盤を削り出した面に位置し、滑落し易い状況にあるためと考えられる。この位置においての葺石は、削り出した岩盤面を若干の山土により被覆した上に固定されている。裾部を画する葺石配列は崩壊しているものと思われるが、A 7 +1.8m地点に裾部を想定したい。上段丘の傾斜は、ほぼ一様であり、25°を測るものである。

下段丘では、裾部より幅1.3m、高さ0.4mにわたり葺石が遺存している。下段丘そのものの高さが著しく低いため、崩落は最小限にとどまり、遺存状況は良好である。削り出された基層の岩盤面に、山土を被覆して整形し、葺石が配置されており、その傾斜は、20°を測る。

中段テラスは、下段の葺石配置の際と同様に、岩盤面を山土により被覆し、整形している。岩盤面まで掘り下げたが、埴輪列またはその痕跡を検出するには至っていない。

本トレンチにおいて把握される現存の墳丘構造は、次のようにまとめられる。下段丘高さ0.5m、中段テラス幅1.2m、上段丘高さ3.4m(墳頂標高を453.20mとした場合)、山丘尾根上を深さ1.5mほどにわたり切断して、裾部及び墳丘面を削り出して整形しており、下段丘、中段テラス及び上段丘の下位は、岩盤面をそのまま墳丘として利用している。岩盤面上には、更に山土を被覆して調整し、葺石を施す。標高は下段丘裾部で449.3m、上段丘裾部で449.8mを測る。

（2）南隅拡張区（図14～16）

前方部南隅の形状と範囲とを確定させるために、FS－8 lineより西側の位置に、約120㎡の面積で設定したものである。

現状では概ね中段テラス及び下段丘裾の遺存状況が良好であり、尾根幅一杯に張り出す形となるコーナー部のみ崩落が進行している様子であった。発掘により、上段及び下段丘の葺石が確認されるとともに、東側の中段テラス前面部に埴輪列が検出された。

上段丘では、コーナー部の稜線沿いに葺石が崩落しているものの、南側面、東前面とも、幅1.5m、高さ0.6m程度で葺石の配列が遺存する。中段テラス部への崩落も考慮されるが、裾部の配列は比較的整っており、コーナー部の開き角度はほぼ直角を測るものである。上段丘の傾斜は、東前面において

図13　前方部東トレンチ（１：60）

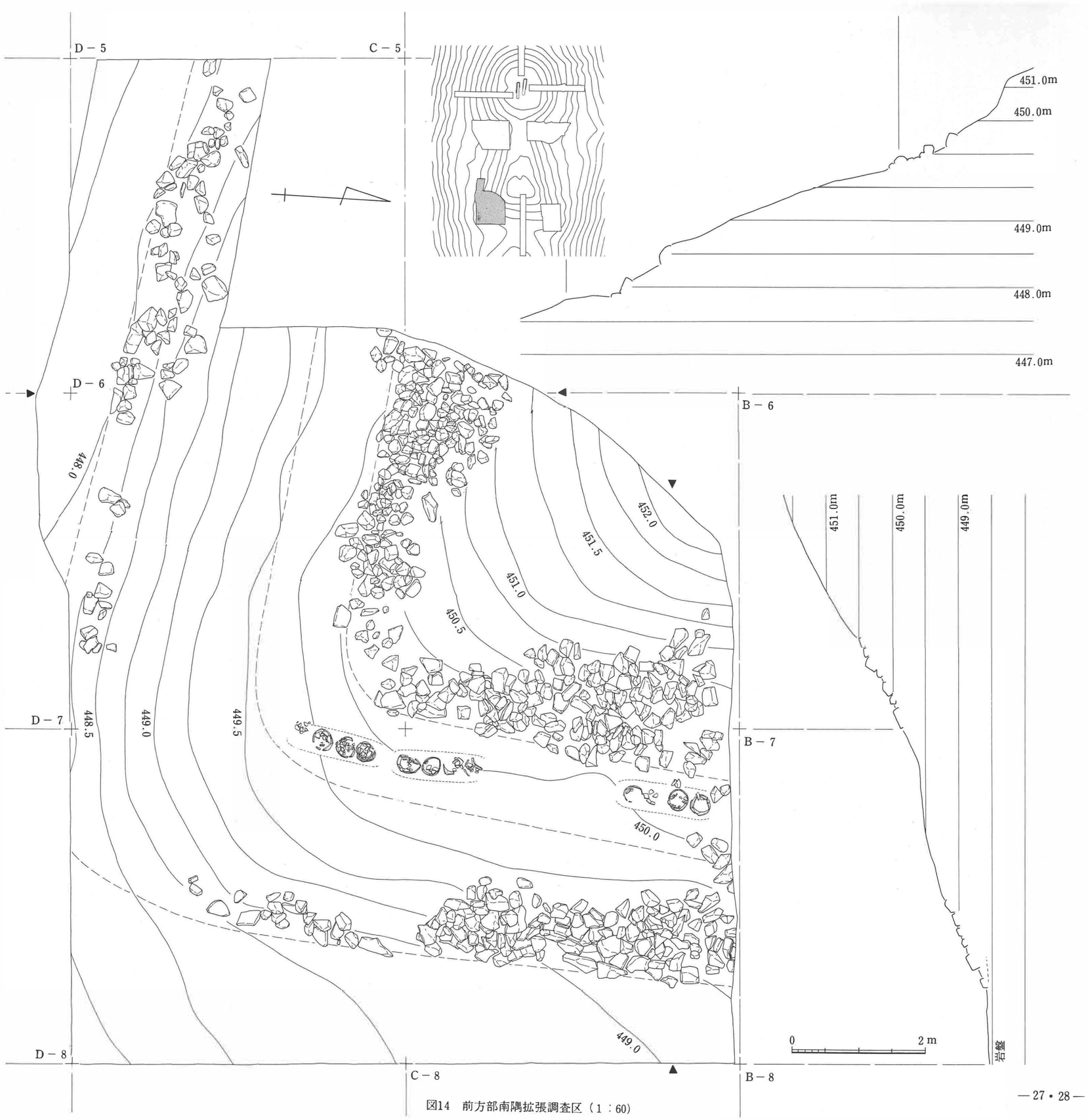


図14　前方部南隅拡張調査区（1：60）

28°、南側面において29°を測り、ほぼ同様の数値を示している。

下段丘では、上段丘と比較して葺石の遺存状況は悪く、東前面の主軸寄りが良好な状況にある他は崩落が著しい。特にコーナー部では全ての葺石が欠落しており、南側面部も裾部付近にまばらな配列が残るのみである。遺存の良好な東前面部における葺石は、幅1.2m、高さ0.8mにわたり遺存し、上段丘よりやや大きめの石材を用いており、裾部の配列は整っている。葺石裾部には自然山丘の岩盤が露出しており、RS－Clineまでは丘尾切断により下段丘が形成されていることが推定される。逆にコーナー部では、自然山丘上に盛土を施し、尾根幅を拡張したうえで、下段丘が形成されたものと考えられ、急傾斜に耐えられずに葺石及び盛土が崩落しているものであろう。南側面も同様に崩落が著しく、盛土内の混入礫を露出する部分が多いが、崩落を免れた裾部付近の葺石遺存により、裾部のラインは復元が可能である。コーナー部の形状は不明といわざるをえないが、東前面裾部の葺石配置がやや内傾している点より、隅丸の形状を呈していた可能性が強い。その開き角度は、上段丘と同様に直角に近い値が求められる。下段丘の傾斜は、東前面において25°、南側面において28°を測る。

中段テラスは、東前面において遺存状況が良く埴輪列も確認されているが、南側面では崩落が進行しており埴輪列も確認されていない。埴輪列は、上段丘葺石裾部より70cm隔てて、ほぼテラス部の中央に位置している。表土直下に埋没し、12個体が確認され、いずれも底部から20cm程度が原位置を保つ状況にある。上面に埴輪上部の破片が散乱堆積する点から、樹立当初の埋置部位も、基部20cm程度であることが推定される。一部に盗掘による攪乱が存在し、埴輪埋置における掘り方も明確に把握するに至っていないため、予測の域を出ないが、埴輪列構成に関して興味深い傾向が指摘できる。盗掘を免れた埴輪は、南より4個体、1本分の空間を空けて4個体、6～7本分の空間を空けて4個体が並列している。6～7本分の空間は、明らかに盗掘による攪乱であるため、4～5個体の埴輪の埋置を想定すべきであろう。また、遺存する埴輪の底部レベルと並びには断続性が認められるところであり、それぞれ接した位置にある数個体ごとにブロックが認められる。この点から、埴

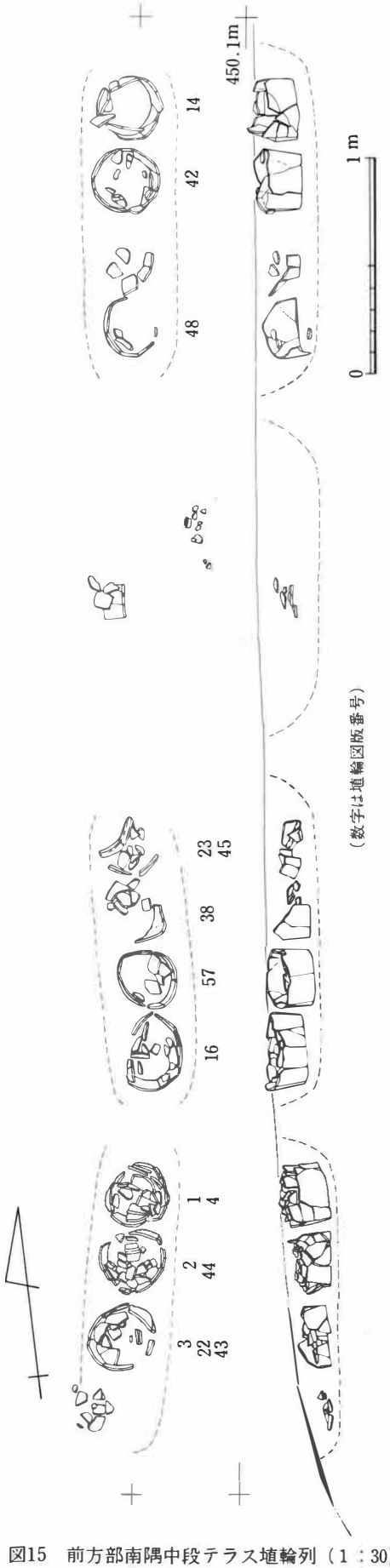


図15　前方部南隅中段テラス埴輪列（1：30）

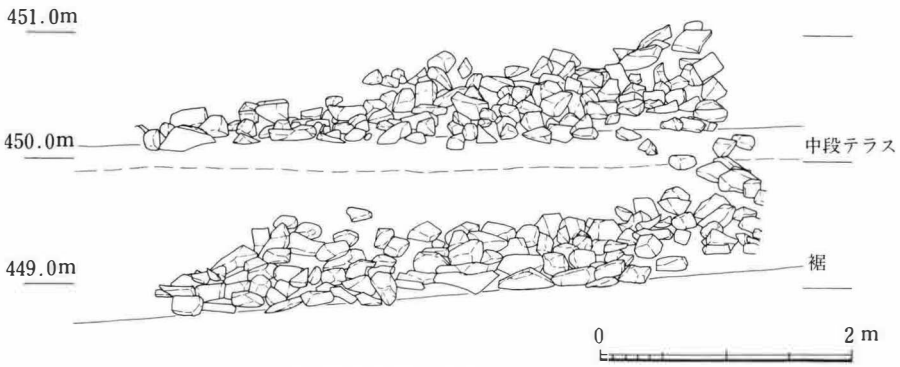


図16　前方部南隅前面部葺石立面（1：60）

輪列の埋置にあたっては、一律に、同時に実施されたと考えるより、4本程度を単位としてブロック毎に埋置された状況が想定される。

本拡張区において把握される現存の墳丘構造は、次のようにまとめられる。下段丘高さ1.0m(FS−Bline上）～1.8m（FS−6line上)、中段テラス幅1.3m、上段丘高さ3.1m、上段丘下段丘とも葺石が遺存し、中段テラスには埴輪列が巡らされている。南側面における下段丘裾、中段テラスは、後円部側へ傾斜していく。標高は、下段丘裾部で449.1m～447.8m、上段丘裾部で450.1m～449.7mを測る。

（3）北隅拡張区（図17）

前方部北隅の形状と範囲を確定させるために、FS−8＋2 mlineより西側の位置に約60㎡の面積で設定したものである。現状では、南隅に比較して保存状態が悪く、特に北側の崩落が進行している様子であった。発掘によっても、葺石の部分的な遺存を確認するにとどまった。

上段丘では、東前面部と北側面部に幅1m、高さ0.5mほどの範囲で葺石が遺存する。ただしコーナー部の稜線沿いは全てが欠落しており、また、遺存部分での配置もかなりまばらな状況を呈している。このため、裾部の配列は明瞭に把握されるものでないが、南隅より鋭角な80°前後の角度を想定しておく。上段丘での傾斜は25°を測るものである。

下段丘では、葺石の遺存は更に少なく、コーナー部は全て欠落し、東前面、北側面の裾部付近に僅かに検出されたものである。それも裾部を画する明瞭な配列を示していないため、多分に崩落による堆積が想定されるべきである。コーナー部の開き角度は不明といわざるをえないが、葺石の遺存状況からみて、80°前後の値を想定しておきたい。下段丘の傾斜は30°前後を呈する。下段丘の形成に関しても、南隅コーナー部と同様に、自然山丘に盛土を施し尾根幅を拡張した後に、更に施されたものであるため、コーナー部の崩落は著しいものとなっている。コーナー部裾部に部分的な試掘を実施した所見によれば、基層の岩盤に由来する大角礫を多量に混入した盛土が確認され、下段丘形成前に、かなり大規模な尾根幅拡張の工程が存在したらしいことが推定される。

中段テラスは、北側面の崩落が著しいものの、東前面では比較的原形を保つと判断される。埴輪列の遺存もなく、盗掘による抜き取りの痕跡も確認されてはいない。

本拡張区において把握される現存の墳丘構造は、次のようにまとめられる。下段丘高さ、東前面において0.8m、北側面では1.5m内外、中段テラス幅1.3m、上段丘高さ3.2m(東前面部からの比高)、上下段とも僅かに葺石が遺存する。北側面における下段丘・中段テラスは後円部側に向かって傾斜して

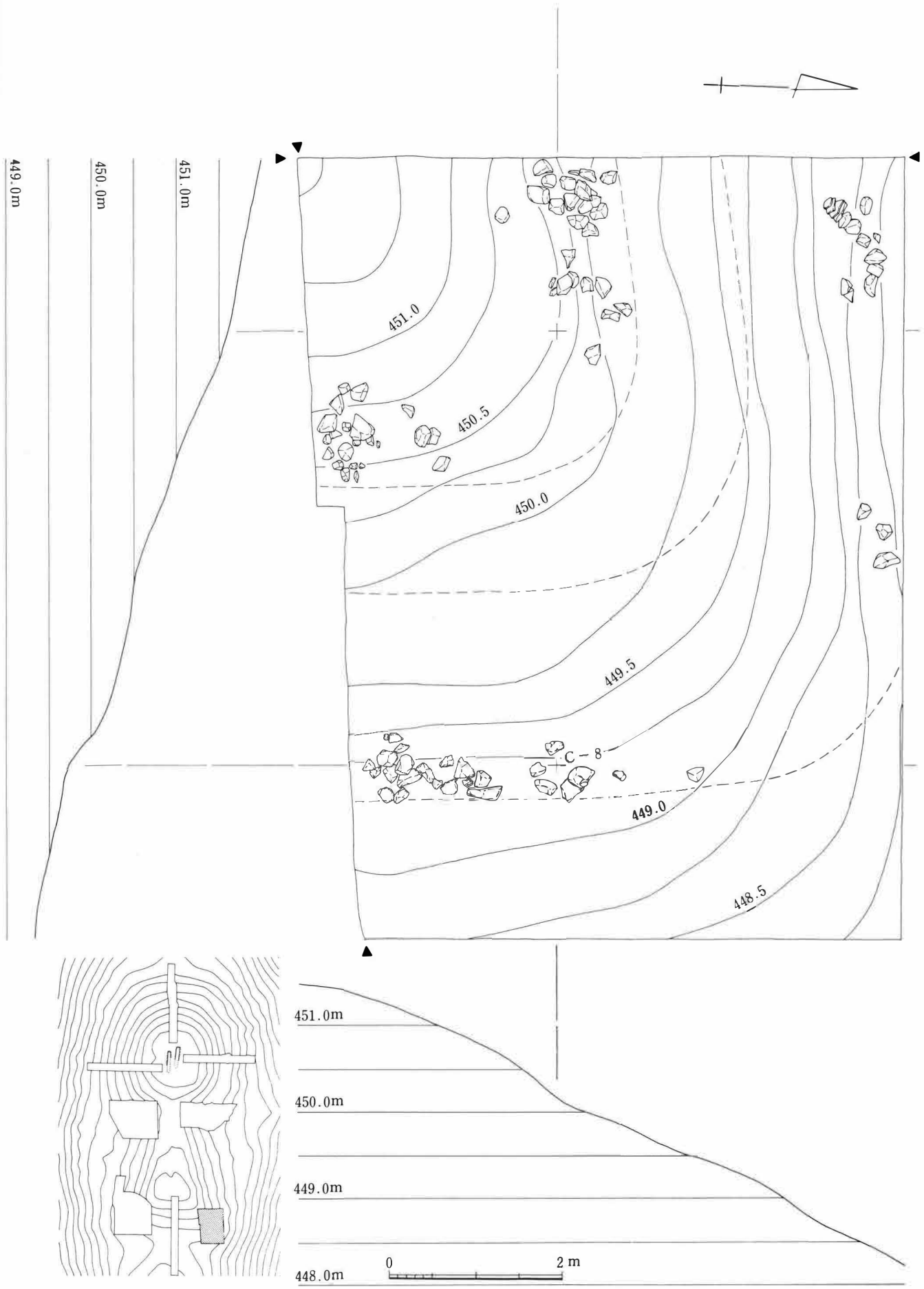


図17　前方部北隅拡張調査区（1：60）

ゆく。標高は、下段丘裾部で449.2m、中段テラスで450.0～449.8mを測る。

（4）墳頂部（図18）

前方部墳頂の現状は、ほぼ平坦面を呈し、保存状態は良好であった。部分的に盗掘坑らしき窪みが存在したため、墓壙の存在も予想されるところであったが、調査の結果墓壙の存在については否定されることとなった。

埴輪に関しては、北側肩部において原位置を保つと思われる2個体の埴輪と、中央部に多量の埴輪破片の堆積を確認するに至った。

原位置を保つと判断された埴輪2個体は、頂部より上段丘斜面へと移行する傾斜面に位置し、ほとんど地表に顔を出す程度に埋没していたものである。（1）は底部より10cmを遺存させた基部であり、墳丘盛土の崩落にともない傾きが若干ずれている状況にあるが、ほぼ樹立当初の位置にあるものと考えられる。（2）も検出状況は同様であったが、底部を欠損し凸帯部を埋置した形となっているため、埴輪列としての埋置状況を示すものであるかについては疑問の残るところである。上位からの転落による可能性も否定されないが、人為的に埋置されたものと判断しておきたい。

なお、この他に埴輪列の痕跡は確認されず、その配列状況を知ることはできない。ただし、くびれ部北側墳頂で確認された6個体から成る埴輪列と、本調査区埴輪個体（1）（2）の検出位置は、ほぼ1直線により結ぶことができ、墳頂北側の肩部際に樹立された埴輪列のラインを復元することが可能である。

墳頂中央部において検出された多量の埴輪破片は、主軸F－A5杭よりF－A4杭までの間に、長さ6m、幅2mにわたり分布するものであり、特にF－A4＋2～3mの地点に濃密な分布を示している。ほとんどが細片であり、人為的に破砕された状況を示し、埴輪列としての埋置状況も確認されてはいない。また、埴輪破片とともに、奈良時代の須恵器坏、寛永通宝、現代の玩具部品等が混在して発見されているため、後世に至って、何らかの理由により同地点に運搬され遺棄されたものと判断される。ただし、遺棄された埴輪が、墳頂部埴輪列を構成していた個体である可能性は高いものといえる。

（青木和明）

図18　前方部墳頂埴輪出土状況（1：30）

D　小結

土口将軍塚古墳は、本来墳丘の遺存状況が良好な古墳であり、調査以前よりその規模や構造の概要については報告されてきた(更埴市教委1973、岩崎1982)。ただし、調査着手前には、墳丘上は松及び雑木により覆われており、必ずしも観察が容易であったとは言い難い。調査の進行にともない、可能な限り小雑木を伐採したため、古墳の外観がかなり明確に把握されることとなり、調査はそれを基に墳丘構造を検証してゆく形で進められてきた。調査成果には、新知見も加わり、当初予定された墳丘構造に関する情報もほぼ収集し得たものといえる。以下節を追って、墳丘の構造に関する調査成果をまとめるものとする。

(1) 墳丘の形態と施設

平面形は端正な前方後円形を呈し、主軸方位はほぼ東西方向を示す。墳丘は二段築成により、中段テラスをはさんで上段丘と下段丘とに分かれるものである。

埋葬施設

後円部墳頂において、竪穴式石室が2基検出されている。ほぼ全域を調査した前方部墳頂、及び墳丘下裾部周辺の調査範囲内では、特に埋葬施設の存在を示す痕跡は認められないため、埋葬施設は後円部墳頂のみに限定されると判断される。

埴輪列

墳頂においては、前方部北縁で8個体、中段テラスにおいては、後円部西トレンチで3個体、くびれ部南拡張区で14個体、前方部南拡張区で12個体が検出されている。その他の地区では、埴輪の樹立が確認されていないが、ほぼ全域にわたって埴輪破片の一様な出土状況が認められており、崩落と盗掘とを考慮すれば、中段テラス、前方部墳頂、後円部墳頂にそれぞれ埴輪列が存在したと判断される。なお、特にくびれ部において顕著であるが、下段丘裾からも多量の埴輪破片が出土している。これについては中段テラスからの転落と考えるべきであろう。

遺存状態の良好であったくびれ部南側と前方部南隅では、数本を単位として肩を接する形で埋設され、次の単位を埋設する際には1～2本分程度の空間を開けて埋設している状況が観察されている。基本的には円筒埴輪をほぼ隙間なく立て並べることを前提としているものと思われるが、その構成に関しては今後の課題として残される。

仮に後円部、前方部墳頂の縁辺部と中段テラス部に埴輪列が全周するとした場合、6mにつき埴輪16本の割合で計算すると、想定される埴輪総個体数は約700本を試算することとなる。(後円部墳頂38m、前方部墳頂61m、中段テラス162mを総延長とした場合)

葺　石

各調査範囲内においては、遺存率に差はあるものの、上段丘と下段丘に葺石の存在が確認されている。遺存状況の良好なくびれ部においては、上段丘の葺石が高さ2m以上、ほぼ前方部墳頂直下まで残存した状態にある。この点から、築造時には上段丘、下段丘ともに墳丘斜面がほぼ全域にわたり葺石により覆われていたと判断される。これは、墳丘裾部、特に平坦面の存在するくびれ部裾において、かなりの量の転落した葺石石材が認められることからも容認されよう。

葺石は40～10cm大の転石であり、裾石にはやや大きめの石材を用いていることが後円部西トレンチにおいて確認される。材質は、石英閃緑岩と考えられ、古墳の位置する薬師山の南斜面に露頭が存在している。古墳の築かれた山頂部には同石材が認められないことから、葺石石材は、山麓より採取されたものと理解される。

（2）墳丘の構築状況

調査においては、墳丘の断ち割り等によって内部構造を検証していないため、詳細については不明の点も多いが、調査範囲の中で得られた所見について述べる。

地　山

古墳の立地する山丘は、妻女山より西に伸びた支脈、通称薬師山であり、地質は泥岩砂岩等による「青木層」と、貫入岩としての石英閃緑岩によって構成されている（斎藤1982）。古墳の位置する山頂部において、基層となっている岩盤は、薄く板状に剥離する性状を有した砂質泥岩である。

地山の切削と下段丘

下段丘の構築にあたり、基層としての岩盤面まで切削が及んでいる部分は、後円部西裾、南裾、くびれ部南裾、前方部東裾である。逆に盛土が予想された地点には、前方部前面部の両隅がある。下段丘の平面形を形成するに際しては、第一の工程として、山丘面の削り出しとともに、尾根上から張り出す形となる前方部前面部での尾根幅拡張を目途とした盛土が存在したらしい。古墳築造以前の自然地形は、伏角5°程度の勾配による尾根が想定されるが、前方部前面主軸上においては岩盤面が1.5mの深さまで切削されており、尾根頂部での地形の切削が大規模であったことが予想される。また、くびれ部両脇がかなりの広さをもって平坦面を形成している点も、切削による所産として考えたい。

中段テラス

下段丘形成の最終段階には中段テラスのレベルがそろえられることとなる。中段テラスは前方部前面主軸上のみが岩盤の切削により造り出されるほか、すべて盛土により構成される。先に旧地形の勾配を5°と推定したが、中段テラスにおいては、前方部で3°以内、後円部ではほぼ水平にその傾斜が修正されている。ただし、傾斜地に設定された下段丘裾から成形してテラス部をほぼ平坦に仕上げ、かつ下段丘の法面を一定に保つとするなら、当然のことながら中段テラス外縁の平面形は下段丘の平面形と一致しない結果となる。墳丘復元想定図（図19）において、下段丘外縁がほぼ正円形に設定できるのにたいして、中段テラス外縁が楕円形に設定されるのはこのためであろう。

上段丘と盛土

中段テラスのレベルがそろえられた後の次の工程は、上段丘の形成である。上段丘は、前方部前面の一部を除き、全て盛土により構成されるものと推定される。盛土には、基層としての岩盤に由来する大小の角礫が含まれており、墳丘周辺部の切削に伴う土砂であると判断される。

上段丘の平面形を見ると、前方部はほぼ下段丘と中段テラス外縁形に準じた規格によりプランが設定されているが、後円部に関しては、若干規格を変更して形成されているらしいことがわかる。これは、中段テラス幅が、後円部西トレンチにおいてのみ4.5mという広い数値をとるのに対し、他の調査区においては1.5m以内に留まっている点からも明らかなとおりである。後円部上段丘の平面形は、中段テラス外縁の楕円形プランからやや正円形に近付けたものであり、傾斜地での施工により中段テラス部の外縁形が著しく楕円を呈する結果となった点を修正する意識が働いているものと理解すること

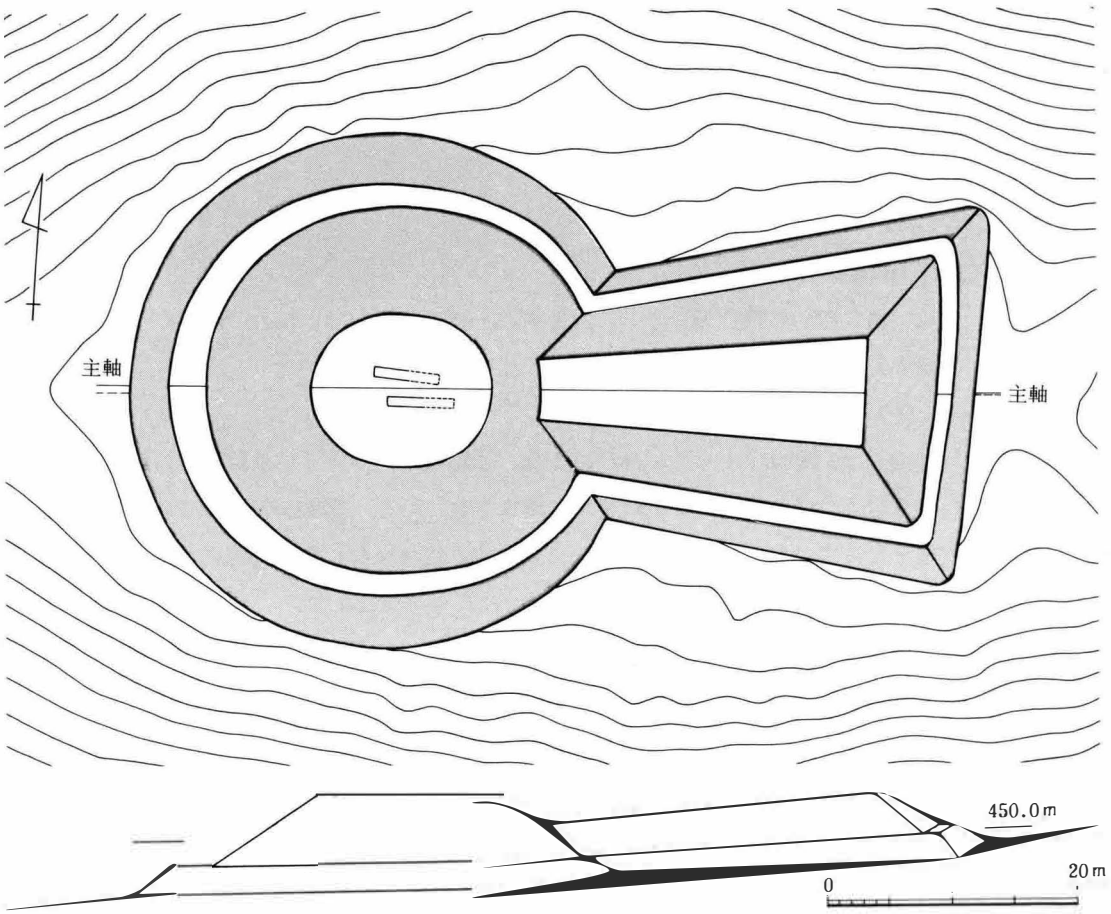


図19　墳丘復元想定図（1：600）（主軸破線は調査区基線）

調査区	標高		中段テラス幅	墳丘勾配	
	上段丘裾	下段丘裾		上段丘	下段丘
後円部西トレンチ	448.5m	445.5m	4.5m	32°	33°
〃　南トレンチ	448.0m	445.9m	1.3m	25°	34°
〃　北トレンチ	448.5m	446.0m	1.4m	35°	30°
くびれ部南拡張区	448.8m	447.3m	1.6m	32°	30°
〃　北拡張区	449.0m	447.6m	1.6m	30°	34°
前方部東トレンチ	449.8m	449.3m	1.2m	25°	20°
〃　南隅　〃	450.1m	449.1m	1.3m	29°	28°
〃　北隅　〃	450.0m	449.2m	1.3m	25°	30°

表3　墳丘計測値

もできよう。なお、墳頂部は、後円部が水平、前方部が約4°の勾配に仕上げられている。

（3）墳丘の規模

最後に、調査により得られた計測値を総合して、墳丘の規模についてまとめておく。各調査区での計測値は表3に示した。

墳丘の主軸は、N－87°30′－E（N＝真北）を測り、ほぼ東西方位によっている。この主軸線は、調査所見をもとに新たに設定したものであり、調査時に調査区設定のために用いた主軸方位から若干ずれる結果となった。

墳丘の全長は、この主軸上において67.7mを測る。ただし前方部前面部が主軸線と直行せず、北隅が東へ傾いているため、この部分を計測値に算入するならば、1.2mほど距離が増加することとなる。

後円部径は、調査区R－3ライン上で40.0mを測る。同ラインは後円部最大径部分に位置しないため、最大径は40.5m程度となろう。

くびれ部幅については、葺石が遺存しているため、確実に把握することができ、19.7mを提示することができる。

前方部最大幅は、前面部両隅の崩落が著しいため、確定しにくい部分である。前方部測縁の延長と前面部裾ラインの交点を求めるなら、30.5m内外の最大幅を測ることができる。　　（青木和明）

引用参考文献

岩崎卓也　1982「土口将軍塚古墳」『長野県史考古資料編全1巻（2）』
更埴市教育委員会　1973『長野県森将軍塚古墳』
斎藤豊　1983「森将軍塚古墳使用の石材」『森将軍塚古墳II』

2　埋葬施設の調査

（1）調査の過程

予備調査

昭和57年８月、調査第１年度に調査計画の策定と破壊の状況を把握するために墳頂部にトレンチを設定した。

埋葬施設の残欠と思われる割石、河原石の存在、盗掘坑の広さを含め幅（横幅６m）、長軸９mほどの長方形の墓壙の存在が予想されていた。調査の結果、中央部に割石を小口積みにした竪穴式石室と、これに並列するように土壙が検出され、長野市松代町所在の舞鶴山２号墳の内部主体に類似するものと推定された。

本調査

前年度の調査結果に基づいて、墓壙の範囲確認から開始したが、盗掘が予想以上に激しく、墓壙を構成する石なのか、墳丘盛土に混入された自然石なのか判別にややとまどいつつも、安山岩系の板石状の石が墓壙、砂岩系の石が墳丘盛土に混入した自然石と区別し、安山岩系の石列を追及すると、前年度墓壙を構成するものと考えていた石列は、竪穴式石室が２基並列することが判明した。

（2）石室の位置・掘り方

石室は後円部のほぼ中央に、墳丘の長軸線をはさみ南北に１基ずつ検出された。北側の石室(北石室)は、５度北西にふっているが、南側の石室(南石室)は、ほぼ東西方向に長軸をとり、墳丘の長軸と同一である。

北石室と南石室は西側端で並行せず、北石室が１mほど突出した形で位置している。２基の石室は意識的にずらせた変則的なままである。

掘り方は、後円部中央に石室の形にそって、石室ぎりぎりの範囲で掘り込み、控え積みのほとんどない簡略化されたものである。本古墳は、狭い尾根に盛土し墳丘を形成し、平坦面に掘り方が設定されたものと思われる。石室基底部、掘り方内部では、特に施設的な面は検出されなかった。石室の構築状況から両石室は、同一時期に築造されたものと観察された。ただ掘り方のプランの北石室の突出については、今後類例の検討、両石室の比較等未解決の部分が多い。

（3）石室の構造

両石室ともに盗掘により破壊され、石室の規模、プラン、両石室の関係等不明部分が多い。

南石室は、現存長5.20m、最大幅（基底面）で0.65m、高さ0.85mである。30cm～50cmほどの板石状の石を小口積みにし、垂直に積み上げる方式である。床面は盗掘され原状は残っていない。控え積みはほとんど無く、空隙が多く良好な構築ではない。

石室の東側部分が破壊されているなど全体像は把握されないが、掘り方の上端面から推定すると壁高はほぼ残存したものと思われる。南石室より出土した遺物は、ガラス製丸玉のみである。

北石室は東側の半分が破壊され、石室全長はつかめない。最大幅は0.55mとやや狭い。壁高は、現存高0.60mである。石室の構造も南石室と同様である。床面は自然礫を混じえた粘土礫床で、平坦で

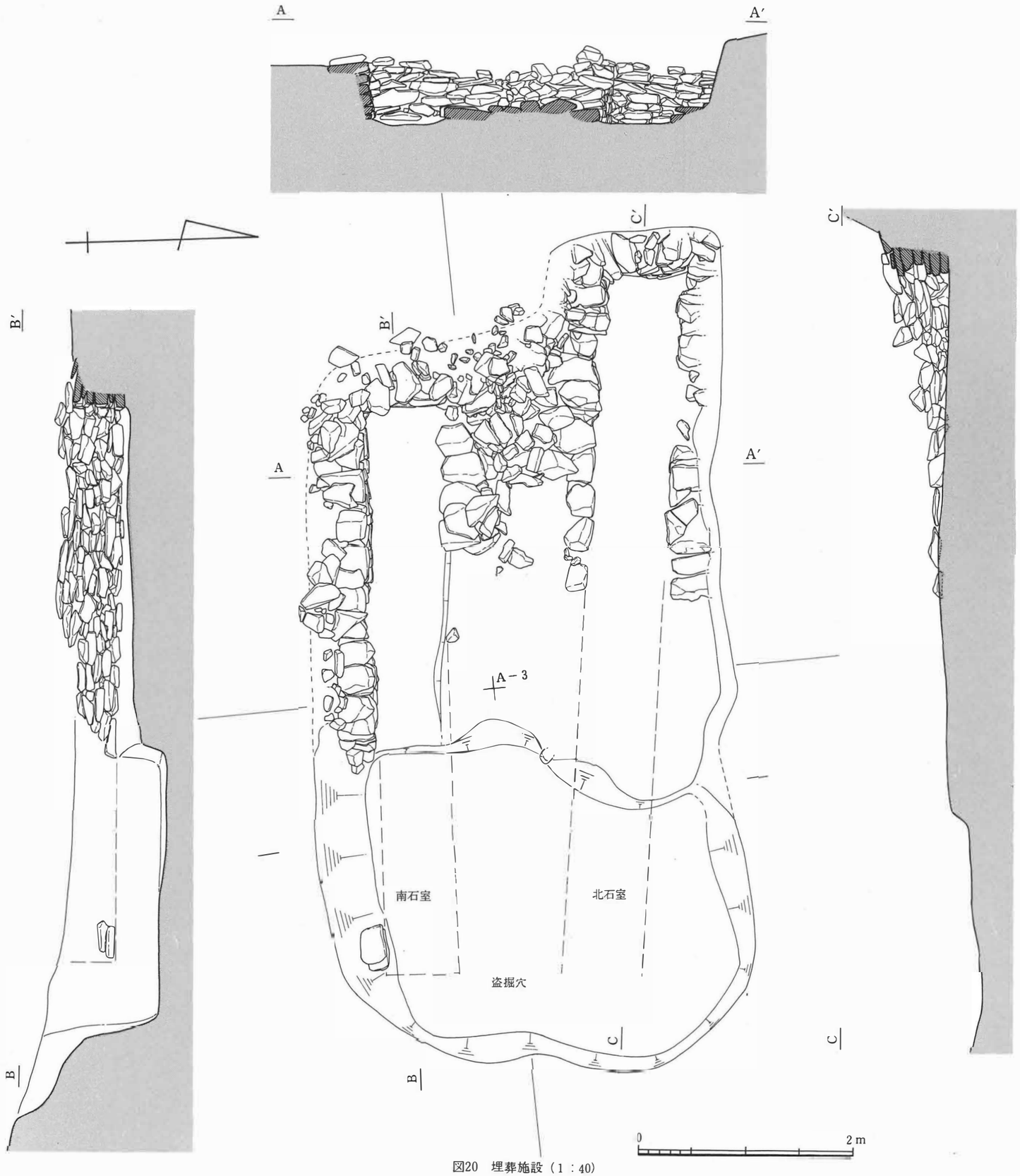


図20　埋葬施設（1：40）

ある。特に棺床は認められなかった。副葬品は、鉄鏃、ガラス小玉等床面から検出された。

南石室と北石室とは、個々の石室は別々の石組がなされているが、控え積みは共通の石を用い、相互に積み重ねた状況が観察できた。また床面のレベル、掘り方の基底面もレベルが同一であり、両石室は同時期に築造されたものと推定された。

（4）2基並列の竪穴式石室について

調査時の観察から本古墳の並列する両石室は、同時期と推定したが、長野県内では、東筑摩郡坂井村安坂古墳群、竪穴式石室と木棺直葬と思われる土壙との並列の長野市松代町舞鶴山2号墳例が存在する。

本古墳の場合は、南石室と北石室は並列するものの、西端部では、北石室が突出する特異なプランである。規模の比較はできないものの石室の構造から見ると南石室のほうがやや大きい。構造面からは差は認められない。副葬品も比較する材料を欠いている。

両石室の中心が古墳の主軸線にあたるところから、内部主体は後円部の中央に位置するものと考えることも可能であろう。古墳築造にあたっては、最初の段階から意図的に2石室の構築が計画されたものと考えられる。

しかしながら前述してきたように、盗掘が激しく両石室の築造時期、副葬品の比較は不可能である。内部主体の並列の問題、善光寺平に分布する竪穴式石室との比較等、追及すべき問題は残るが資料的な制約が存在する。

（小林秀夫）

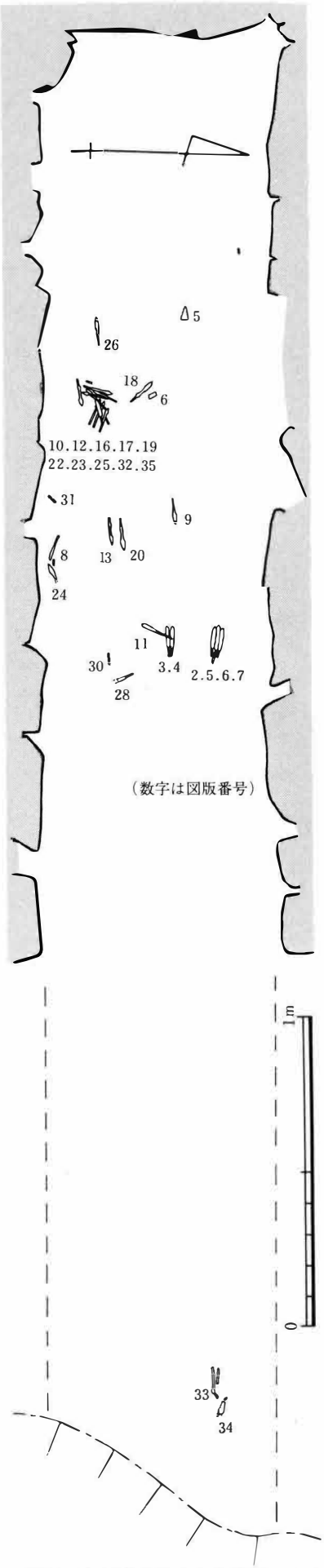


図21　北石室遺物出土状況（1：20）

3　出土遺物

A　埴　輪

調査により出土した埴輪は膨大な量に及んでおり、これには、普通円筒埴輪、朝顔形埴輪、それに形象埴輪と考えられる埴輪がある。これらの出土は、埴輪の樹立状態を原位置に留めていた基底部を除けば、中段テラス、墳麓、前方部墳頂に散在していたものであり、その復元は困難であった。したがって、全容を想定できるものは1点だけであった。

普通円筒埴輪（図22～26）

全容を復元できたものは、南側くびれ部より出土した1点だけであり、個体としての差異を見い出すことはできないため、各部位における特色について見ていきたい。基底部、凸帯のなかには朝顔形埴輪が含まれている可能性がある。

口縁部（1～13・図22）　上段凸帯より口縁端部までが10cm以上となるもの（1～4）と5cm前後と短いもの（5～11）がある。前者は器厚がほぼ1cmに整えられ、殆ど垂直に立ち上がり、口縁端部はヨコナデを施し、丸く仕上げている。後者には垂直に立ち上がるもの（5～7）と、外開するもの（8～11）があり、共に口径は前者に比べ小さい。口縁端部は前者同様ヨコナデにより丸く仕上げたものが大半を占めるが、つまみ出しにより薄くなるもの（9）や、平坦あるいは面取りがなされているもの（図22）が僅かに含まれている。口縁部が短い一群の出土は前方部墳頂に集中しており、中段テラスからの出土は少ない。

凸帯　観察できた凸帯はすべて貼付凸帯であり、完形品及び胴部破片では、凸帯をはさんで一方にしかスカシを持っていないことから、本墳においては、2本の凸帯を持つのが通例らしい。凸帯の断面形は、M字形を呈するもの、台形を呈するものに分類できる。大半の埴輪は断面M字形の凸帯を有するものであり、1.5～2cm内外の高さで、幅2cm前後になるよう、ていねいなヨコナデが施されており、M字形の上部の突出がより強いことが原則となっていて、一定の規格によって作られたことを知ることができる。台形を呈するものは、口径（胴部径）が30cmを超える大形品で、僅かに含まれる程度である。ヨコナデは施されているものの、荒いものであり、M字形をなすものとは製作意図が異なるものと思われる。

基底部（1・14～16・25・37～66）　下段凸帯より、直線あるいはやや内弯的に基部へと至り、そのまま平坦な底部となるものと、基部に進むにしたがって内外面が張り出し、バチ状を呈するもの（39・40）とがある。前者が圧倒的に多く、僅かに見られる後者は、大形品が中心となっており、整形は荒い。底部に網代痕を持つものが数点あり、製作時に使用されたと考えられる。下段凸帯より底端部までの間隔が長く、数

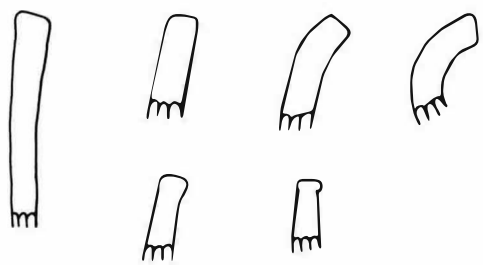


図22　口縁端部が平担となる埴輪

値が得られるものはいずれも20cmを超えている。

スカシ　中央段に1対穿たれるものと推測され、形状は直径5～6cmの不整円形となっている。ただ小破片のなかには、直線によって構成されていたと思われる穿孔も見られ、方形のスカシも僅かに存在したようである。

朝顔形埴輪（図26）

全容を知り得たものはなく、出土した口縁部を見ても総数の10%に満たない。朝顔形埴輪の円筒部として理解できた67～69を除けば、いずれも口頸部と肩部が摘出されるにすぎない。それらはまず頸部に凸帯を有するもの（72・73）と、そうでないもの（71・74）に分類できる。前者は凸帯が断面三角形に近く、頸部から口縁部への反りはさほど強くないが、後者は強く反っている。これらはまた、肩部が大きく広がって胴部へと移行するもの（74）とあまり開かず移行してしまうもの（71）に分けられる。広がるものはナデは施されるが荒いものであるのに対して、開かないものには丁寧なナデが施されている。

朝顔形埴輪の円筒部と理解できたものは、底径が共に30cmを超えており、器厚も1.5cm前後と厚い。3本以上の凸帯を有するものもあり、断面形はM字形、方形、上方に反り上がり、端部を丸く仕上げたものの3種が見られる。ヨコナデが荒く、指圧痕を顕著に残していることから、普通円筒に見られるそれとは、一見して差異を指摘できる。基底部は、下段凸帯よりほぼ垂直に下がり、内外面がバチ状に開いて底端部となる。スカシは、普通円筒同様5～6cmほどの不整円形であるが、中央段の他下から3段目肩部にも穿孔しているものがある。

形象埴輪（図27－75～84）　すべて北側くびれ部より出土したものであり、形象埴輪を飾った一部と思われるが、その全容を知る由もない。ひれ状に凸帯が縦走するもの（75～77）と角状に突出する（78～83）2種がある。ひれ状の突出は円筒形の埴輪に貼り付けられていたものらしく、弯曲した体部に付けられている。いずれも高さ3～4cm、厚さ1～2cmほどで、下端は斜めに削られている。上端がどのような形状を示していたか不明であるが、体部上端は口縁となっているのに対し突出部には欠落痕が見られることから、上部に張り出していたと考えられる。調整は指圧の後かるいナデが施されている。75～77には赤色塗彩が施されている。

角状に突出するものは、長さ10～13cmで直径3cmほどの粘土紐の一端を、内弯するよう引き伸ばし尖らせたもので、上下関係もさだかでない。ただ、半円形を示す断面の弦となる部分には、いずれも剝離痕が認められ、その形状から察するに半球状のもの、たとえば、肩部に凸帯をもつ朝顔形埴輪の肩部から頸部にむかって貼付されたもの、あるいは円筒形の上段凸帯から口縁にかけて貼付されたと考えることができるものがあるが、その根拠はない。

製作上における特徴については、普通円筒埴輪と朝顔形埴輪の分別が困難であり、また両者の製作方法に大きな差を見い出すことはできなかった。

本墳出土埴輪の最大の特徴は、叩き目をもつ埴輪が主体をなす点にある。刷毛目状の痕跡が見られたものは僅かにすぎず、主たる調整がハケとなるのは1点（58）のみであり、それもハケというよりは、むしろ板状工具によるナデに近いものであった。

叩き目には、平行叩きと格子目叩きがあるが、前者が圧倒的に多い。平行叩きを施すものは器厚が1cmほどと比較的薄手に仕上げられ、その痕跡を顕著に残すものはなく、いずれも僅かに見い出せる程度のものであり、口縁部に対してほぼ平行に施されている。位置を見れば、最下段と中央段に確認できるものは多いが口縁部において確認できるものは少ない。問題となるのは、叩き目を僅かにしか残さないのは、最終調整である叩きが弱いためであるのか、あるいは、叩きのあと 2次調整としてナデを施し、磨り消しているのかという点である。叩き目の稜があまりつぶれていない点を見れば、叩き自体が弱いためであったとも考えられるが、凸帯のヨコナデにより消えているもの、かすかではあるがナデの痕跡を残すものがあるため、1次調整として叩き目を施し、2次調整としてナデを施し磨り消しているものと理解したい。また同様の形状を持ちながらまったく叩きの痕跡を残していないものも、本来叩きが施されているものと考えたい。内面を観察すると、平坦に調整されており、当て具痕を全く残していない。板状工具の痕跡を残すものが多く、外面同様にナデにより磨り消されているとも考えられるが、器面の粒子が粗く、輪積痕も比較的観察され、当て具痕を完全に磨り消すほど丁寧なナデを施していたとは考えにくいことから現段階では叩き時の当て具の使用はなかったものと理解しておきたい。

格子目叩きを施すものは、大形品に多く、その出土は前方部主軸ラインの北側に集中している。ほとんどが3㎜前後の格子目であり、平行叩きに比べ顕著にその存在を観察することができる。叩きの後ナデを施しているが粗いものであり、叩き痕を消そうとした意図があったとは考え難い。ただ、凸帯の剥離した部分にまで叩き目が見られるものがあり、凸帯貼り付け以前に叩きが行われている。内面の調整は平行叩きを施したものよりさらに粗いものであるが、そこにも当て具の痕跡を認めることはできない。

底部は幅4cm前後の粘土帯によって作られているものが多い。3本の粘土帯を接合することによって底部を作り出しているものがほとんどであるが、4本の粘土帯によって作り出されるもの（図33－67）もまれに見られる。これらの接合部を観察すると、両端が共に内側にくる粘土帯が存在しており、底部の成形はこの部分より始まったことが分かる。仮に新しく接合する粘土帯を前面に持ってきているとすれば、右回りに作られたことになる。底部の内外面には、指、板などによる底部調整は見られない。胴部は幅2cmほどの粘土紐によって形作っているらしく、内面にその痕跡を残しているが、巻き上げであるのか、輪積みであるのかは分からない。

線刻をもつ埴輪が見られる点も特色の一つといえよう。線刻はヘラなどの鋭い工具を用いて描かれたものであり、幾何学的に配した鋸歯状、格子目状といった文様のほか、一定の形を示さないものまで雑多が見られるが、小破片が多く、それらがどのような文様体を構成していたかを知り得たものは少ない。そのなかでほぼ文様帯の構成を知り得るものとして注目されるのは図32に見られるような鋸歯文様のモチーフである。これに近い文様は、長野市駒沢新町1号祭祀遺構から出土した鼓形土師器にも見られ、陶質土器に見られる文様とも類似している。叩きの後ナデを施す調整とともに、初期須恵器の製作技法に酷似するものといえよう。

赤色塗彩を持つものは、口縁部が短い普通円筒埴輪、朝顔形埴輪、線刻を持つものに僅かに見られるが、剥離が進んでおり、明確ではない。

黒斑は顕著に観察される。それは外面の相対する位置に、縦長に付着するものであるが、稀に一方にしか観察されないものが含まれている。（佐藤信之）

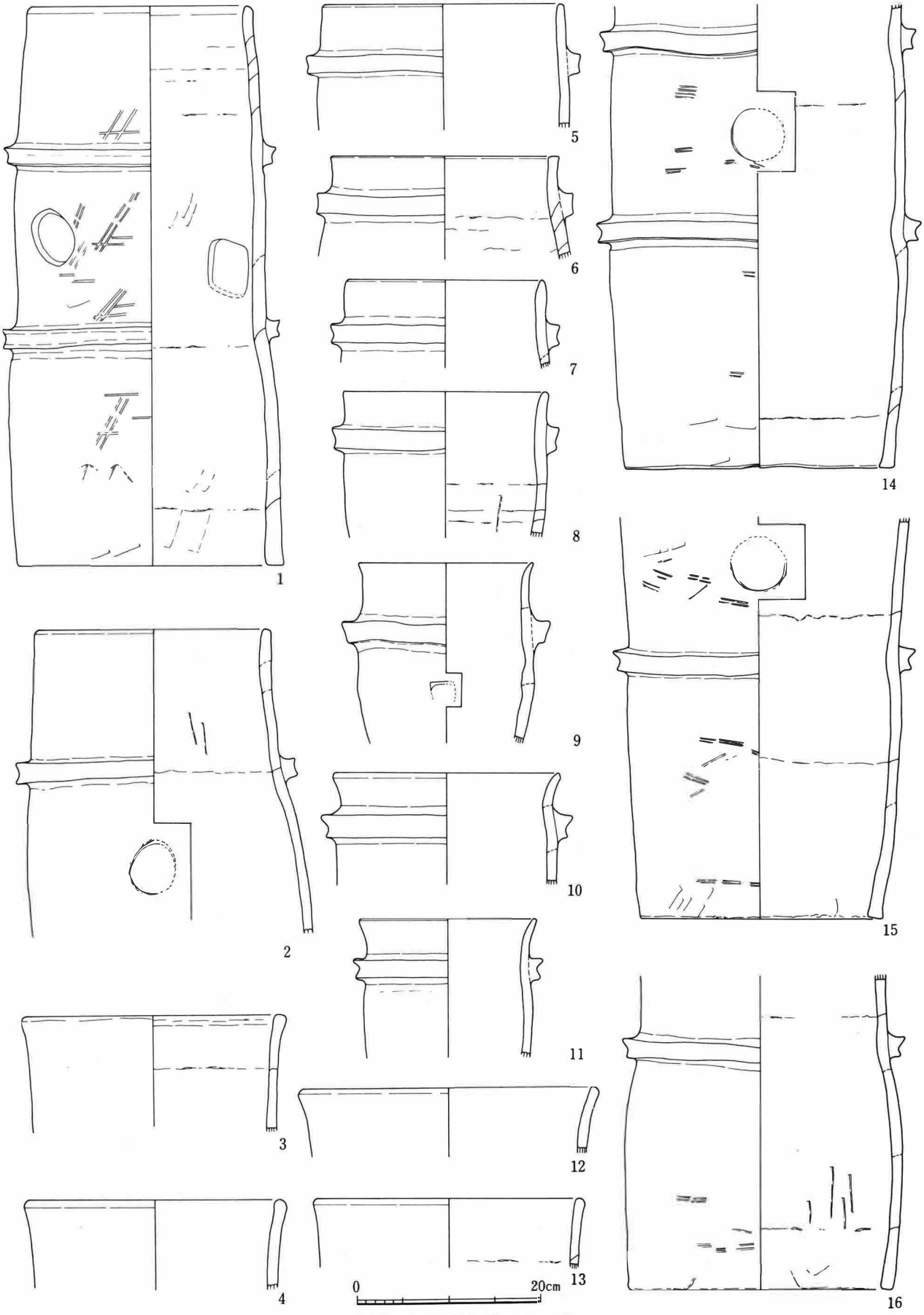


図23　埴輪実測図①（1：6）

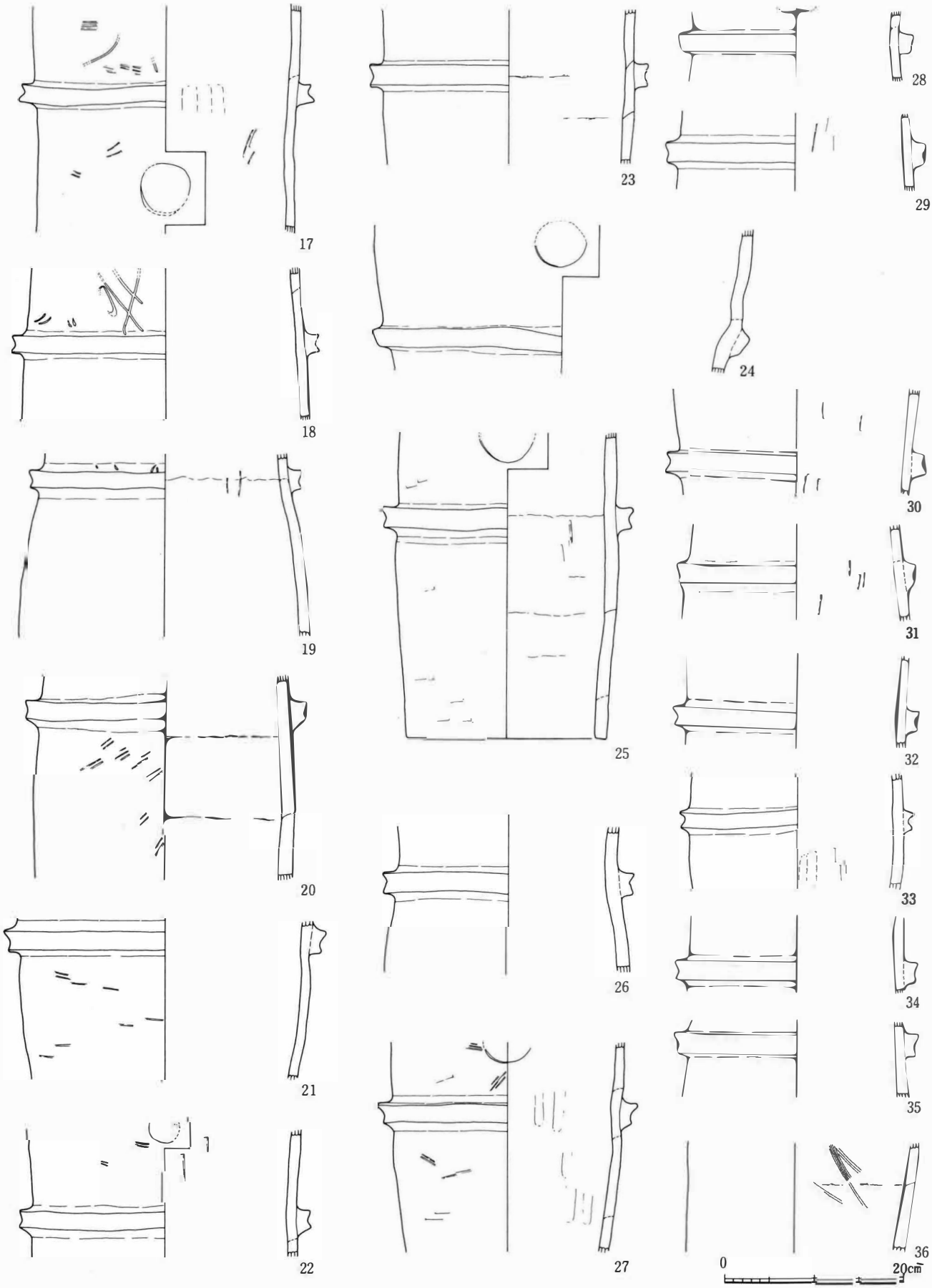


図24　埴輪実測図②（1：6）

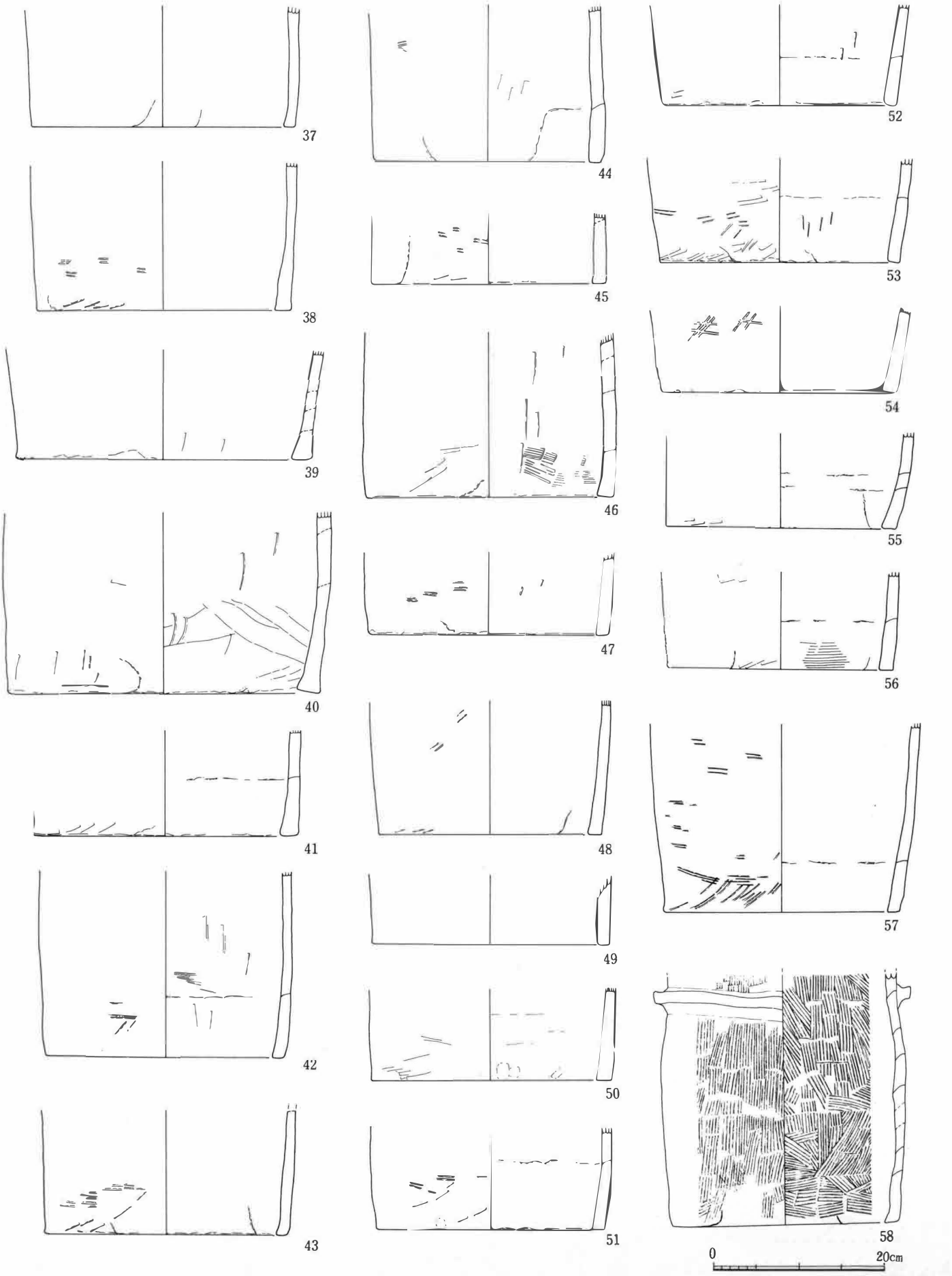


図25　埴輪実測図③（1：6）

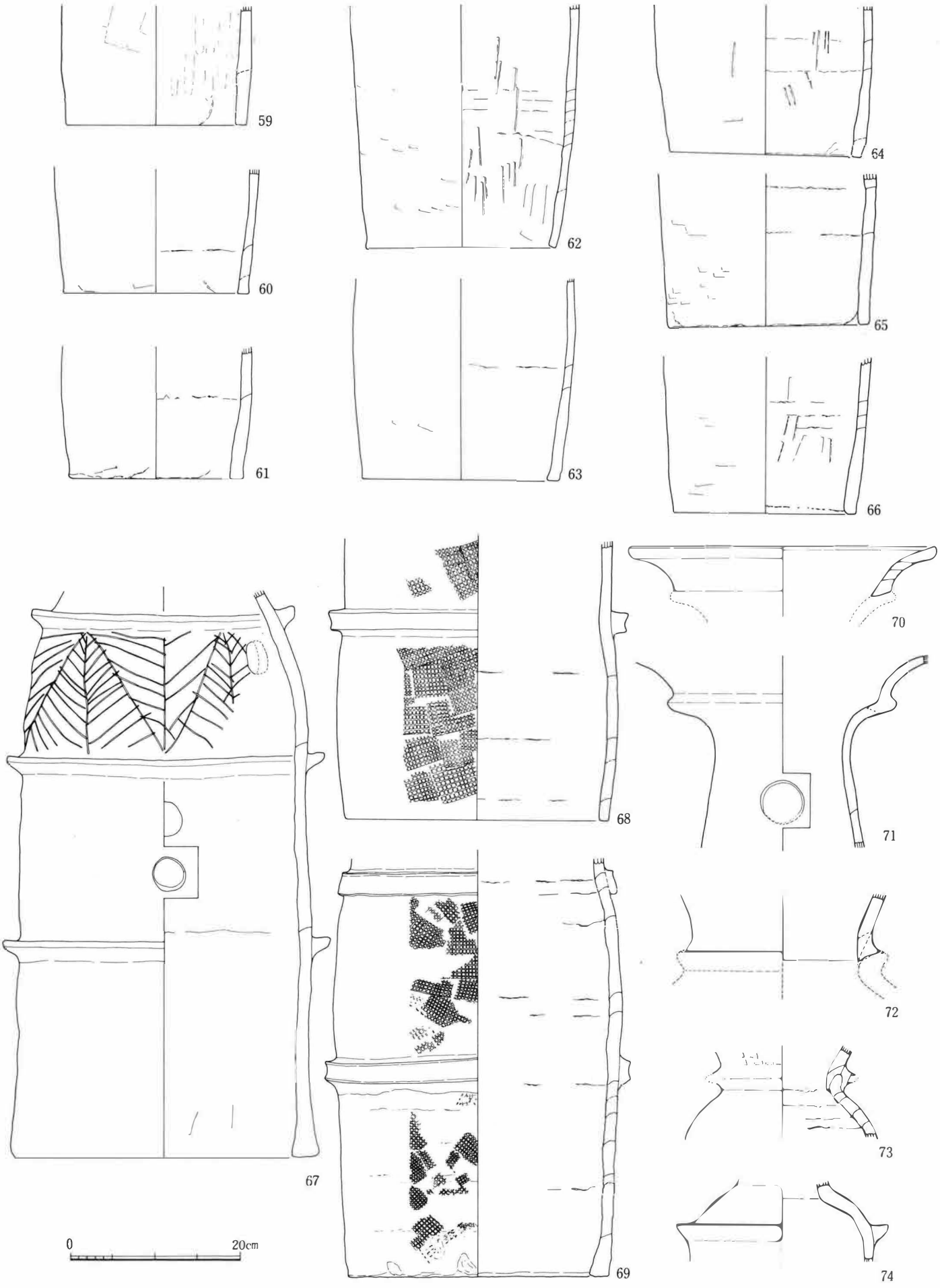


図26　埴輪実測図④（1：6）

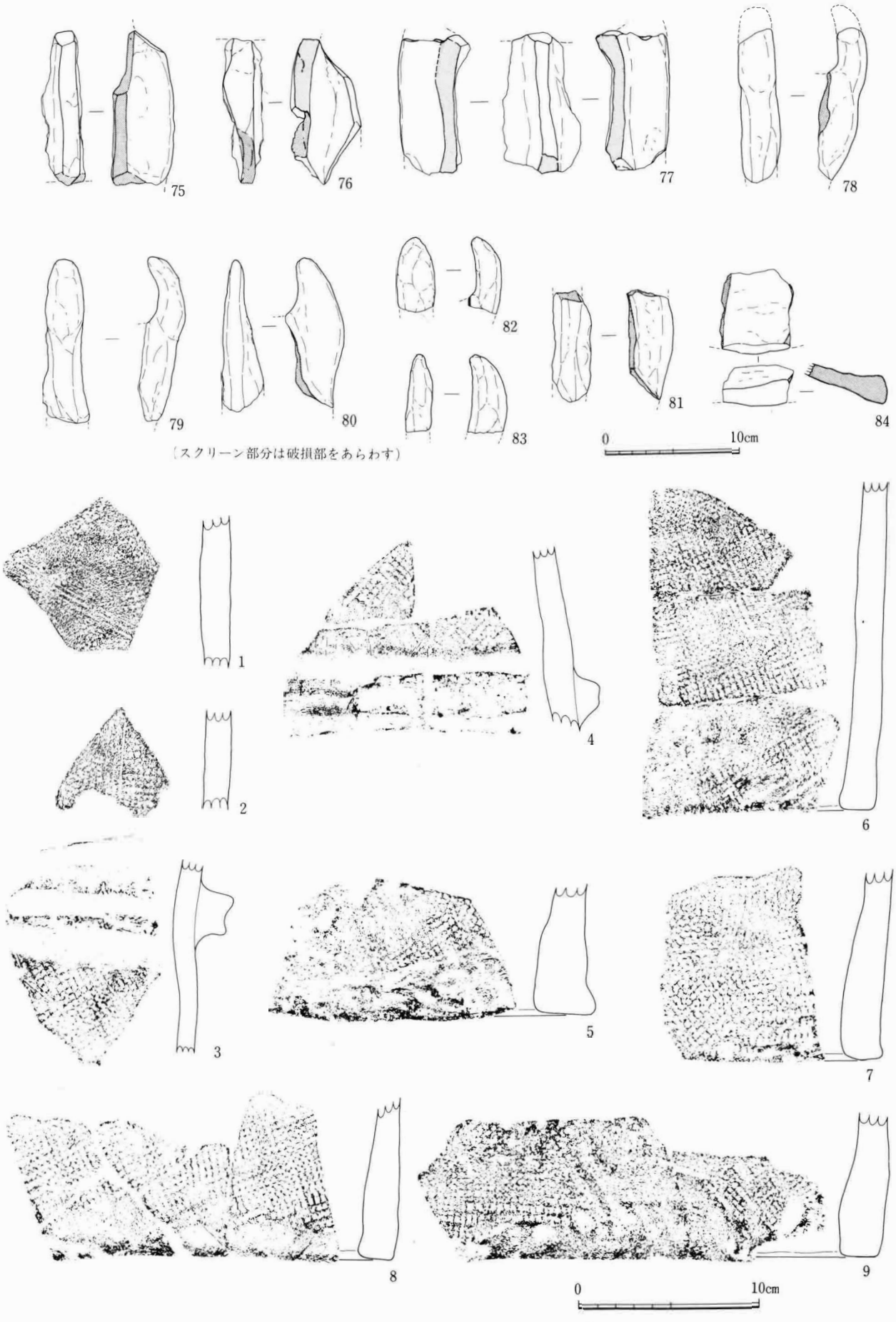


図27　埴輪実測図⑤（1：4）・拓影①（1：3）

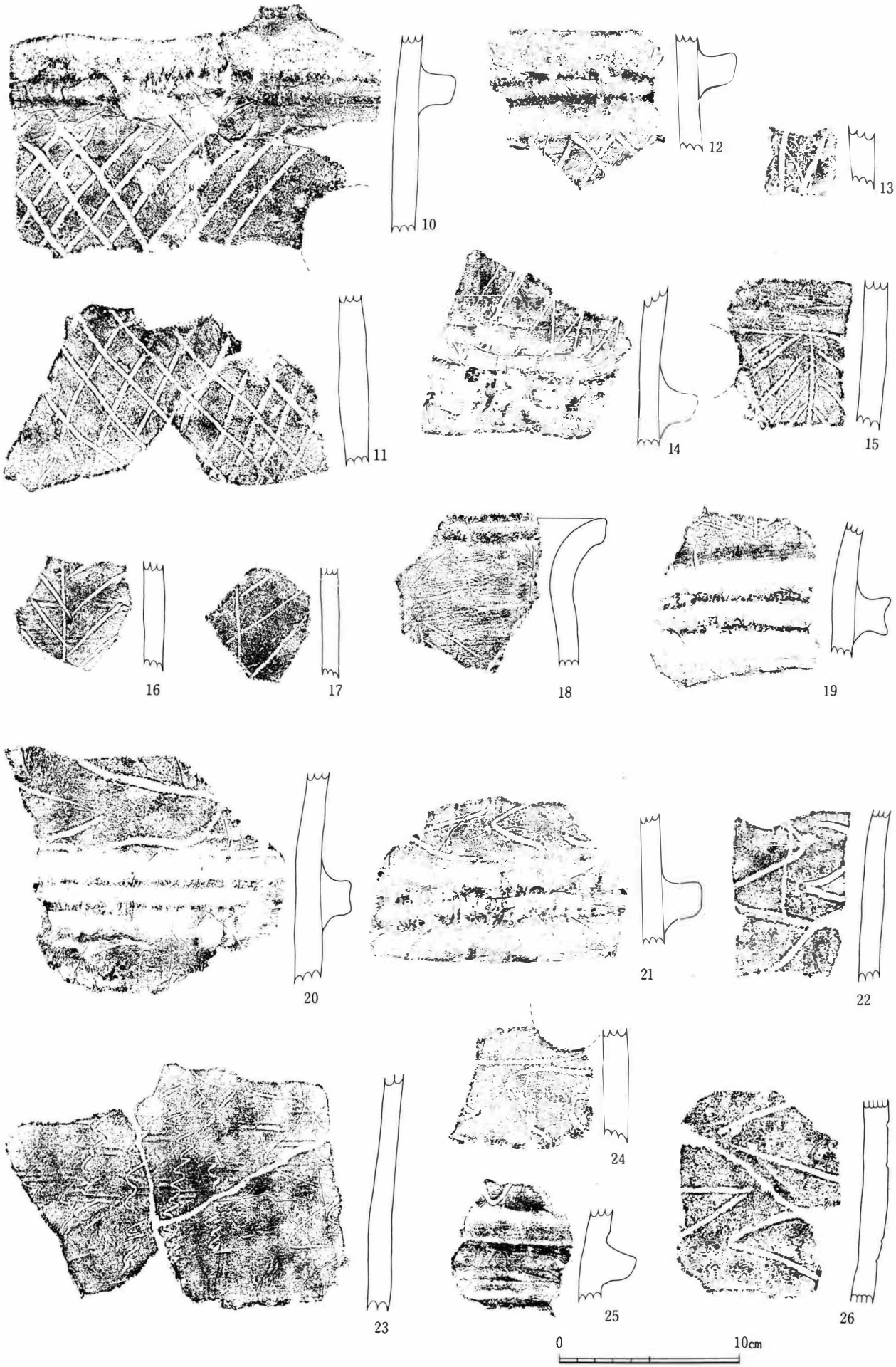


図28　埴輪拓影②（1：3）

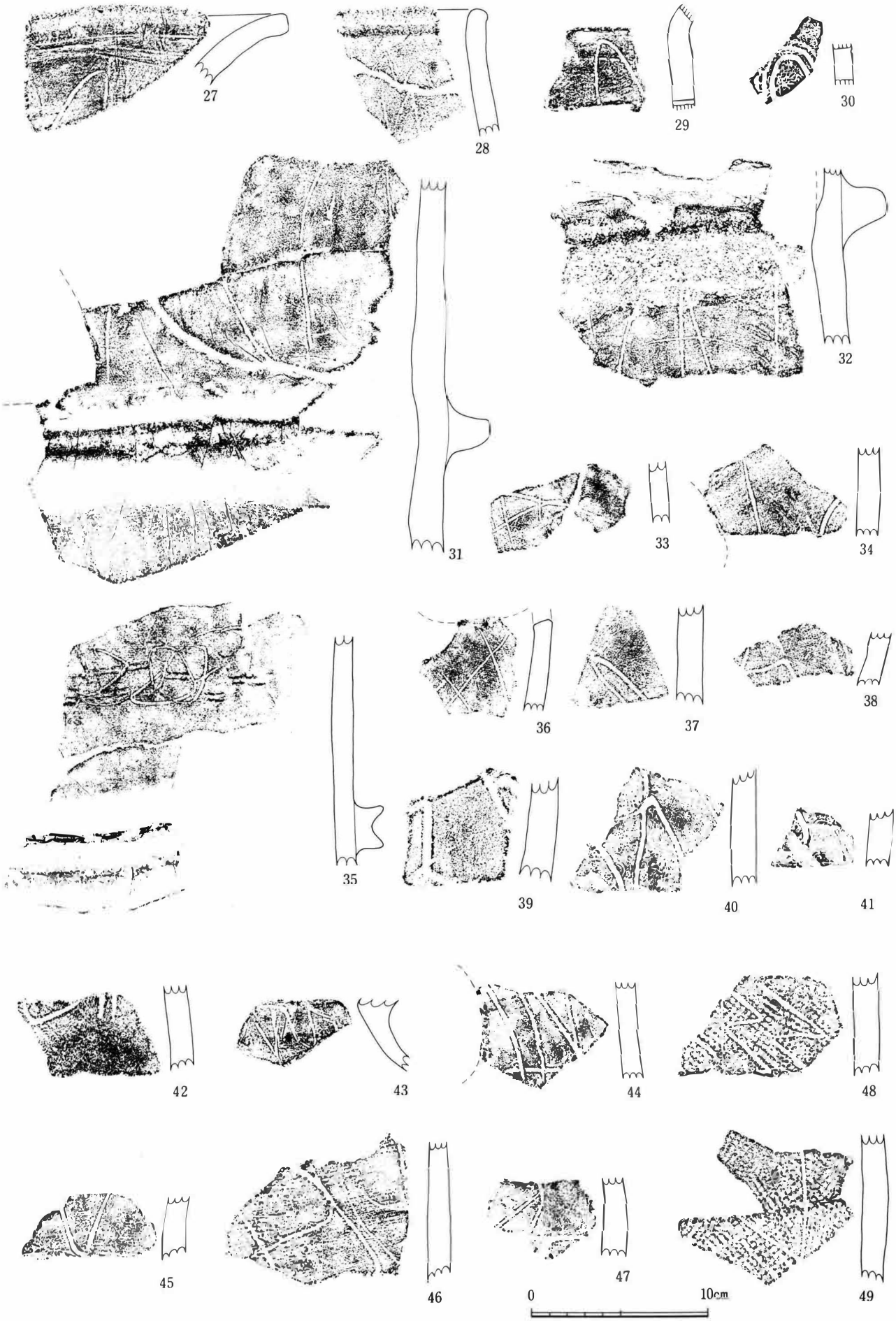

27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
10cm

図29　埴輪拓影③（1：3）

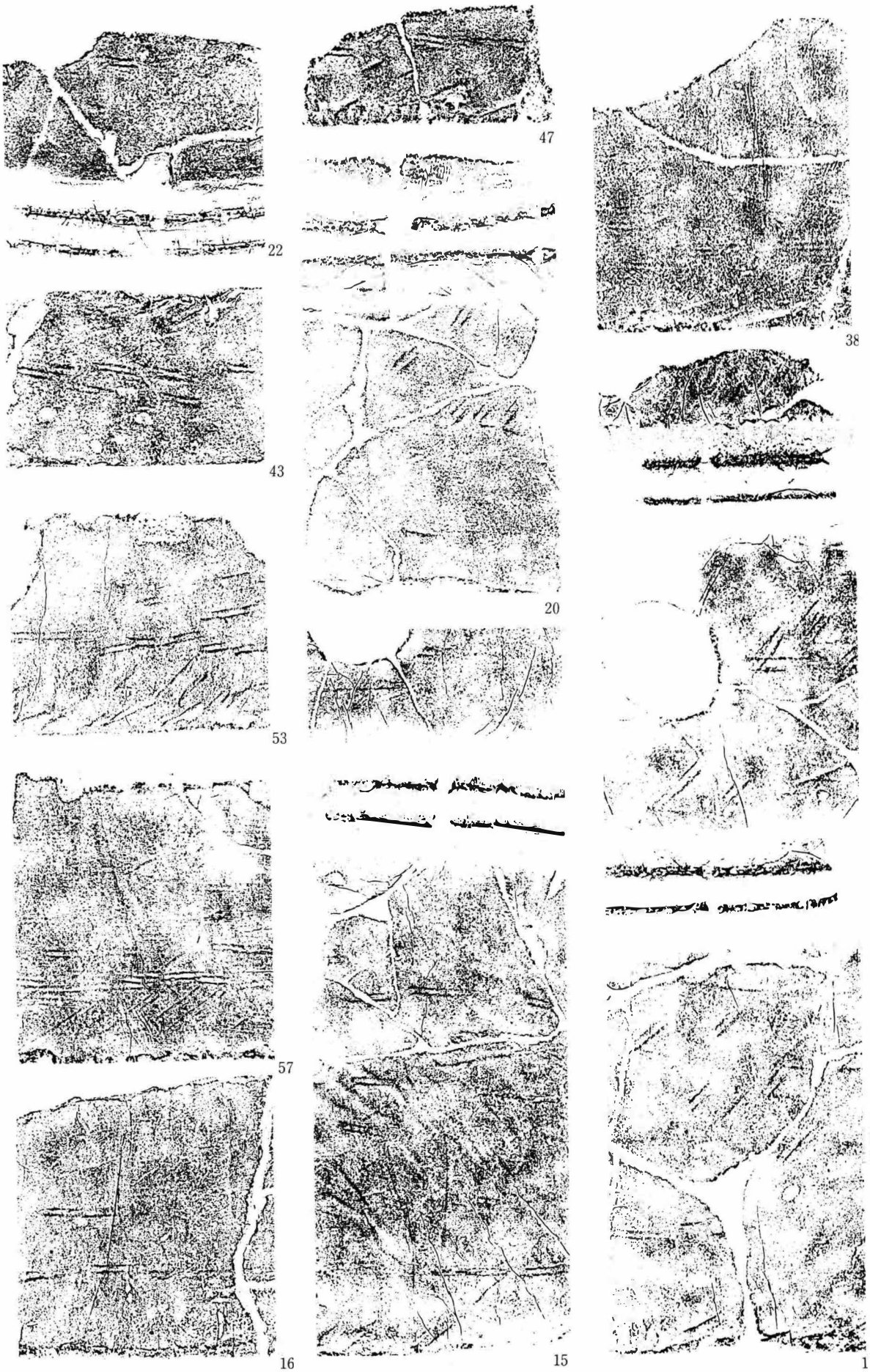


図30　埴輪拓影④（1：3）

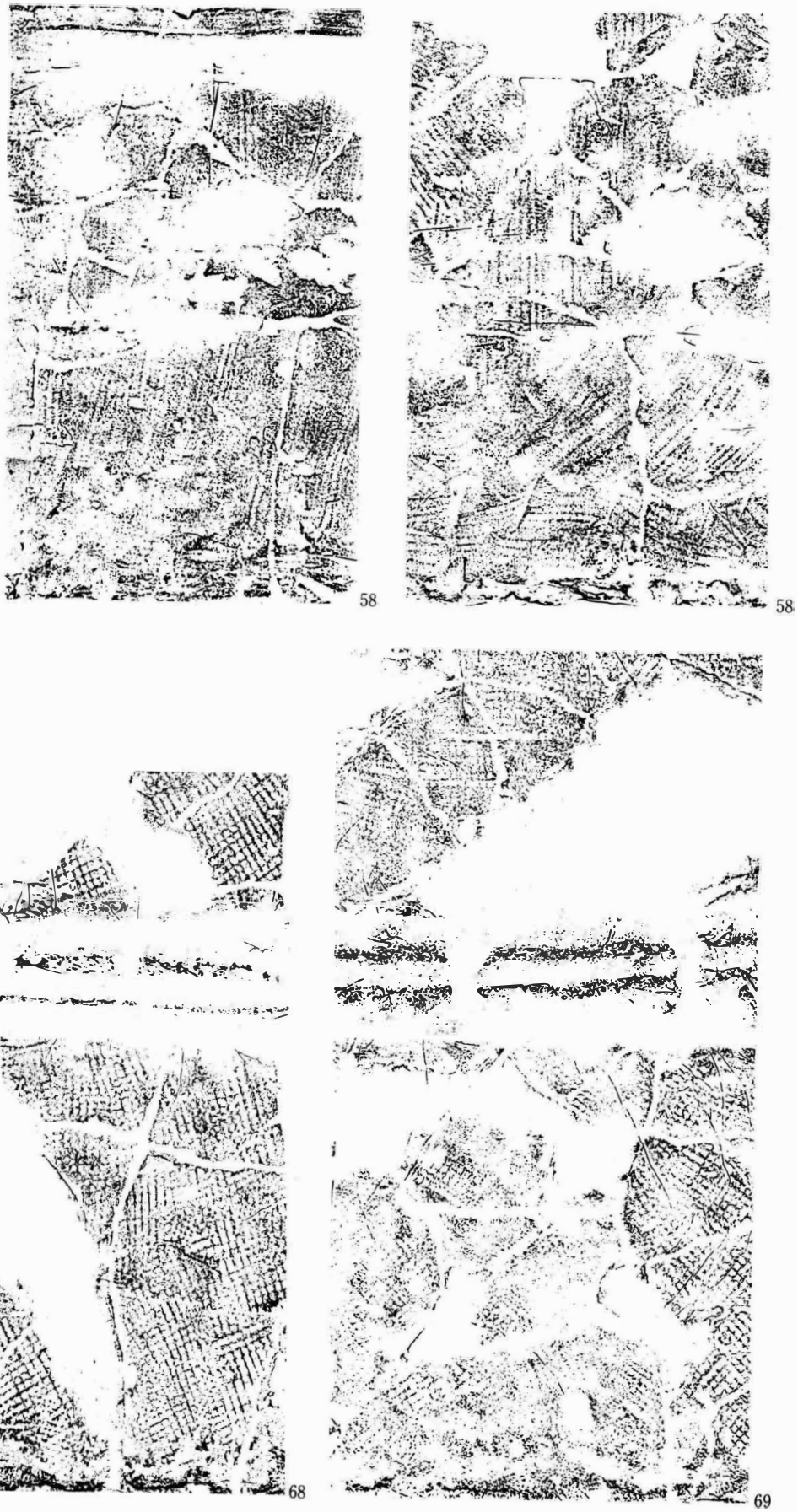
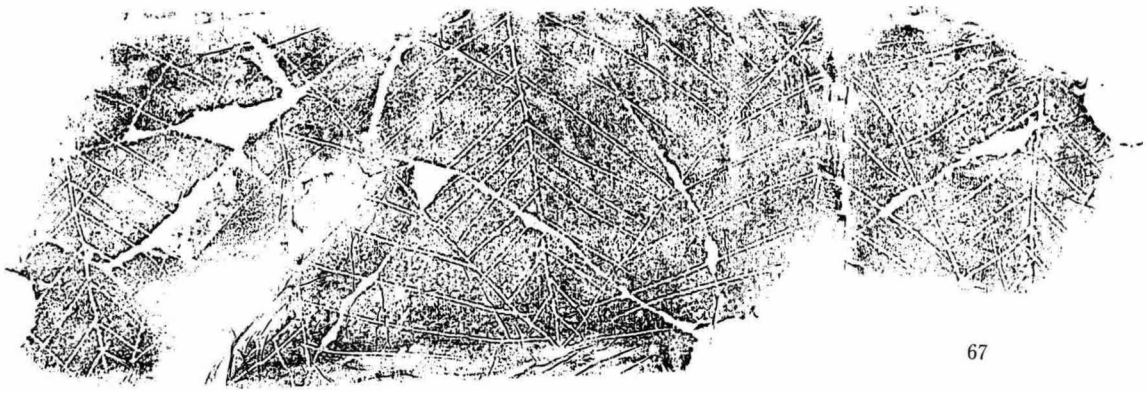
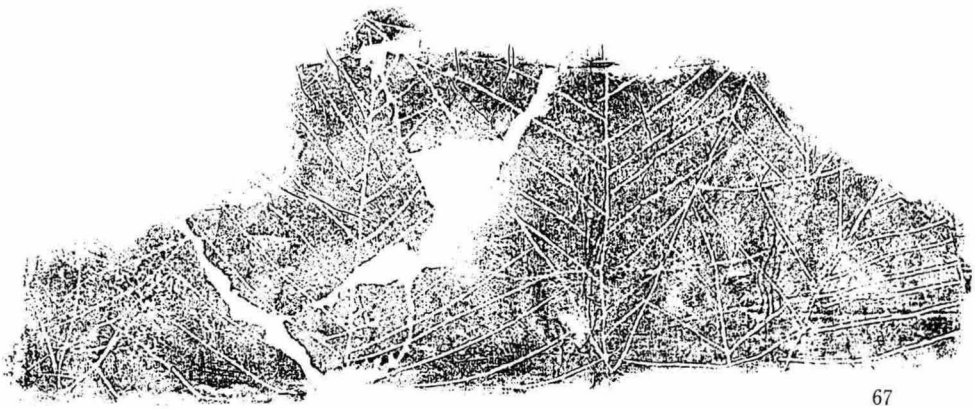


図31　埴輪拓影⑤（1：3）





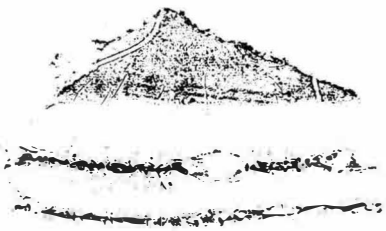
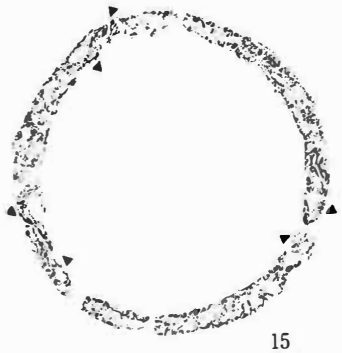


図32　埴輪拓影⑥（1：3）


15

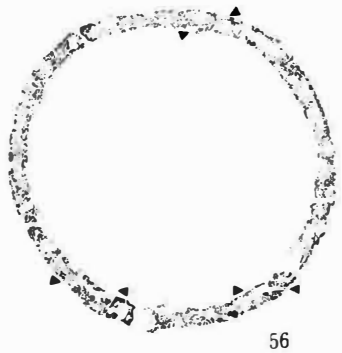
66

41

16

37

67


56

40

46

62

52

14

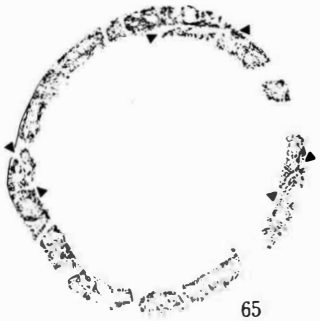

65

図33　埴輪拓影⑦（1：6）

図版No.	部位	出土位置	径 (cm) 口径	底径	最大径	形態	手法	備考
普通円筒埴輪								
1	完形	FS中列2・3	24.7	28.9	29.5	口縁 垂直で長く端部は丸い 凸帯 M字形2本 スカシ 方形に近い円形2段に1対 底部 ほぼ垂直	内面 板状工具によるタテのナデ 外面 平行タタキのちナデ	黒斑は対向する位置に縦長に付着 器高60.4cm
2	口縁 胴部	FS中列1・2	25.8		30.6	口縁 垂直で長く端部は丸い 凸帯 M字形 スカシ 円形1対	内面 板状工具によるナデ 外面 ていねいなナデ	黒斑は対向する位置に縦長に付着 歪みあり
3	口縁	FS中列1	29.0		29.0	口縁 やや外反し端部は丸い	内面 ヨコのナデ 外面 一部にヨコのナデ痕跡	
4	口縁	FS中列3	28.6		28.6	口縁 やや外反し端部は丸く内向する	内面 ナデ 外面 ナデ	
5	口縁	FSク上	26.1		27.2	口縁 垂直で短かく端部は丸い 凸帯 M字形	内面 タテの指ナデ 外面 ナデ	摩耗が進んでいる
6	口縁	F頂	24.7		27.3	口縁 垂直で短かく端部は平端 凸帯 M字形に近い台形	内面 ナデ 外面 ナデ	
7	口縁	FSク上	21.3		22.6	口縁 垂直で短かく端部は丸い 凸帯 M字形	内面 指ナデ 外面 ナデ	外面に赤色塗彩
8	口縁	FSク上・中	22.3		22.3	口縁 やや外反し短かく端部は丸い 凸帯 M字形	内面 板状工具によるナデ? 外面 タテのナデ	
9	口縁 胴部	FSク上	18.9		19.2	口縁 端部がつまみ出しによって外反 凸帯 台形 スカシ 方形に近い円形	内面 ナデ 外面 ナデ	
10	口縁	FSク上	24.7		24.7	口縁 外反し短かく端部は丸い 凸帯 M字形	内面 タテのナデ 外面 タテのナデ	外面に赤色塗彩
11	口縁	FS下	19.3		19.3	口縁 外反し短かく端部は丸い 凸帯 M字形	内面 ナデ 外面 ナデ	
12	口縁	FSク下	32.6		32.6	口縁 外反し端部は丸い	内面 ナデ 外面 ナデ	
13	口縁	FSク上	29.4		29.4	口縁 ほぼ垂直で端部は丸い	内面 ナデ 外面 ナデ	
14	基底部 胴部	FS中列9・10		29.1	32.1	凸帯 M字形 スカシ 円形2段に1対 底部 ほぼ垂直	内面 ていねいなナデ 外面 平行タタキのちナデ	黒斑は縦長に付着しているが対向する部分は不明
15	基底部 胴部	FS中列下		26.3	31.3	凸帯 M字形 スカシ 円形2段に1対 底部 やや内弯・粘土帯?は3本	内面 ナデ 外面 平行タタキのちナデ	黒斑は相対する位置に付着
16	基底部 胴部	FS中列4		28.8	30.1	凸帯 M字形	内面 板状工具によるナデ 外面 平行タタキのちナデ	摩耗が進んでいる 黒斑は縦長に1ケ所
17	胴部	FSク下			29.6	凸帯 M字形 スカシ 方形に近い円形	内面 指ナデ及び板状工具によるナデ 外面 平行タタキのちナデ	
18	胴部	FSク下			31.8	凸帯 M字形	内面 ていねいなナデ 外面 ナデ	線刻あり
19	胴部	FSク下			31.9	凸帯 M字形	内面 ナデ接合部に板状の痕跡 外面 ナデ	黒斑あり
20	胴部	FNク頂列3・6			23.7	凸帯 M字形	内面 ていねいなナデ 外面 平行タタキのちナデ	黒斑相対する位置に1対
21	胴部	FSク中列2			32.5	凸帯 M字形	内面 ナデ 外面 平行タタキのちナデ	黒斑あり
22	胴部	FS中列1			29.9	凸帯 M字形 スカシ 円形1対	内面 ナデ 板状工具の痕跡 外面 平行タタキのちナデ	

表4 埴輪観察表(1)

図版No.	部位	出土位置	径 (cm) 口径	底径	最大径	形態	手法	備考
23	胴部	FS中列7			27.9	凸帯 M字形	内面 ナデ 外面 ナデ	
24	胴部	F頂列2			41.9	凸帯 台形 スカシ 円形1対	内面 ナデ 外面 ナデ	朝顔形か？
25	基底部 胴部	FSク下		22.1	24.7	凸帯 M字形 スカシ 2段に存在するが形状は不明	内面 ナデ 外面 ナデ	
26	胴部	FSク下			26.7	凸帯 M字形	内面 ナデ 外面 ナデ	黒斑あり
27	胴部	FSク中・下			25.7	凸帯 M字形 スカシ 円形	内面 指ナデ及びナデ 外面 平行タタキのちナデ	黒斑あり
28	胴部	FSク上			23.7	凸帯 M字形に近い台形 スカシ 円形？	内面 ナデ 外面 ナデ	
29	胴部	FSク上			26.4	凸帯 台形に近いM字形	内面 ナデ 板状工具の痕跡 外面 ナデ	
30	胴部	FSク下			27.4	凸形 M字形	内面 板状工具によるナデ 外面 ナデ	
31	胴部	FSク上			25.4	凸帯 M字形	内面 板状工具によるナデ 外面 ナデ	黒斑あり
32	胴部	FSク下			24.8	凸帯 M字形	内面 タテのナデ 外面 ナデ	
33	胴部	FSク下			23.7	凸帯 M字形	内面 ナデ 板状工具の痕跡 外面 ていねいなナデ	
34	胴部	FSク上・中			24.1	凸帯 M字形	内面 タテのナデ 外面 ナデ	黒斑あり
35	胴部	FSク下			25.1	凸帯 M字形	内面 ナデ？ 外面 ナデ	摩耗が進んでいる
36	胴部	FSク中列10			25.4	埴輪列に埋設されていたもので当初より底部を欠いて使用？	内面 ナデ 一部にハケ状の痕跡 外面 ナデ	黒斑は相対する位置に縦長に付着
37	基底部	FSク中列2		30.9	32.1	底部 底近くで内弯・粘土帯？は3本	内面 ナデ 外面 ナデ	黒斑あり
38	基底部	FS中列6		29.6	31.2	底部 ほぼ垂直 底近くで厚くなる	内面 ナデ 板状工具の痕跡 外面 平行タタキのちナデ	黒斑相対する位置にあり
39	基底部	FSク下		34.9	37.2	底部 やや内弯 断面形はバチ状	内面 ナデ 外面 ナデ	
40	基底部	F頂列1		36.7	38.5	底部 やや内弯 断面はバチ状 粘土帯は3本	内面 板状工具によるナデ 外面 板状工具によるナデ	一方向にのみ黒斑あり
41	基底部	RS中列2		31.1	31.8	底部 ほぼ垂直 断面はバチ状 粘土帯は4本？	内面 ナデ 外面 ナデ 板状工具の痕跡	黒斑は相対する位置に縦長に付着
42	基底部	FS中列9		28.1	29.7	底部 ほぼ垂直 底近くで内弯	内面 ナデ 一部にハケ 外面 平行タタキのちナデ	黒斑あり
43	基底部	FS中列1		28.6	29.7	底部 やや内弯	内面 ナデ 外面 平行タタキのちナデ	
44	基底部	FS中列2		26.1	22.0	底部 ほぼ垂直 板作り	内面 ナデ 板状工具の痕跡 外面 平行タタキのちナデ	黒斑相対する位置にあり
45	基底部	FS中列7		27.0	27.4	底部 ほぼ垂直 板作り？	内面 ナデ 外面 平行タタキのちナデ	
46	基底部	FNク頂列2・3		28.7	29.4	底部 垂直 底近くでやや内弯	内面 底部ハケ他はナデ 外面 ナデ 板状工具の痕跡	黒斑あり
47	基底部	FS中列7		27.9	28.9	底部 ほぼ垂直	内面 ナデ 板状工具の痕跡 外面 平行タタキのちナデ	黒斑あり
48	基底部	FS中列8		25.8	27.8	底部 やや内弯	内面 ナデ 外面 平行タタキのちナデ	黒斑あり
49	基底部	FSク中列9		27.6	28.2	底部 垂直	内面 ナデ 外面 ナデ	
50	基底部	FNク頂列1		27.8	28.8	底部 ほぼ垂直 底近くで厚くなる	内面 ナデ 外面 タタキのちナデ	黒斑は一方向のみ付着

表5 埴輪観察表(2)

図版No.	部位	出土位置	径 (cm) 口径	底径	最大径	形態	手法	備考
51	基底部	RS中列1		26.7	28.0	底部 やや内弯	内面 ナデ 外面 平行タタキのちナデ 板状工具の痕跡	
52	基底部	FSク中列8		27.0	30.0	底部 やや内弯 粘土帯？は3本？	内面 ナデ 板状工具の痕跡 外面 板状工具によるナデ	底部に網代痕 黒斑は相対する位置に付着
53	基底部	FSク中列11		27.8	30.6	底部 やや内弯	内面 ナデ 板状工具の痕跡 外面 平行タタキのち板状工具のナデ	底部に網代痕
54	基底部	FSク中列1		27.3	30.1	底部 内弯 底近くで厚くなる	内面 ナデ 外面 タタキのちナデ	底部に網代痕
55	基底部	FSク中列6		26.6	28.6	底部 内弯する 粘土帯は3本	内面 ナデ 外面 ナデ	黒斑あり
56	基底部	FSク中列4		26.1	27.5	底部 ほぼ垂直 粘土帯は3本	内面 ナデ一部ハケ 外面 ナデ 板状工具の痕跡	黒斑は一方向にのみ付着
57	基底部	FS中列5		27.3	31.1	底部 やや内弯	内面 ナデ 外面 平行タタキのちナデ	黒斑は一方向にのみ付着
58	基底部	FSク中列12		26.2	28.6	凸帯 台形 底部 ほぼ垂直	内面 ハケのちナデ 外面 ハケのちナデ	黒斑は相対する位置に縦長に付着
59	基底部	FSク上		21.1	22.3	底部 ほぼ垂直	内面 タテの指ナデ 外面 板状工具によるナデ	黒斑あり
60	基底部	FSク中列12		21.8	24.0	底部 やや内弯 紐作りの可能性あり	内面 ナデ 外面 ナデ	
61	基底部	FNク頂列3・4		20.5	22.3	底部 やや内弯	内面 ナデ 外面 ナデ 板状工具の痕跡	
62	基底部	FNク頂列4・5		22.4	27.0	底部 やや内弯 粘土帯は3本	内面 板状工具によるナデ 外面 板状工具によるナデ	
63	基底部	FNク頂列4		23.0	26.1	底部 やや内弯 粘土帯？は3本	内面 ナデ 外面 ナデ	黒斑は相対する位置に縦長に付着
64	基底部	RS中列3		22.4	25.7	底部 やや内弯 紐作りの可能性あり	内面 板状工具によるナデ 外面 ナデ 板状工具の痕跡	黒斑は一方向に縦長に付着
65	基底部	FSク中・下		23.8	25.7	底部 やや内弯 粘土帯？は3本	内面 ナデ 外面 ナデ 板状工具の痕跡	黒斑は相対する位置に縦長に付着
66	基底部	FSク中列13		21.6	24.5	底部 やや内弯 粘土帯？は3本	内面 ナデ 板状工具の痕跡 外面 ナデ 板状工具の痕跡	黒斑は一方向にのみ縦長に付着
朝顔形円筒埴輪								
67	基底部 胴部	FSク中列14		35.3	36.2	凸帯 突出度高い スカシ 円形 2段と3段に1対 底部 ほぼ垂直 断面はバチ状	内面 ヘラナデ？ 外面 ナデ、ヘラ状の痕跡	鋸歯状の線刻あり
68	基底部 胴部	FNク下		31.1	33.1	凸帯 M字形タタキのち貼付 底部 やや内弯 粘土帯？は3本	内面 ナデ一部ハケ 外面 格子タタキのちナデ	黒斑あり 普通円筒の可能性あり
69	基底部 胴部	FNク下		30.5	34.0	凸帯 M字形と方形 底部 ほぼ垂直 断面はバチ状	内面 指ナデ 外面 格子タタキのち一部ナデ	黒斑は相対する位置に斑状に付着
70	口縁	FSク中列12	36.3		36.3	口縁 大きく外反し端部は丸い	内面 ヨコナデ 外面 ヨコナデ	
71	頸部	FSク下			33.4	スカシ 円形	内面 ナデ、板状工具の痕跡 外面 ナデ	
72	頸部	FSク下			22.9	凸帯 丸味を持つ三角形？	内面 ナデ 接合痕顕著 外面 ナデ	赤色塗彩あり
73	頸部	FSク下			22.9		内面 ナデ 外面 ナデ	赤色塗彩あり？
74	頸部	FNク上			25.0	凸帯 突出度高い	内面 ナデ 外面 ナデ	黒斑あり

表6 埴輪観察表(3)

B　土師器

出土した土師器のほとんどは、後円部墳頂墓壙上部及び周縁より検出されたものである。この他に、後円部の各トレンチ内からも、墳頂より転落したと推定される少量の土師器破片を検出している。土師器は破片総数百点を越えるが、細片となっているものがほとんどであり、接合作業によって全形を知りうる復元がなされた個体は存在しない。

（1）壺（図34）

1は口径15cm、頸径9cmの口縁部破片である。受口状の有段口縁を呈するが、段の稜線は明瞭ではなく、有段口縁でも末期的な形態といえよう。内外面はともにヘラ磨きにより調整されている。2・3は同一個体の可能性が考えられる上半部破片である。口縁部は有段口縁であり、端部を欠損するが1と同様の形態が予想される。頸部は強く屈曲し、胴部内面には巻き上げ痕が明瞭に観察される。口縁部内外面及び胴部はヘラ磨きにより調整されている。4は口径13cm頸径8cmの口縁部であり、やや小形品である。内外面ともにヘラ磨きされているが、外面では縦方向の暗文風に仕上げられている。5は頸径12cmの頸部破片である。焼成が悪く摩耗が著しいが、ヘラ磨きにより調整され、頸部下の内面には指押えの痕跡を残している。6～8は底部破片である。6・8は底面を削りにより成形しており、外面はヘラ磨き、内面はナデにより調整されている。7は凹底を呈し、内外面ナデ調整による。

上記壺と判断した個体の焼成は良好であり、胎土も概ね一致した状況にあり、色調は灰褐色を呈する。ただし、5のみ焼成が悪く、色調も赤褐色を呈しており異質である。また外面には全ての個体に、鈍い赤褐色の焼成前の塗彩を認めることができる。なお、各実測個体には、接合関係を認め得ないが、2・3・8と4・6はそれぞれ同一個体に属する可能性が高いものと思われる。

この他、実測不能の個体が多数存在する。底部破片を抽出すると、実測個体とは別に5個体が確認されるため、底部破片により判別される壺個体数は8個体を算出することとなる。

（2）高坏（図35）

個体数が多いものの、全形を知りうるものが存在しないため、以下各部位に分けてその形態について述べる。

坏部は有段口縁の形態を呈するものであり、次の3形態に分類される。

坏部a類（9）

口縁部が外反するもので、坏底部との段はやや不明瞭である。口径は18.4cmを測りやや大形となる。

坏部b類（10～17）

口縁部は直に伸び、僅かに外反ぎみである。坏底部との段は明瞭であり、稜線上部には凹面が形成されている。口径は14～16cmであり、a類に比較して小形である。

坏部c類（18）

段が2段にわたるものであり、段の稜線は凸帯状を呈している。口縁部を欠損しているが、口径は20cm前後になると思われる。

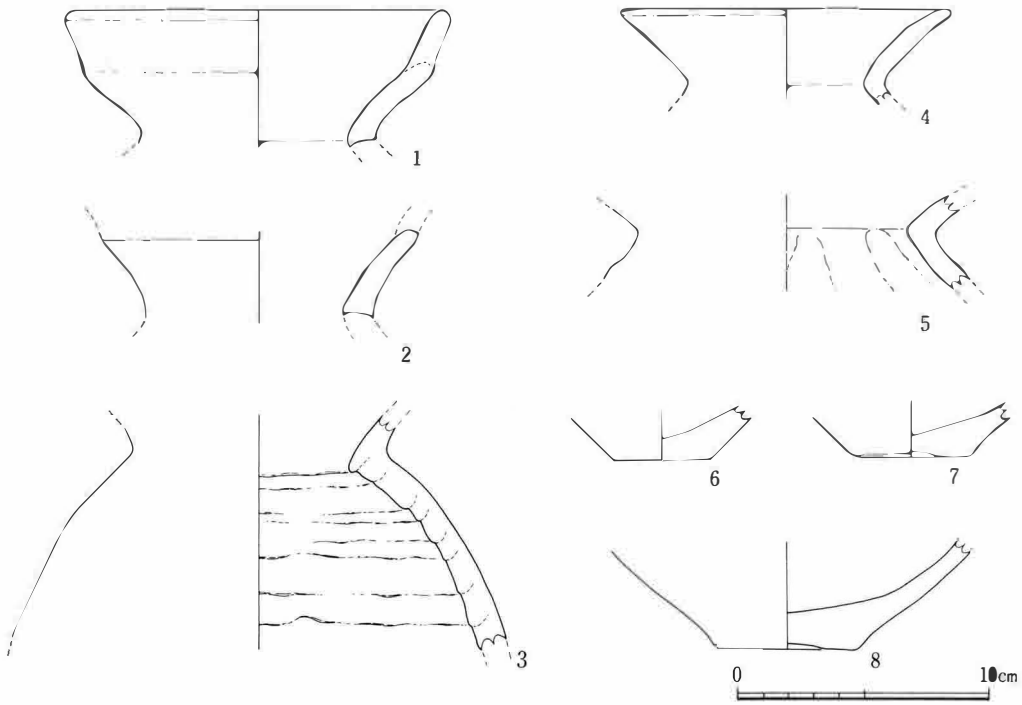


図34　土器実測図①（1：3）

脚部は、柱状の筒部に大きく開いた裾部を取り付けた形態を呈するもので、筒部の法量差などから次の2形態に分類される。

脚部a類（21～27）

筒部が8～9cmの長さをもち、裾部への移行部で径6cm内外の開きを有する。

脚部b類（28～31）

筒部が6cm内外の長さをもち、裾部への移行部の開きは5cm以内にとどまる。

脚部a，b類は、内面にしぼり痕を残す点と、上半の坏部との接合部付近がヘラ削りにより調整されている点は共通しているが、a類が内面下半に明瞭な巻き上げ痕を有するのに対し、b類にはその痕跡が残されない点において相違する。また、坏部との接合面は、いわゆるホゾ状の突起によって充塡されているが、脚部a類には砲弾形（23・24）、脚部b類には砲弾形の先端つまり脚内に挿入された下端部が指頭により押し潰された形態のホゾ（15・19）が伴う。この2種類のホゾは、出土個体中、坏部あるいは脚部に伴う個体が6例を数えるが、本体より剥離してホゾのみの粘土塊として検出されたものが14個存在する。その剥離状況を観察すると、砲弾形のものは上面が坏部内面として形成されているのにたいして、下端が押し潰されたものは脚に挿入された後に、更に上面に坏部内面を形成する粘土板を覆っているものであり、それぞれが成形方法を異にしている点が理解される。

以上、坏部と脚部について形態分類したが、次にこの分類に基づき、胎土、焼成、成形、調整の諸要素を加味しながら、想定される型式を抽出してみたい。

A　型

坏部a類を指標とする。焼成はやや悪く、黄褐色を呈した軟質である。脚部はa類に近いが、成形調整方法がa類とは異なり、内面上半がナデ、下半がヘラ削りによる。ホゾはb類に伴う下端が押し

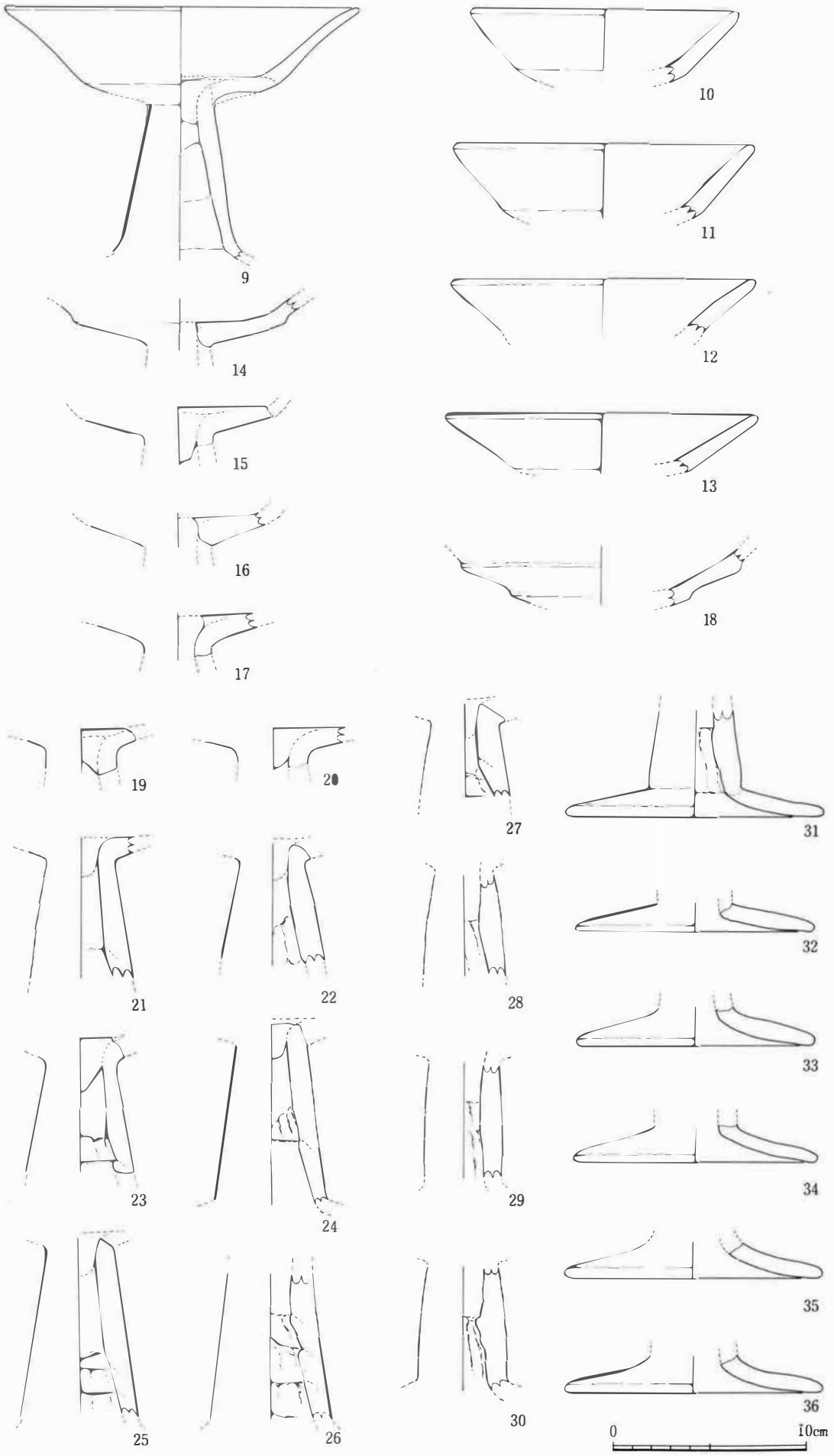


図35　土器実測図②（1：3）

潰された形態を呈する。外面及び坏部内面はヘラ磨きにより調整され、坏部内外面は放射状の暗文風に施される。概して器壁は薄く、成形自体は精緻なものといえよう。

B　型

坏部b類を指標とし、脚部a，b類の組み合わせが考えられ、脚部a類をBa型、脚部b類をBb型とする。両者の違いは、脚部a，b類の法量差と成形方法の違いに基づくが、基本的には同一型式として把握すべきであろう。焼成は良好であり、灰褐色を呈した硬質である。外面及び坏部内面はヘラ磨きにより調整され、磨きの方向は一定せず、ほぼ全面が丹念に磨かれているといってよい。器壁は厚めであり、全体的にボッテリとした外観を呈する。

C　型

坏部c類を指標とし、焼成色調、成形調整はA型に近似する。

高坏の全個体数は、検出された破片から推定して30個体を越えるものと思われる。このうち大多数を占めているものがB型であり、BaとBb型が同比率で存在する。これに対してA型、C型は各1個体しか確認されない。A、C型は一般の集落遺跡より出土する高坏と大差ないものと判断されるが、B型は成形調整方法の面から言えば特殊な様相をもつ高坏といえよう。その特殊性については、坏部と脚部との接合状況に表われている。一般的に、同種の高坏の成形は、脚部と坏部とを別工程により作出するため、坏部と脚部との接合面において剥離しやすい。また、接合にともない坏部に付随したホゾ状の突起を脚部に挿入する例が多い。これに対して、B型には、坏部と脚部との接合による擬口縁が観察されず、ホゾ状の突起も、接合を目途とするというよりも、単に坏底部内面の穴、脚部上端の穴を充塡するのみに用いられているらしい。これは、本体よりホゾのみが剥離した例が多数存在することからも肯定される点であり、B型に関しては、坏部と脚部とがほぼ1工程に近い形で成形されているものと理解される。また、脚部内面の調整が、上半のみをケズリにより仕上げている点は、類例を知らないが、恐らくはその特殊な成形方法に関連する要素となるものであろう。

（3）出土土師器の特殊性

後円部墳頂より出土した土師器は、推定される個体数が40個体を越えるものと考えられるが、そのうちの8割が高坏により占められており、残りが壺に比定される。その器種組成からも明らかなとおり、埋葬施設上部での、供献を中心とした祭祀用遺物としての性格が導かれる。

この土師器高坏の中で、主体となるのはB型であり、それが、一般に見られる高坏とは様相を異にしている点は繰り返し述べないが、所見を付け加えれば、かなり規格性を意識しながら一時的に大量生産された製品であるという印象が強く感じられる。その焼成と胎土の状況は、墳丘に樹立された埴輪に近似し、この特徴は壺の大多数にも共通する要素である。調整技法のなかに、ハケメが認められない点も土師器製作技法の上から見れば特殊な様相といえる。このほかに根拠を持たないため、危険な推論となるかもしれないが、同土師器の製作者を埴輪製作者と関連させて理解することも可能かと思われる。出土土師器が高坏B型を主体として構成される点から、極めて短期間のうちに供献が完結したと判断するならば、墳頂への供献を前提として製作された特殊な土師器としての性格も否定されるものではないだろう。

（青木和明）

C　鉄　鏃（図36・37）

a類　大形の柳葉形のものを一括するが、鏃身部等の形態差よりａ１～ａ３類に細別される。

ａ１類（１～３）

鏃身部は両丸造の柳葉形をなし、関部から内弯ぎみに篦被部へ移行する形態を呈する。篦被部はやや幅広の断面長方形をなし、篦被は関篦被である。断面円形に近い茎が付す。１は茎部を欠損するが、２・３はほぼ完形である。１・２は茎部に木質が残存するが 2はその上をおおう樹皮も遺存している。法量には、やや個体差があるが、形態はほぼ同一といえよう。

ａ２類（４～７）

鏃身部は両丸造の柳葉形をなすが、関部から直線的に篦被部へ移行する形態を呈する点、ａ１類と異なる。篦被部は断面長方形を呈し、篦被は関篦被である。断面円形に近い茎が付す。４を除き完形品である。いずれも茎部には木質の残存が認められるが、6はその上をおおう樹皮も残存している。

ａ３類（８）

大形の柳葉形をなすが、鏃身部は片丸造で、刃部幅もａ１・ａ２類に比較してやや狭い。８の一例のみであるが関から直線的に篦被部へ移行する形態を呈し、篦被は関篦被である。茎部は樹皮が良好に遺存しており、断面円形を呈する。

b類　柳葉形を呈するが、ａ類に比較して鏃身部の短い形態のものでｂ１、ｂ２類に細別される。

ｂ１類（９）

鏃身部が両丸造の柳葉形を呈するもの。９の一例のみであるが、関部から直線的に篦被部へ移行する形態をなし、篦被は関篦被である。断面円形に近い茎が付す。

ｂ２類（10）

鏃身部が片丸造の柳葉形を呈するもの。10の一例のみであるが関部から直線的に篦被部へ移行し、篦被は関篦被である。ａ類、ｂ１類に比較して篦被部がやや長い。茎部には木質が残存する。

ｃ類（11）

圭頭斧箭式のものであるが、11の一例が存するのみで完形品である。鏃先端は端刃をなし、鏃身部と篦被部の区別がなく、篦被は、関篦被をなす。また茎部は断面長方形をなす。

d類　鏃身部が長三角形のものを一括するが、鏃身部等の形態差よりｄ１～ｄ４に細別される。

ｄ１類（12）

鏃身部は片丸造で、関は直角関に近い形態をとる。篦被部は断面長方形を呈し、篦被は関篦被をなす。茎部には木質が残存し、茎の断面は、円形を呈する。

ｄ２類（13～18）

鏃身部は片丸造で、関部は内弯ぎみに篦被部へ移行する形態を呈するもの。篦被部は、ａ・ｂ類に比較して長いが、鏃身部長の1.5倍未満のものが主体をしめる。篦被は、いずれも関篦被をなす。14・16・17は、茎部に木質が残存する。18は、鏃身部が長三角形というよりも、柳葉形に近く、ｂ類に含

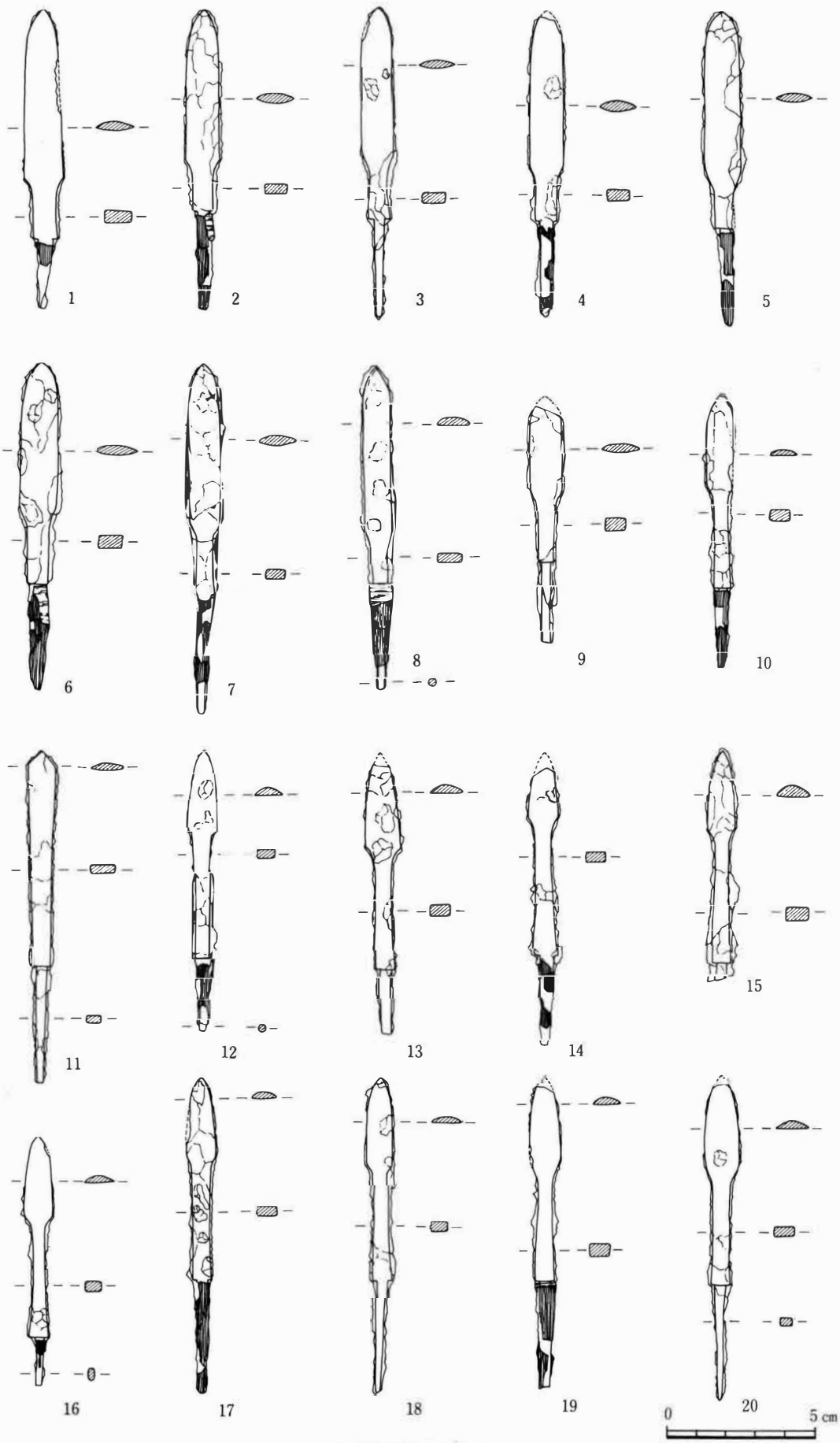


図36　鉄鏃実測図①（1：2）

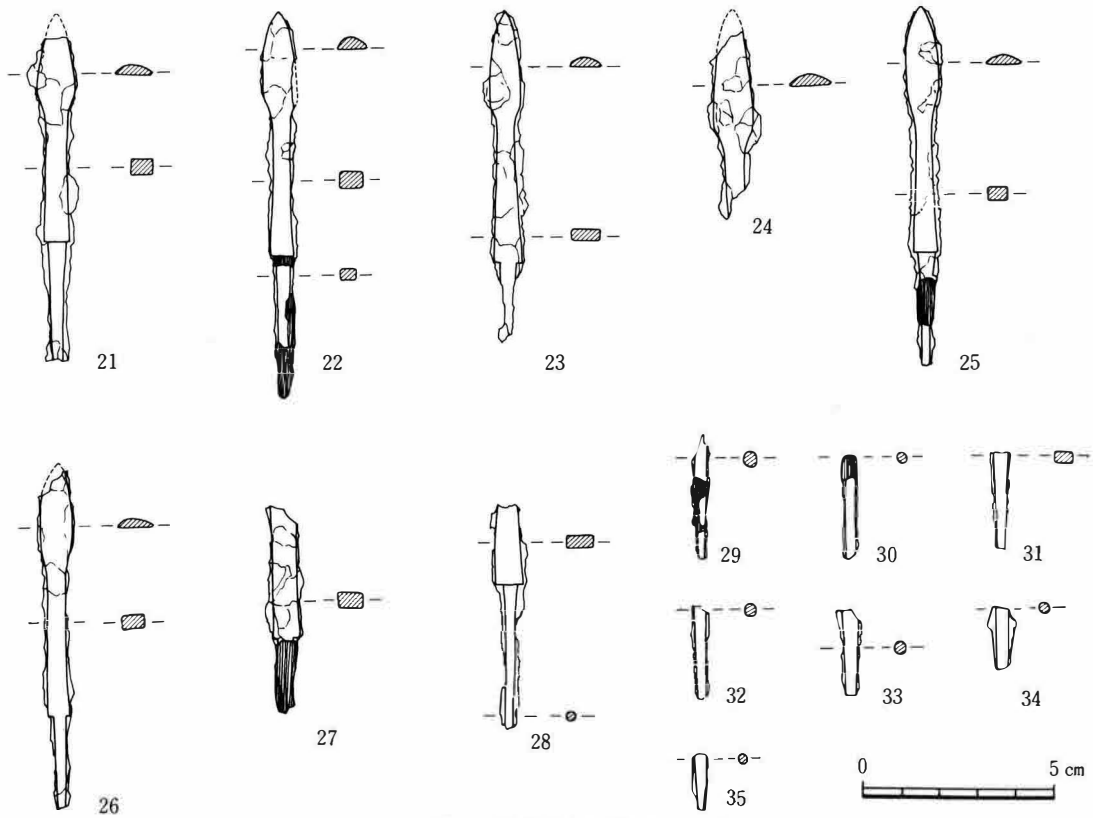


図37　鉄鏃実測図②（1：2）

番号	型式	全長 cm	鏃身長cm	箆被長cm	茎長 cm	鏃身断面	重量 g	番号	型式	全長 cm	鏃身長cm	箆被長cm	茎長 cm	鏃身断面	重量 g
1	a 1	10.1	6.2	1.5		両丸造	14.2	14	d 2	9.3		3.9	3.0	片丸造	9.4
2	a 1	10.1	5.5	1.3	3.3	両丸造	12.2	15	d 2	7.8	3.1	4.1		片丸造	14.8
3	a 1	10.4	5.4	1.7	2.8	両丸造	14.0	16	d 2	9.4	3.0	3.7		片丸造	7.9
4	a 2	10.0	5.6	1.4	3.2	両丸造	15.8	17	d 2	10.6	3.0	3.8	3.8	片丸造	10.7
5	a 2	10.6	5.9	1.3	3.1	両丸造	16.0	18	d 2	10.6	3.2	3.7	3.7	片丸造	10.7
6	a 2	11.0	5.5	2.0	3.5	両丸造	17.6	19	d 3	10.2	3.2	3.3	3.6	片丸造	12.4
7	a 2	11.8	5.7	1.8	4.0	両丸造	16.7	20	d 3	10.7	3.3	3.3	3.9	片丸造	10.4
8	a 3	10.9	5.8	1.5	3.5	片丸造	11.3	21	d 3	8.5		3.1		片丸造	12.1
9	a 1	8.0	3.5	1.8		両丸造	10.0	22	d 3	10.3	2.8	3.7	3.8	片丸造	13.9
10	b 2	9.2	3.4	3.6	2.7	片丸造	10.6	23	d 3	8.7	3.0	3.7		片丸造	9.5
11	c	11.2	7.3		3.9		15.8	24	d 3	4.8				片丸造	5.5
12	d 1	9.4	2.7	4.2		片丸造	9.7	25	d 4	9.6	3.1	3.4	3.1	片丸造	10.3
13	d 2	9.2	3.0	3.9		片丸造	14.6	26	d 4	8.8	2.7	3.7	2.4	片丸造	8.1

表7　鉄鏃計測値

めて考えるべきかもしれない。

ｄ３類（19～24）

鏃身部は片丸造で、関部はｄ２類に比べ不明瞭で、関無に近い形態のもの。19・20・24はやや大形のものである。篦被はいずれも、関篦被をなす。19・22は茎部に木質が残存する。

ｄ４類（25・26）

鏃身部は、片丸造で、関無のものである。篦被はともに関篦被をなし、25は茎部に木質が残存する。

この他、27・28は頸部残片、29～35は茎部残片である。31は、断面方形をなす。

各鉄鏃の計測値、重量等は、表７に示した。重量について、各類ごとに、比較的良好な遺存状況のものの平均値をあげると、ａ類15.2ｇ、ｂ類10.3ｇ、ｃ類15.8ｇ、ｄ類11.2ｇである。

なお、鉄鏃の出土状況は、出土状況微細図（図21）に見るとおり、北石室現存部の中央西寄りと、中央東寄りの２箇所に集中している。中央東寄りでは、２～７・11等のａ・ｃ類、中央西寄りでは、14・16～19・22・23・25・26等のｄ類が認められ、大きな２つの型式別に埋納された可能性がうかがわれる。また、図21には示されていないが、１は北石室攪乱層内、15・21は北石室床面から出土している。

（千野　浩）

本稿で使用した鉄鏃、ならびに、各部位の名称等については、後藤守一　1939「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第４号、小久保徹　他　1983「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ⅰ－鉄鏃について」『研究紀要　1983』埼玉県埋蔵文化財調査事業団、によるところが大きい。

D　短　甲（図38）

短甲の残欠が、墓壙ならびに墓壙周辺より、６点出土している。

１は帯金の残欠と思われる。幅2.9cm、長さは、現存長で、約10cmである。上段には３個、下段には4個の穿孔が認められ、それぞれに革綴の痕跡が明瞭に確認できる。

２～６は地板の残欠であろう。２は長方形を呈すると思われ、幅4.0cm、長さは現存長で5.7cmである。上下に、それぞれ１個の穿孔がなされている。３も長方形を呈すると思われ、幅3.5cm、長さは現存長で５cmである。穿孔は認められない。４は最大幅3.3cm、長さは現存長で4.7cmである。１個の穿孔を有する。５は三角板の可能性があり、長さは現存長で4.5cmである。中央付近に 2個の穿孔が認められ、各々が表と裏面に革綴の痕跡を明確に残している。６は、詳細は不明といわざるをえないが、やはり短甲の残欠であろう。最大幅で2.4cmをはかる。

いずれも小破片であり、これだけの資料をもって短甲の型式を類推するのは危険であるが、５のような三角板と考えられるものの存在より、これらは三角板革綴短甲であった可能性が高いといえよう。

（千野　浩）

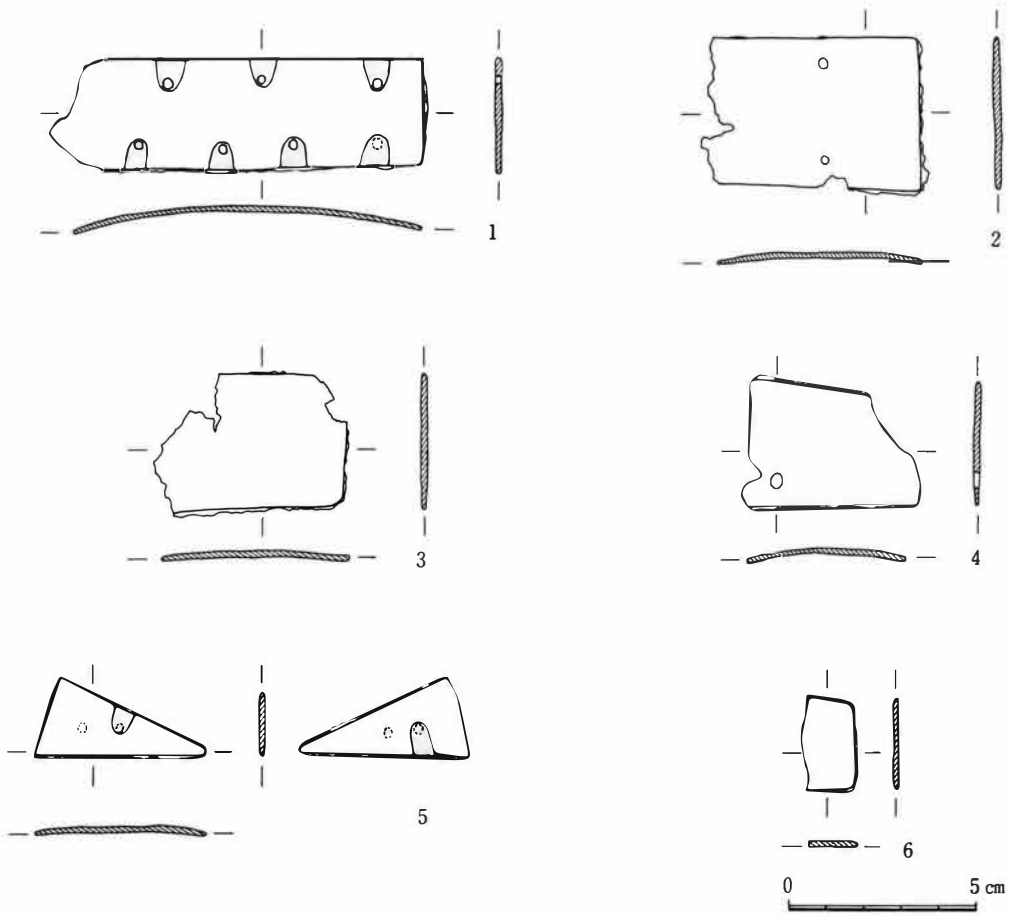


図38　短甲実測図（１：２）

E　玉　類 (図39)

玉類は、計26個出土しており、これらは以下のように分類できる。

a類　ガラス製玉で、色調はいずれもコバルトブルーを呈し、材質もほぼ同一と思われる。大きさ、形態等から、a1～a3類に、細分し得る。

a1類（1～5）　径7㎜以上のやや大形のもので、形態は円形に近い。

a2類（6～14）　径5～6㎜前後のやや小形のもので、形態は、a1類同様、円形に近い。

a3類(15～19)　a1類、a2類に比べ、小形のもので形態は円形というよりも、むしろ臼玉に近い形態を呈するものである。

b類(20～25)　ガラス製小玉で、扁平な形態を呈するもの。色調はいずれも淡緑色を呈し、材質も同じである。

c類(26)　滑石製臼玉である。26の1例のみ検出された。

次にこれらの出土状況についてであるが、第1次調査トレンチ覆土内、特に盗掘による攪乱廃土内より出土したものが多く、詳細は不明といわざるを得ない。しかし、確認し得た範囲においては、a類、c類は北石室から、b類は南石室からのみ出土しており、両石室間に差異が存在する可能性もある。また、北石室のa類は、a1類、a3類が出土しているが、a1類、a2類とa3類とは形態的に異なり、北石室には 2種類の装身具が埋納されていた可能性もある。　（千野　浩）

番号	型式	高さ	径cm	孔径	出土位置	番号	型式	高さ	径cm	孔径	出土位置
1	a1	0.93	1.02	0.21	トレンチ墳頂	14	a2	0.59	0.71	0.18	北石室床
2	a1	0.63	0.82	0.17	北石室床	15	a3	0.40	0.55	0.15	トレンチ墳頂
3	a1	0.69	0.74	0.22	北石室床	16	a3	0.40	0.51	0.19	トレンチ墳頂
4	a1	0.78	0.70	0.11	トレンチ墳頂	17	a3	0.35	0.55	0.15	南石室床直上
5	a1	0.74	0.70	0.17	北石室床直上	18	a3	0.32	0.45	0.11	北石室床
6	a2	0.59	0.63	0.16	トレンチ墳頂	19	a3	0.26	0.44	0.10	北石室床
7	a2	0.62	0.68	0.18	トレンチ墳頂	20	b	0.20	0.40	0.14	南石室床直上
8	a2	0.60	0.70	0.19	トレンチ墳頂	21	b	0.28	0.35	0.12	南石室床
9	a2	0.63	0.74	0.17	トレンチ墳頂	22	b	0.23	0.39	0.12	トレンチ墳頂
10	a2	0.60	0.62	0.16	トレンチ墳頂	23	b	0.20	0.36	0.10	トレンチ墳頂
11	a2	0.64	0.58	0.16	トレンチ墳頂	24	b	0.24	0.35	0.12	トレンチ墳頂
12	a2	0.64	0.64	0.17	トレンチ墳頂	25	b	0.19	0.28	0.08	トレンチ墳頂
13	a2	0.58	0.60	0.19	南石室床	26	c	0.22	0.41	0.12	北石室床

表8　玉類計測値

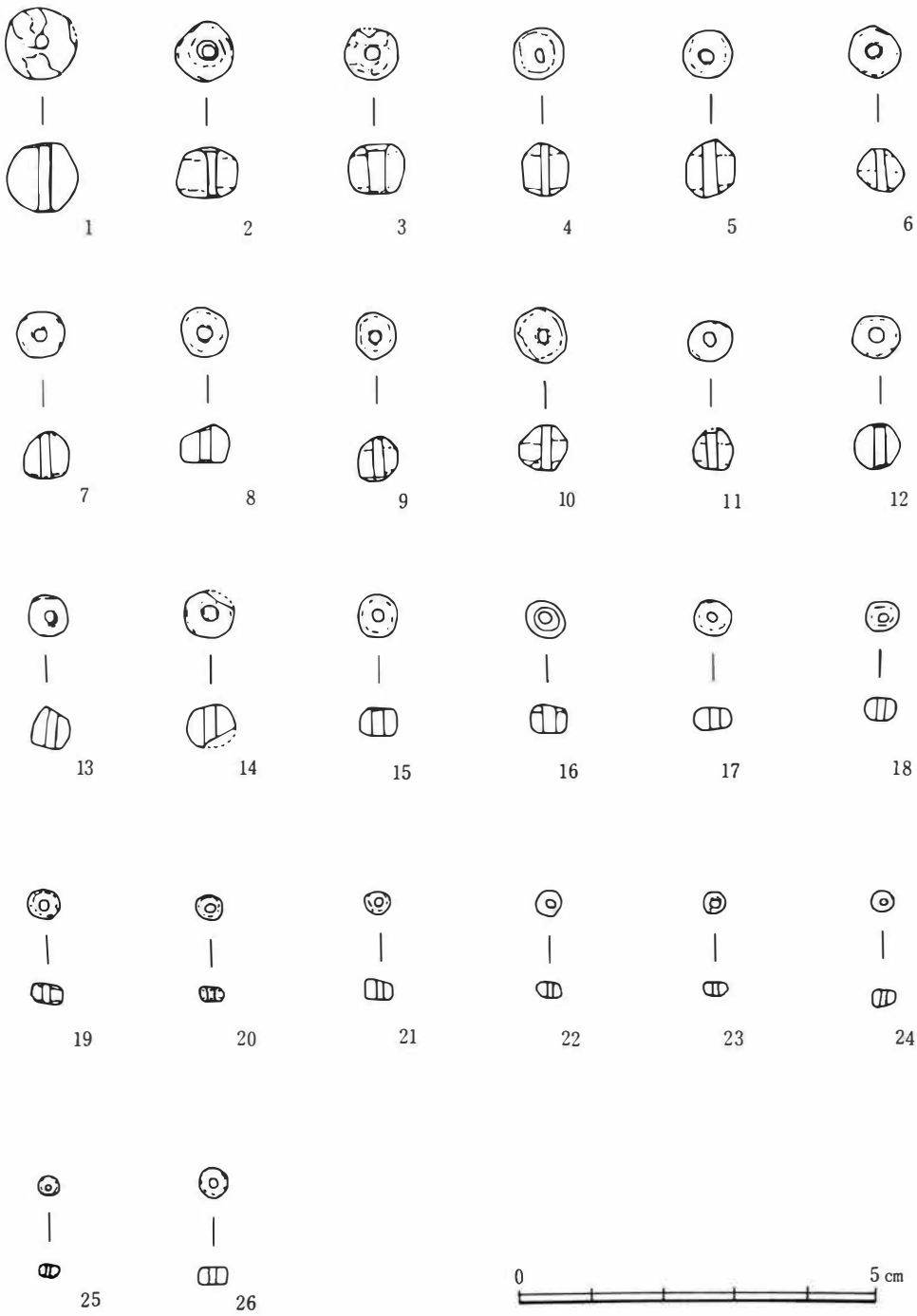


図39　玉類実測図（1 : 1）

F　その他の遺物

ここでは、２次的に混入したと判断され、直接古墳に伴わない遺物を扱うこととする。

（１）須恵器（図40－１・２）

１は坏$\frac{1}{2}$破片であり、 前方部墳頂の埴輪破片集中地点より検出されたものである。内外面ともロクロメを明瞭に残し、底部は回転ヘラ切りによるものと考えられ、静止ヘラ削りにより調整されている。 ２は、底部のみの破片であり、くびれ部北側の上段丘より検出されたものである。回転ヘラ切り痕を残し、ナデにより若干の調整を施している。両者とも、８世紀代の遺物として位置づけられよう。

陶磁器（図40－３～８）

全て後円部墓壙盗掘坑の攪乱層中より出土したものである。

３は、珠洲系陶器の壺口縁部と考えられ、同一個体の深い刻みによる並行叩き痕を有する胴部破片も出土している。焼成が悪く、軟質であり灰白色を呈する点、珠洲系とは断定し難いが、中世須恵器系陶器と判断して大過無いものといえる。４・５は内外面自然釉を有する常滑壺破片と考えられる。底部付近にはわずかにハケメを観察することができる。６は、ほぼ完形の松代焼紅鉢である。松代焼は、当地において江戸時代に操業された近世陶器であり、その出自は明確である。７・８は、磁器であり、明治時代をさかのぼる所産ではない。

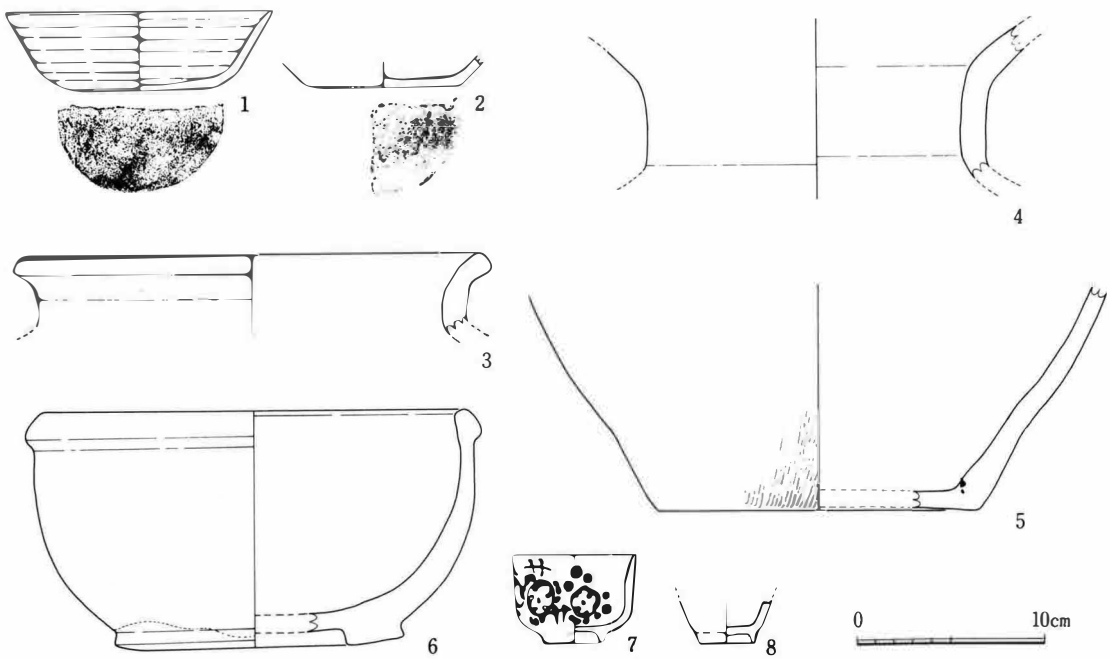


図40　その他の遺物①（１：４）

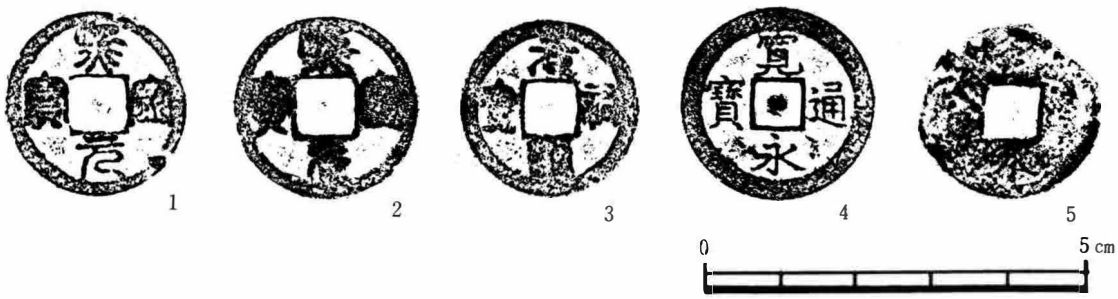


図41　その他の遺物②（1：1）

銭　貨（図41）

1・2は「熙寧元宝」、3は「元祐通宝」、ともに北宋銭である。4・5は「寛永通宝」である。1～3は、後円部墓壙攪乱層、 4は前方部墳頂、 5は後円部北トレンチより出土したものである。

この他、墓壙攪乱層中から、明治時代二銭・半銭銅貨と、現代の空缶、ビニール袋等が検出されており、古代より現代までの多種類の遺物が混在した状況にある。これらは、盗掘者、登山者、見学者のいずれかの遺留品であると考えられ、その時代性を考えるうえにおいては、興味深い資料といえよう。特に、平安時代から中世にかけての遺物が、盗掘坑を中心として分布し、石室床面近くにおいても検出されていることから、かなり古い時代に盗掘が行なわれた可能性が示唆される。その後も、数次にわたり盗掘が行なわれた様子であり、石室の極端な破壊状況もうなずける点である。

（青木和明）

Ⅳ 考　察

1　埋葬施設の検討

土口将軍塚古墳の後円部頂には、２つの竪穴式石室が併存していた。この埋葬施設が提起する問題は多々あろうが、今その２、３についてなにがしかの検討を行ないたい。

（1）併葬をめぐって

この古墳では、当初から２竪穴式石室を併設する意図があったばかりか、これらは同時構築と理解されたという。調査当事者のこの見解は、十分に尊重されるべきだが、担当者も認めるように、これには問題がないわけではない。並列する両石室の軸線方位が一致しない点、その西端部において、北石室が大きく突出する点などが合理的に説明されなければならないからである。

一墳丘に複数の埋葬施設がある場合、そのあり方を正しく把握することは葬送イデオロギーならびに被葬者の性格等を考究するうえで重要である。(1) 近在する森将軍塚古墳では、後円部頂には圧倒的規模の一埋葬施設があるだけで、これに次ぐ施設は前方部頂に営まれていた。(2) 倉科将軍塚古墳の場合も、前方部埋葬の可能性が強い。被葬者間の明白な格差の存在が想定できよう。

墳頂部併葬にもいくつかの型がある。まず墳丘中央に埋葬が行なわれ、ついでその傍らに第２、第３の埋葬施設が設けられていくのが、その１である。あらかじめ併葬を予定して、先に築く施設を中心から外して、一方に寄せることもある。これを第２とするなら、併葬の３番目の型は、墳頂に設けた墓壙内に、同時に２つ以上の埋葬施設を設ける場合で、改葬をも含む同時埋葬さえ考慮する必要が生じうるタイプである。他にも２、３の類型があるが、今はふれない。

もちろん、埋葬施設の位置と築造順序だけの問題ではない。埋葬施設ならびに副葬品の質をも併せ検討すべきであるが、与えられたテーマからして副葬品にまで言及するのは筋違いであろう。

施設の質を考えるためには、これまた近在する舞鶴山１号墳をまず取り上げねばなるまい。この古墳の頂部には２つの埋葬施設が並んでいるが、主埋葬と思われる方が竪穴式石室であるのに、併存するいま１基は木棺を直葬したものと考えられた。このような並列する２つの埋葬施設の一方が竪穴式石室であるのに、他方が粘土槨などである例は決して少なくはない。そしてこれを被葬者間の隔差の表現と考える人は多い。

同じ県内の小古墳でも、坂井村の安坂１号墳(3)には相似した竪穴式石室が、また諏訪市フネ古墳(4)には２つの粘土槨が並んでおり、被葬者間の隔差の乏しさを看取させた。土口将軍塚古墳の場合は、類似構造の竪穴式石室の並列で、しかも同時構築らしいというのである。このあたりの問題を考えるため、いくつかの古墳の例を検討しておきたい。

佐賀県経塚山古墳(5)（円墳）の墳頂には、6.1×４メートル、深さ0.8メートルの墓壙があり、およそ１メートルの間をおいて、２基の竪穴式石室を併設すべく設計されていた。予定された両施設の軸線方位、規模は一致しており、床面レベルも同一になるように企画されていたらしい。同じ佐賀県の谷口古墳（前方後円墳）にも特異な竪穴式石室が並列していたが、田平徳栄氏らはこれらも構造上からして同一墓壙・同時構築と想定している。(6) だが現存するのは東石室だけであるため、詳細は知り難い。梅

原末治博士は、両石室の間隔を2.5メートルほどと推定された。[7]

三重県石山古墳[8]（前方後円墳）の後円部頂にも長方形プランの墓壙があり、その底に３つの粘土槨が共存していたというが、その細目は公表されていない。ただ、東槨の長さが８メートルを上まわるのに、西槨はその半ばにも満たない規模だった点は注目される。ところが奈良県池ノ内１号墳[9]（円墳）では、墳頂に穿たれた4.3×４メートルの壙内に、ほとんど同大の２棺が併置されていた。同一方位、同一レベルを示す２つの棺の間は、僅か50～60センチにすぎなかった。

僅かな例であるが、同一墓壙内多葬の場合は、同一方位・同一床面レベルが原則で、同大施設である場合がむしろ多いと想定できそうに思う。

岡山県金蔵山古墳（前方後円墳）や山口県長光寺山古墳[10]（前方後円墳）などは、墳頂中央に主石室を有し、偏った位置にいま１つの竪穴式石室が設けられた例である。長光寺山古墳の両石室も、相互の関係が把握されているわけではないが、方位・床面レベルにズレがあるばかりか、規模の上でも東石室（中央）の復原長8.75メートルにたいし、西石室は5.7メートルとされており、彼我の差は大きい。両石室間の距離は、その中心部で５メートルもあるから、墓壙を異にすることは疑いない。金蔵山古墳[11]の場合は、両石室中軸間が8.1メートルもあり、別墓壙であることも確かめられているのに、軸線方位も床面レベルもほぼ一致している。そればかりか中央石室長が6.1メートルなのに南石室が7.2メートルとむしろ長く、長光寺山例と大きく異なっている。これなどは、主埋葬と従埋葬という関係を強調しつつ、あらかじめ計画されたものと解すべきかもしれない。

兵庫県丸山１号墳[12]（前方後円墳）の後円部頂の２つの竪穴式石室は、あらかじめ併葬を意図して石室の位置が決められた例である。しかし、北石室の墓壙が南石室のそれの一部を破壊していたというから、異墓壙・異時埋葬であることは明瞭である。両石室間の距離は、その中央部で２メートルにすぎないが、軸線方位は６°のズレがあり、両石室の内法長の間にも、数十センチの差異がある。

墓壙を異にする併葬の場合も一概にこれといえぬまでも異方位・室間距離の大きいこと、規模にも差があることが多く、また床レベルの差なども指摘しうる場合が多そうである。

さて、土口将軍塚古墳の石室を改めてみるとき、この古墳の両石室の軸線方位におよそ５°のズレがある点、またむしろ規模が小さいと考えられる北石室の西端が１メートルも西に突出する点などは、墓壙を共有したとする可能性を薄める要素といえる。だが石室間の距離が1.3メートル前後、そして同一レベルの床面という点などは、全く逆の傾向を思わせる。墓壙の輪郭線が不明な今、これ以上の論議は無駄であろう。

ここで再び先述した、長野県内のフネ、安坂１号墳に目を転じたい。安坂１号墳の竪穴式石室は同方位を示し、やや大きい２号石室は、その両端が同程度ずつ１号石室より突出する。両室の間は1.7メートルほどである。床面レベルの差も10センチ程度にすぎない。

フネ古墳は、粘土槨を併置しているが、両槨の規模には50センチほどの差があるに過ぎないのに、相互に南北にズレている点は、土口将軍塚古墳例に近い。西槨にはねじれが認められるため、正確に方位の差を測り難いが、これまた土口将軍塚例に近いズレが認められる。両粘土床の間隔は60センチにすぎず、床面レベルもほぼ一致すると判断されたらしい。にもかかわらず調査者は、両者の位置関係のズレを重視して、時を異にする構築・埋葬を考慮している。

安坂１号墳の２石室は、この古墳が積石塚という特殊な墳丘である点をも考慮して築造順序を推測する必要がある。また、石室間距離の大小などは、古墳の規模にも左右される。例えば金蔵山古墳で

は大きな間があったのに、別墓壙が確かめられている舞鶴山１号墳では、両施設間が1.5メートルにすぎなかった。このように述べてくるなら、結局は上記諸古墳の墓壙が確かめられないかぎり、これ以上の論議は不毛ということになってしまう。したがって、ここでは長野県においては、中山36号、森将軍塚、弘法山それにおそらく川柳将軍塚などを加えた古式な古墳では、主丘に単独で中心埋葬施設が存在するのを一般とするのに、５世紀代とされる古墳に主丘併葬が、それも同質の埋葬施設を至近に並べる例がしばしば認められるという点だけを強調し、土口将軍塚例は新例を加えたと評価しつつ、この地域５世紀の首長層の性格を考えるよすがとしたい。

（２）石室構造をめぐって

土口将軍塚古墳の竪穴式石室は、南、北両室とも、礫を混える粘質土で固めた平坦な床をもち、側壁は内側に持ち送られることなく直立し、控え積みもきわめて少ないという、共通した特色をもつ。

周知のように、古式な竪穴式石室の側壁は、割石を少しずつ内側に持ち送って小口積みをするため、極度に内傾している。森将軍塚古墳や、隣県の甲斐銚子塚、丸山塚古墳などの石室はその好例といえる。このような壁体構造は、崩落を防ぐ上で幅のある控え積みを必要とすると考えられる。森将軍塚古墳石室の控え積みは、板石と河原石を交互に配した頑丈なもので、その奥行は２メートルを計測している。[13] 丸山塚古墳の場合も、石室上面付近で幅1.5メートルと推測されている。[14]

森将軍塚古墳前方部に設けられた２号石室は、全長２メートル未満、壁高５、60センチという小規模なものだが、側壁は内傾するタイプである。そして控え積みはその基部でこそ板石１枚分、すなわち幅30センチ前後（石室壁面から60センチ）にすぎないが、高まるに従って幅をまし、上面では70センチほど（壁面から１メートル）となっている。

弘法山古墳の石室は河原石使用による特殊なもので、壁面も外傾ぎみとなっている。にもかかわらず、控え積みは壁体の外方に１～1.5メートルの幅で認められた。[15]

さて、土口将軍塚古墳石室の控え積みは、十分に把握されたとはし難いが、その上面でも、壁面から５、60センチにすぎず、板石１石分の幅しかとられていない。上述諸例に照らすまでもなく、簡略

古墳・石室名	内法長(m)	最大幅(m)	壁高(m)
土口将軍塚、南石室	5.2＋α	0.65	0.85
土口将軍塚、北石室	4.6＋α	0.55	0.6＋α
舞鶴山１号墳	5.3	0.7	0.5
舞鶴山２号墳	5　＋α	0.7	0.6
越将軍塚	6.2	1.45	0.9＋α
安坂１号墳、１号石室	5	0.8	0.8
安坂１号墳、２号石室	5.6	0.7	0.6
安坂２号墳	6.8	1.0	0.9

表９　長野県における５世紀代の竪穴式石室

化が進んだ形式として把握しうる。これに直立する壁面と石室規模をも勘案するなら、本古墳の石室は、舞鶴山１号墳などのそれに、極めて類似していることがわかる。

表示した諸石室のうち、石室幅に著しい差を見る越将軍塚古墳は、すでに盗掘によって石室の大半が破壊されていたが、調査により滑石製臼玉若干と埴輪片が採集された[16]。円筒埴輪片には黒斑が認められないという指摘を重視するなら、この古墳は土口将軍塚・舞鶴山１号墳などよりは後出といえる。残余の内法長５メートル代の石室こそ、５世紀代の長野県下に盛行した型と想定できそうである。

つぎに平坦な床面に言及しなければならない。全長５メートルを上まわり、幅１メートルに満たない狭長な竪穴式石室には、割竹形木棺が安置されるという。だが別稿でも指摘[17]したことだが、丸太に近い形状と想定される割竹形木棺を安置するには、それ相応の棺台が必要である。通常は横断面形がU字形に窪む粘土床を設けて、この棺を安定させるといわれている。埼玉県前山２号墳[18]のように２列の石列でこれに代えるなどの例もあるが、土口将軍塚古墳の２石室には、そのような施設もない。平坦な床に割竹形木棺が安置できないとなれば、長大な組合式木棺を想定しなければならない。

弘法山古墳を調査した斎藤忠博士らは、その石室床面の状態から、割竹形木棺はおろか木棺の類すべての使用を否定された。また森将軍塚古墳の主石室も、その規模、床の形状から割竹形木棺の使用は考え難い。そればかりか、表示した竪穴式石室はすべてが平坦な床をもち、割竹形木棺安置の設備を欠いているのである。もちろん近畿圏の古式古墳といっても、すべてが割竹形木棺を使用したのではなく、組合式木棺を考えねばならない例も少なくはない[19]。だがやはり近畿圏などの前期古墳の典型は割竹形木棺をもつとすべきである。すなわち、この地域では古墳築造の当初から、近畿圏とは異なる型の埋葬施設が用意され、それが土口将軍塚古墳にまで及んだと考えるべきではなかろうか。

４世紀末以降、近畿圏などの有力古墳には石棺の使用が始まり、それとともに石室の形態が変わるという[20]。だが、長野県下の場合、石棺の採用はあとづけられず、すでにみたとおり伝統的な狭長竪穴式石室の使用が続く。そして５世紀も中葉ごろから割竹形木棺と粘土槨とがようやく登場する。いまのところそれらが、中・小古墳に限って認められる点も興味深い。土口将軍塚古墳の被葬者の系譜・性格を論じるさいに、埋葬施設のあり方をも十分考慮に入れる必要があろうと思うゆえんである。

（岩崎卓也）

註

（１）　多葬を扱った論文の主要なものは以下のとおりである。

石部正志「多葬墳に関する一考察」先史学研究３　1961年

関根孝夫「古墳における多葬の問題」史潮98　1966年

山本三郎「畿内地域における前期古墳の複数埋葬について」考古学論叢　1983年

松尾昌彦「前期古墳における墳頂部多葬の一考察」古墳文化の新視角　1983年

（２）森将軍塚古墳発掘調査団『森将軍塚古墳』保存整備事業第２・第３年次発掘調査概報　更埴市教育委員会　1982・83年

（３）大場磐雄ほか「長野県東筑摩郡坂井村安坂積石塚の調査」（１）（２）　信濃16－４・６　1964年

（４）藤森栄一・宮坂光昭「諏訪市上社フネ古墳」考古学集刊３－１　1965年

（５）田平徳栄・蒲原宏行『経塚山古墳』浜玉町教育委員会　1980年

（６）註５に同じ

(7) 梅原末治「玉島村谷口古墳」佐賀県文化財調査報告書2　1953年
(8) 小林行雄「三重県名賀郡石山古墳」日本考古学年報1・2・3　1951・54・55年
(9) 泉森皎ほか『磐余・池ノ内古墳群』奈良県教育委員会　1978年
(10) 長光寺山古墳調査団『長光寺山古墳』山陽町教育委員会　1977年
(11) 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館　1959年
(12) 山本三郎・井守徳男『丸山古墳群－調査の概要』山南町　1977年
(13) 註2文献に同じ
(14) 坂本美夫ほか『銚子塚古墳附丸山塚古墳－保存修理事業第1・2年次概報－』山梨県教育委員会　1985年
(15) 斎藤忠ほか『弘法山古墳』松本市教育委員会　1978年
(16) 矢口忠良「越将軍塚古墳」長野県史考古資料編1－2　1982年
(17) 岩崎卓也「古墳時代の信仰と葬制」長野県史考古資料編1－4　1987年刊行予定
同「埋葬施設からみた古墳時代の東日本」斎藤忠博士頌寿記念論集　1987年刊行予定
(18) 小久保徹「前山2号墳の発掘調査」埼玉県遺跡発掘調査報告書16　1978年
(19) 大阪府和泉黄金塚古墳東・西槨などはその好例といえる（末永雅雄ほか『和泉黄金塚古墳』　綜芸社1954年）
(20) 小林行雄「竪穴式石室構造考」紀元二千六百年記念史学論文集　1941年

2　土口将軍塚古墳の設計企画

土口将軍塚古墳の、詳細実測原図ができ上がった段階及び調査の進行の段階で、後円部の平面プランが楕円形をなすのではないかとの認識がひろがった。その根底には前方後円墳の中段プランニングという見解も横たわっていたと言うこともできる。丘尾切断による前方部前面を尾根の上位に企画する宿命として、後円部の位置の標高が下がるため、水平面を中段に築造するという工法上の課題の克服もこのなかに内在している。主軸線にそった前方部前面の墳丘裾線中央は、449.3m、後円部墳丘裾線中央は445.5mであるため、その標高差は3.8m、前方部の裾線が高く、後円部裾線の低いことを示している。墳丘裾線は、前方部中央点の449.3mを最高点として南北に逓減し、南北くびれ部の墳丘裾線の447.3m及び447.5mに至る。およそ２m下がることになる。そして更に後円部最南北位置である主軸線に直角な墳丘裾線の標高445.9m、445.5mに至るのであるが、ここの間に1.5mから1.8mと急激に下がることが注意される。しかし、この位置より後円部端445.5mまでは、まったく平坦であることも重要である。

墳丘中段部を見ておきたい。前方部中央の主軸上の標高は449.8m、前方部南北隅450.1mと450.6m、南北くびれ部448.7mそして449.0m、後円部中央主軸線直角位置の南北点は448.8m448.5mとなり、後円部主軸線上点は448.5mである。墳丘裾線の3.8mの下降に対して、中段テラスは1.3m以内の下降であって、後円部最末端の標高差３m、前方部の標高差は0.5mの在り方を加えると、中段テラスを極めて意図的に水平面に近い平坦面となるように構築しようとしているのが明らかである。土口将軍塚古墳の設計企画を読み取るための基礎的な要素であるといえよう。

墳丘裾線が、地山の緩斜面を前方部で切断削り出したのみで、ほぼ後円部に向かっての自然地形緩斜面を利用していることは明らかで、主軸67mにたいして3.8mの下降は、そのまま自然地形面にそっていると見てよい。それに対し墳丘中段テラス面は、その面での新しい計測による割り出しを期するかのように、水平面に近づけようとする意図が見える。したがって中段面における設計企画も重要な課題であるとみることができる。

図42は土口将軍塚古墳調査にもとづく実測図より、読み取ることのできる設計意図の復元図である。なお、表10はそれにもとづく土口将軍塚古墳の計測と比率である。まず図42より必要な要素を把握しておきたい。

①主軸線ⒶⒷ(BD)は直線で、67.0mと計測できる。②前方部前面の裾線は主軸線に直行せず 6°向って左、南側墳丘裾線が短くなるように傾斜している。③前方部の三辺裾線はほぼ直線状であるが、南北の角は鋭角の稜をなさず丸味を帯びている。④前方部と後円部の接合部は、明確に割り出されていて、主軸線上のO点を中心として半径20.5m(直径BC41.0m)上に位置し、後円部主軸上の最末端点Ⓐ(B)とも一致する。それは主軸線に直行する南北裾線ともほぼ一致することが明らかである。したがって、後円部がOを中心とした真円であるということは、今まで試みられてきたO－O′の二重構造の在り方をなしていないということでもある。

墳丘中段部の意図を把握しておきたい。①中段主軸線の長さは58.3mである。②前方部前面の中段テラス内側の線は、墳丘裾線と同様で主軸線と直行せず 6°の角度で交わっている。③したがって中段ラインは三辺とも墳丘裾線と平行に築造されていることが明らかである。その上、前方部墳丘裾線及び

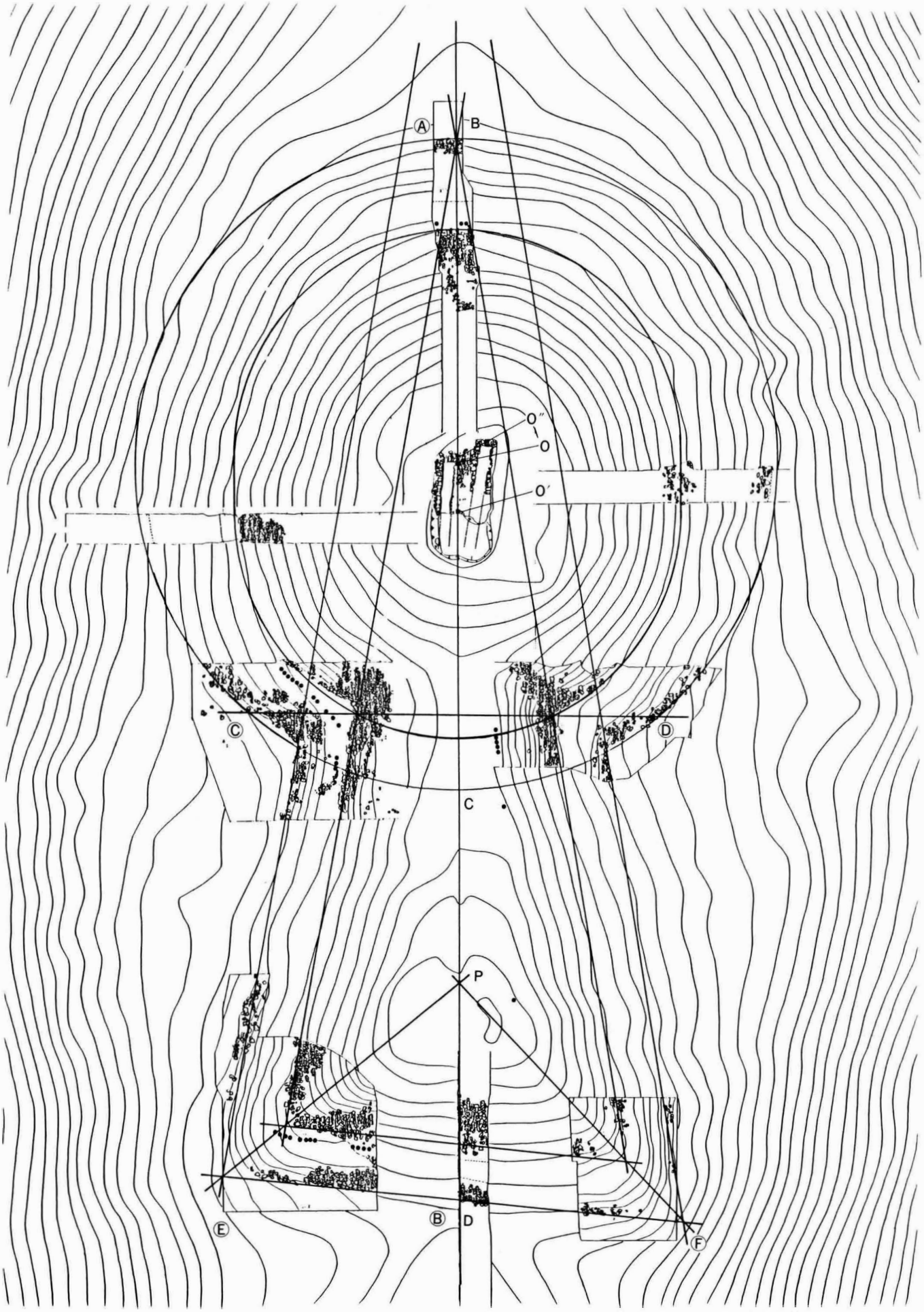


図42　土口将軍塚古墳の設計意図の復元

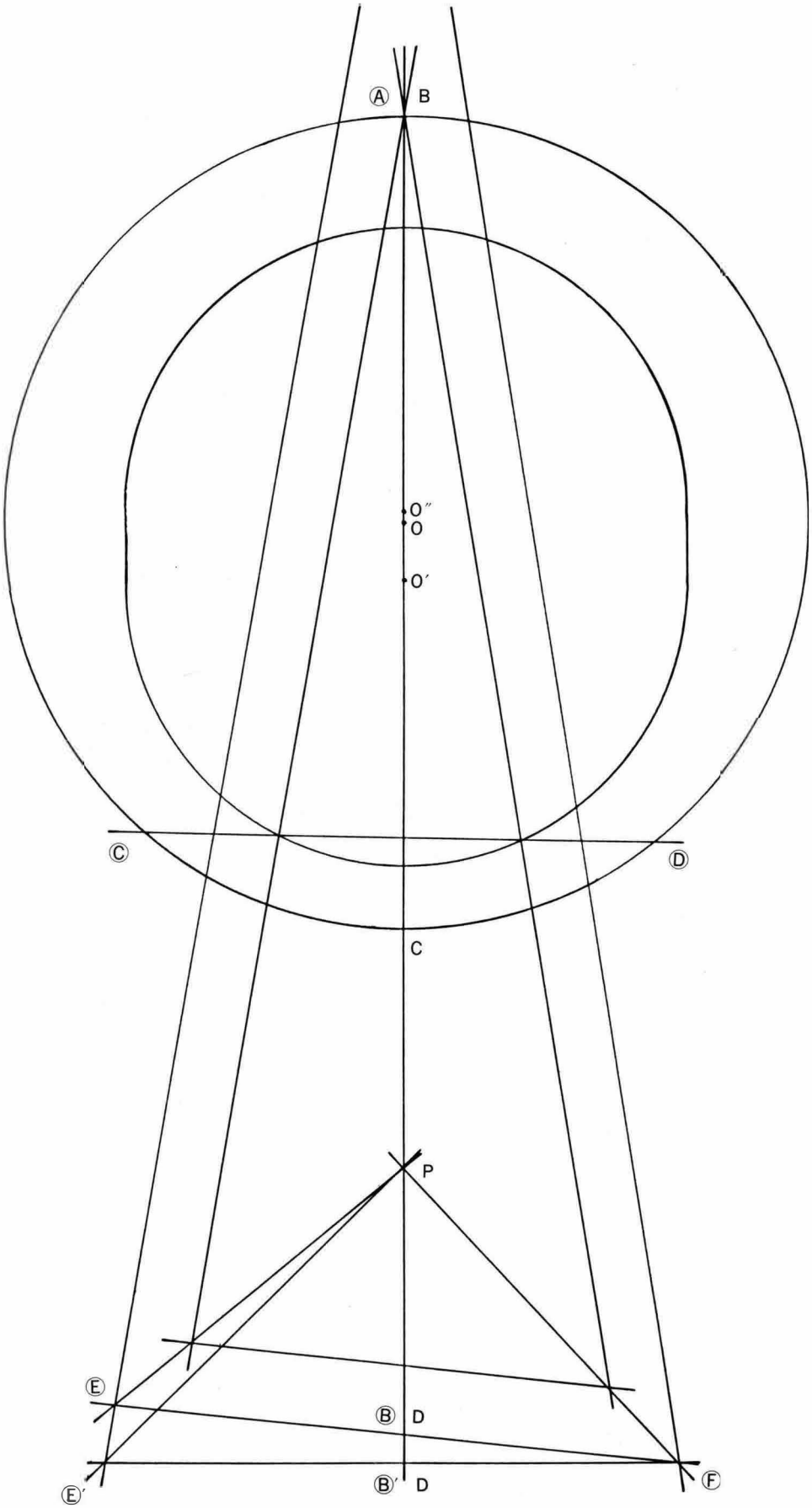


図43　土口将軍塚古墳の設計企画

中段テラスの南北コーナーを結んだ線は、主軸上の一点(P)、CP12.3mより確実に割り出されたものである可能性が大きい。この点は、6°傾斜コーナーとも一致することは、更にその確実さを補強している。④中段後円部との接合くびれ部は、ほぼO′点を中心とする半径14.4mで接し、後円部へと続いている。このO′点は墳丘後円部の中心O点より前方部へ3m寄った所に存在する。主軸線に直行する南北端テラス線とも一致する。しかしO′点は中段後円部全体をカバーできず、西側半円は、中心点を主軸線上で3.5m西へずらした位置O″点において半径14.4mをトレースすることで主軸上の中段テラス石垣裾線をカバーすることができる。したがって中段後円部は3.5mはなれた 2つの中心点をもつ楕円形をなすことと認識される。⑤なお前方部の南北両側ラインは、墳丘後円部の裾線と主軸線の交わる点を基点として、主軸線に対してそれぞれ10°ずつ20°の開きをもって走行していることは注目すべきことである。

墳丘調査により当初の所見に反して、後円部墳丘裾線のプランニングは、真円形であって、中段後円部は楕円形であることが明らかとなった。また前方部前面裾線は主軸線に直行せず、6°をもって傾斜していることも明らかであるが、前方部は極めて明確な基点と、平行線をもって行なわれていることも明らかとなった。墳丘中段テラスの持つ墳丘構造上の意義は大きいものがあるものと理解される。

図43は土口将軍塚古墳の以上の設計意図の把握によって、築造当初の設計企画について復元的に理解しようと試みたものである。表10と関連しながらその在り方を読みたい。土口将軍塚古墳の平面形における一つの特徴は、前方部前面の墳丘裾部ラインが 6°傾いている点である。この線についてはどのように理解するのが妥当であるのか、にわかには明らかにならない。森将軍塚古墳のように地形上の制約があったとは考えられないのでその課題の克服は難しい。しかし、円筒埴輪及び形象埴輪の配列等を考慮すると、森将軍塚古墳において注意されたように、よりデコレートされた片側を意識されているとすると、土口将軍塚古墳は岩野東福寺側を意識した可能性が大きい。すると当初の設計企画はⒻ－Ⓔ′ラインであった可能性も大きいと理解することができる。修正値はそれを意味している。

椚案8：3：3.5、上田案6：2：2、宮川案8：5は、土口将軍塚古墳の設計企画の重要な所見とすることができる。森将軍塚古墳のそれぞれ8：3：2.5、6：3：2、8：4.7と共にかなり古式古墳の様相を呈していることに注意されねばならない。出土遺物としての鉄鏃甲冑等に与えられる5世紀前半、埴輪に与えられる5世紀中葉とも合わせてもなお設計企画において古式の前方後円墳であることは注目すべき課題である。かつて私は、森→土口→倉科→有明山の可能性を設計企画から示唆しておいたが、本調査の進展とともにその可能性は更に増大したと考えている。　　(森嶋　稔)

実測	ⒶⒷ	ⒸⒹ	ⒺⒻ	ⒶⒷ：ⒸⒹ：ⒺⒻ	概略	椚国男案
実測	67.0	26.7	29.7	8：3.18：3.54	8：3：3.5	
修正	69.2	26.7	30.0	8：3.18：3.46	8：3：3.5	
	BC	CD	PD	BC：CP：PD	概略	上田宏範案
実測	41.0	12.3	13.7	6：1.80：2.00	6：2：2	
修正	41.0	12.3	14.2	6：1.80：2.00	6：2：2	
	BC	CD		BC：CD	概略	宮川渉案
実測	41.0	25.9		8：5.05	8：5	
修正	41.0	27.5		8：5.36	8：5	

表10　土口将軍塚古墳の計測と比率

3　善光寺平の埴輪

森将軍塚古墳や、土口将軍塚古墳等の発掘調査によって、埴輪の様相も次第に明らかとなってきた。今後こうした調査成果に基づき、古墳の年代や変遷について検討を行うために、ここで土口将軍塚古墳を取りまく善光寺平南部地域の円筒埴輪を中心に改めて整理を行った。また、川西宏幸氏が行った円筒埴輪の編年[(1)]に基づき編年を試みた。

1、森将軍塚古墳　　更埴市大字森　前方後円墳（全長約100m）

昭和40・42・43年の調査[(2)]以後、昭和56年から古墳の保存整備事業[(3)]によって全面発掘調査が実施されている。埴輪は、樹立原位置を保つ出土例は少ないが総重量3,000kgにもおよぶ埴輪片が出土しているほかに、古墳を取りまく12基の埴輪棺からも出土している。器種には、円筒・壺形・朝顔形埴輪をはじめ、特殊器台形埴輪の流れを汲むもの、家形あるいは囲形埴輪と考えられる方形を呈する形象埴輪があるが、復元されていないので詳細は未だ不明である。

円筒埴輪の特徴　①外面２次調整は、タテ・ナナメハケ調整が施されている。②透孔は、三角形のものが千鳥に多数穿たれている。巴形のものが極一部あるほかに、全く透孔の穿たれないものもある。③凸帯は、突出度が強くその製作にあたっては『善光寺平型埴輪』[(4)]と提唱されている擬口縁状に造りだされるものがある。条数は、３条が基本である。④黒斑がある。⑤個体毎に形状が異なり、口径40cm、器高80cmと大型である。

こうした特徴から川西編年Ⅰ期に相当するものと考えられる。

2、川柳将軍塚古墳　　長野市篠ノ井　前方後円墳（全長93m）

昭和４年に刊行された『川柳将軍塚の研究』[(5)]において「此の埴輪には厚薄二種の作を見る。」と紹介されているのみである。表採資料に少量の円筒埴輪片[(6)]があるのみで、詳細は不明である。

表採された円筒埴輪の特徴　①外面２次調整は、タテ・ナナメハケ調整が施されている。②凸帯は、断面台形の貼り付け凸帯である。③黒斑がある。④器厚は、0.8cmと薄手である。

埴輪棺の特徴　①外面２次調査は、タテ・ナナメハケ調整が施されている。②透孔は、大きな三角形のものが２孔穿たれている。③凸帯は、突出度が強く擬口縁状に造りだされたものと考えられる。条数は２条である。④黒斑がある。⑤形状が楕円形を呈しており、口径38×48cm、器高80cmと大型である。

こうした特徴から、川柳将軍塚古墳前方部付近で発見された埴輪棺は、川西編年II期に相当するものと考えられる。本埴輪棺が、川柳将軍塚古墳の陪塚と考えるとすれば、川柳将軍塚古墳の円筒埴輪は、本埴輪棺より古くⅠ～II期相当とするのが妥当と考えられる。

3、倉科将軍塚古墳　　更埴市大字倉科　前方後円墳（全長73m）

昭和59年更埴市史編纂事業の一環として、前方部南側くびれ部付近の部分的な発掘調査が行われた。出土した埴輪片は、器面が荒れた小破片のみで詳細は知り得ない。かつて、水鳥・人物等の形象埴輪が出土したとのことである[(7)]。調査でも扁平な板状の埴輪片が出土しており、形象埴輪の存在を知る。

円筒埴輪の特徴　①外面２次調整は、タテハケのほかにB種ヨコハケが施されている。②透孔は、方形と円形がある。③凸帯は、断面台形ないし三角形を呈した貼り付け凸帯である。④黒斑がある。

B種ヨコハケがあることから、川西編年III期に相当するものと考えられる。

4、森2号墳　　更埴市大字森　円墳（径20m）

昭和43年のトレンチ調査[8]後、昭和61年に再び全面発掘調査が実施され、古墳の全容が明らかにされた。埴輪は、墳頂及び、裾部では0.8～2.3m間隔に円筒・朝顔形埴輪が樹立されていたが、形象埴輪はない。

円筒埴輪の特徴　①外面2次調整は、一部のものにタテハケ調整があるものの、タテハケ1次調整のみのものが多い。②透孔は、方形のものが多く、わずかに三角形のものがある。③凸帯は、断面台形及び凸帯側面を丸くしたものがあり、全て貼り付け凸帯である。条数は2条である。④黒斑がある。⑤個体毎に形状が異なり、口径23～32cm、器高45cm～58cmと大きさにもばらつきがある。

調査者の岡林孝作氏も説く[9]ように古い様相ではあるが、2次調整の省略がみられること、TK73～TK216型式併行の須恵器が出土していることなどから、川西編年III期に相当するものとするのが妥当と考えられる。

5、越将軍塚古墳　　長野市篠ノ井　円墳（径33m）

昭和53年に行われた発掘調査[10]によって、埴輪片が墳丘及び周湟内より出土している。しかし、その出土量は、部分的なトレンチ調整ではあったが少ないもので、器種等も詳細は不明である。

円筒埴輪の特徴　①外面2次調整は、タテハケ調整が施されるものがあるが、ナデ調整ないし省略されている。②透孔は、方形のものがある。③凸帯は、上側に大きく突出する貼り付け凸帯がある。④黒斑がある。

タテハケ1次調整のみのものがあること、方形の透孔があることなどは森2号墳例に類似しており、同様に川西編年III期に相当するものと考えられる。

6、長礼山2号墳　　長野市松代　円墳（径16.6m）

昭和49年に発掘調査[11]が行われ、円筒・朝顔埴輪と共に家形・楯形埴輪が出土している。また、人物・水鳥・動物を形どった土偶状の土製品も出土している。

円筒埴輪の特徴　①外面2次調査は、タテハケ・B種ヨコハケが施されている。②透孔は、方形と円形がある。破片の中には、凸帯をはさんで両者の透孔をもつものがある。③凸帯は、断面M字形のものと台形を呈するものがある。④黒斑がある。⑤口径15.6～44cm、底径19.4～37.8cmを測り大小2種類の円筒埴輪の存在が考えられる。

こうした特徴から、川西編年III期に相当するものと考えられる。

7、四ツ屋遺跡　　長野市松代　祭祀遺構（？）

昭和35・47年の調査によって直径20mの周溝と共に埴輪列の一部が検出されているが、その詳細は不明なところも多く、調査者は、「古墳ではなく、特殊な祭祀遺構ではないかと考えるに至った。」[12]と報告しているものである。また埴輪列の内側から、土師器の高坏・甕・須恵器の把手付坩（TK216～208型式併行）が出土したこと、さらに鶏の頭部のみの形象埴輪が採集されたことも報じている。

円筒埴輪の特徴　①外面2次調整は、B・C種ヨコハケが施されている。まれにA種ヨコハケと思われるものがある。②透孔は、円形が多いが、縦長の長方形を呈するものもある。また、三角形のものもあったとのことであるが、確認できなかった。③凸帯は、断面台形状である。④明瞭な黒斑が認められるが、窖窯焼成とも考えられる程焼成は良い。⑤底径は、21～24cmである。

ヨコハケが多用され、C種ヨコハケがみられることから、川西編年IV期に相当するものと考えられる。

8、腰村1号墳　　長野市篠ノ井　前方後円墳（全長43m）

本古墳は、発掘調査が行われておらず詳細は不明である。昭和53年長野県史編纂事業の一環で墳丘測量が実施された。その折表採されていた円筒埴輪片についても詳しく調査された。(13)

円筒埴輪の特徴　①外面調整は、タテハケ1次調整のみである。②透孔は、円形である。③凸帯は、低いM字形である。④黒斑はない。⑤底部調整はない。

調査者は、こうした特徴から川西編年Ⅴ期の古相に相当するものと位置づけている。

以上善光寺平南部地域の円筒埴輪の特徴を紹介し、川西編年に基づき編年を試みてみたが、III・IV期相当としたものに多くの問題が残る結果となった。なお、本報告書で紹介した土口将軍塚古墳の円筒埴輪は、川西編年III期に相当するものと考えられる。

III期としたものの中で、外面調整にヨコハケを施す倉科将軍塚古墳・長礼山2号墳と、タテハケ1次調整を主体とする森2号墳・越将軍塚古墳との前後関係は不明である。前者の透孔は円形・方形であるのに対し、後者は方形・三角形でありより後者のものが古く位置づけられるのであるが、後者の場合2次調整の省略とするならば、ヨコハケによる2次調整を施す前者を古く考えるのが妥当である。現段階では、一概にこれら埴輪について前後関係を決しがたい。また、IV期とした四ツ屋遺跡のものは、B・C種ヨコハケを多用しており、III期・IV期を通して外面調整のあり方に問題は残る。

川西編年におけるIII期とIV期の大きな違いは、焼成技法の変化とされ黒斑の有無により分けられているが、善光寺平南部地域では腰村1号墳を除き全てに黒斑が認められる。C種ヨコハケが施されていることからIV期と考えた四ツ屋遺跡は、黒斑の有無からするとIII期に位置づけるのが妥当と考えられるが問題も残る。しかし、こうしたことから善光寺平南部地域では、黒斑は須恵器が導入された後（5世紀後半）までも残っており、川西編年と大きく異なるものである。

III期・IV期相当とした円筒埴輪の様相をはじめ、III・IV期の区分・年代等今後解明しなければならない課題は大きい。

（矢島宏雄）

註

（1）　川西宏幸　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻2号　1978年

（2）　更埴市教育委員会　『長野県森将軍塚古墳』　1973年

（3）　更埴市教育委員会　『森将軍塚古墳―保存整備事業第1～6年次発掘調査概報―』　1981～1987年

（4）　立木　修　「円筒埴輪の製作技法」『古代文化』26巻8号　1974年

（5）　森本六爾　『川柳村将軍塚の研究』　1929年

（6）　矢島宏雄　「善光寺平の埴輪」『第6回三県シンポジウム埴輪の変遷』　1985年

（7）　米山一政　「更埴地方の古墳」『更級埴科地方誌』2巻　1978年

（8）　註（2）に同じ

（9）　更埴市教育委員会　『森将軍塚古墳―保存整備事業第6次発掘調査概報―』　1987年

(10)　矢口忠良　「越将軍塚古墳」『長野県史考古資料編』全1巻(2)　1982年

(11)　長野県教育委員会　『長野市の埋蔵文化財』第10集　1981年

(12)　森嶋　稔　「清野四ツ屋遺跡」『更級埴科地方誌』2巻　1978年

(13)　高崎光司他　「善光寺平南部における古墳の実測調査」『信濃』31巻12号　1979年

4　叩きの埴輪

（1）はじめに

1955年に大森信英氏が茨城県権現山古墳の埴輪について報告したもの[1]が、叩きの埴輪研究の皮切りであった。当時大森氏の報告はあまり問題視されなかったが、その後岩崎卓也氏等が土口将軍塚古墳の叩きの埴輪に着目したことにより、権現山古墳の埴輪が見直されるようになった。1974年乾芳宏氏等によって埼玉県生野山将軍塚古墳の叩きの埴輪が報告[2]され、東日本において叩きの埴輪が広範囲に分布すると想定されるようになった。1986年には佐藤好司氏によって埼玉県金鑽神社古墳、公卿塚古墳の叩きの埴輪についての報告[3]がなされている。

これら東日本の叩きの埴輪についての報告では、叩き工具の種類が全て格子目であることから、格子叩き＝初期須恵器の技法＝須恵器製作技法の導入、という考え方が一般になされていた。それならばどのようにして須恵器製作技法が流入したのかが問われるようになり、1985年に木下亘氏は、土口将軍塚古墳に近隣している森将軍塚古墳周辺において初期須恵器が出土していることなどから、須恵器工人による埴輪生産への関与を想定[4]している。前述の佐藤氏はその論考で「東日本（長野・茨城・埼玉）の格子叩きをもつ埴輪の製作は、叩きをもって須恵器技法の影響をうけたとする可能性があるが、焼成においては朝鮮半島系軟質土器の製作技法の影響をうけた可能性が高い。」と述べている。また東日本各地域の首長系列をたどり、叩きの埴輪は「ごく限られた時期の首長墓にのみ採用されたものと推定」している。1987年に酒井清治氏も埴輪の叩き技法が「朝鮮半島系軟質土器と関連があると想定[5]」しており、さらに格子叩きの埴輪に須恵質のものがないことについて、「今後検討すべき材料」だとしている。

以上東日本（中部・関東）における叩きの埴輪について、研究の流れを述べてきた。一方西日本（北陸・東海以西）では、叩きという成形技法よりも須恵器的な焼成技法の須恵質埴輪に注目することから、叩きの埴輪の研究が始まっている。

1966年平野和男氏は、須恵器的な焼成の埴輪を「硬質埴輪」の名で紹介している。追って翌1967年には山村宏氏等がそれを土師質の埴輪と区別して「須恵質埴輪」と呼称するようになった[6]。ここでは埴輪の焼成に窖窯が導入されることにのみ触れており、東日本の叩きの埴輪とは紹介の動機を全く異にしている。

1977年川西宏幸氏は須恵質埴輪の焼成方法と成形技法の両者について触れ、タタキとC種ヨコハケを焼成とともに須恵器の製作技法と結びつけて考えている[7]。これによって、西日本と東日本の叩きの埴輪研究の接点が初めて生じたのである。また川西氏は和歌山県紀ノ川下流北岸地域で初期須恵器が出土することと、近隣の大谷古墳から叩きの埴輪が出土することを併せて考え、須恵器工人と埴輪工人との関連を考えるうえで重要だとしている。後に坂靖氏も和歌山県木ノ本釜山遺跡からの叩きの埴輪出土に際して、川西氏の考え方を支持している[8]。1984年関川尚功氏は畿内の埴輪窯において埴輪と初期須恵器との併焼例が少なくないことについて、古墳の造営を機に集められた多方面にわたる工人集団のなかで、須恵器工人と埴輪工人が技術交流を行ったのではないか[9]と述べている。

叩きの埴輪の出土は県下では土口将軍塚古墳のみであり、全国でも管見し得たのは他に42例にとどまる。

（2）叩きの埴輪の系譜（表11）

叩きの埴輪は、東日本（中部･関東）ではほぼ5世紀中頃のみに集中して出土している。一方西日本（北陸・東海以西）では、叩きの埴輪の初現である大阪府淡輪の西陵・宇度墓・西小山の3古墳の時期が、絶対年代として東日本の叩きの埴輪をもつ古墳と大体同じ時期の5世紀中頃であり、その後6世紀にも引き続いて出土している。5世紀中頃というのは、川西氏によれば畿内において埴輪の焼成に、須恵器の技法である窖窯焼成技法が取り入れられる時期[10]である。西日本で淡輪の3古墳以降の時期に出土する埴輪は須恵質であるが、東日本で出土している叩きの埴輪は土師質である。

叩きの埴輪は径11mの円墳から長さ210mの前方後円墳に至るまでの出土をみているが､刷毛目をもつ埴輪のように広範囲にわたって分布せず、狭い範囲から集中して出土する傾向がある。しかし叩きの埴輪は未報告のものがあるようで、他の地域からも出土する可能性がある。

叩きの埴輪が、出土した埴輪の全てを占める古墳は未だ確認されていない。叩き以外の調整としては、ナデ・ケズリ・タテハケ・B種ヨコハケ・C種ヨコハケがある。ハケのあとタタキを施す（7例）よりも、タタキのあとにナデやハケを施す(12例)方が多い。またタタキのみ、ハケのみの調整と、タタキとハケの両方を組み合わせた調整がある。

叩きは器壁の外面調整だけでなく、底部調整（14例）や凸帯製作（8例）にも用いられている。叩きによる底部調整は、畿内の埴輪によくみられる底部調整技法の、板状工具の押圧によるものと同じ意図であり、また凸帯製作時の叩きも板状工具による押圧技法の範疇に入るもので、外面全体に施す叩きとは混同しないほうがよいと思われる。

格子叩きの埴輪は東日本の土師質のものだけではなく、愛媛県上難波南10号墳・三島神社古墳から須恵質の埴輪が出土している。しかしこれらには底部調整として叩きが施されており、東日本の叩きの埴輪との直接の関連性はうすい。

叩きの埴輪には有黒斑と無黒斑、土師質と須恵質のものがある。埴輪の黒斑について最初に着目した西口寿生氏と川西氏は、黒斑が埴輪の焼成技法を考えるうえで極めて重要なポイントだとしている[11]。京都府寺戸大塚古墳出土の埴輪を例にあげ、円筒埴輪の黒斑が「外面の一方とその反対方向の外面とに、縦に長くつく」ものだと述べている。しかし黒斑の付着例は必ずしも一様ではなく、長野県更埴市森将軍塚古墳の円筒埴輪のように「基底部および口縁部の内面もしくは外面をめぐるように付着」[12]したり、斑状に付着するものもある。

西日本で出土している叩きの埴輪はほとんどが須恵質で無黒斑だが、土師質で無黒斑のもの[13]や土師質と須恵質両方の埴輪が出土している例[14]がある。叩きを持たない埴輪のうち、ひとつの古墳の中で須恵質埴輪と有黒斑の埴輪が共伴する例[15]もあるので、黒斑の有無だけで焼成方法を推定するのは尚早かもしれない。また窖窯焼成で黒斑が生じないとすれば、須恵質埴輪と有黒斑の埴輪が伴う古墳の造営に際しては、焼成技法が異なる2ケ所以上の工人集団から埴輪を供給したことになってしまうだろう。焼きむらによって生ずるとされる黒斑は、窖窯焼成の際の焼きむらによって生ずることはないのだろうかと疑問が残る。

番号	所在地	名称	遺跡の性格	規模(m)	時期	外面 叩きの種類
1	長野県 更埴市土口・長野市松代町岩野	土口将軍塚古墳	前方後円墳	70	5世紀中葉	平行・格子
2	茨城県 那珂郡東海村大字村松字権現山	権現山古墳	前方後円墳	90	5世紀第III~IV	格子
3	埼玉県 児玉郡児玉町入浅見	金鑽神社古墳	円墳	67	5世紀第III	格子
4	〃 児玉郡児玉町	生野山将軍塚古墳	円墳	60	5世紀第III	格子
5	〃 本庄市久下塚	公卿塚古墳	円墳	65	5世紀中葉	格子
6	福井県 遠敷郡上中町日笠	上船塚古墳	前方後円墳	70	6世紀前半	平行
7	〃 〃 天徳寺	十善の森古墳	前方後円墳	67	6世紀前葉	平行
8	〃 三方郡美浜町佐田	帝釈寺1号墳	(古墳)	—	?	平行
9	〃 〃 郷市	獅子塚古墳	前方後円墳	33	6世紀第II	平行
10	〃 〃 興道寺	興道寺11号墳	円墳	?	?	平行
11	〃 〃 〃	興道寺窯	須恵器窯	—	6世紀前葉	平行
12	石川県 加賀市二子塚町	二子塚東田10号墳	前方後円墳	?	?	平行
13	〃 小松市矢田町通称借屋	借屋4号墳	円墳	(20)	6世紀前葉	平行
14	〃 〃 〃	借屋7号墳ないし8号墳	前方後円墳	—	(5世紀後半)	平行
15	〃 〃 今江町	御幸塚古墳	前方後円墳	?	(6世紀前葉)	平行
16	〃 〃 小梨	豆岡山窯	埴輪窯	—	?	平行
17	〃 〃 押水町二ツ屋	大海川川口遺跡	祭祀	—	?	?
18	静岡県 引佐郡細江町	中平古墳	円墳	11	6世紀中葉	平行、擬似格子
19	〃 浜松市都田町中津郷ケ平	郷ケ平6号墳	円墳	14	6世紀中葉	擬似格子(平行)
20	〃 小笠郡菊川町	高田原古墳	(古墳)	?	6世紀中葉	擬似格子
21	〃 〃 大東町大井	星川古窯	古窯	—	6世紀中葉	擬似格子(平行)
22	〃 袋井市岡崎	衛門坂古窯	古窯	—	6世紀中葉	擬似格子(平行)
23	愛知県 宝飯郡御津町	赤坂天王山古墳	(古墳)	?	?	平行
24	〃 名古屋市熱田区白鳥町	白鳥古墳	前方後円墳	(75)	5世紀後葉	(平行)
25	〃 〃 〃 旗屋町	断夫山古墳	前方後円墳	151	6世紀初頭	平行
26	〃 〃 中区	大須二子山古墳	前方後円墳	40	5世紀後葉	(平行)
27	〃 〃 守山区大字守山字東山	守山瓢箪山古墳	前方後円墳	63	6世紀前葉	(平行)
28	〃 〃 〃 大字志段味字中屋敷	勝手塚古墳	帆立貝式前方後円墳	53	5世紀	(平行)
29	〃 春日井市	洲原山古墳	円墳	?	?	(平行)
30	〃 〃	勝川遺跡	(古墳)	—	?	平行
31	〃 尾張旭市	城山古窯	古窯	—	?	平行
32	〃 〃	卓ケ洞古窯	古窯	—	(6世紀前葉)	(平行)
33	奈良県 御所市元町	石光山48号墳	円墳	15	5世紀末	斜格子
34	〃 桜井市	纒向遺跡	?	—	6世紀前半	平行
35	大阪府 藤井寺市林	林1号墳	(旧古墳)	—	?	平行
36	〃 泉南郡岬町淡輪	西陵古墳	前方後円墳	210	5世紀第II	平行
37	〃 〃	宇度墓古墳	前方後円墳	170	5世紀中葉	平行(格子)
38	〃 〃	西小山古墳	円墳	42	5世紀中葉	平行
39	和歌山県 和歌山市大谷	大谷古墳	前方後円墳	70	5世紀末葉	平行
40	〃 〃 木ノ本字釜山	木ノ本釜山遺跡	——	—	(5世紀中葉)	平行
41	愛媛県 北条市上難波	上難波南10号墳	円墳	?	?	格子
42	〃 松山市畑寺町	三島神社古墳	前方後円墳	45	(6世紀前半)	格子
43	宮崎県 宮崎市下北方	下北方1号墳	前方後円墳	110	?	平行

表11 叩きの埴輪出土遺跡の概要

調整 その他	外面調整の順序	叩きの位置	内面調整	焼成	註
ナデ、タテハケ	タタキのちナデ	外面全体	ナデ、ハケ	土師質、有黒斑	
?	?	外面全体	?	?	
タテハケ、ナデ	タタキのちナデ	外面全体	ナデ、ハケ	有黒斑	
?	?	外面	?	?	
ナデ、タテ・ナナメ・Cヨコハケ	タテハケのちタタキ・タタキのちナデ	外面	ハケ、ナデ	有黒斑	
タテ・ナナメハケ	?	底部調整	ハケ、ナデ	?	
タテハケ	?	底部調整	ハケ	無黒斑	
?	?	底部調整	?	?	
タテ・ナナメハケ	?	底部調整	ハケ、ナデ	土師質・須恵質	
?	?	底部調整	?	?	
タテ・ナナメハケ	?	底部、内・外面	ハケ、ナデ、青海波	土師質・須恵質	(17)
?	?	底部調整	?	?	
タテ・Cヨコハケ	タテハケのちタタキ	外面	タテハケ、ナデ	須恵質	
タテ・(Bヨコ)ハケ	?	底部調整	ハケ、ナデ	?	
タテハケ	?	底部調整	?	無黒斑	
?	?	外面	?	?	
?	?	内面	青海波	?	
ナデ、タテ・ナナメ・Cヨコハケ	タタキのちCヨコハケ タタキのちタテハケ	内・外面	青海波、ナデ	土師質・須恵質 無黒斑	
Cヨコハケ	?	内・外面	青海波、ナデ	須恵質	
?	?	(内)・外面	ナデ(青海波)	(須恵質)	(18)
ナデ	2次調整タタキ	内・外面 最下段凸帯より下	青海波、ナデ	須恵質	(19)
ナデ、ヨコハケ	2次調整タタキ	内・外面 最下段凸帯より下	青海波、ナデ	須恵質	(20)
タテ・Cヨコハケ	?	外面	ナデ	須恵質	(21)
タテ・Cヨコハケ	タテハケ後タタキ	外面	ハケ、ナデ	土師質、無黒斑	(22)
タテ・Cヨコハケ	①タテハケ②タタキ③Cヨコハケ	外面第3・4段	ハケ、ナデ	須恵質	(23)
タテ・Cヨコハケ	(1次調整タタキ)	?	ハケ	?	(24)
Cヨコハケ	?	凸帯側面	?	(須恵質)	
?	?	底部調整	?	?	
?	?	凸帯側面	?	?	
?	?	凸帯側面	?	?	(25)
?	?	凸帯側面	?	?	
?	?	?	?	?	
タテ・Cヨコハケ	①タタキ②タテハケ③Cヨコハケ	外面上から2段目	ハケ	?	(26)
?	?	底部調整	?	?	(27)
タテ・Cヨコハケ	①タテハケ②タタキ③ナデ ①タタキ②ハケ ①ハケ②タタキ	基底下半部	ハケ、ナデ	土師質 須恵質	(28)
タテ・B・Cヨコハケ、ナデ	1次調整タタキ	外面、凸帯側面	ナデ、オサエ、ハケ	須恵質 無黒斑	
タテ・Cヨコハケ、ナデ	1次調整タタキ	内・外面、凸帯側面	ナデ、オサエ、青海波	須恵質・無黒斑	
タテ・ナナメ・Cヨコハケ、ナデ	1次調整タタキ	外面、凸帯側面	ナデ、オサエ、ハケ	土師質・須恵質 無黒斑	
タテハケ、ナデ	タタキのちタテハケ	外面、凸帯側面	(ナデ)、オサエ	土師質・須恵質 無黒斑	
タテ・ナナメ・Cヨコハケ	?	外面	?	須恵質	
タテハケ	タテハケのちタタキ タタキのちハケ	外面、凸帯側面 底部調整	オサエ	須恵質	
ナデ	?	底部調整	?	須恵質	
?	?	底部調整	?	須恵質	

( ) は可能性のあるもの・ ? は不明

（3）土口将軍塚古墳の叩きの埴輪

土口将軍塚古墳の叩きの埴輪には平行叩きと格子叩きの2種類の叩き痕跡があり、それぞれ叩いたあとにナデが施されている。平行叩きはナデによりほとんど消されているが、格子叩きのあとのナデは、叩きを消そうとしたとは思えないほどの軽いものである。内面の調整をみてみると、外面からの叩きを押えるための当て具痕が認められない。静岡などで出土している埴輪にみられる青海波文や、円礫・指などで押えた痕、またそれらをナデで消した痕がない。埴輪成形の際の粘土紐の接合痕も、器壁の内外面いずれにおいても消し切れずに残っているものが多い。これらにより土口将軍塚古墳の埴輪の叩きは、弥生土器や土師器の製作技法のように叩きの際に内面に当て具を使わなかった可能性[16]がある。しかし、格子叩きの埴輪の剝れた凸帯下に叩き痕跡が観察できることから、強い叩き締めではないが、埴輪の成形に関わる技法として叩きを用いたと考えたい。

土口将軍塚古墳の埴輪には、全てといっていいほど多くの個体の外面全体にタタキもしくはナデのみが施されており、ハケを用いた個体はほとんどない。わずか、例外的にみられるハケ調整の埴輪には、タタキは共伴していない。

平行叩きと格子叩きは1個体内では共伴しない。それぞれの割合は、発掘調査により平行叩きの方が格子叩きの埴輪より多いことが判明した。叩きの痕跡がなくナデしか観察できないものについては、平行叩きのあとに施された丁寧なナデのために、叩きの痕跡が消されてしまったものが含まれる可能性があり、これらを加えると更に平行叩きの埴輪の個体数が増えることが考えられる。また円筒埴輪の胴部中程に、叩きの刻み痕は残らないものの、板を押し付けたような圧痕とその際にできた稜が残る個体がみられる。畿内の埴輪にみられる板による底部調整と同じような状況を示しており、叩いたあとをナデで消したか、刻みを入れない板による叩き（オサエといった方がいいのか）の痕と考えたい。

平行叩きと格子叩きの埴輪の間には目立った個体差は認められないが、ただ出土位置に違いがみられる。平行叩きの埴輪は中段テラスより、格子叩きの埴輪は後円部墳頂と北側から出土しているのである。

焼成は良好だが土師質で、黒斑が残る。黒斑のつき方は西口氏等のいわれるように「外面の一方とその反対方向の外面とに縦に長くつく」ものが多いが、外面の片側にしかないもの、斑状に付着するものも少なからずみられる。内面や底部、口縁端部に付着することはない。黒斑の付着位置に何らかの規則性があるとすれば、黒斑の成因は野焼きの際の火のまわりの違い、あるいは焼きむら以外に、初原的な窯の存在を考えたい。

（4）まとめ

土口将軍塚古墳の埴輪は叩きをもつものの内面に当て具痕がない。そして叩きの原体に平行と格子の2種類があるのが特徴的である。焼成は野焼きに近い状態で黒斑をもち、須恵器を焼くような窖窯は使用しなかったと考えたい。土口将軍塚古墳のように、出土している埴輪のほとんどに叩き痕跡がある例は他にない。これほど叩き調整を主体として使いながら、須恵器の焼成を取り入れていないのはどういうわけだろうか。土口将軍塚古墳よりやや先行する埴輪が出土する長野県更埴市森2号墳からはTK73、TK216型式の初期須恵器が出土している。これから考えると、土口将軍塚古墳の埴輪製作は須恵器出現以降も須恵器の焼成技法を導入しなかったことになる。調整技法と併せて考えてみるならば、土口将軍塚古墳の埴輪製作にあたり、須恵器の製作技法を直接導入していないことを示す材料

になろう。

叩きの埴輪の出土は、全国で43遺跡であり、その数は埴輪を持つ古墳の数から比べればとても少ないものである。西日本で叩きの埴輪は100m以上の大型古墳からも出土しており、須恵質埴輪の一形態として考えることができるが、東日本の場合は時期も範囲も限定され、埴輪生産の主流にはなり得なかったようである。

川西氏の埴輪編年によれば、III期とIV期の編年のメルクマールのひとつに焼成技法の相違がある。これは言い換えれば須恵器の導入ということであるが、川西氏も述べているように瞬時にして舶来の新しい技法が浸透したと考えるのには無理が生ずる。特に長野県の場合5世紀中葉、もしくは5世紀後半になってもまだ黒斑を有する埴輪が出土するのである。この現象をIII期が5世紀後半まで続くと考えるか、IV期に入っても黒斑が残るのかについては各古墳の詳細な分析が必要になってくるが、少なくとも畿内における川西編年を長野県下出土の埴輪、特に土口将軍塚古墳の埴輪にそのままあてはめることはできないだろう。

時期的に非常に近いと考えられる森2号墳の埴輪の透孔は、主に方形で中央段に2～4孔穿たれる。稀に三角形の透孔もあり、千鳥状に穿たれる。これに対して土口将軍塚古墳の埴輪の透孔は円形が主体であるが方形に近い円形もあり、中央段に向かいあって2孔穿孔される。森2号墳の埴輪は個体毎に形状が異なり、その様相は森将軍塚古墳に系譜が求められるだろう。

土口将軍塚古墳と森2号墳の埴輪を比較してみると、透孔、全体のプロポーションの違いなどから、土口将軍塚古墳の埴輪の方がやや後出的な要素を持っている。森2号墳出土のTK73、TK216型式の須恵器の時期にやや後出する時期のものと考えたい。　　（山根洋子）

本稿を草するにあたり、資料の実見をはじめ関係文献の提供、適切な御指導等を全国の多くの方々にいただきました。関係各位の御名前を記してここに御礼申し上げます。

赤塚次郎　入江文敏　岩崎卓也　宇垣匡雅　加納俊介　木下　亘　塩谷　修　鈴木敏則　関川尚功
高井健司　立木　修　野澤則幸　北條芳隆　増田逸朗　森田久男　（敬称略　多謝）

註

（1）大森信英『常陸国村松村の古代遺跡』村松村教育委員会　1955　　このほかの権現山古墳の報告に茂木雅博ほか『常陸馬頭根窯址』東海村教育委員会　1983　がある。

（2）乾　芳宏ほか「埼玉県生野山将軍塚古墳採集の埴輪片」『考古学ジャーナル』97号　1974

（3）佐藤好司「児玉町金鑽神社古墳」「公卿塚古墳」「埴輪について」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室　1986

（4）木下　亘「更埴市城の内遺跡出土の陶質土器について」『信濃』第37巻第4号　1985
この論考で木下氏は、初期須恵器の甕の体部小破片が出土したと記述されているが、後日発掘調査の結果同一個体の破片が多数出土。口縁部などの形態から平安時代の甕と判明するに至った。

（5）酒井清治「東国の朝鮮半島系土器」『第21回埋蔵文化財研究集会第4回調査研究会　弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』第III分冊－発表要旨・追加資料－　埋蔵文化財研究会・(財)大阪府埋蔵文化財協会　1987

（6）山村　宏ほか「遠江の須恵器生産－伝播現象としての観点で－」『古代学研究』第50号　1967

(7) 川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』第2巻第4号　1977

(8) 坂　　靖「古代の遺構と遺物」『和歌山市木ノ本III遺跡発掘調査現地説明会資料』和歌山市教育委員会 1986　「隣接する車駕ノ古址古墳でも同種の埴輪が表採されることから、同古墳の埴輪が流出したものと推定される。埴輪を整形・調整する際に須恵器の技法（タタキ・C種ヨコハケ）が導入されている。紀ノ川北岸地域には楠見・六十谷（むそた）遺跡など古い須恵器の出土する遺跡がある一方、大谷古墳でも叩き技法をもつ埴輪があり、須恵器工人と埴輪工人との関連性を考えるうえで極めて重要である。」

(9) 関川尚功「奈良県下出土の初期須恵器」『橿原考古学研究所紀要　考古學論考』第10冊　1984

(10) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号　1978

(11) 川西宏幸「埴輪研究の課題」『史林』第56巻第4号　1973

『奈良国立文化財研究所学報第23冊平城宮発掘調査報告VI　平城京左京一条三坊の調査』1974

(12) 立木　修「円筒埴輪の製作技法－長野県森将軍塚古墳の場合－」『古代文化』第26巻第8号　1974

「焼成の際の黒斑は基底部及び口縁部の内面もしくは外面をめぐるように付着しており、川西氏が論じた以外の焼成方法が本例では存在したのかもしれない。」

(13) 野澤則幸「遺物　古墳時代・埴輪」『熱田区・白鳥古墳－法持寺改築に伴う発掘調査の概要－』名古屋市教育委員会　1985

(14) 樋口隆康ほか『大谷古墳』1959

藤永正明「西小山古墳」『大阪府文化財調査概要』『淡輪遺跡発掘調査概要・III』大阪府教育委員会 1981

西小山古墳の報告はこのほかに『西小山古墳現地説明会資料』大阪府教育委員会 1981　がある。

辰巳和弘ほか「静岡県引佐郡細江町における古墳時代資料」『古代学研究』第110号　1986

入江文敏「興道寺窯」『福井県史』資料編第13巻考古－本文編－　1986

(15) 春成秀爾「地方史の資料としてのさまざまな遺物　埴輪」『考古資料の見方＜遺物編＞』柏書房　1977

野上丈助ほか『大阪府立泉北考古資料館改修工事完成記念特別展　大阪府の埴輪』　1982

(16) 須藤　隆ほか「遺物　土器」『奈良国立文化財研究所学報第39冊平城宮発掘調査報告X　古墳時代Ⅰ』1980

PP.17～18　「須恵器のタタキ技法は内面を当て道具で押え、外面から叩き板で叩きつけるもので、器壁を叩き締め延展させる機能を果たしている。それに対し弥生式土器とその系譜上にある庄内式土器にみられるタタキ技法では、おそらく内面からの道具は用いられていなかったと考えられ、成形時に器体に生じた歪みや器面の凹凸を平滑化することを目的にしていたと推測される。またそのための技法としてはハケメ調整やケズリ調整に比べるとすぐれて有効な方法であると思われる。」

(17) 入江文敏氏によれば「獅子塚古墳造営を直接の契機として開窯」したものである。須恵器と埴輪兼用窯。

(18) 浜松市博物館の鈴木敏則氏の御教示による。「星川古窯からの供給先と考えられる。」

(19) 鈴木敏則「星川古窯跡出土遺物」『静岡県考古学研究』13　1982

(20)『袋井市史』通史編　袋井市史編纂委員会　1983

(21) 鈴木敏則氏の御教示による。

(22) 名古屋市見晴台考古資料館の野澤則幸氏の御好意で、資料を実見することができた。

(23) 野澤則幸氏の御好意により、資料を実見させていただいた。

(24) 戦後間もなく破壊された。

(25) 赤塚次郎氏によれば「古墳時代の遺物である埴輪片等は、本来近接する古墳に使用されていたものであると推測」できる。

(26)『葛城·石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊　奈良県立橿原考古学研究所編　1976
円筒棺に用いられた埴輪である。(石光山48号墳　埋葬施設２)

(27) 奈良県立橿原考古学研究所の関川尚功氏、木下亘氏の御教示による。

(28)『林遺跡発掘調査概要・III』大阪府教育委員会　1981
PP.25～26「奈良時代以降に削平された径約25mの円墳、もしくは帆立貝式古墳の後円部分である。」

主要参考文献

山村　宏ほか　「遠江の須恵器生産－伝播現象としての観点で－」『古代学研究』第50号　1967

川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』第２巻第４号　1977

川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号　1978

『探訪日本の古墳』東日本編　有斐閣　1981

古川　登「越前及び加賀における６世紀代の埴輪について」『北陸の考古学』第26号　1983

古川　登「福井県吉田郡松岡町泰遠寺山古墳の埴輪について」『福井考古学会会誌』第２号　1984

赤塚次郎「尾張としてのはにわ製作」『考古学の広場』第１号　1983

赤塚次郎「文字が刻まれた埴輪」『埋蔵文化財発掘調査年報III』愛知県教育サービスセンター　1985

森　　毅「愛媛県における埴輪研究の現状と課題」『遺跡』第26号　1984

『第５回三県シンポジウム　古墳出現期の地域性』資料　千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会・北武蔵古代文化研究会　1984

『第６回三県シンポジウム　埴輪の変遷－普遍性と地域性－』資料　千曲川水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会・北武蔵古代文化研究会　1985

『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室　1986

入江文敏「若狭地方における首長墓の動態－主体部·副葬品の分析を通して－」『福井県史』資料編第13巻考古－本文編－　1986

5　土口将軍塚古墳出土土師器の編年的位置

後円部墳頂から出土した土師器は、高坏を中心に推定40個体を数え、埋葬直後の埋葬施設上部での祭祀に伴う遺物として考えられた。ただし、出土土器の大多数が、小破片であり、盗掘により攪乱をも受けているため、その型式学的な検討とともに、出土状況の検証にも不充分な点があることは否めない。その一括性と、埋葬施設との同時代性については、可能性が提示されるに留まるものであるが、その可能性を前提として、出土土師器のうち比較的形態の明確となった高坏を取り上げて、その編年的位置付けを試みてみたい。

（1）出土高坏標準型式の設定

前章において、高坏をA・B・Cの3型式に分類した。このうち、最も遺存状況の良好なA型(図35・44－9）と、個体数が多くなおかつ各個体間に形態的共通要素が強いB型（図35・44－11・15・30・31）をもって、分析における標準型式としたい。以下、前者を土口A型、後者を土口B型とする。なおB型は、全形を示す個体が存在しないため、Bb型について各部位ごとの破片を図上で組み合わせた想定図を作成して示した。

土口A型、土口B型ともに、関東地方における「和泉式」高坏と共通する形態を呈しており、その年代が古墳時代 3期区分による中期に相当することは異論のないところであろう。B型は、形態と成形の面において特殊性が認められ、祭祀用に生産された「仮器」としての性格を有する可能性を前章で指摘しておいたが、基本的な形態的要素は、一般性に基づいているものと判断した。A型に関しては、その特殊性が考慮されるものではない。

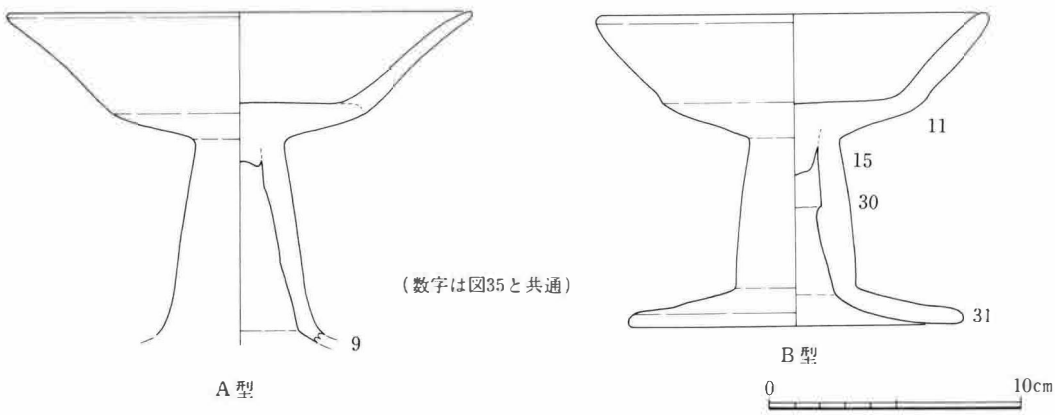


図44　土口将軍塚古墳出土の高坏標準型式（1：3）

（2）比較型式の抽出

標準型式の編年的位置の分析は、他遺跡出土の高坏との比較を通して、その型式学的変遷のなかに標準型式を組み入れる操作による。比較資料となる型式の抽出においては、時間的には古墳時代中期を中心とし、地域的には標準資料と直接的な関係を設定できる善光寺平に対象を限定する。また、型式学的変遷を理解するためには、共伴遺物による年代観も大きな比重を占めるため、共伴性を検証しうる高坏以外の器種、それも年代決定の指標となりうる器種を含む資料を選択するものとする。

長野市篠ノ井遺跡群大規模自転車道地点出土資料（図45－１～13）

各遺構出土土器の中から、高坏と小形精製土器を中心とした共伴器種を抽出した。（長野市教委1980、6・12－21号住、２・７・10－26号住、13－29号住、３・５・11－30号住、１・４・９－方形周溝墓）

高坏（１～４）

坏部には、口縁部が直線的に外方に伸びるもの（１）と、端部において外反するもの（２）との２形態が存在する。脚部は柱状の筒部に大きく開いた裾部を取り付けた形態であり（４）、裾部に３孔の透かしを有する小形品（３）が含まれる。坏部との接合部は中実となっている。

小形器台（５～７）

受部中央に円孔を貫通させるもの（５・６）と、孔を持たないもの（７）が存在する。前者は、裾広がりの脚部に４孔の透かしを有する（６）。後者は、３孔の透かしにより、脚部上半が柱状の伸びを示す。

小形丸底鉢（８～10）

口縁部が体高を大きく上回るもの（８）と、口縁部と体高とがほぼ等しいもの（９～10）が存在する。

前者は、口縁部内面にハケメを残し、外面の調整も丁寧ではない。

直口壺（12）

直線的に外方へ伸びた口縁部が端部においてやや外反し、胴部はほぼ球形を呈する。

Ｓ字状口縁台付甕（13）

頸部下は板状工具による削りに近いナデにより調整され、内面には指頭の圧痕が認められる。

編年的位置

篠ノ井型高坏の形態には、布留式の中葉段階に共通する要素が認められ、小形器台、小形丸底鉢などの共伴遺物もほぼ同時期の様相を示す。Ｓ字状口縁台付甕は、ハケメ調整を簡略化したものであり、同系列の最末期に置かれる。以上の様相は、当地における編年の中では善光寺平第１様式新段階に相当し、他地域との並行関係を求めると、畿内では布留２～３式、関東では五領２式に対応できよう。

長野市駒沢新町遺跡出土資料（図45－14～19）

祭祀遺構としての１号址出土資料中から、典型的な高坏と、特徴的な共伴土師器とを抽出した。なお、１号址からは、土師器500個体以上が検出されており、その過半数が高坏と小形丸底壺により占められている。図示したもの以外に型式設定できる高坏が含まれる点は否定されない。また、甕については、出土土師器中２点のみが確認されている。（笹沢1982）

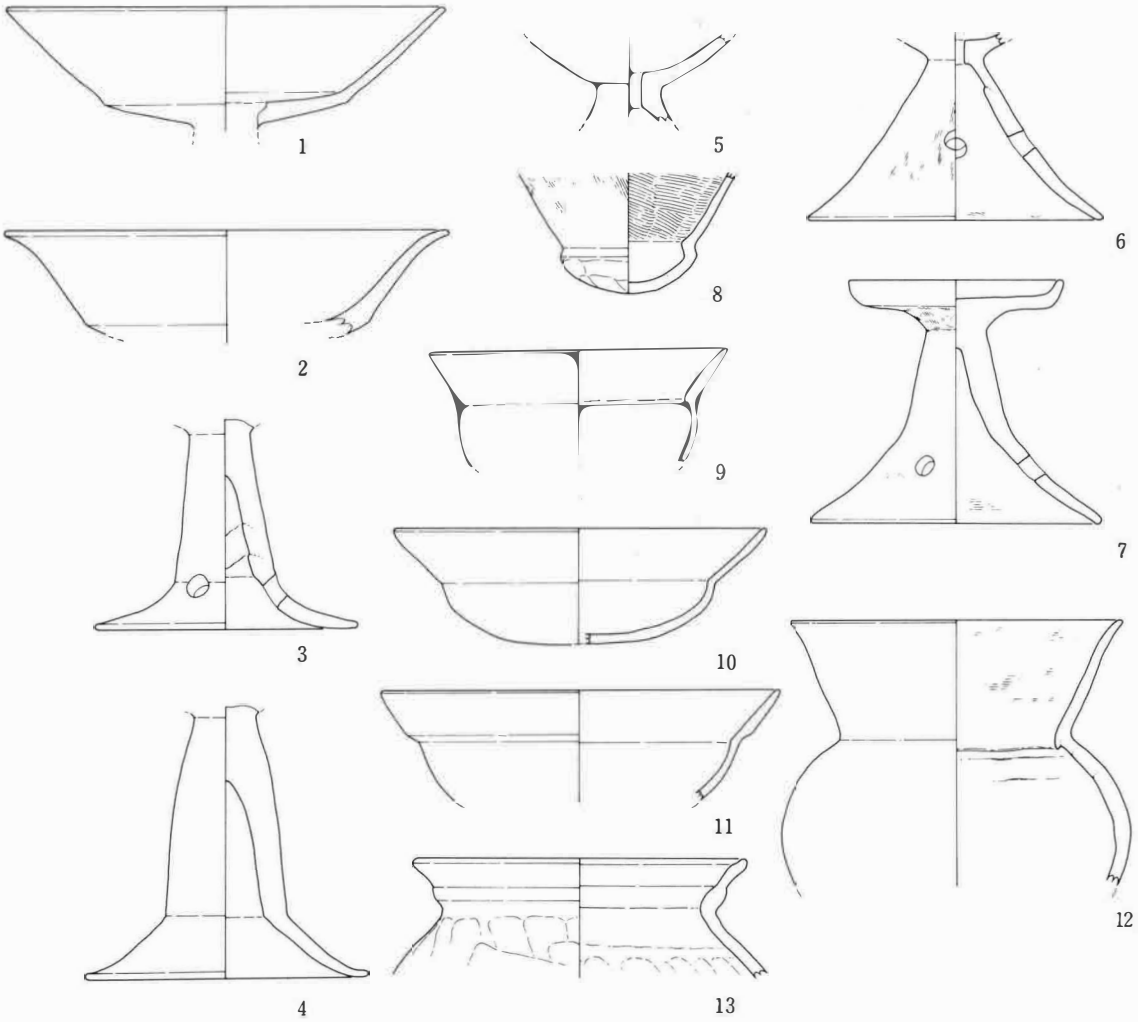
高坏（14・15）

坏部は、口縁部が外反ぎみに大きく開き、坏底部に明瞭な稜線を有する。脚部は、柱状に発達した中空の筒部に、大きく開いた裾部を取り付けた形態を呈する。脚部に４孔の透かしを有した小形品（14）は特殊な存在であり、他に透かし孔を有する例品はない。

甕（16・17）

口縁部と体高がほぼ等しく、口縁部が有段口縁を呈するもの（16）と、短口縁で、体部に円形刺突文、鋸歯文、格子文により構成される箆描線刻文様を施したもの（17）とが存在する。

篠ノ井遺跡群



駒沢新町遺跡

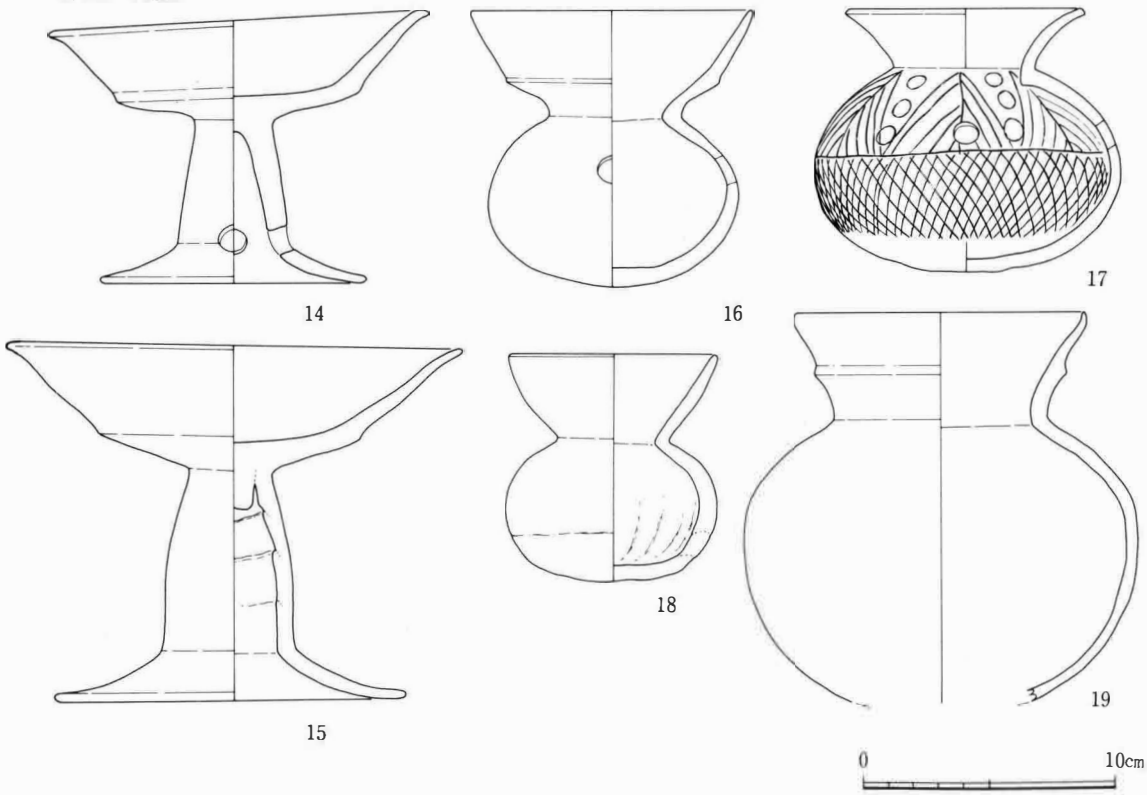


図45　高坏比較型式と共伴資料①（1：3）

小形丸底壺（18）

内弯ぎみに大きく開いた口縁部に、やや扁球形の体部を付したもので、口縁部内面はヨコナデ調整をそのままに残し、外面のヘラミガキも粗雑である。

直口壺（19）

口縁部中位に凸帯状の段を有し、端部において内弯する。胴部はほぼ球形に近い形態を呈する。

編年的位置

駒沢型高坏は、典型的な和泉式の形態ということができ、篠ノ井型に後出することが明らかである。小形丸底壺も、当地において最も盛行した段階に位置付けられ、布留式新段階における同器種の盛行と対応できる。甕、直口壺は、初期須恵器あるいはそれ以前の朝鮮陶質土器の模倣を想定すべきであろう。特に、甕に見られる線刻文の系譜については、笹沢氏が指摘するとおり（笹沢1982）、TK73型式かそれ以前に求められるものであり、陶質土器との関連も注目される。以上の様相は、当地における編年では、善光寺平第２様式古段階に比定されており、小形丸底壺の盛行と小形器台、小形丸底鉢の消滅から、畿内における布留４式に対応できよう。

長野市四ツ屋遺跡出土資料（図46－20・21）

墳丘が未確認ながら、円筒埴輪列の存在から古墳の可能性が指摘される遺構内より出土した資料である。他に、土師器高坏と、器高20cmの大形甕（土師器）が共伴している。（高野1972、小林1976、矢口1982）

高坏（20）

坏部は、内弯しながら外方へ開き、坏底部に凸帯状の段を有する。全体的に、厚手の成形ながら、器面のミガキ調整は丁寧であり、精緻なつくりといえる。

須恵器・把手付埦（21）

黒灰色を呈する優良な焼成であり、内面には自然釉がかかる。上部に渦巻き状の飾りを付けた把手を有し、口縁部は外反しながら内方へ開き、端部はやや丸みを帯びている。体部には２条の凸帯下に流麗な波状文を施している。底部は不定方向のケズリの後ナデ調整し、やや平坦な丸底を呈する。

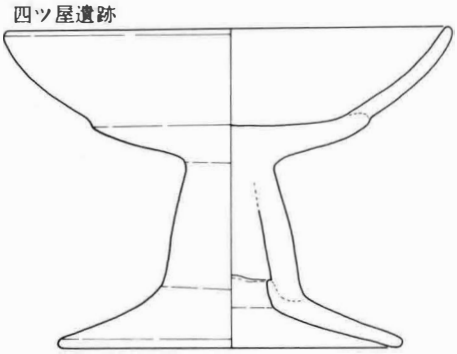
編年的位置

四ツ屋型高坏は、口縁部が内弯する点において駒沢型に後出するものと考えたい。駒沢新町遺跡１号址出土資料中には、口縁部が直線的に外方へ開き坏底部に明瞭な凸帯を有する高坏が存在する。口縁部形態に四ツ屋型の祖型を見ることができるが、脚部は裾広がりの形態をとっている。同種の高坏は、大形で特殊な存在ながら、１型式を形成するものであり、四ツ屋型との関連が予想される。脚部が駒沢型にくらべて短くなる点も、新しい要素として把握され、善光寺平第２様式新段階に相当するものと考えられる。須恵器は、TK216～208型式に盛行した把手付埦の一種と考えられ、口縁端部の形態に古い要素が含まれる。口縁部及び底部の形態は、同器種のなかでは異質であり、渡来品としての可能性も指摘されている（矢口1982）。

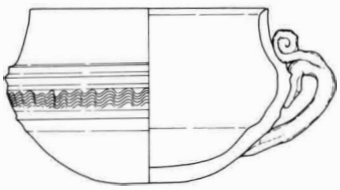
長野市浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスＢ地点出土資料（図46－22～26）

４号住居址出土の高坏と須恵器、14号住居址出土の須恵器を抽出した。（長野市教委1986、22･26－４号住居址、23～25－14号住居址）

四ツ屋遺跡

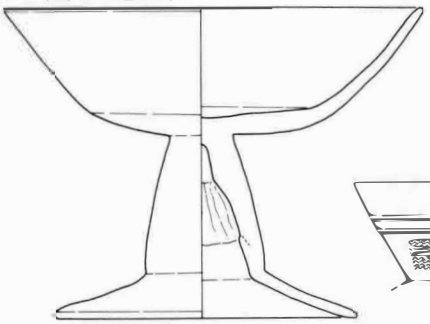


20

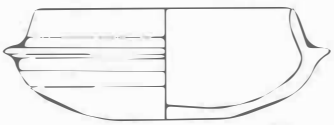


21

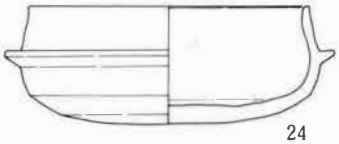
浅川扇状地遺跡群



22

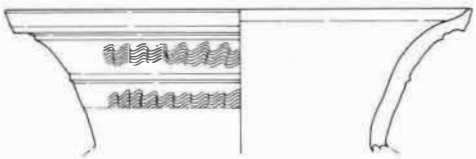


23



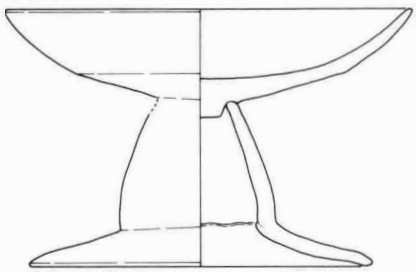
24

25

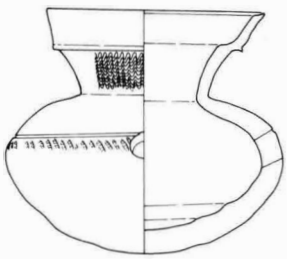


26

森2号墳

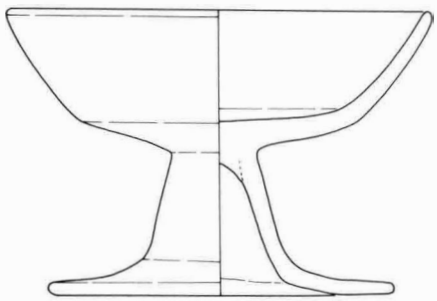


27

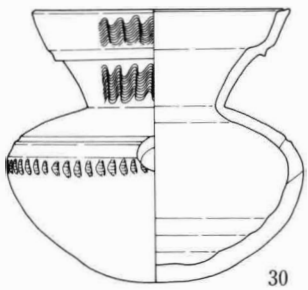


28

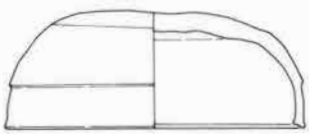
地附山2号墳



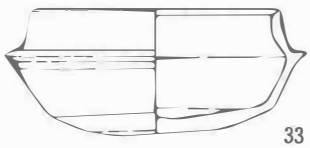
29



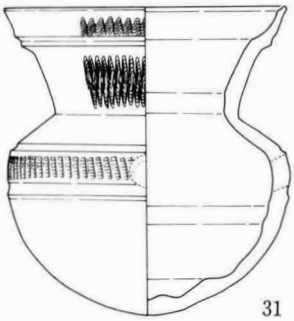
30



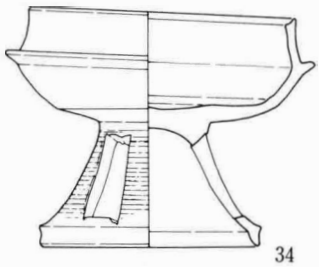
32



33



31



34

図46　高坏比較型式と共伴資料②（1 : 3）

高坏（22）

坏部は、直線的に外方へ開き、坏底部の稜線は不明瞭であり、口縁部への移行は丸みを帯びている。脚部は、円錐に近い柱状の筒部に、大きく開く裾部を取り付けた形態を呈する。

須恵器・蓋坏（23・24）

口縁部は外反ぎみに内方へ開き、端部は丸く仕上げられている。蓋受部は、水平に近くやや上方に伸び、丸く仕上げられている。底部は½から⅔が回転ヘラケズリされる。全体として丁寧な調整により、焼成も優良である。

須恵器・直口壺（25）

優良な焼成による口縁部破片で、中位に鋭い凸帯２条を有する。凸帯下には、細密な波状文が施されている。

須恵器・甕（26）

口縁部破片で、端部内面が凹面を形成する。２条の鋭い凸帯をはさんで、２段の流麗な波状文が施されている。

編年的位置

浅川型高坏は、口縁部が外反せず、坏底部との稜線も不明瞭であることから、坏部の形態は内弯化の傾向を示している。脚部も短小化しており、駒沢型より後出的な要素が強く表われる。共伴する土師器には、小形丸底壺と有段口縁壺が消滅する傾向が認められ、駒沢型に後出する善光寺平第２様式新段階に位置付けられる。須恵器は、蓋坏にTK216型式の特徴が認められ、直口壺もほぼ同時期の所産として考えられる。甕は、口縁部がTK208型式以降の形態を呈するものであり、文様帯を画する凸帯に古い要素を残すといえよう。

更埴市森２号墳出土資料（図46－27・28）

墳裾の埴輪列上部に形成された集石に伴い出土した土器群から、高坏と須恵器を抽出した。高坏は、10個体以上が確認されており、そのほとんどが抽出個体と同型式になる。その他、土師器では、壺、坏、須恵器では、無蓋高坏などが共伴するものである。また、森２号墳からは、TK73～216型式並行の古い段階の須恵器の一群が出土している。それらは墳丘上からの流れ込みと判断されており、直接的には抽出資料に共伴しないものとされるため、ここでは除外する。（更埴市教委1986年調査）

高坏（27）

口縁部は、内弯ぎみに外方へ開き、坏底部との稜は不明瞭である。口縁部が短いため、坏部は浅い形状を呈し、皿形に近い。脚部は、柱状の筒部に大きく開いた裾部が付されるが、筒部下端が大きく膨らみ、脚高に比較して寸詰まりの形態を呈する。

須恵器・𤭯（28）

口縁部に大きく歪をもつ個体であり、口縁端部は斜めに凹面を形成する。口縁屈曲部に１条の凸帯が付され、その下に波状文が施される。体部は扁球形であり、肩部の沈線下に刺突文が施される。

編年的位置

須恵器𤭯は、共伴している無蓋高坏とともに、TK23型式並行に比定されている。森型高坏は、坏部形態が扁平であり、他型式のそれと形態を異にする。ただし、口縁部に内弯化の傾向が顕著であり、脚部も短い形態をとる点に新しい要素が認められ、浅川型に後出すると考えてよいだろう。須恵器の

編年位置を、TK23型式並行に対応させるとすれば、森型高坏は善光寺平第３様式古段階における高坏型式の一つとしてみることができる。

長野市地附山上池ノ平２号墳出土資料（図46－29～34）

墳裾から検出された土師器高坏と、須恵器を抽出した。前者は完形で埋納された状態で検出された土師器10個体の内の１点で、後者は、土師器類と共に破砕された状態で検出された須恵器の一部である。それぞれ地点を異にしての出土であるが、遺棄の時間的隔たりに大差ないものと判断されており、共伴資料として扱う。（長野市教委1986年調査）

高坏（29）

口縁部が内弯ぎみに外方へ開き、坏部との稜は不明瞭である。口縁部の立ち上がりが直に近づくため、坏部は深い形状を呈する。脚部は筒部と裾部の境界が不明瞭であり、高さは坏部高を下回る。

須恵器・𤭯（30・31）

肩のやや張った扁球形の体部によるもの(30)と、肩部に明瞭な稜を有し、頸径を大きくしたもの(31)の２者が存在する。両者とも、口縁部に２段の波状文と、肩部下に刺突文を施している。前者は優良な焼成によるが、後者は軟質で灰白色に近く、低火度の焼成による。

須恵器・蓋坏（32・33）

蓋(32)は器高が高く、丸い形状の天井部½程度を確認ヘラケズリする。口縁部との稜線が不明瞭であり、口縁端部は内傾した凹面を形成する。坏身は、やはり底部回転ヘラケズリが½以下であり、口縁部の立ち上がりは内傾しながら屈曲し、「く」の字状を呈する。両者とも焼成、胎土、成形が粗雑な製品である。

須恵器・高坏（34）

坏部は蓋坏と同様の形態調整に基づいている。短い脚部には、長方形の透かしが３方向に開けられ、やや不明瞭なカキ目が施されている。端部は屈曲して稜を形成するが、丸みをおびて鋭くはない。調整は蓋坏より丁寧であるものの、胎土と焼成は粗雑といえる。

編年的位置

地附山型高坏には、坏部の内弯化が顕著に認められ、脚部も矮小化した形態となる。同傾向は、浅川型においても指摘されたが、それがさらに顕在化した段階のものとして位置付けることができ、善光寺平第３様式古段階に比定される。須恵器では、森２号墳と同一形態の𤭯のほかに、肩部に稜を有した新しい形態の𤭯が伴出している。同形態はTK23型式以降に定型化されたものとされ、TK47型式並行に置かれる可能性がある。高坏はTK23～47型式並行とされる埼玉県稲荷山古墳出土資料に近似している。当資料の方がやや長脚であるものの、編年位置は概ね一致するものと思われる。蓋坏もほぼ同期の型式特徴を示す。

（３）土口型高坏の編年的位置

善光寺平における古墳時代中期の高坏は、布留式の影響下に成立したと思われる篠ノ井型を祖型とし、駒沢型に見られる口縁部外反、長脚形態から、地附山型に至る口縁部内弯、短脚形態へと型式変化することが想定された。ただし、高坏の型式組列が一系でないことを示す四ツ屋型、森型も存在することから、想定した形態の変化を一律のものと考えるには危険であり、他地域との比較も含めて、

複数系列により構成される高坏型式についての再検討が課題として残されている。

現段階において、標準型式として抽出した土口将軍塚古墳出土の高坏の編年的位置について言及するならば、比較型式として抽出した高坏との共通性を問題にするのみである。土口A型は、駒沢型の口縁部形態に近似し、脚部も長脚といえる。坏部の稜線が不明瞭な点は後出的な要素となろう。土口B型は、坏部形態が四ツ屋型と同列に置かれる。口縁部が外反ぎみで、脚部が長い形態をとる点はやや先行的な要素といえる。駒沢型と四ツ屋型とは、共伴資料による相対年代からその先後関係を明らかであり、土口型を両者の中間位置に編年することには無理がない。土口型の共伴遺物に、駒沢型に伴う小形丸底壺が含まれていない点も、その序列に矛盾を来さない。この編年的位置付けを前提とするなら、共伴資料としての須恵器編年が年代決定の重要な要素となる。駒沢型以降と考える四ツ屋型、浅川型には、TK216～208型式、次の段階に置かれる森型、地附山型にはTK23～47型式並行の須恵器が共伴していることから、先行型式としての駒沢型にはTK73型式以前を並行させることが妥当となる。駒沢型に共伴する土師器甕に、TK73型式古段階と対応する篦描線刻文が存在することは、それを肯定しうる手掛かりとなろう。土口型に関しても、出土埴輪の一部に存在する格子叩き技法や、篦描線刻文を関連させれば、TK73型式並行期にさかのぼらせて理解することは否定されるものではない。

TK73型式の暦年代については、5世紀中葉とする説（田辺1981）と5世紀前半にさかのぼらせる説（白石1979）とが対峙し、にわかに決着し難い様相を呈するものであり、須恵器生産の開始にかかわる朝鮮陶質土器との関係にも検討の余地が残された状況にある。本稿においては、両説に対しての立場を明らかにすることなく、その年代観の上限と下限とを引用するにとどめたい。土口型高坏がTK73型式に並行すると考えた場合、白石説に従えば5世紀前半、田辺説に従えば5世紀中葉という実年代が導かれる。

（本稿に引用した土師器及び須恵器の編年は、次の論文による。善光寺平－笹沢1976、布留式－寺沢1986、五領式－大村1982、須恵器－田辺1981　なお、笹沢浩氏、岩崎卓也氏には有益な御指導を賜った。記して感謝申し上げたい。）

（青木和明）

引用参考文献

大村直　1982　「前野町式・五領式の再評価」『神谷原III』
小林秀夫　1976　「長野市四ツ屋遺跡特殊遺構の遺物」『信濃考古』36
笹沢浩　1976　「古墳時代―生活遺跡」『上水内郡誌　歴史編』
笹沢浩　1982　「駒沢新町遺跡」『長野県史考古資料編　全1巻（2）』
白石太一郎　1979　「近畿における古墳の年代」『考古学ジャーナル』164号
高野行栄　1972　「長野県四ツ屋古墳出土の土器」『土師式土器集成　本編2』
田辺昭三　1981　『須恵器大成』
寺沢薫　1986　「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』
長野市教育委員会　1980　『篠ノ井遺跡群―大規模自転車道地点―』
長野市教育委員会　1986　『浅川扇状地遺跡群―牟礼バイパスB～D地点―』
矢口忠良　1982　「四ツ屋遺跡」『長野県史考古資料編　全1巻（2）』

6　土口将軍塚古墳出土の鉄鏃と甲冑について

本古墳出土の鉄鏃は、鏃身部等の形態などから、ａ１～ａ３類、ｂ１・ｂ２類、ｃ類、ｄ１～ｄ４類の10類に細別することが可能であるが、大きくはａ類、ｂ類とした柳葉式鉄鏃、ｃ類とした圭頭斧箭式鉄鏃、ｄ類とした長頸長三角形式鉄鏃に大別することができる。

既に盗掘を受けているため、各形式の構成は、その信用度が低いといわざるをえないが、長頸長三角形式15本、柳葉式10本、圭頭斧箭式１本であり、長頸長三角形式、柳葉式が主体的、圭頭斧箭式が従的なあり方を示しているととらえられよう。

ｄ類とした長頸長三角形式の鉄鏃は、いずれも篦被部の長さが鏃身部長の1.5倍程度の長さを有するもので、定型化した長頸鏃に比較してやや古い様相がうかがわれる。

長野県内において、長頸長三角形式鉄鏃を出土した５世紀から６世紀前半代に比定される古墳としては、中野市林畦２号古墳（小野1972）［図47－10］、飯田市妙前大塚古墳（飯田市教委1972）［図47－11～15］、飯田市新井原12号古墳（今村、小林1983）［図47－23･24］、東筑摩郡本郷村桜ヶ丘古墳（本郷村教委1966）［図47－25～27］等があげられる。しかし、いずれも頸部は完全に長頸化しており 本古墳出土資料よりも明らかに後出的な様相がうかがえる。

また、他地域の様相と比較するならば、長頸鏃の祖形タイプと考えられる大阪府和泉黄金塚古墳西槨出土資料（末永、島田、森1954）［図48－１～４］よりは頸部の長頸化が認められ、明らかに後出的であるが、初期須恵器を出土している大阪府野中古墳（大阪大学文学部国史研究室1976）［図48－５～９］、奈良県新沢千塚139号墳出土の頸部の完全に長頸化したものに比較するならば、やや古相を呈するものととらえられよう。

本古墳出土例のような定型化した長頸鏃への過渡期的な長頸長三角形式の鉄鏃は、福岡県甘木市古寺墳墓群第７号墓（甘木市教委1983）［図48－10～18］に良好な資料が出土している。第７号墓から土器の出土はないが、池の上・古寺墳墓群は、陶質土器、初期須恵器の副葬が顕著に認められる墳墓群であり、鉄鏃の年代観についても、今後注意すべき資料となろう。

次に、ａ類とした柳葉式鉄鏃は、鏃身部が典型的な柳葉状をなさず、直線的な形態を呈している。長野県内において、本古墳出土例より先行する柳葉式鉄鏃には、松本市弘法山古墳（松本市教委1978）［図47－１・２］、更埴市森将軍塚古墳（更埴市教委1973）［図47－５・６］の類銅鏃柳葉式鉄鏃があげられよう。

また本古墳出土のａ類は、鏃身部の長身化、ならびに篦被部もやや長頸化の傾向を示す点特徴的であり、本来篦被部がほとんど存在せぬか、存在しても非常に短いことを特徴とする柳葉式鉄鏃であることを考慮するならば、本古墳出土資料はむしろ長頸化の影響を受けたものであることが想定され、時期的にはｄ類の長頸長三角形式のものと、ほぼ同時期に位置付けうるものと考える。

長野県内において、ａ類と同様の柳葉式鉄鏃を出土した古墳としては、須坂市鎧塚第１号古墳がある（永峯、亀井1959）［図47－16～22］。しかし、鏃身部を欠損しているため不明ではあるが、頸部が完全に長頸化した長頸長三角形式と想定されているものも共伴しており、本古墳例よりは新しい様相を呈しているものと考えておきたい。

ｃ類とした圭頭斧箭式鉄鏃は、本古墳では１例のみの出土であり、また、今のところ長野県内にお

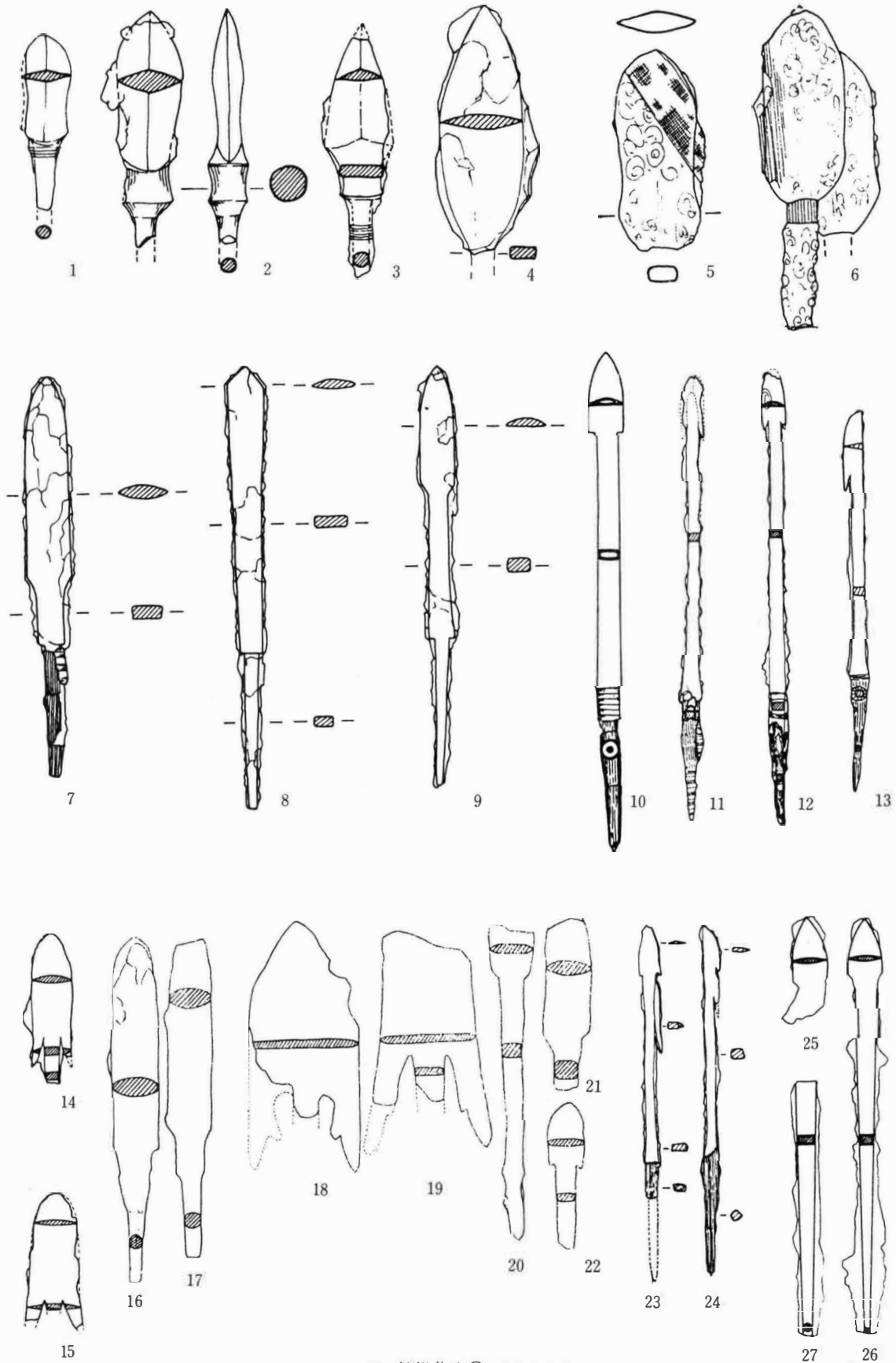


図47　鉄鏃集成①（縮尺不同）

1～4松本市弘法山古墳　　5・6更埴市森将軍塚古墳　　7～9土口将軍塚古墳　　10中野市林畦2号古墳

11～15飯田市妙前大塚古墳　　16～22須坂市鎧塚1号墳　　23・24飯田市新井原12号墳　　25～27本郷村桜ケ丘古墳

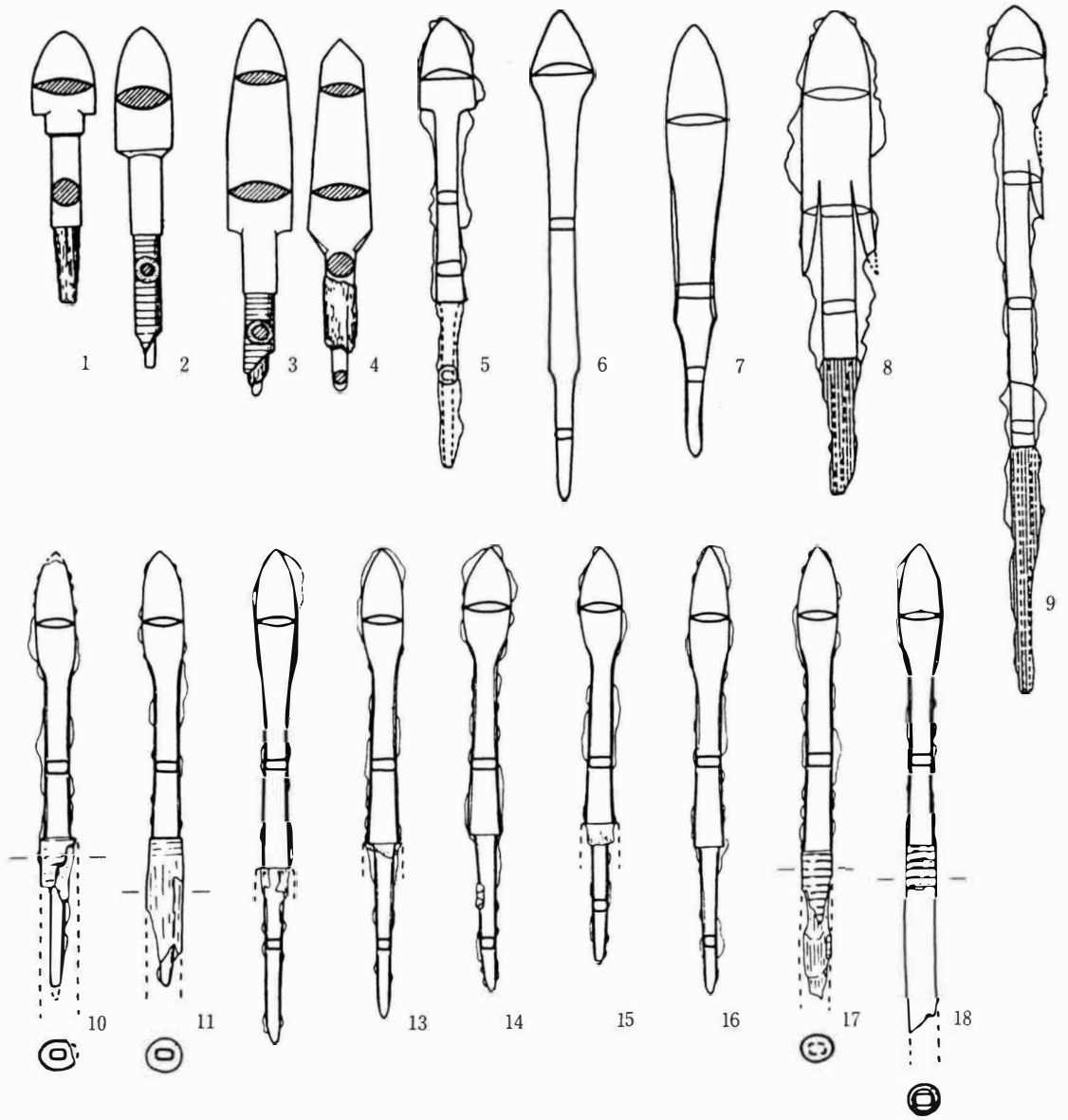


図48　鉄鏃集成②（縮尺不同）

1～4 大阪府和泉黄金塚古墳西槨　　5～9 大阪府野中古墳　　10～18福岡県甘木市古寺墳墓群第7号墓

いても出土例は存在しない。頸部の長頸化ならびに鏃身部幅の狭さなどの点より、やはり前述の二者とほぼ同様の時期に位置付けうるものと考えておきたい。

以上大別した3形態の鉄鏃について述べてきたが、これらは他地域の古墳の年代観より考えるならば、5世紀第1四半期後半～5世紀第2四半期前半頃に比定することが可能かと考えられる。しかし、長野県内における当該期の良好な資料が本古墳を除き存在せぬ現在、5世紀中葉～後葉に比定しうると考えられる林畦第1号、第2号古墳、鎧塚古墳、妙前大塚古墳出土資料よりは明らかに先行する様相が強いという意味において、本古墳の鉄鏃は大きく5世紀前半という年代幅のなかでとらえておきたい。

次に、甲冑について若干述べておきたい。本古墳出土例はいずれも小破片であり、詳細は不明といわざるをえないが、三角板と想定される地板残欠の存在、また、革綴の痕跡が明確に確認できるもの

の存在することより、三角板革綴短甲である可能性が高いことを指摘しておいた。

長野県内においては、中野市七瀬双子塚古墳（土屋1982、小野1953）において革綴部分を残す鉄片の出土が報じられているほか、明確な革綴形式のものは出土していない。三角板革綴式に後続する鋲留式のものでは、中野市林畦1号古墳（小野1953）から三角板鋲留短甲が、飯田市妙前大塚古墳から四方白小札鋲留眉庇付冑が出土している。三角板革綴短甲の盛行期が5世紀代前半であることから、本古墳出土資料が三角板革綴短甲であるならば、さきに述べた鉄鏃の年代観とも合致するものであるといえよう。

尚、鉄鏃の年代観については、杉山秀宏氏の御教示によるところが大きい。記して感謝の意を表したい。

（千野　浩）

引用・参考文献

甘木市教育委員会　1983　『古寺墳墓群II』甘木市文化財調査報告第15集

飯田市教育委員会　1972　『妙前大塚（3号）　古墳発掘調査報告書』

今村善興、小林正春　1983　「新井原12号古墳」『長野県史』考古資料編全1巻（3）

小野勝年　1953　「下高井地方の考古学的調査」『下高井』

更埴市教育委員会　1973　『長野県森将軍塚古墳』更埴市文化財調査報告書第5集

笹沢浩　1985　「信濃」『季刊考古学』第10号

末永雅雄、島田暁、森浩一　1954　『和泉黄金塚古墳』

田中晋作　1985　「副葬品による編年―武器を中心に―」『季刊考古学』第10号

土屋積　1982　「七瀬双子塚古墳」『長野県史』考古資料編全1巻（2）

永峰光一、亀井正道　1959　「長野県須坂市鎧塚古墳の調査」『考古学雑誌』第45巻第1号

本郷村教育委員会　1959　『信濃浅間古墳』

松本市教育委員会　1978　『弘法山古墳　長野県松本市弘法山古墳調査報告』

横山浩一　1953　「長丘村古墳調査」『下高井』

7　雨宮凹地から観た土口将軍塚古墳

1

古代、善光寺平南半の雨宮凹地には1世紀半余に及ぶ世襲王権が存続していたとする推測がある。森将軍塚・倉科将軍塚・土口将軍塚・有明将軍塚古墳など、ここに蝟集している前方後円墳から説かれたことで、昭和33年発表の、ここを国造治処と観た斎藤忠氏の考察[(1)]あたりが皮切りになるだろうか。30年代には屋代城の内遺跡や屋代条里水田の調査があり、40年には森将軍塚古墳の第一次調査、関連して倉科や土口将軍塚古墳の墳形測量が行なわれ、45年には考古学よりする本格的地域研究の嚆矢となった岩崎卓也氏の「古墳時代の遺跡・遺物と郷土社会の変貌」[(2)]が発表されている。

その後、更埴市教育委員会による発掘調査、更埴郡誌の発刊、5次に亙る森将軍塚古墳の保存整備事業に係る調査でこの地域の考古学的な解明は急速に進んだ。そして、この度の、長野・更埴市両教育委員会による土口将軍塚古墳の調査で一応の小括を迎えた。

2

冒頭の推測は4基の前方後円墳の規模・形状・施設から森将軍塚・倉科将軍塚・土口将軍塚・有明山将軍塚古墳へと続く編年に基づいているが、岩崎氏の45年レポートは、その推測を一応は是認しながらも、これにはなお考究を重ねねばならぬ幾多の点のあることを指摘している。その中には土口将軍塚古墳に係る問題もある。

氏は、1世代1古墳で4基の首長墓を縦位置に並べる1説の他に、

2説、森将軍塚―倉科将軍塚┬有明山将軍塚
　　　　　　　　　　　　└土口将軍塚

3説、　　┌有明山将軍塚
　　森将軍塚┼倉科将軍塚
　　　　└土口将軍塚

4説、森将軍塚┬倉科将軍塚―有明山将軍塚
　　　　└土口将軍塚

という、3種類の配列を掲げた。このうち、初代首長が終ると3人の支配者が鼎立する3説は成立し難いだろうが、2説・4説の配列は有り得ることだと発言している。

そして、その場合、土口将軍塚古墳がキー・ストーンになっている。

「直接この地域の平地（雨宮凹地）を俯瞰する位置にはなく、地理的に若干の問題をとどめている。すなわち、北方、千曲川の流域を眺望するによい薬師山の尾根を修飾して築造され」という立地の点から、2説の場合は、「3代目に北方の低地をのぞむ地帯の首長が新たに強力な権力を持つに至り、2首長に分割支配されるとみるか、両古墳の規模の相違からみて支配機構の整備されたある種のすがたを想定することもできよう」。4説の場合では、「土口将軍塚古墳の被葬者の基盤となった土地・集団は、もともと森将軍塚古墳のそれとは別個のもので、むしろ、この地域の2代目首長の段階で大和政権の傘下に入ったとみるべきであろう。」

2説・4説の推測は、単系世襲王権の存在を否定することになり、かかる考察の経緯があって、森・

倉科・土口の3基の将軍塚古墳の周囲、及び、その山麓に形成されている後期の群集墳の存在から、この地域には幾つかの集団が居り、その集団の形成年次を溯ぼらせた場合、「森・倉科・土口の3将軍塚古墳の被葬者は、それぞれ別個の集団の族長だったと考えることも許されるだろう。もし、この考えが認められるなら、首長権はある特定集団内の特定親族に世襲されたのではなく、有力集団(或いは全集団)の間を移動していたと推測できる」こととなり、1説の立場をとっても、「利害をともにする幾つかの農業集団のルーズな連合体がこの地域の古墳時代前期の社会の実体だった」との結論を生み出している。

この結論は、6世紀後半に降るまで150年以上に亙り継続的に作られてきた森将軍塚古墳の墳麓を囲繞している小形埋葬施設の存在[3]で証明されている。もし、森将軍塚古墳から始まる単系世襲王権説に固執していたならば、小形埋葬施設群の説明はつき難い。

3

この問題について、別な観点からの推測はできないものだろうか。

この後、科野国造の入信、7世紀代に下っては国司の赴任があって、中央集権の体制内に組み込まれていくのだが、雨宮凹地に存在し、将軍塚古墳を築きあげた農業集団の末裔は数世紀後の律令体制中に見出し得ないものなのかということである。具体的には律令時代の郷名――埴科郡7郷中のどの郷と結ばれるのかということで、これができ得れば、微弱ながらも一つの例証にはなるだろう。

7世紀代から始まる地方制度の筋は国―郡―里―戸であり、霊亀元(715)年から天平12(740)年までの25年間は国―郡―郷―里―戸。それ以後は国―郡―郷―戸となった。このうち、国・郡には境界があるも、郷・里は地域によらず郷(里)を構成する戸に基準をおいているため、四至は判然としていない。郡の増置の時は従来の郡を分置して一郡を建てているのに、郷の場合は分置といわず新たに加うという次第で、埴科郡7郷の地域を地図上にグルーピングすることはでき得ない。

ただ、天平12年以後の制度は永く存続し、平安末に至ると郷が国衙領の一定の地域を表現するようになるので、そこから溯っての地域の推測はある程度可能である。

地名の上から坂城・磯部・船山・英多は雨宮凹地よりはずされるので、倉科・屋代・大穴の3郷がここでは問題となる。うち、倉科は昭和31年に屋代町に合併するまで村名として存続してきているので問題は少ない。

倉科郷は中世、倉科庄に替っている。『吾妻鏡』文治2年3月乃貢未済庄々注文(寛永本)に「九条城興寺領倉科庄」と見えるのがそれだが、ここで興味深いのは、これに続く「同加納屋代四ケ村」の条で、これにより屋代郷の位置も推定できる。

「同」は倉科庄に同じの意。「加納」は「地理的条件の有利なるを楯として自領庄の外に官地を冒して賦税を加納し漸次領知権の凡てを収むること」なので[4]、屋代四ケ村は倉科庄と同一の地理条件をもつ地域ということになる。

明治8年の調べによると、倉科村の水田面積は11町3反、森村は77町3反で、この用水である三滝川と沢山川は旧生萱村の宮崎あたりで合し(以後生仁川)、北流して千曲川に注いでいる。したがって、屋代四ケ村は用水を同じくする旧生萱・雨宮・土口・屋代村あたりが該当する　このうち、雨宮村には貞観8(866)年に定額寺となった屋代寺に比定できる廃寺跡があり、近接する灰塚遺跡からは「卍」の墨書土器片が出土している。

更に、屋代が社に通ずるとするならば、ここには「雨宮座日吉神社」が祀られている。

4

明治７年から17年にかけて作成された『長野県町村誌』[(5)]によれば、雨宮村・土口村・生萱村・森村は古時大穴郷と称するとあるが、中世の郷中に名を留めていないのが大穴郷である。『吾妻鏡』文治２年２月条には「大穴庄」の名が見えるが、配列の順序によれば安曇郡所在で、池田町の大部分と明科町陸郷にかけての地域が比定されている。『信濃地名考』は「森村、土口村２村のうちなるべし」、『大日本地名辞書』は「西条村・清野村・豊栄村等にあたるごとし」、『日本地理志料』は「土口・雨宮・岩野の諸邑に亙る」と見える。

下って、栗岩英治氏は「大穴、是は森村の地字オホナである。而して是が昔の郷の名残りらし」[(6)]。一志茂樹氏[(7)]は「更埴市域の旧屋代町の大部分と旧雨宮県村の一部」、なお、同氏は「倉科郷は旧倉科・旧森両村地域、屋代郷は旧雨宮県村の大半地域」。米山一政氏[(8)]は「生仁は「オオナ」の轉訛ではないかと想像される。「雨宮の沢山川以東、生仁・生萱・土口を含む地域」。関連して「屋代郷は屋代町東北の千曲川自然堤防上、その東端は屋代寺の寺跡まで。倉科は今の倉科地区から森地区へかけて」。

「大穴」は「於保奈」と訓じられている。地名に当ると森地区に「おほら」があるが、その他に、森と屋代の境にある山名に「大穴山」がある。「おほら」はこの山の東麓に位置する村名だが、注意しなければならぬのは、この山頂に森将軍塚古墳が築かれていることで、同古墳の所在地は「更埴市森字大穴山・赤池山」である。

全面葺石貼りになる主軸長100mの前方後円墳の、巨大な竪穴式石室中に眠る首長は、雨宮凹地外の農民にまで君臨していたことだろうが、核となる村は凹地内になければならない。しかも村の規模は相当に大きくなければならぬので、大穴山の山麓下に求めることはできかねる。古墳の全貌を真正面に見る地域こそ核的な村にふさわしい訳で、古墳真北の、1500mへだたった千曲川自然堤防があがってくる。この自然堤防上は４世紀代からの集落遺跡で覆われてしまっている。

5

前節では相当に飛躍してしまったが、底辺を北に置いた三角形状の雨宮凹地の東麓際に倉科郷、北辺に横たわる自然堤防のうち、西半分に大穴郷、東半分に屋代郷を設定し、大穴郷と森将軍塚古墳とを結びつけた。

籍帳制度は、それが収奪を目的としている以上、当時の現実にある程度則していなければならないだろう。利害を同じくする自然村落を統合して１郷を形成することはあっても、逆のケースは考え難い。自然堤防上に設けた２郷の郷名については、西方部に大穴郷を置こうとする一志氏及び桐原の説、東方部に置く『信濃地名考』、『日本地理志料』、『長野県町村誌』、米山一政氏の説と対立してはいるが、雨宮凹地に存した３つの郷の位置同定作業はまずは妥当視されることだろう。ところで、『倭名鈔』の郷名と、奈良・平安時代の文書記載の郷名との照合結果では、９世紀前半が97.5％と最も高く、８世紀前半まで溯ぼらせると84.5％と低下してしまっているので、この地縁組織をそれ以前の世紀まで及ぼすことには問題がある。しかし、古代の村落には意外と停滞的な面がある。４・５世紀代においても雨宮凹地内の自然村落は３群にグルーピングできないものか。そして、大穴郷は森将軍塚、倉科郷は倉科将軍塚、屋代郷は土口将軍塚古墳築造村落の末裔といった図式が描けはしないかというこ

とである。

6

千曲川流域という地形上から、善光寺平南半部には弥生時代遺跡は豊富であるとの先入観念を持っていたが、更埴市教育委員会の矢島宏雄氏の示教によると、更級郡下では豊富であるも埴科郡下は寡少に過ぎるとのことである。宮下健司氏も「更級郡下の石川条里地域には伊勢宮・松節遺跡を始め数多い遺跡があるのに、埴科郡下の後者は広大な条里地割であるが、弥生時代のものでは生仁遺跡の他はその規模は小さく、歴史景観も少ない(9)」と両地域間の差異を強調している。

だが、次期に入った途端、埴科郡の雨宮凹地には善光寺平最古の古墳が築かれ、自然堤防上に城の内の大集落が出現する。この現象は余りにも唐突で、内よりの変革よりも外からの影響を大きく考えたい。大和政権が信濃に進出するに当り、在地勢力の稀弱な地域を狙って、更級郡下よりも埴科の雨宮凹地に橋頭堡を築きあげたとする考えがどうしても払拭しきれない。在地勢力との結合は当然にあっただろうが、彼等とは生活習慣を異にする人人の来住も結構多かった。4世紀後半の朝鮮進攻による渡来人も混っていたのかもしれない。

自然堤防上に定着した彼等は後背湿地の開拓を進める。自然堤防の南側には現在五十里川が流れているが、古代に同川は存在しなかったとする考察があるので、まず用水路・排水路の開鑿は必要である。これには畿内人・渡来人のもつ技術が発揮された。彼等の首長は集落の真南の山頂に葬られた。そして古墳の墳麓には8基の円墳、61基にのぼる組合式箱形石棺、11基の埴輪棺が築かれた。時期的に最も下るものが6世紀後半の円墳で、横穴式石室を内蔵している。

一方、5世紀代に入って、三滝川東の山頂には倉科将軍塚古墳が築かれ、山麓には横穴式石室をもつ円墳3基、更に、三滝川の発する奥処に矢の口と杉山の群集墳が築かれている。矢の口古墳群は13基、杉山古墳群は22基で、これは総て積石円墳である。

また、三滝・沢山川の合する生萱地区の山麓、及び土口の北の薬師山山麓には横穴式石室内蔵の円墳が数多く存在している。生萱地区に現存する古墳は僅か3基にすぎないが、明治初年には将軍塚・大穴塚・老の塚・飯盛塚・御蔵塚・遠見塚・皇塚の7塚があり、更にそれ以前に遡っては30余基の古墳があった。土口地区の現存古墳は17基だが、これも『長野県町村誌』の記事によれば、薬師山の半腹より裾にかけて「坑口相連りてその数往日は百余あり（或いは47ヶともいう）」と見える。

いかがであろう。3地区の古墳様相に見られたこの差異は大きい。殊に、倉科将軍塚古墳とさして時間差がない同じ5世紀に、雨宮凹地の北東隅を劃する薬師山山頂に前方後円墳を築き、次期、薬師山南麓に100余基もの横穴式石室墳を構築した氏族は、明らかに森将軍塚古墳や倉科将軍塚古墳築造氏族とは性格を異にしている。

土口の水田面積は、明治8年には僅か8町5反、畑は33町9反、集落のすぐ西側は千曲川の河筋で、増水の都度、河水は逆流してくる。沢山川（生仁川）を渡り、謡坂を越えての土口の凹地は、西方の自然堤防上集落から見た場合、高井郡南端の大室谷同様の、死者の眠る地域であったのかもしれない。

同じ千曲川自然堤防上に生活を構えてはいても、祖霊の鎮まる森将軍塚古墳の墳麓に眠ることを願ったグループとは性格は大いに異なる。少なくとも6世紀代にあってはそうだった。森将軍塚古墳と土口将軍塚古墳の被葬者間にほぼ1世紀の時間差がある。5世紀後半。この凹地において新氏族の台頭のあったことが思われる。

考古学的資料の裏付けは全く無いといってよいが雨宮凹地の中より土口将軍塚古墳を観て、改めて、岩崎氏の第4説にひかれるものがある。　（桐原　健）

註

(1) 斎藤忠「国造に関する考古学上よりの一試論」『古墳とその時代（2）』昭33年

(2) 岩崎卓也「古墳時代の遺跡・遺物と郷土社会の変貌」『郷土史研究と考古学』昭45年

(3) 更埴市教育委員会『森将軍塚古墳――保存整備事業第1年～第5年発掘調査概報』昭56～60年。

(4) 市村咸人『建武中興を中心としたる信濃勤王史攷下巻』昭14年

(5) 長野県『長野県町村誌』昭11年

(6) 栗岩英治「郷名考」『諏訪研究』大6年

(7) 一志茂樹「周辺の環境的考察――歴史的環境」『更埴市条里遺構調査報告書』　昭42年

(8) 米山一政「古代――律令制時代」『更級埴科地方誌第2巻』昭53年

(9) 宮下健司「条里地域の歴史景観」長野郷土史研究会総会発表、昭61年1月

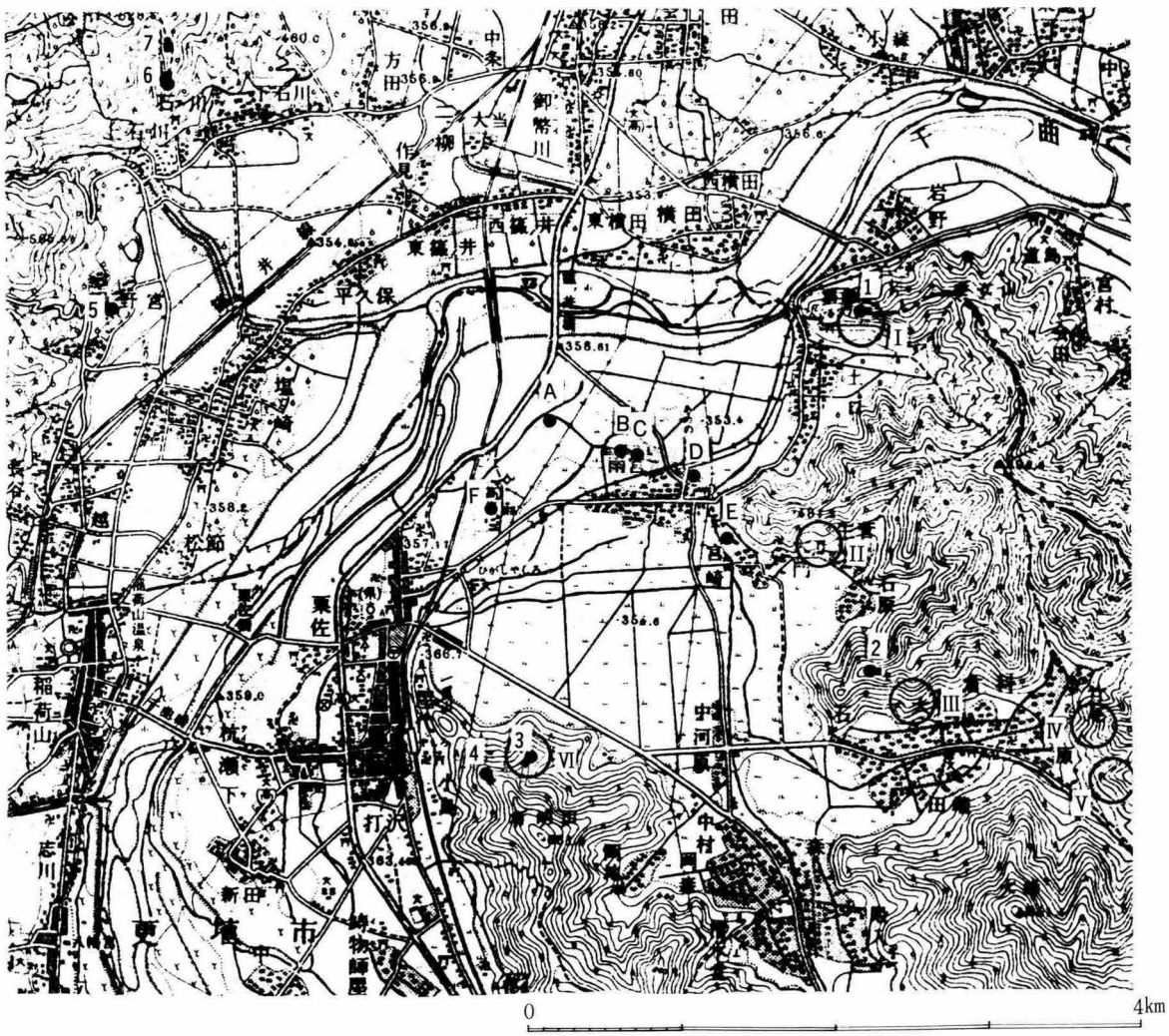


図49　土口将軍塚古墳周辺の遺跡分布

1土口将軍塚古墳　2倉科将軍塚古墳　3森将軍塚古墳　4有明山将軍塚古墳　5中郷神社古墳
6川柳将軍塚古墳　7姫塚古墳
Ⅰ土口古墳群　Ⅱ生萱古墳群　Ⅲ大峡古墳群　Ⅳ矢ノ口古墳群　Ⅴ杉山古墳群　Ⅵ森古墳群
A城の内遺跡　B下条遺跡　C灰塚遺跡　D推定屋代寺跡　E生仁遺跡　F馬口遺跡

V　ま　と　め

土口将軍塚古墳は長野市松代町岩野と更埴市雨宮土口の両地区に位置する丘陵尾根の先端部に立地する前方後円墳である。長野市から善光寺平の南部の更埴市にかけては、千曲川や犀川をはじめとして多くの小河川によって開析された沖積地が形成され、善光寺平と称される盆地となっている。この善光寺平の南部に位置する雨宮小盆地をのぞむ南東側は山丘が迫り、沖積低地にむかって丘陵が突出しており、土口将軍塚古墳は標高450m、沖積面との比高差約100mの尾根上に主軸を東西に向けて立地している。

調査の結果、明らかにされた古墳の規模は下記の通りである。

墳丘全長　67.7m　二段築成　葺石・埴輪あり

主軸方位　北87度30分東（前方部方向は東）

後円部直径　40.5m

後円部高さ　8.1m（下段丘3.0m、上段丘5.1m）

くびれ部幅　19.7m

前方部先端幅　30.5m

前方部先端が示す偏角　6度

前方部高さ　3.9m（下段丘0.5m、上段丘3.4m）

後円部墳頂標高　453.60m

前方部墳頂標高　453.20m

後円部と前方部の比高差　0.40m

上述のように土口将軍塚古墳は墳丘規模が70m近い長さを有する善光寺平で有数の前方後円墳である。善光寺平の南部地域にあっては、古くから川柳将軍塚古墳が著名であり、墳丘長93mを測る。また森将軍塚古墳は98mの墳丘長でこの地域最大の規模を誇っている。将軍塚古墳の名を冠する古墳が、この地域では他に越将軍塚・倉科将軍塚・有明山将軍塚とともに土口将軍塚をも含めて総計6基の名がある。これらの諸前方後円墳がすべて同一時期の築造とは考えられず、各地域間の関係と築造時期の前後関係とは、4世紀から6世紀代にいたる善光寺平の歴史的な諸状況の反映と見てよいであろう。

本報告書のなかにおいても桐原健氏は、土口将軍塚古墳の基礎的な調査成果を勘案したうえで、善光寺平南部地域の古墳間の系譜上の問題に言及されている。かつて岩崎卓也氏は1973年(昭和48)の『森将軍塚古墳』の中で、この地域の盟主墳としての前方後円墳の築造順序にふれ、森・倉科・土口・有明山という4前方後円墳の序列を考えつつ、なお若干の考究すべき点のあることを示唆している。桐原氏が指摘しているように、この雨宮盆地を中心とした地域の前方後円墳の推移は、森将軍塚古墳を最初の最有力盟主墳として位置づける点では、ほとんどの研究者が同様の考え方に立つと思われる。森将軍塚古墳の被葬者に次いで、この地域の政治的な統括者として君臨したのは一体誰であったのか。そしてその首長の登場した歴史的世界のあり方は、中央の大和政権とここ千曲川流域で覇権を担った有力首長との政治的関係論にまで及ぶと思われる。森将軍塚古墳に次いで出現する古墳が、これまで考えられてきたように倉科将軍塚古墳で間違いないのかどうか。土口将軍塚古墳とは墳丘規模あるい

は、後円部にたいしての前方部の発達程度、さらに埴輪の存在や予想される内部主体の構造の内容を考えると、今回の調査でかなり明白になった土口将軍塚古墳との、これまでの築造年代とそれにもとづく順位とが、きわめて不確かなものとならざるをえない。倉科将軍塚古墳には円筒埴輪のほかに、地元研究者が保管しているという人物埴輪が確実に出土したのかどうかということも、十分に調査する必要があろう。そして越将軍塚古墳も善光寺平南部地域の前方後円墳の系列のなかで、どこに編年しうるのかまだ不明確といったほうがよい。森将軍塚古墳に比較的近い距離に存在する有明山将軍塚古墳は、墳丘長40m未満の前方後円墳で、森将軍塚古墳との対比の問題で、年代を若干引下げて新しく見ようという見解が支配的である。有明山将軍塚古墳が森将軍塚古墳よりは新しく登場したと考えたとしても、倉科・越・土口の3基の将軍塚古墳の、いずれが古くいずれが新しいかは、実は即断の限りでない。すでに桐原健氏が報告書の中でも問題提起しているように、これらの将軍塚古墳の歴史的な関係は岩崎卓也氏によって下記の如く理解されている。

1説　森将軍塚古墳――倉科将軍塚古墳――土口将軍塚古墳――有明山将軍塚古墳
2説　森将軍塚古墳――倉科将軍塚古墳―┬―有明山将軍塚古墳
　　　　　　　　　　　　　　　　　　└―土口将軍塚古墳
3説　森将軍塚古墳―┬―有明山将軍塚古墳
　　　　　　　　　├―倉科将軍塚古墳
　　　　　　　　　└―土口将軍塚古墳
4説　森将軍塚古墳―┬―倉科将軍塚古墳――有明山将軍塚古墳
　　　　　　　　　└―土口将軍塚古墳

上記の諸関係の中で土口将軍塚古墳の構造年代や古墳の内容が、今回の調査で明瞭にされた結果、大きく二つの問題が浮び上がってくるように思われる。それは基本的には編年上の問題であるが、倉科将軍塚古墳と土口将軍塚古墳との関係についてである。2説では倉科将軍塚古墳は有明・土口の両将軍塚に先行するという考え方である。3説と4説とは有明山将軍塚古墳の編年序列に差異があるものの、倉科将軍塚古墳とはほぼ同一時期に地域を異にして併行して出現したという理解の仕方である。

このような古墳の調査研究におけるもっとも基本的な問題についても、まだまだ多くの課題を解決しなければ研究は進展しない。桐原氏は今回の報告書の中では、古墳資料の検討の上で、岩崎氏がかつて提起した第4説に魅力を感ずると述べている。

この問題は土口将軍塚古墳の築造年代をどの辺りに定着させるかということと関係がある。この点に関しては調査研究にかかわった関係者の間でも年代の決定については微妙な差異がないわけではない。森将軍塚古墳から土口将軍塚古墳へという時間的な経過を考えて矛盾がないのかどうか。土口将軍塚古墳がもし5世紀の後半期の出現だと理解すると、森将軍塚古墳との年代のヒアタスが少し大き過ぎはしないだろうかという疑問が生まれる。あるいは、土口将軍塚古墳の年代が5世紀前葉にまでさかのぼりうるのか問題となるであろう。

いずれにせよ土口将軍塚古墳の明確な事実認識こそ、善光寺平南部における前方後円墳間における政治的な権力構造の動きを解く重要な糸口になるものと思われる。そこで、こうした課題を念頭において土口将軍古墳の調査で判明した事実、あるいは長野県の考古学研究のみならず、全国的な視点からでも重要だと思われる問題提起についてまとめを述べておきたい。

土口将軍塚古墳の墳丘築造について

古墳の築造は円墳・前方後円墳に限らず、とくに地形の変化の著しい丘陵尾根上に立地させる場合には、土木技術上のさまざまな経験的知識が投入されたと思われる。長さ67.7mの前方後円形のシンメトリックな墳丘を構築するために、技術者たちは立面を二段築成とし、さらに埴輪の配列と葺石の実施をまず計画し準備した。墳丘の下段丘を築成するために旧尾根地形を削って、基層となる岩盤面のレベルを揃えて墳丘を盛土していることが確認されている。墳丘の裾部の葺石に接して必ずといってよいほど岩盤の露出が認められている。下段の傾斜は33度、中段のテラスは墳丘の地点によって幅に広狭があり、とくに後円部西側中段のテラス幅4.5m～5mあり、ほか幅1.5mであった。上段丘の傾斜も下段同様33度でありきわめて正確に設計され、工事が施工されていたことを知るのである。

前方部墳丘の築造にあたっては自然山丘の岩盤を露出し、旧地形をいわゆる丘尾切断して墳裾線を決定して盛土作業をしていた。前方部のコーナー部は尾根幅が狭いため、盛土をして形を整えていることも明らかになった。

幅のかなり狭い尾根上を削平したり、また一部には盛土を施して下段丘を作るため、後円部の下段丘裾部は正円のプランを示し正円形につくる努力を惜しまなかったが、傾斜地であるため、墳丘下段丘の傾斜を一定に保たせるため、中段テラス外縁の平面プランはやや楕円形となっている。このため後円部の上段丘の平面プランを正円形に近づけるため、中段テラス幅を多少変更して、後円部西側を中心に幅4.5m～5mとし、そのほかの中段テラス幅は1.5mとしたのである。前方後円墳築造のための企画設計が、自然の山丘地形に対して施される場合の具体的な実施例として、きわめて重要な資料になるものと思われる。

土口将軍塚古墳の墳丘築造企画と設計について、森嶋稔氏は椚国男・上田宏範・宮川渉ら3氏の設計企画の方法を用いて、森将軍塚古墳と土口将軍塚古墳の墳丘の計測点指数を計算して比較を行っている。

森嶋氏の報告からここに採録させていただくと下記の如くである。

	森将軍塚古墳	土口将軍塚古墳
椚国　男案	8：3：2.5	8：3：3.5
上田宏範案	6：3：2	6：2：2
宮川　渉案	8：4.7	8：5

上記のような3氏の設計企画論に基づいて示された土口将軍塚古墳の計測指数が、きわめて森将軍塚古墳に近いことに注目され、同氏は森将軍塚古墳→土口将軍塚古墳→倉科将軍塚古墳→有明山将軍塚古墳の編年の可能性が増大したことを示唆している。また土口将軍塚古墳の前方部先端線の方向が、墳丘主軸に対し6度の傾きのあることに注目し、埴輪配列の特色をも勘案されて、よりデコレートされた墳丘の片側意識についての指摘をしている。

葺石と埴輪の配列

墳丘の上段丘と下段丘の傾斜面には葺石が存在した。築造時には傾斜全面に施設されていたが、各所で落下している部分もありくびれ部の遺存状態が最も良好であった。葺石は直径10cm－40cmの大きさの転石で石英閃緑岩であり、土口将軍塚古墳の立地する薬師山の南斜面に露頭があり、おそらく山

麓一帯から採石したものと考えられている。

埴輪列は後円部墳頂部と前方部墳頂ならびに中段テラスの中央部に樹てられていた。墳丘の裾部から埴輪破片が多量に発見されているが、墳裾に原位置を示すものがなく、中段テラスからの転落であったと考えられている。従って土口将軍塚古墳の下段丘の裾には、円筒埴輪列は樹てられていなかったと判断されている。調査者の青木和明氏によれば、本古墳の埴輪列上注目すべき特色として遺存状態の良好だったくびれ部南側と前方部南隅の所見として、次の事実を報告されている。

すなわち数本の円筒埴輪を密接して樹て、1－2個の空間を設けて再び数本を樹てるという繰り返しをしていることだという。こうした配列のパターンが墳丘各地点を全周していたのかどうか、転落資料も多く実証しがたいという。若しそうした傾向があるとすれば、埴輪配列における視覚上からする特別な意識が、墳丘のある部分に対して働いていたということになるのかも知れない。墳丘に発見された埴輪列が、仮に全周するとすれば、6mの距離に16本の埴輪が並んだとすると、土口将軍塚古墳の総個体数は約700本と試算されている。

埋葬施設の問題点

土口将軍塚古墳の後円部中央には2基の竪穴式石室が確認された。この両石室は平行しないで石室主軸が北石室が北西方向に5度ふれている。南石室はほぼ東西方向を指している。これらの石室は掘り方の中に構築されているが、北石室だけが1mほど突出している。

これらの石室は双方とも東側半分近くが盗掘の厄を受けていて、竪穴式石室の石材が半分以上も抜き取られ破壊されている。

南石室の現存長5.20m、幅0.65m、高さ0.85mという規模から判断すると、北・南石室とも幅の狭い、粘土礫床のある竪穴式石室であったと考えられる。この2石室並列の石室は同時期共存だと見られている。報告者の小林秀夫氏は、長野県の2基並葬石室例として、東筑摩群坂井村安坂古墳群、竪穴式石室と木棺直葬並列の長野市松代町舞鶴山2号墳例を挙げている。土口将軍塚古墳の並葬石室の被葬者を析出することはきわめて困難であり、単純に夫婦一組の並葬などと推断することはできない。全国的な観点から見れば2棺乃至3棺の例は決して稀有の存在ではなく、たまたま遺存しえた遺骸についての解剖的所見によって、被葬者の実態について推理をかさねるという傾向が強かった。今回の調査ではそうした資料の検出はみとめられていないので、並葬石室の持つ多様な問題点の展開は、なお将来に期待されなければならないと考えられる。

埴輪に関する問題点

土口将軍塚古墳の出土埴輪には、全国的な視点からする埴輪研究の将来に、大きな問題を投げかける課題が含まれている。

全国でも現在43例の出土例がある「叩き」のある埴輪が、土口将軍塚古墳から出土しており、とくに本古墳の出土埴輪のほとんどが叩きのある埴輪という点にも特色があろう。平行叩きと格子叩きを施した埴輪の中でも、本古墳では平行叩きが多いことが指摘され、注目すべき所見として、平行叩きの埴輪は中段テラスから主として出土し、格子叩き目の円筒埴輪は、後円部墳頂とその北側から出土しているといわれ、両者は凸帯や2次調整などの細部においても変化がある。格子目叩きの埴輪には大形品が多い傾向なども、埴輪の製作技法に相異なるテクニックをもつ複数のグループの存在を考え

ることができるかもしれない。

叩き目がある埴輪は東国では5世紀代の中頃に多いといわれる。土口将軍塚古墳の叩き目があり黒斑のみとめられる埴輪の製作年代が限定できるとすれば、土口将軍塚古墳の年代決定に有効なばかりでなく、埴輪製作と須恵器生産との歴史的な諸関係の究明にも重要な貢献を果たすことになるだろう。

土口将軍塚古墳の叩きの埴輪について報告された山根洋子氏の見解は、きわめて重要な問題を提起している。土口将軍塚古墳の叩きの埴輪の特性を抽出するとすれば、叩きの際内面の当て具痕の欠如、あるいは平行叩きと格子目叩きの2種類の存在だとされる。叩き調整を集中的に、また主体的に用いながら、須恵器焼成の技法をとり入れていないことに疑問を呈している。山根氏は土口将軍塚古墳より古い埴輪を出土している更埴市森2号墳からは、TK73、TK216型式の初期須恵器が出土しているから、本古墳の埴輪を焼成した工人たちは、意識的に須恵器の焼成方法を採用しなかったのだと考えている。東国の埴輪製作が盛行する地域では、逆に須恵器の新技法の流入や採用を、鈍らせる意識が強く働いていた節があるので、土口将軍塚古墳の叩き目のある埴輪の問題は、今後研究をますます深化させることが必要である。

出土遺物と古墳の築造年代

土口将軍塚古墳の後円部墳頂から総数で約40個体の高坏を主体とした土師器が発見された。おそらく埋蔵直後に執行された墓前祭に供献され用いられた土器と考えられる。調査者の青木和明氏は、資料の量的な問題もあり高坏をとりあげて型式学的分析を行い、A型・B型・C型の3型式に分類して検討を進めた。本古墳出土の高坏は青木氏も指摘するように、和泉式土器の高坏と共通した特色をもっている。そこで善光寺平の数遺跡で発見された資料に比較を求めた結果、善光寺平の土師器の高坏は、篠ノ井型→駒沢型→浅川型・四ツ屋型→森2型・地附山型へと移行するという。この関係をいま図式で示すと下記のようになろう。

善光寺平の土師器・高坏による形式変遷図

比較型式	善光寺平での編年	他地方土師器	須　恵　器
篠ノ井型 ↓	善光寺平第1様式新段階	布留2－3式 五領2式	
駒沢型 ↓ (土口型) ↓	善光寺平第2様式古段階	布留4式 典型的和泉式	TK73かそれ以前
浅川型 四ツ屋型 ↓	善光寺平第2様式新段階		TK216－208
森2型 地附山型	善光寺平第3様式古段階	埼玉稲荷山古墳例	TK23－47

上記の高坏を主体とした善光寺平の土師器の編年体系の中に、土口将軍塚古墳の40個体の土師器・高坏はどのように位置づけられるであろうか。青木氏が高坏を中心として分析し、比較型式として設定したのは、駒沢型に似ているがやや後出的と考える土口A型と、四ツ屋型と同じ特徴を示す土口B型であった。土口将軍塚古墳の高坏の示す土口型の比較型式の位置は、駒沢型には含まれている小形丸底土器が本型式にはみとめられない点は、土口型が駒沢型と四ツ屋型の中間に位置することを明確にしている。更に土口型における筺描き線刻文の存在や埴輪の格子目叩き技法を介在させることによって、土口型が須恵器TK73型式に並行するものだとする。青木氏の土口将軍塚古墳出土の土師器に関する年代論は、須恵器TK73型式の年代が、田辺昭三氏による5世紀中葉説と白石太一郎氏による5世紀前半説とがあって、いずれをとったとしても、5世紀後半代にまでその主要年代を引下げる必要はないのではなかろうかという主張のようである。

その他の出土遺物について

土口将軍塚古墳から出土した石室副葬品は長頸長三角形式鉄鏃15本、柳葉形式鉄鏃10本、圭頭斧箭形式1本の計26本の鉄鏃と、三角板革綴短甲片と推定できる数枚の鉄板のみであった。すでに千野浩氏によって紹介されている如く、鉄鏃に関しては長頸鏃の古式例とされる大阪府和泉黄金塚古墳出土例と、大阪府野中古墳出土例などとの中間的な発達程度を示しており、とくに福岡県甘木市古寺遺跡出土例などと同時期の資料と考えてよいであろう。柳葉形鉄鏃の年代の古さを考えても5世紀前半に比定するのが妥当なところではないだろうか。

三角板革綴短甲の出土は長野県においては稀例であり、今後の資料の増加を期待したいところであるが、中野市双子塚古墳出土の革綴鉄片に加えて、県内で2例となった。三角板革綴短甲の盛行年代も鉄鏃の場合と同様で5世紀前半に比定するのが、妥当な年代観のように思われるのである。

土口将軍塚古墳の歴史的性格

このたびの調査研究によって土口将軍塚古墳の不明瞭な部分が、かなり鮮明に見え始めてきたといってよいであろう。本古墳の有する歴史的性格を究明するということは、例えば善光寺平とその周辺に展開する4世紀代から8世紀代へ続く村落の実態や古墳群の関連性が把握されなければ、正しい正確な評価は不十分だと思われる。

更埴市の森将軍塚古墳を前期古墳として、どのような年代を与えたらよいのか、研究者間でも異論の出るところであろう。いま善光寺平において最初に登場してきた強力な権力執行者としての森将軍塚古墳の首長は、おそらく西暦4世紀代の中葉前後には、善光寺平の南部地域を基盤に登場してきたのであろう。

桐原健氏の論考にあるように古代の大穴郷や屋代郷あるいは倉科郷などが、それよりはるか数百年も遡った古墳時代の支配構造や自然集落の実態と、どのようにかみ合うのかまだまだ若干の年月の経過が必要かもしれない。しかし、近年における善光寺平の開発に基づく考古学上の大規模な調査によって、千曲川やそれに流入する小河川の形成した自然堤防上や扇状地などで、弥生時代から古墳時代にかかわる重要な遺跡調査が激増している。

森将軍塚古墳の首長が生前に支配しえた地域の範囲をどのように設定できるかという大問題が依然としてまだ未解決のことである。

土口将軍塚古墳を5世紀前半の出現と見るのか、あるいは5世紀後半と考えるのかは、墳丘規模や内部主体の構造、副葬品の組み合わせ、埴輪の問題など様々な分野で、理解の仕方に大きな影響を与えることになる。

筆者自身の考えでは、土口将軍塚古墳の築造年代は土師器や埴輪、そして鉄鏃など武器・武具の形式的特色から考えて、いまは5世紀前半、いかに年代を新しくするとしても5世紀中ごろ以前の段階に、出現していたと考えたい。土口将軍塚古墳が善光寺平南半地域における第2番目の首長なのか、それとも倉科・土口というように同時期に併立していたと考えるのか、筆者には確固たる考古学的証明ができる自信がない。しかし、全国的な視点によって一般的な地域における歴史的状況の進行を観察すると、5世紀代——地域によって多少の遅速はあるが——の中頃からとくに後半期を迎えて、古墳群構造に変質や中型古墳の複数登場など、かなりめまぐるしく古墳に変化が現れる。

農業生産の拡大や収穫量の増大とそれに伴ったさまざまな社会の変質は、近年各地に発掘される膨大な古墳時代から奈良平安時代へと続く水田址や畑址の調査例を見ると、実感として認識させられる。従って上記のような傾向を事実として認めると、善光寺平における古墳時代中期以降、とくに5世紀後半代以降は、各地域にそれぞれ首長が支配者として君臨し、とくに自然のあるいは人為的な災害・障害などによって、数奇な命運を辿る場合さえあったのだと考えることの方が、事実に近いのではなかろうか。

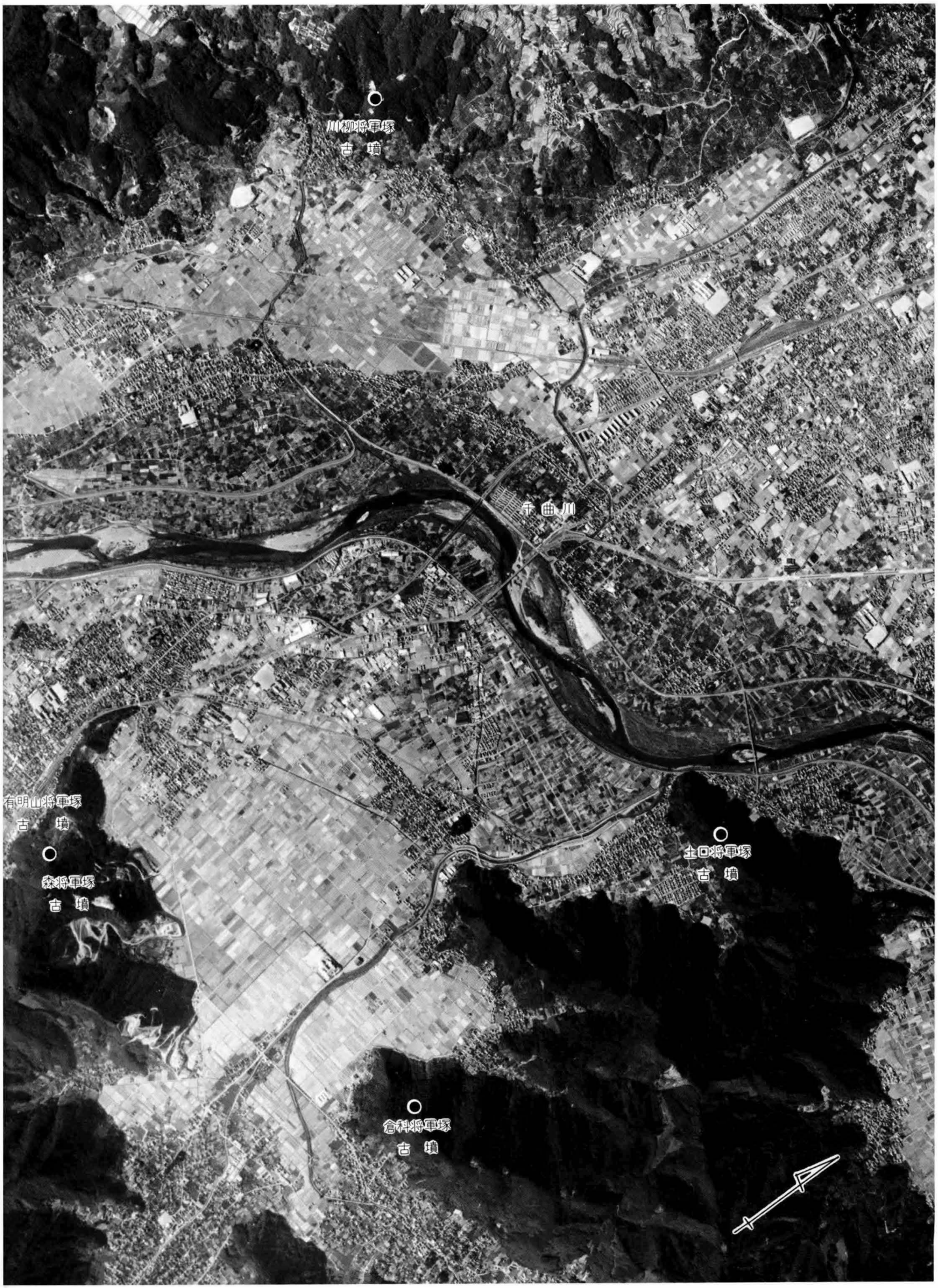
森将軍塚古墳を最初の盟主墳として、あるいは川柳将軍塚古墳の首長が次代を担ったことがあった可能性もあろう。しかし5世紀の前半代には、善光寺平の開発は急激に進展し、土口・倉科・有明山・越の将軍塚をはじめ、さらに大室18号墳のような60m級の前方後円（方）墳さえ登場するのであって、一世代一墳的な傾向を次第に弱めつつ、善光寺平の各地域に有力首長が台頭していったのではなかろうか。

土口将軍塚古墳の時代はまさにそうした新しい歴史の幕開けの時代だったのであろう。

（大塚初重）

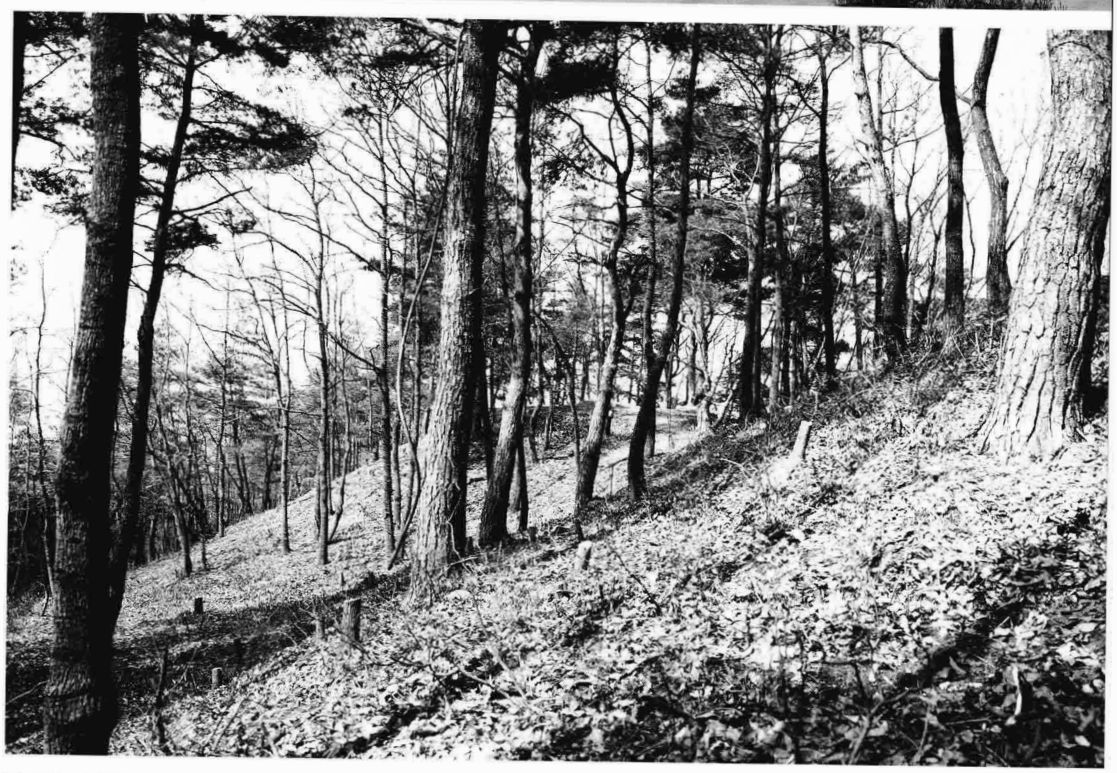
写　真　図　版

図版Ⅰ　航空写真



図版 2
全景・埋葬施設

古墳の遠景
（岩野橋より）



墳丘の南側面

後円部墳頂埋葬施設

図版 3
埋葬施設

左：南石室
右：北石室

石　室
西　面

図版 4
埋葬施設

南石室南側
石室石材散乱状況

同　上

攪乱層除去後の
墓壙と石室

図版 5
石　室

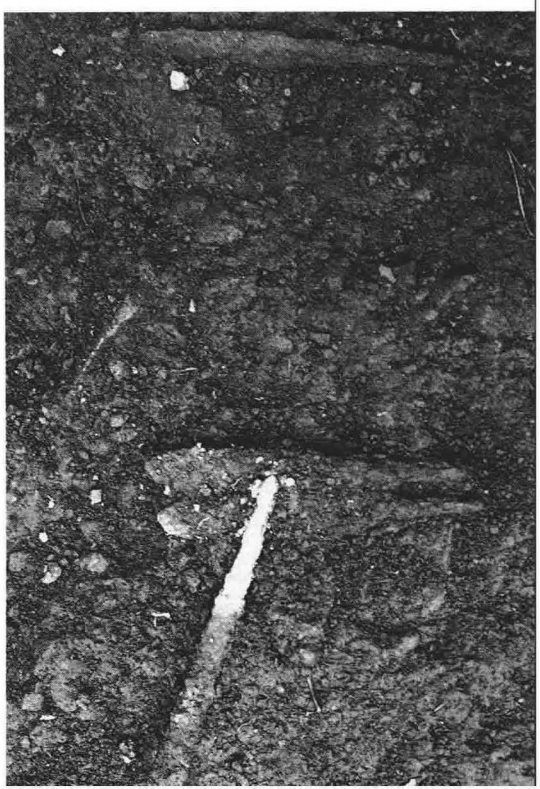
南石室
南　壁

南石室
西　壁

北石室
西　壁

図版 6
北石室床面

遺物出土状況



物出土状況部分

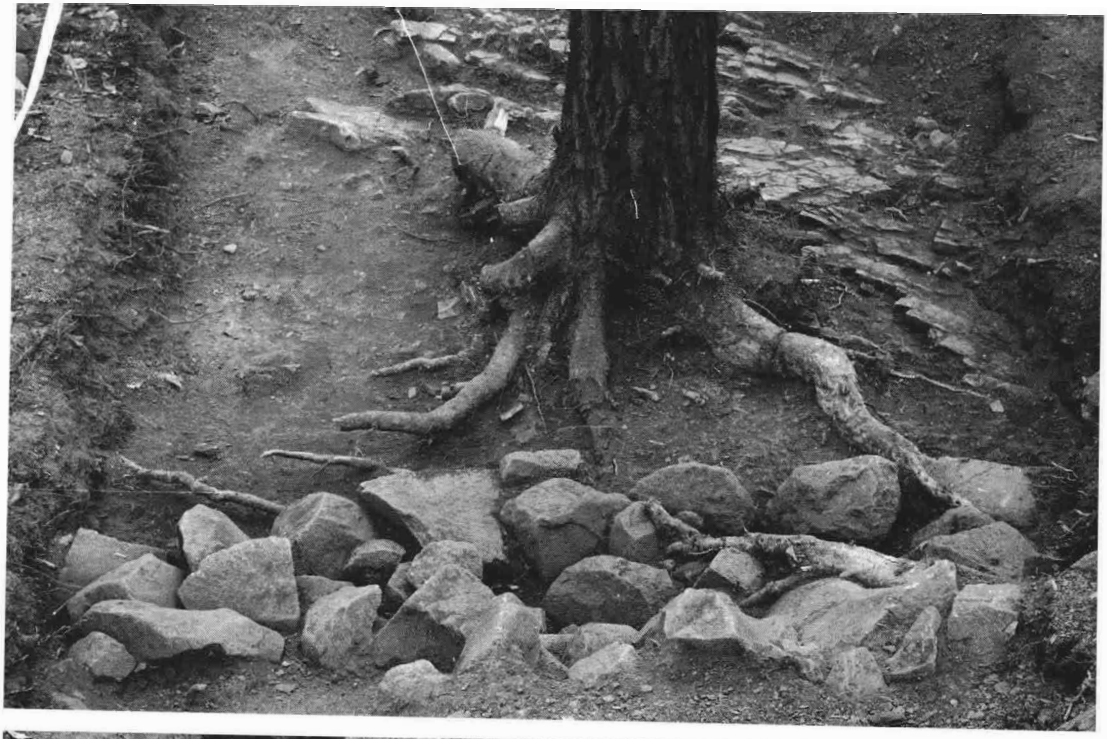
図版7
後円部西トレンチ

調査区全景

上段丘葺石

下段丘葺石

図版 8
後円部西トレンチ
北トレンチ



西トレンチ
下段丘裾部
岩盤露出状況

西トレンチ
中段テラス埴輪列

北トレンチ
調査区全景

図版 9
後円部南トレンチ

調査区全景

上段丘裾部

下段丘裾部

図版10
くびれ部南側

調査区全景

調査区全景
（後円部より）

中段テラス埴輪列

図版11
くびれ部南側
北側

中段テラス埴輪列

同　上

墳頂部埴輪列
左：検出状況
右：基　部

図版12
くびれ部北側

調査区全景

調査区全景
前方部より

上段丘葺石

図版13
前方部南隅

調査区全景

調査区
東前面部

調査区
南側面部

図版14
前方部南隅

東前面部葺石

中段テラス埴輪列

埴輪列部分

埴輪列部分

図版15
前方部北隅
墳　頂

北　隅
調査区全景

北　隅
調査区
東前面部

墳頂部
埴輪破片出土状況

図版16
前方部東トレンチ

調査区全景

上段丘葺石

下段丘葺石

図版17　調査風景

後円部墳頂調査着手時

墓壙の検出

石室内の精査

後円部西トレンチの実測

前方部南隅埴輪列の検出

前方部南隅埴輪列の検出

前方部南隅の実測

くびれ部南側の検出

図版18　円筒埴輪

1

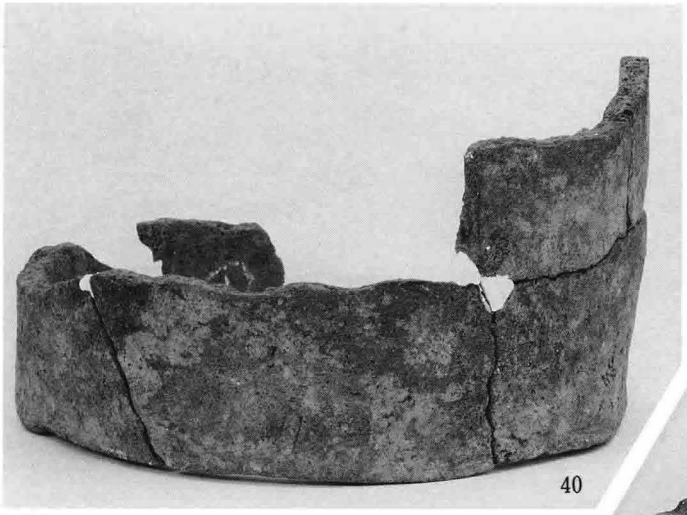
14

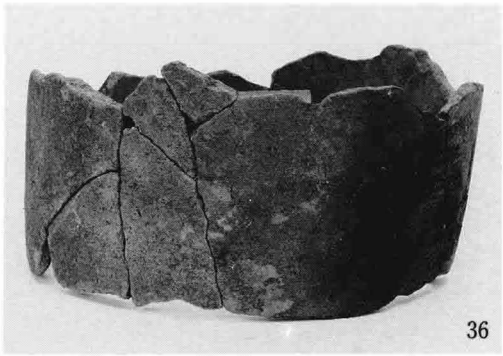
15

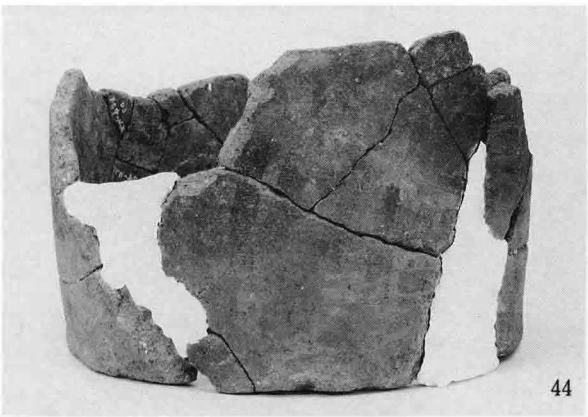
16

（約1：5）

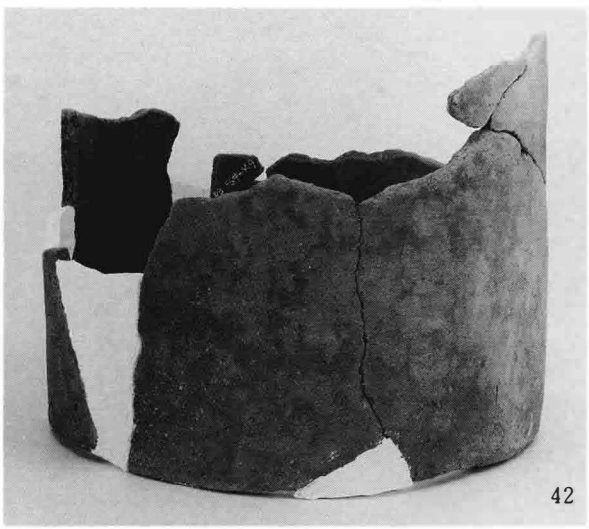
図版19　円筒埴輪


40

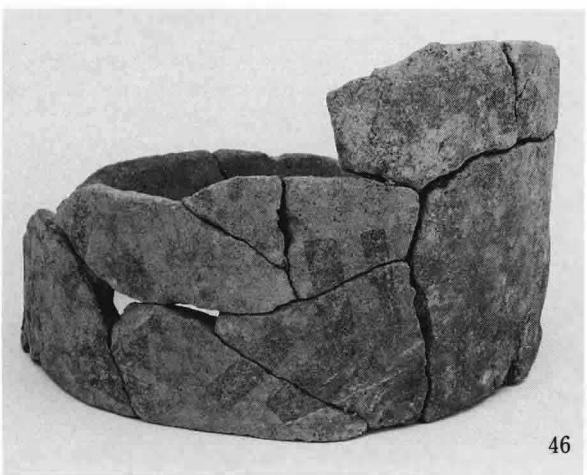

36


44

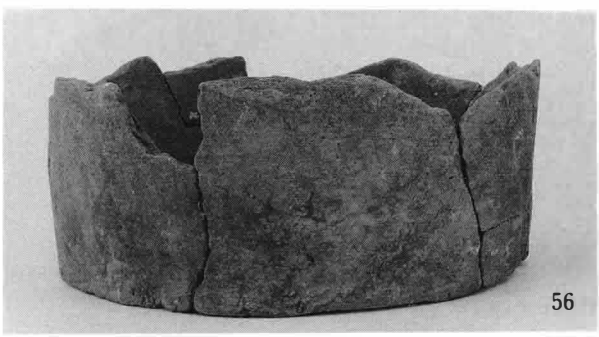
20


42

37


46

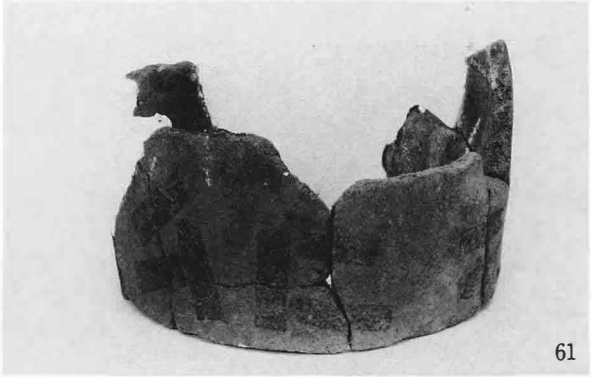
41


56

（約１：５）

図版20　円筒埴輪

57


61

58

62

63

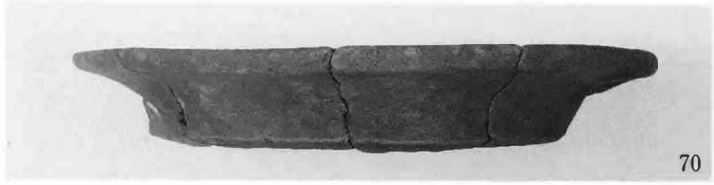
64

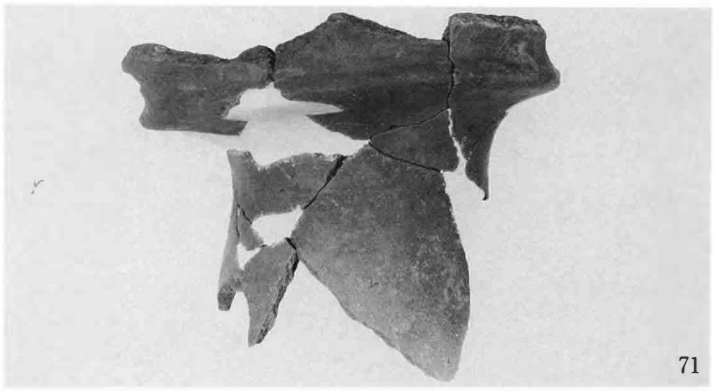
65

66

（約１：５）

図版21　朝顔形埴輪

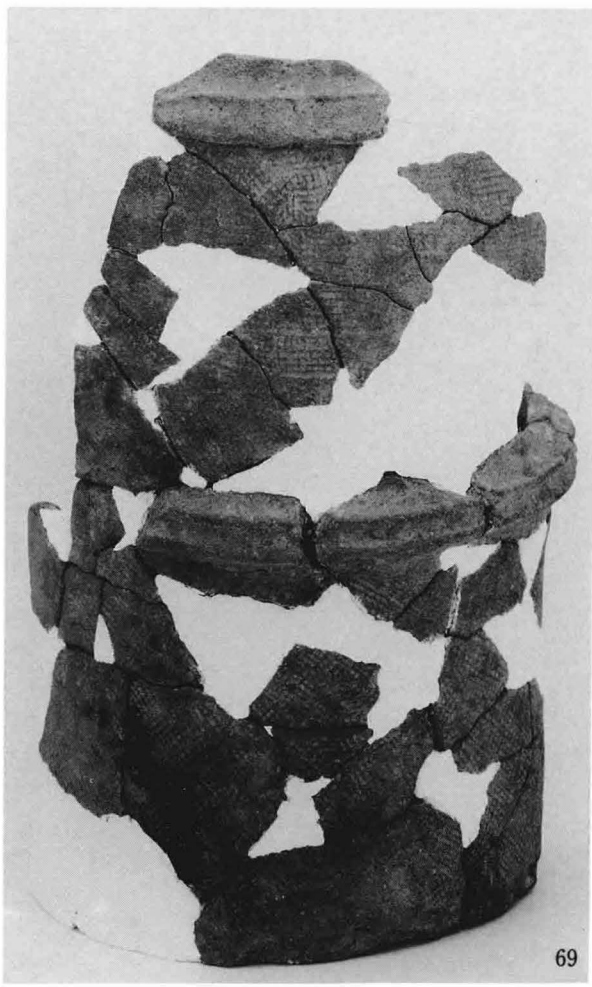

70


71

67

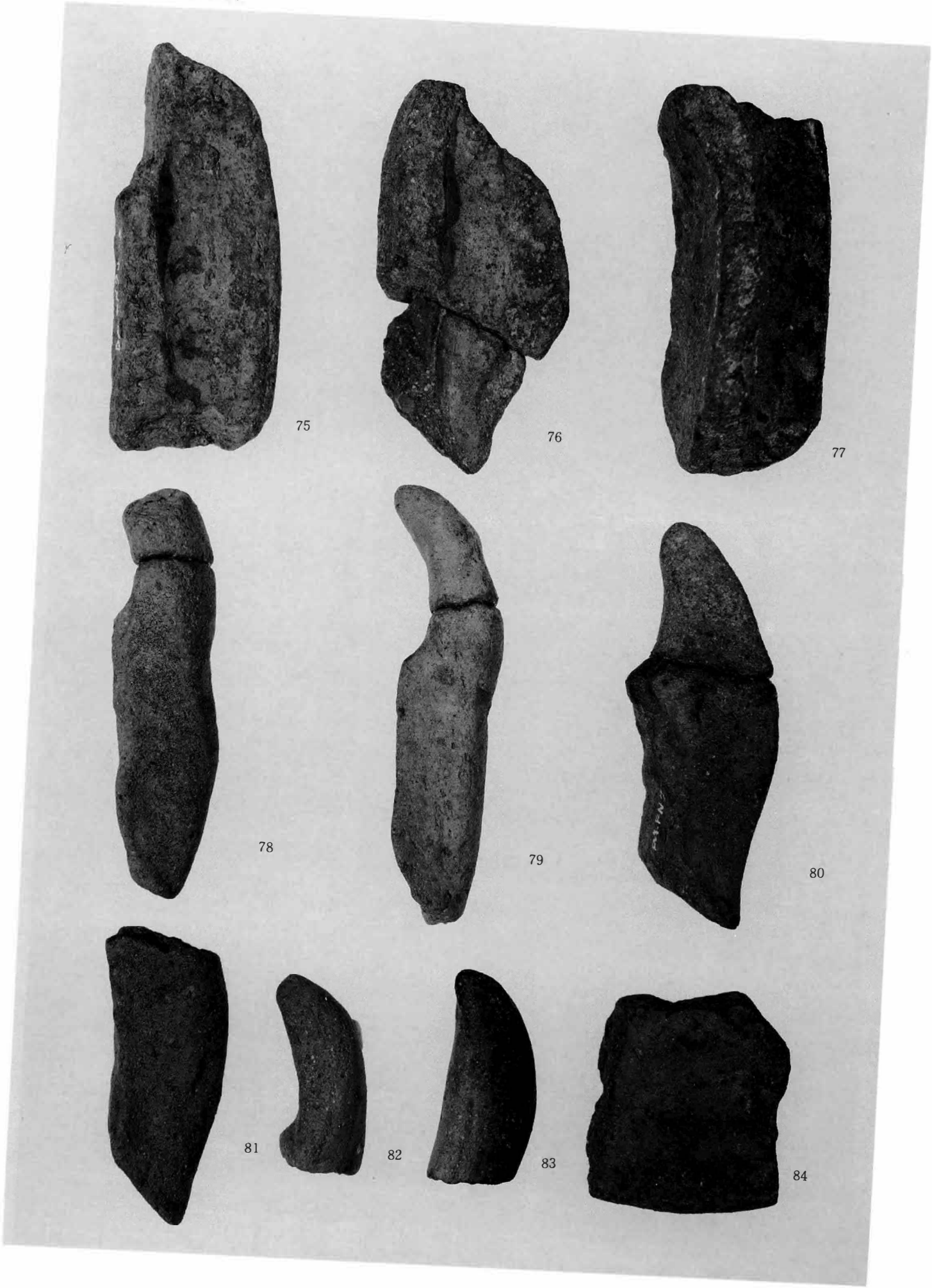
75

68

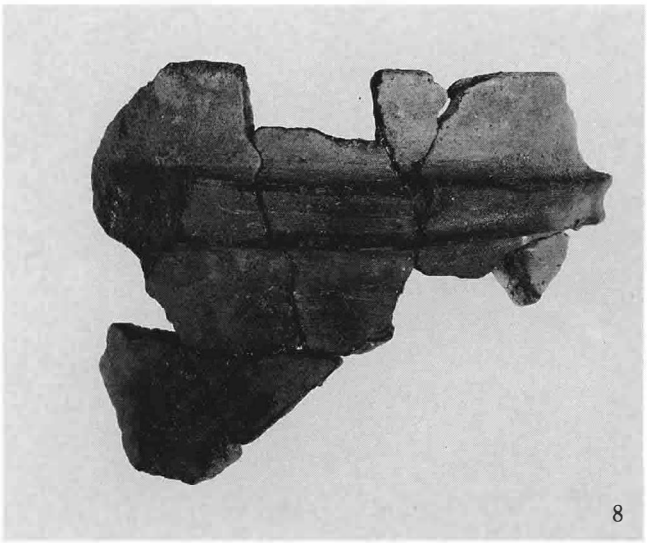

69

（約1：5）

図版22　形象埴輪

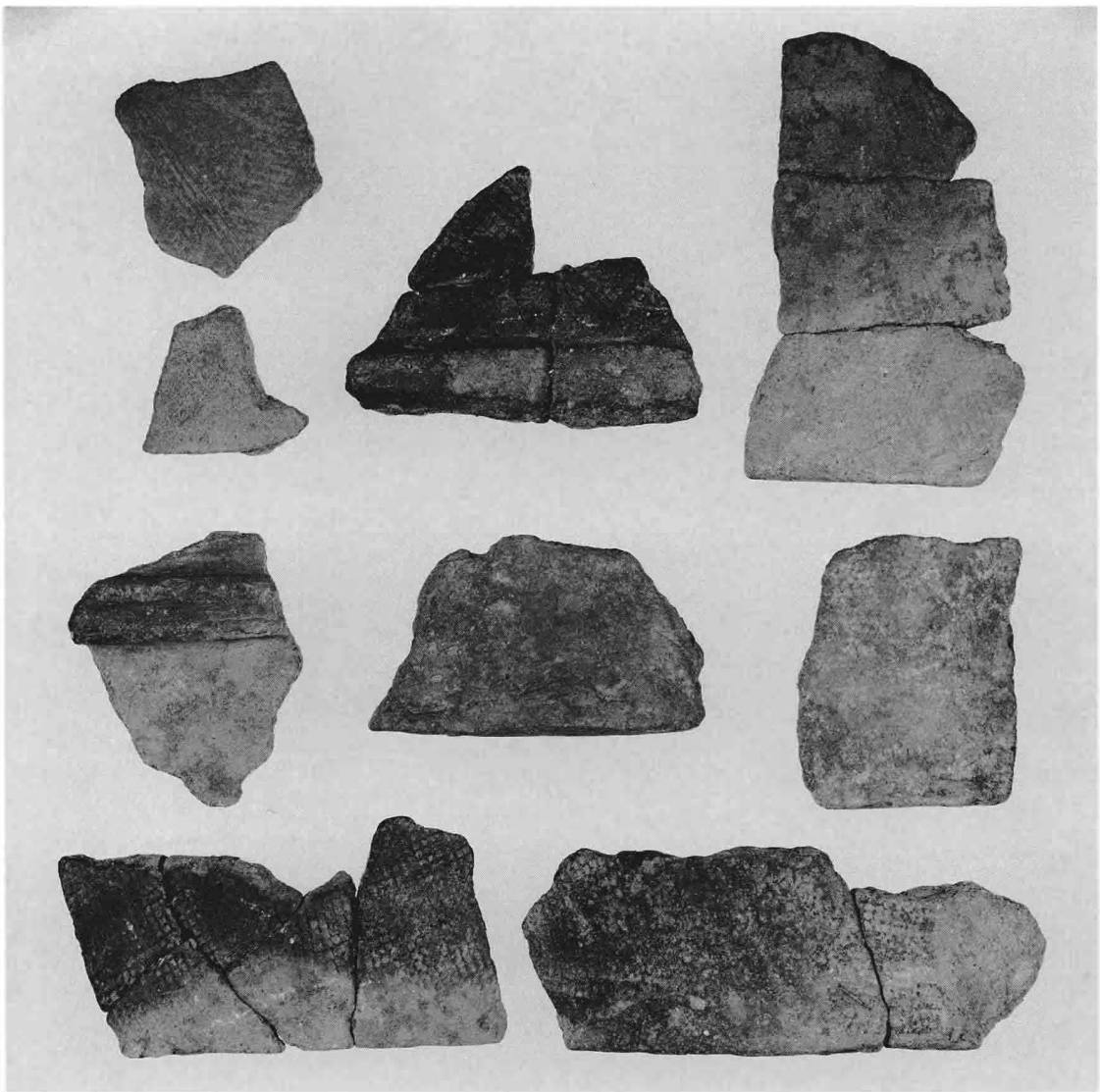


図版23　埴輪


8

11

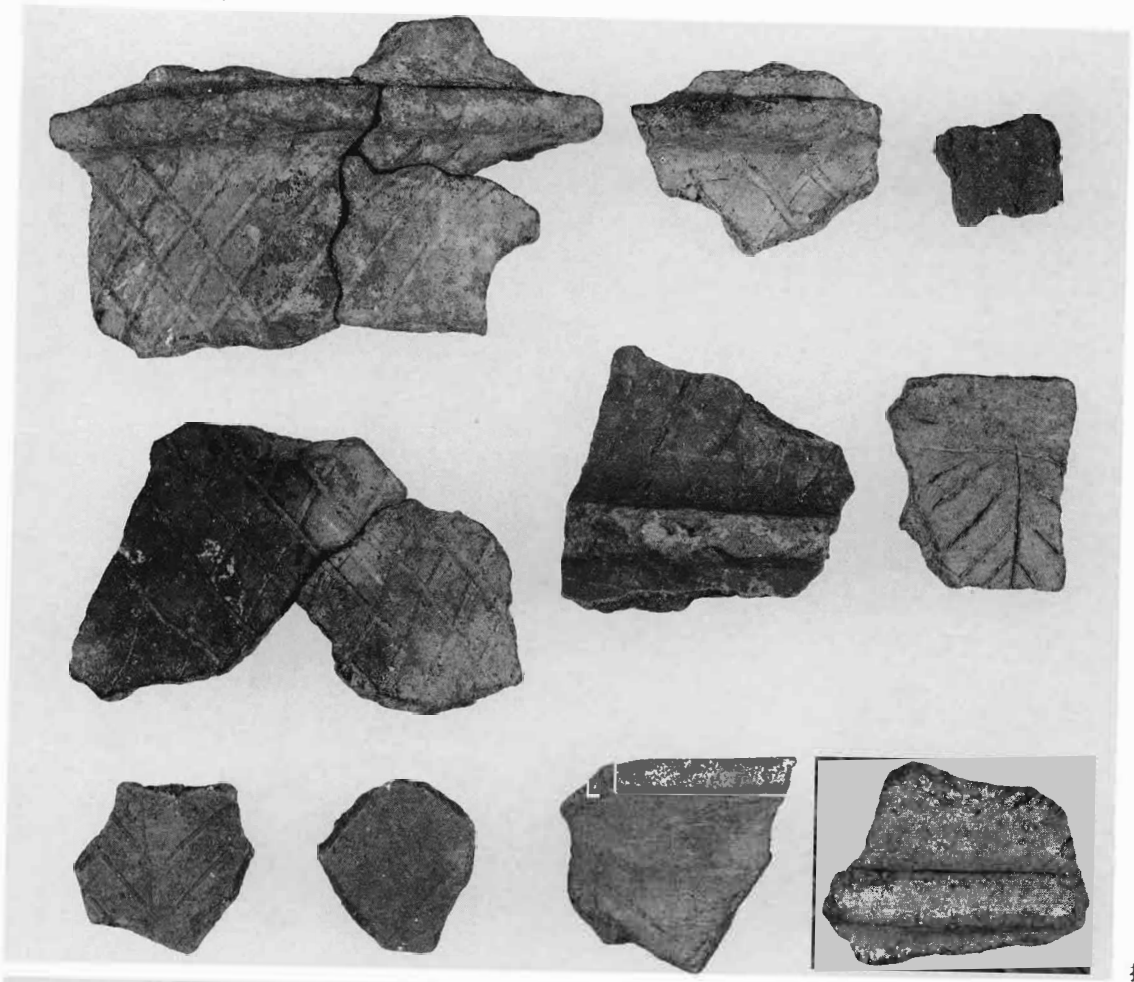
円筒埴輪



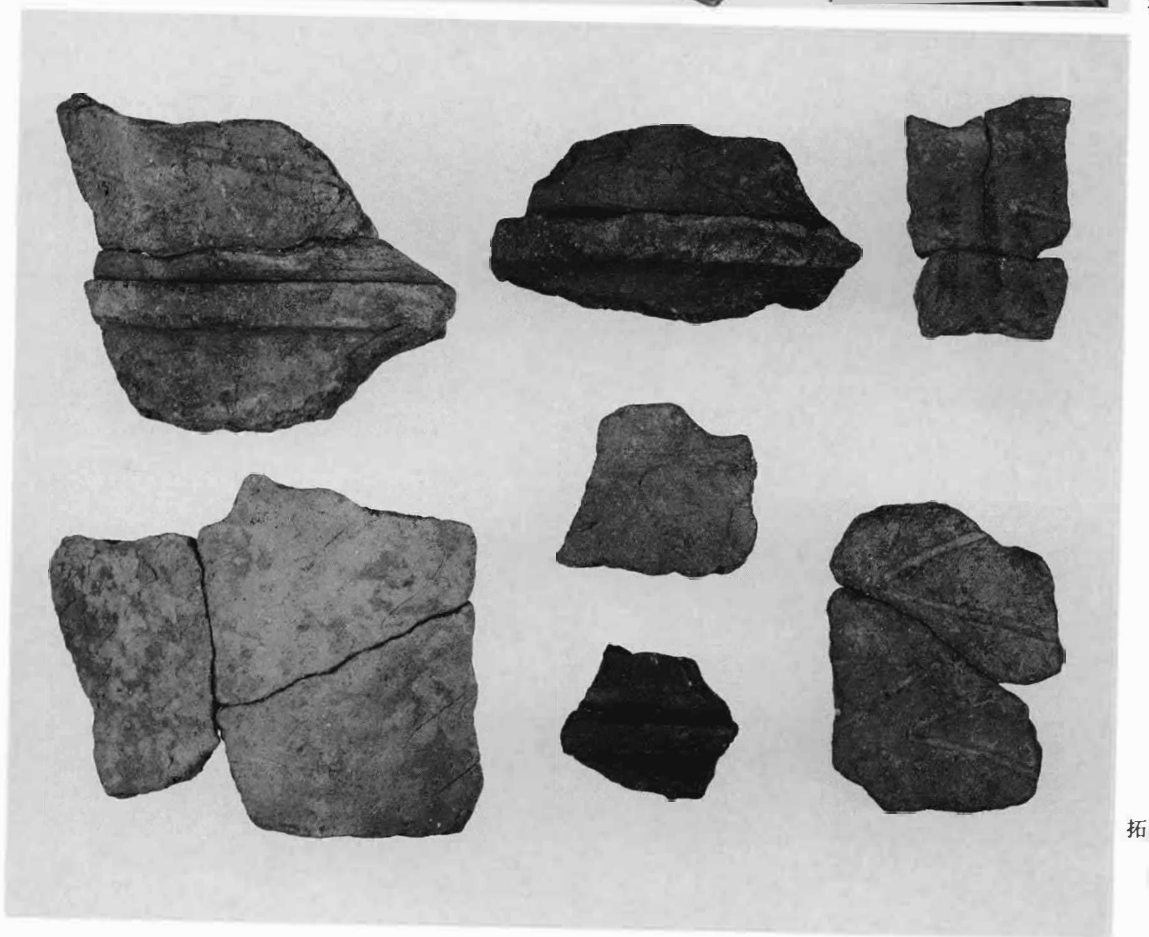
拓影１～９

（約１：３）

図版24　埴輪



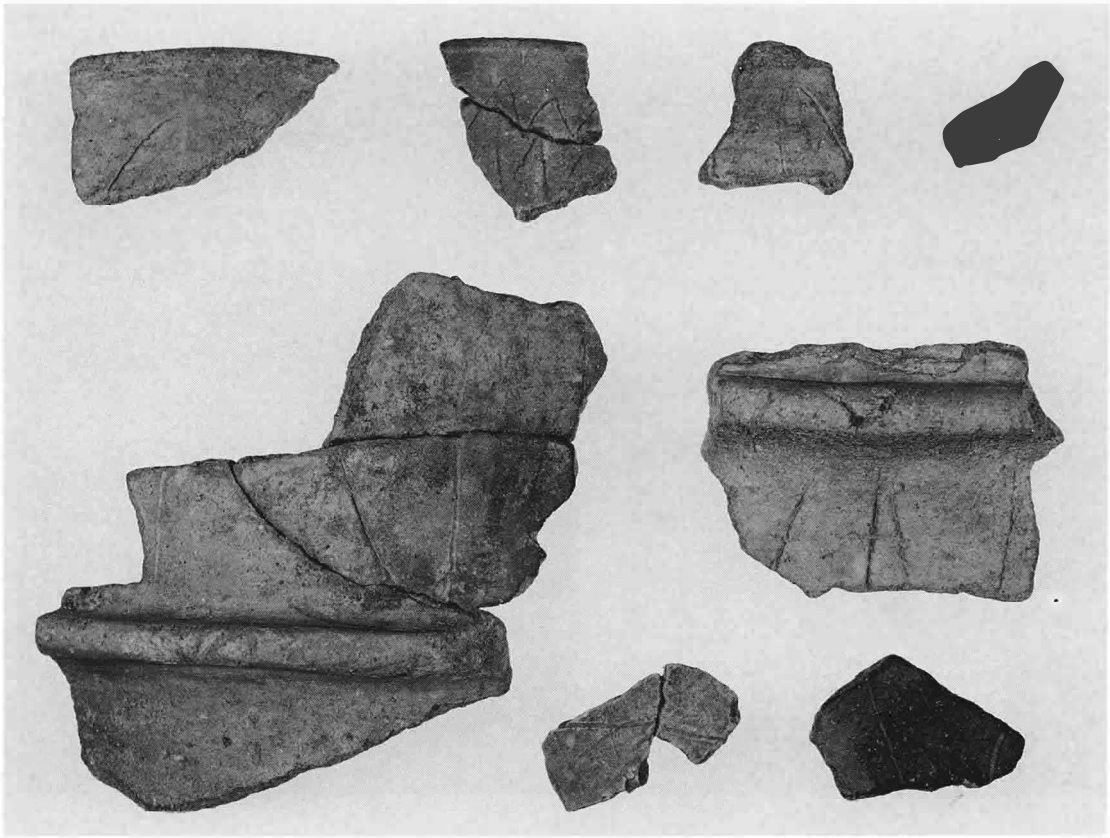
拓影10～19



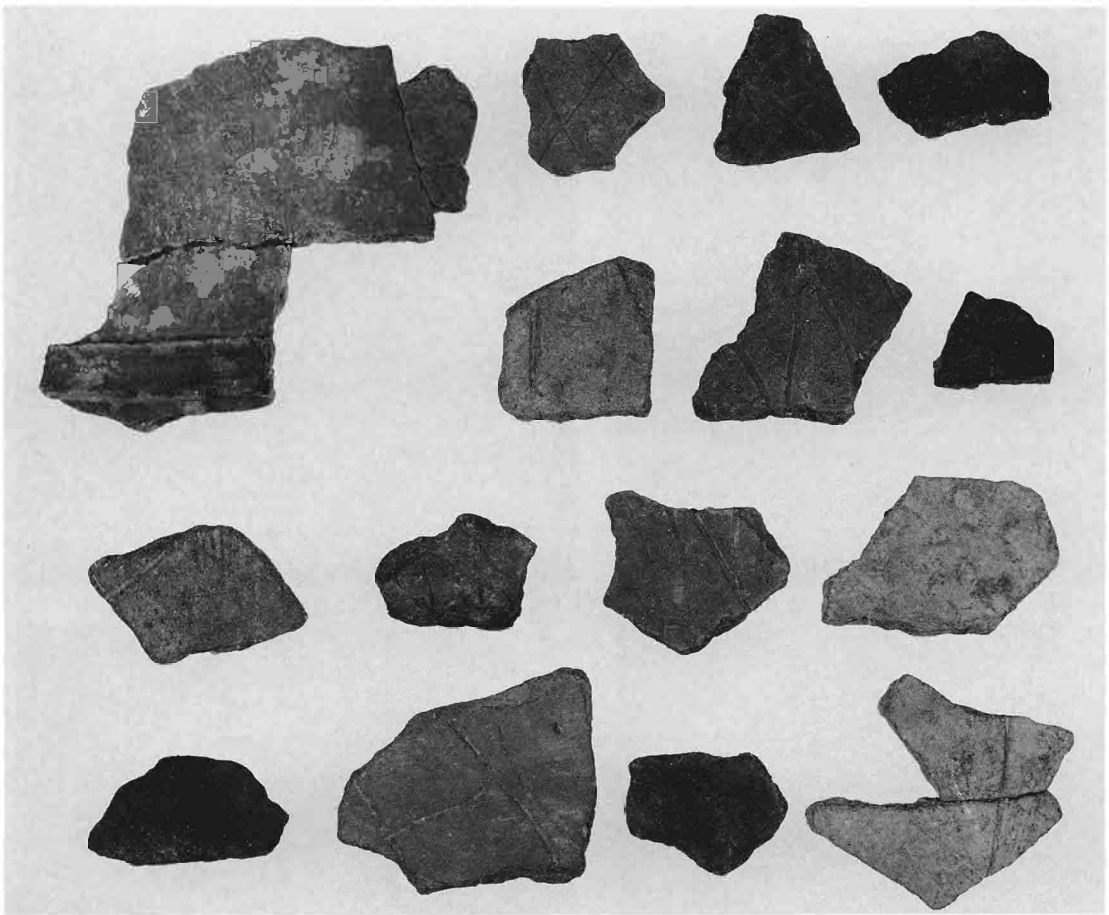
拓影20～26

（約１：３）

図版25　埴輪



拓影27～34



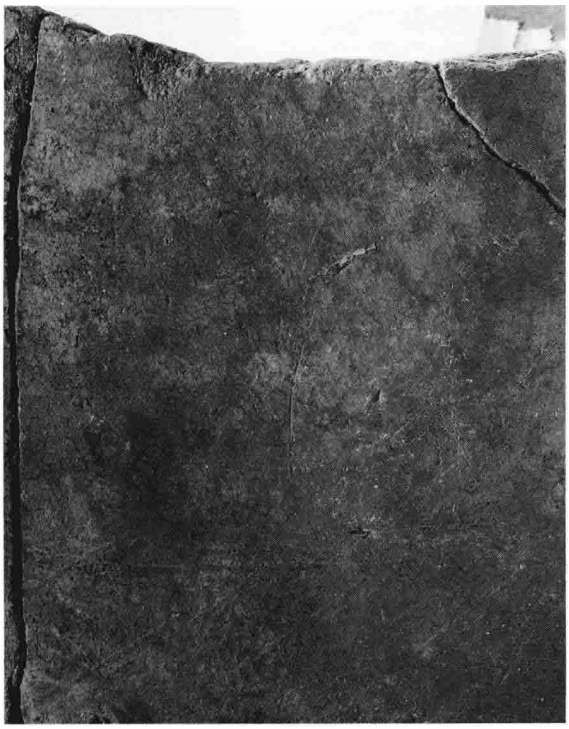
拓影35～49

（約１：３）

図版26　埴輪叩き目

1

1



57

14

43

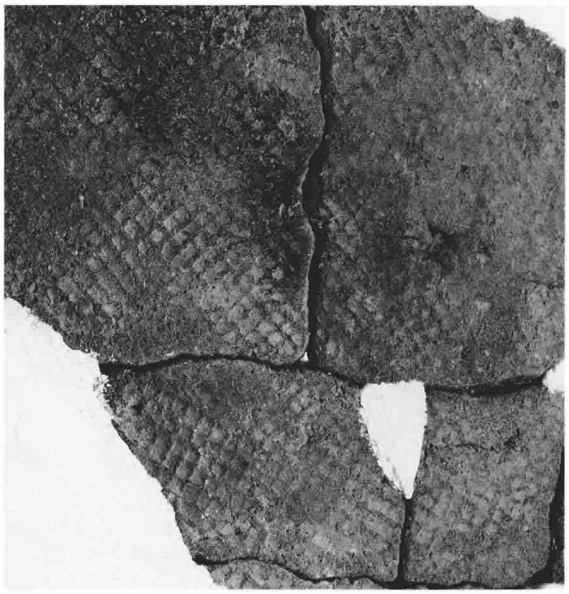
53

図版27　埴輪叩き目・刷毛目

38

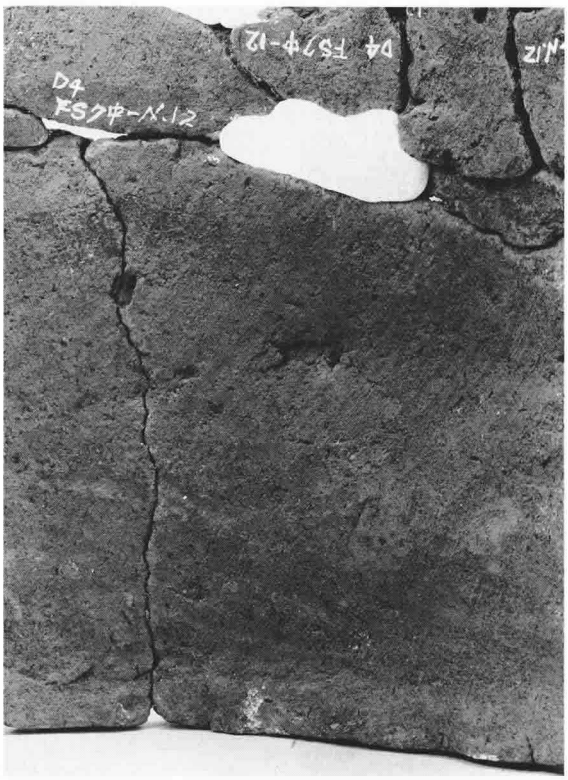
68

69



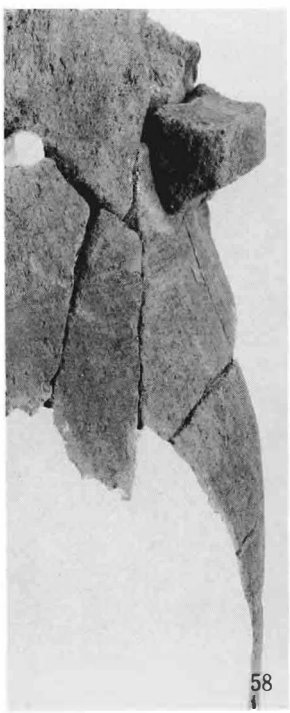
69

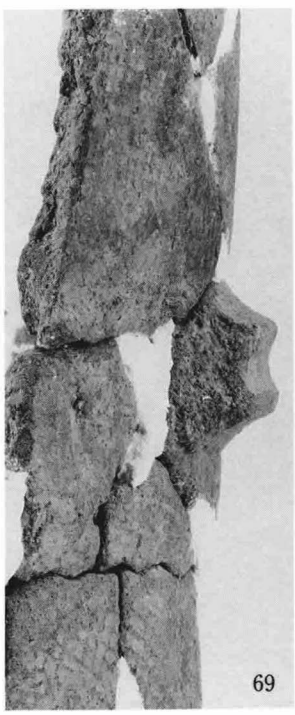
58表



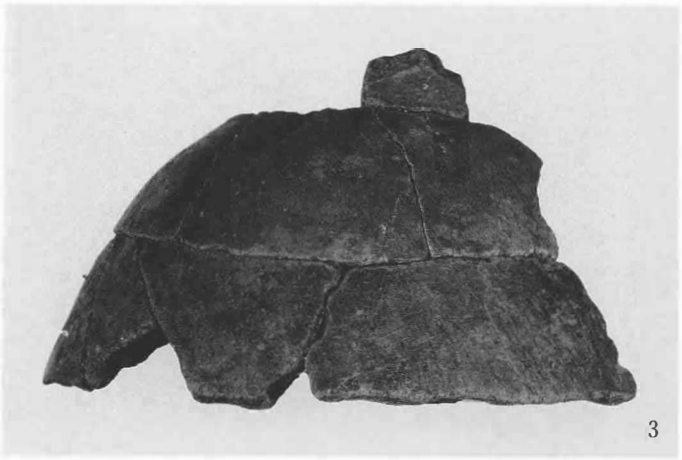
58裏

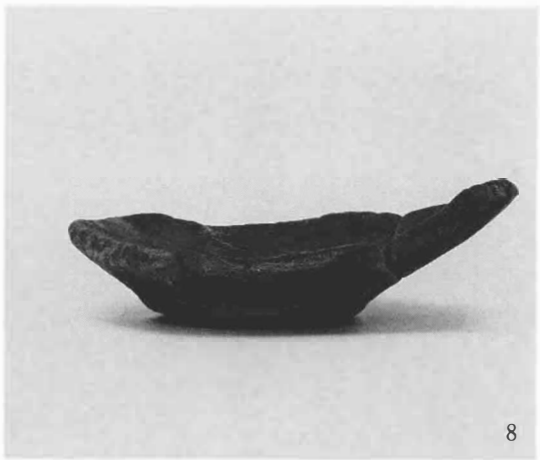
図版28　埴輪線刻文・凸帯





図版29　土器


3


8

9

24

31

21

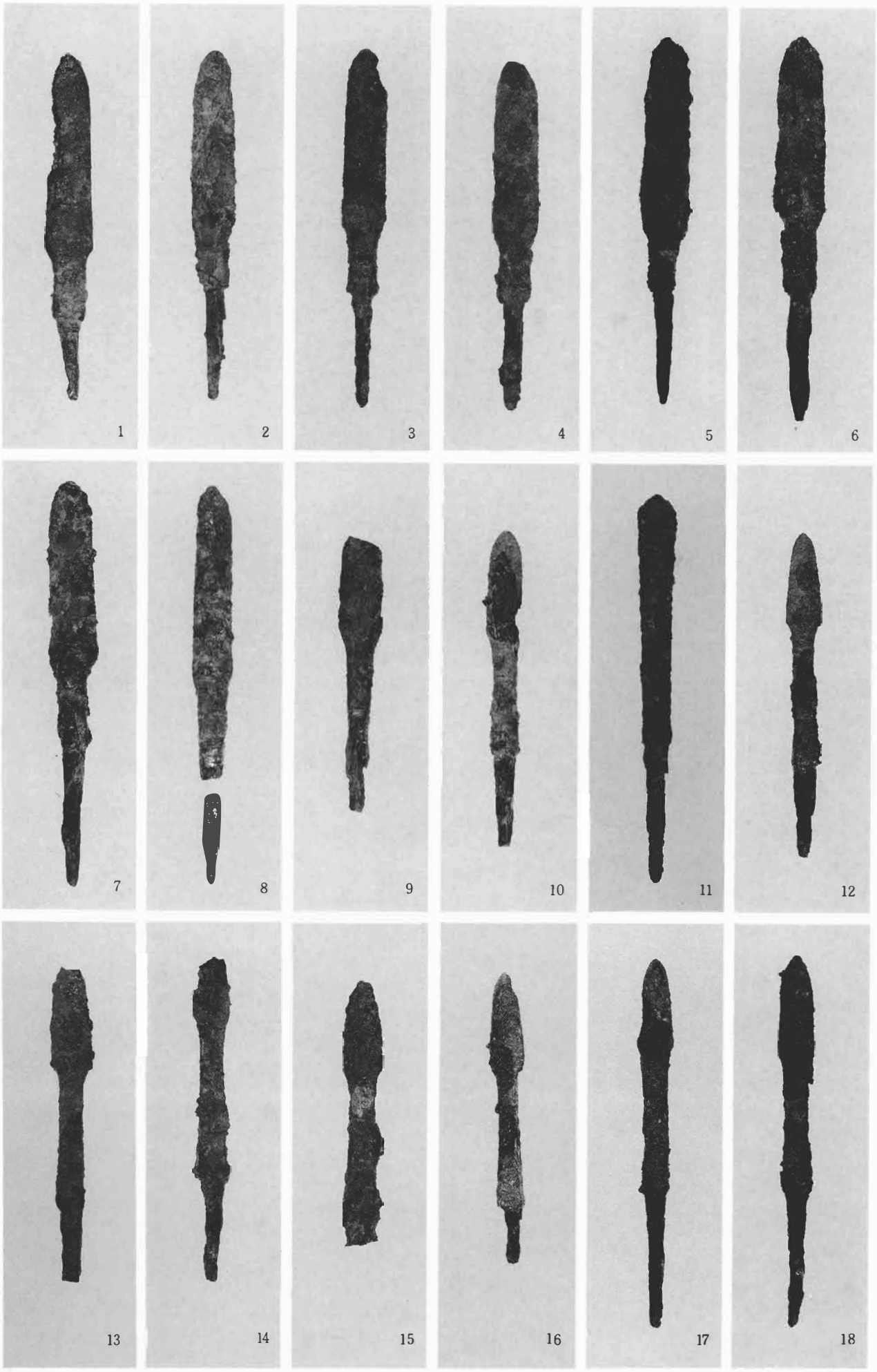
15

23

高坏ホゾ

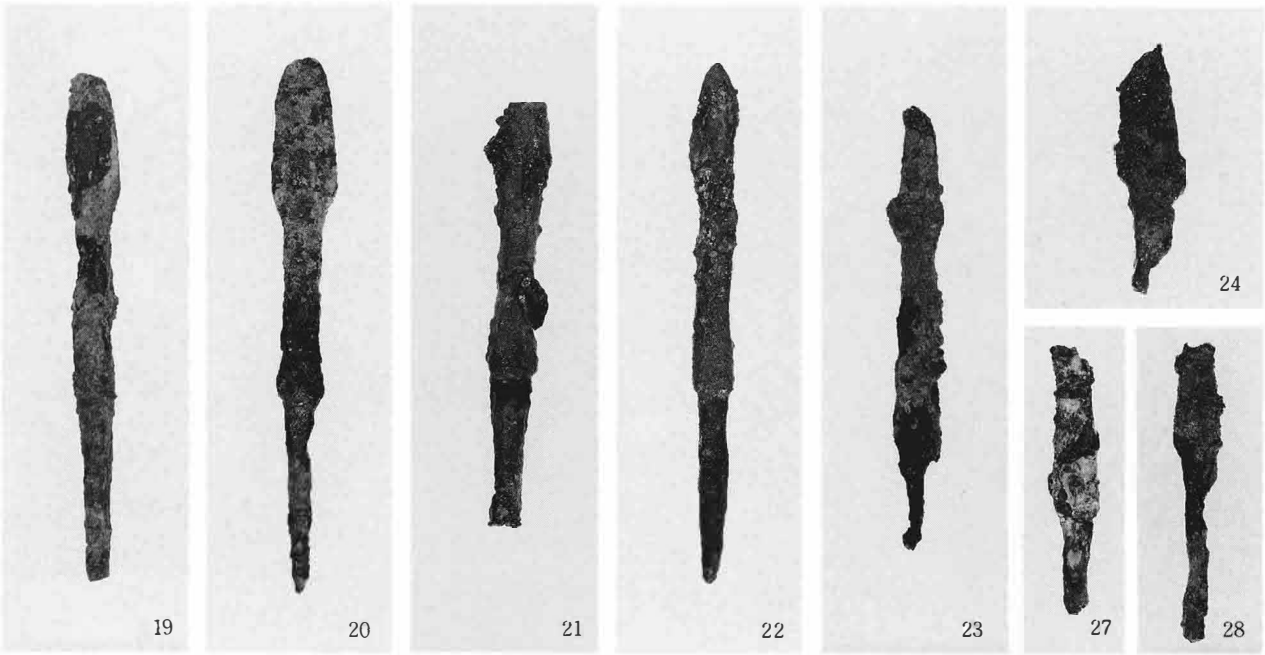
（約１：２）

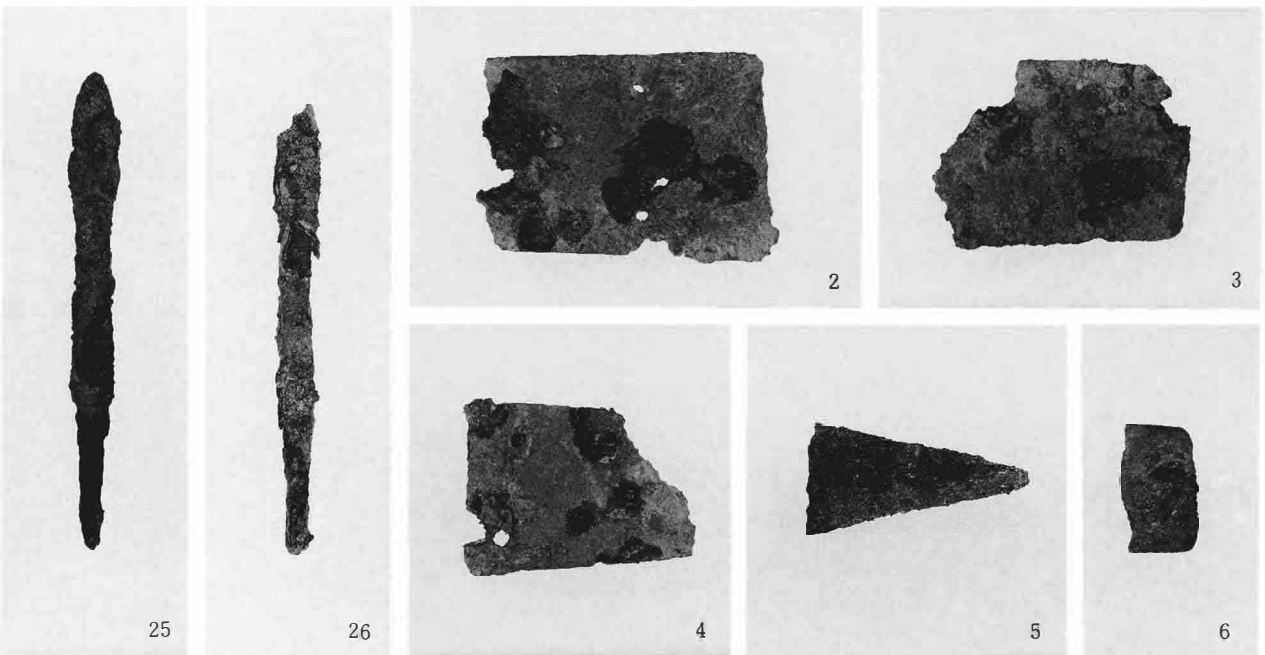
図版30　鉄鏃

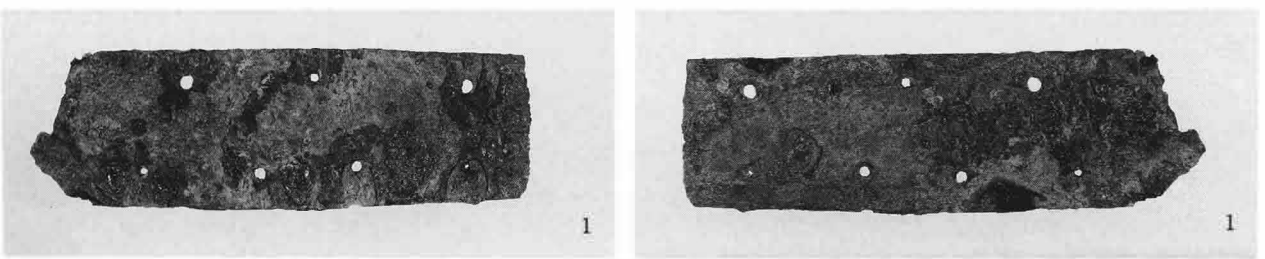


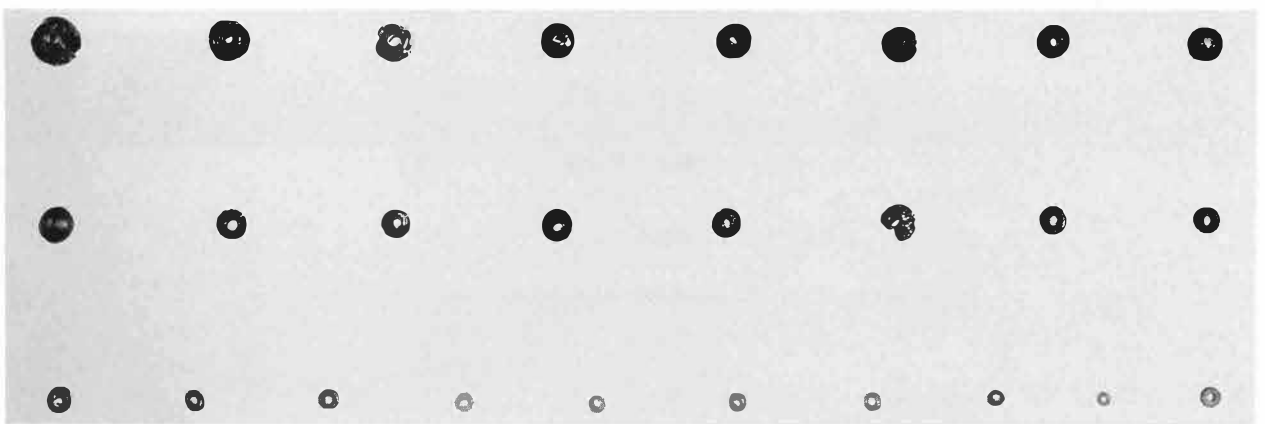
（約２：３）

図版31　鉄鏃、短甲、玉類

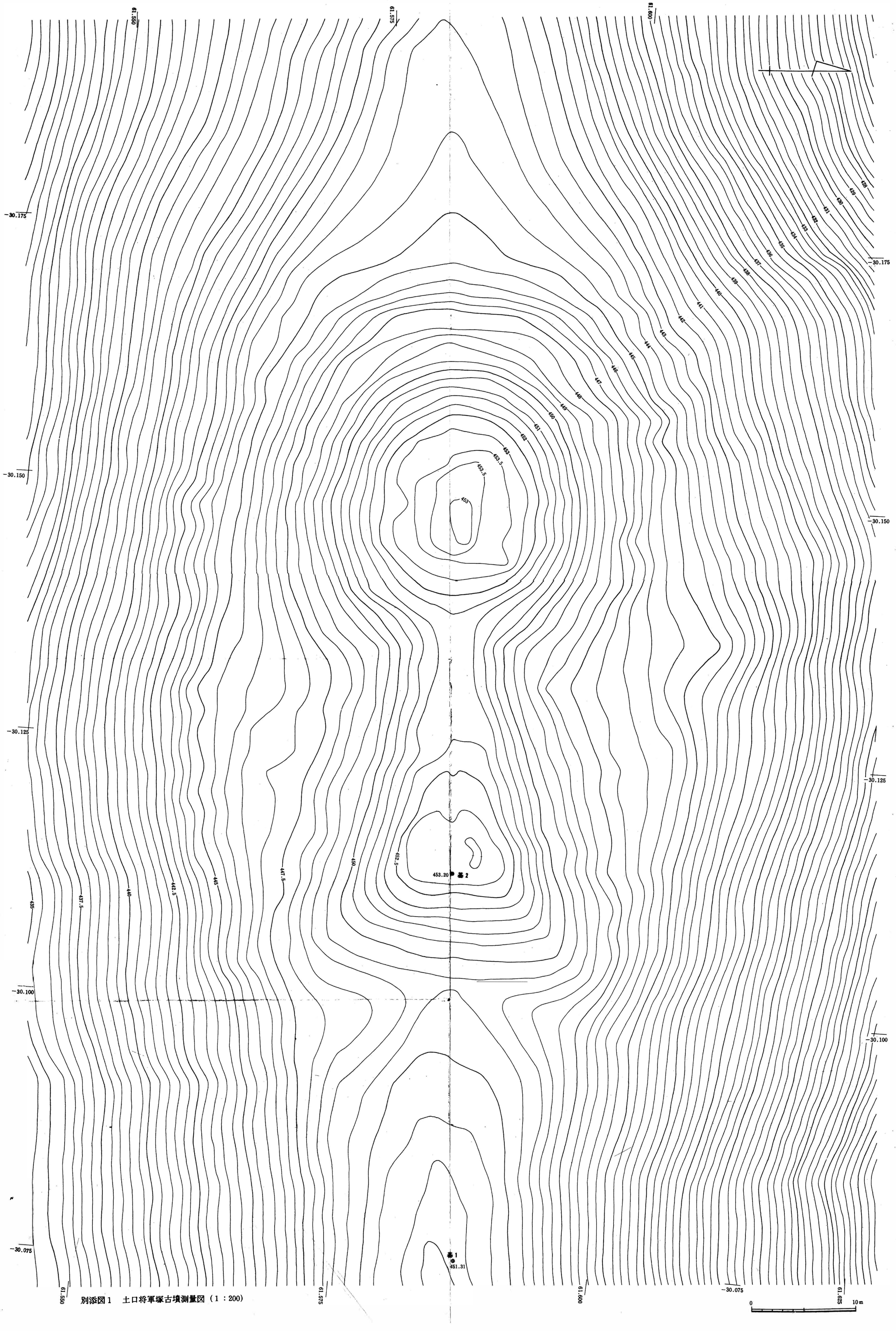




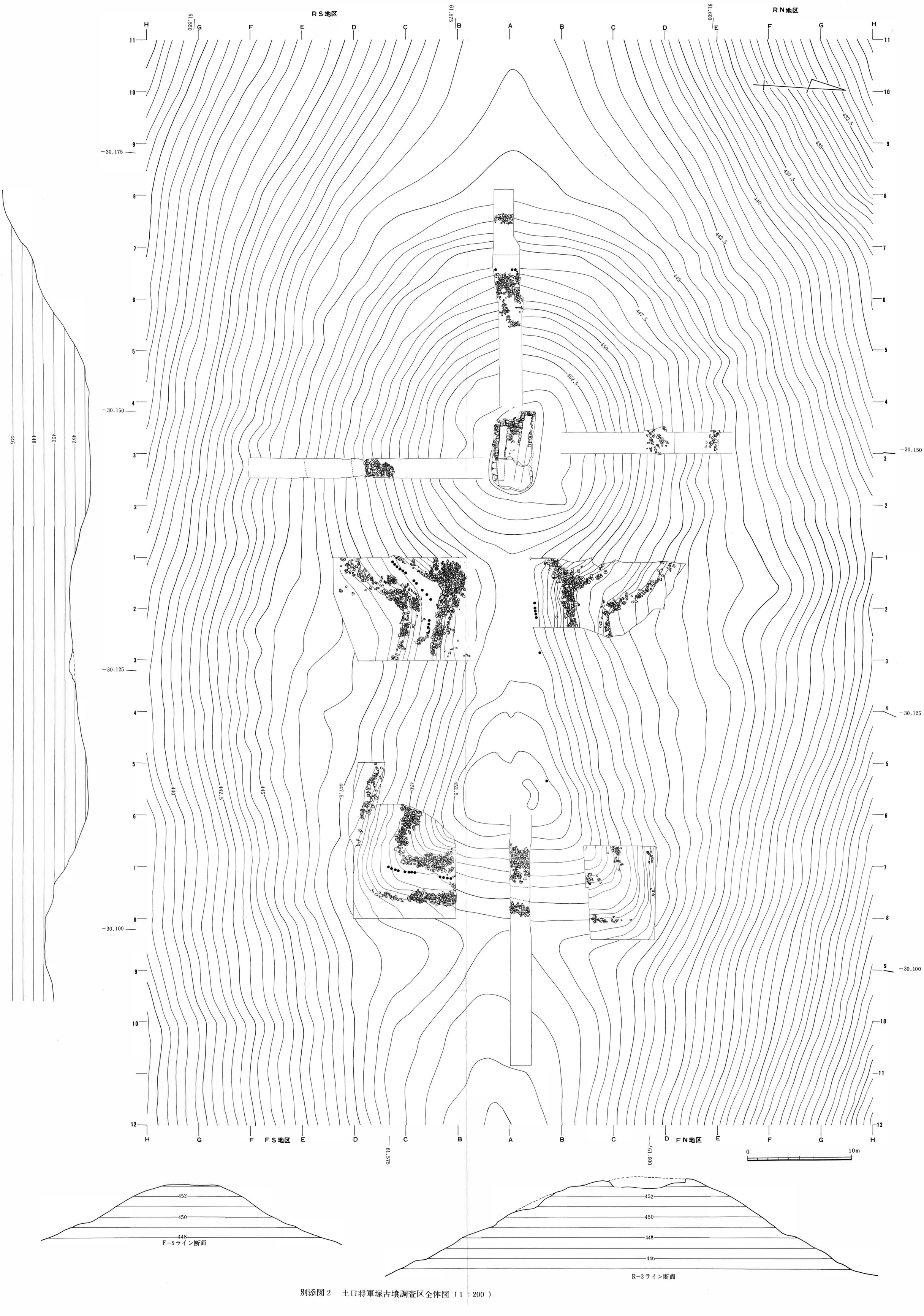




（約２：３）



別添図1　土口将軍塚古墳測量図（1：200）



別添図２　土口将軍塚古墳調査区全体図（１：200）

長野県史跡　　長野市の埋蔵文化財第十九集

土口将軍塚古墳 ——重要遺跡確認緊急調査——

発行日　昭和62年３月31日

編　集　土口将軍塚古墳調査会

発　行　長野市教育委員会
長野市大字鶴賀緑町1613

更埴市教育委員会
更埴市杭瀬下762－２

印　刷　ほおずき書籍株式会社